

奇譚クラフス

# 奇譚クラフス

新しい風俗文献誌



10  
月



斯道愛好家に贈る絶好のコレクション

略号(ブロ)

本誌モデル諸嬢総出演

ブロマイド式フォト百二十八次女!!

# 写真真集 決定

本写真集は一切書店販売を致しません。

定価 千円

お申込先

大阪市阿倍野郵便局 振替口座 大阪五〇〇四二番

天 星 社

嘗て本誌口絵に登場したことのある緊縛美女三十数名の大胆奔放なるポーズを盛りすぐつて特写した百二十八態のブロマイド。キヤビネットの隅から隅まで強烈なる悦慮の雰囲気がいびつとむせかえるような香気を漂わせ思わずマニヤをうんと呻めかせる緊縛写真集の決定版。口絵には発表できない超弩級作品のオンパレード、絶対に一般市販しない限定版につき、必ず天星社宛直接お申込み下さい。縄に囁えく美女のすべての秘密のベールが、皆さまの手によつて、ここに開かれるのです。どうか、今すぐお申込み下さるようお願いいたします。

天







THE GREAT ESCAPE

by Raymond Chandler

Illustrated by  
WILLIAM S. BROWN



THE GREAT ESCAPE









# 奇譚クラブ 十月号

(第十六卷 第九号)

## 目次

### 夢の緊縛特選集

塚本鉄三・構成

一ヤ  
第グ

逆さ吊りのワンカット……………梨花悠紀子  
首繩の哀かん譜……………絹川文代  
囚女第14号の引き回し……………桜井葉子  
もだえる柔肌と緊縛……………大塚啓子  
トイレのある風景……………須川令子

絵口頭巻

皮革の臭気……………四馬孝  
枷の部屋——曲馬団の少女……………黒川不二男  
切腹——腰元血斗の果て……………滝れい子  
M画——尻に敷かれた亭主……………滝れい子  
女斗美絵巻……………滝れい子

### 美しきいましめ

杉原虹児構成

ニヤ  
第グ

鏡に映えた麗身……………熱海容子  
乱れ髪の新ーフェイス……………水本茂美  
鞭打ちの末……………梨花悠紀子  
お下げ髪の娘……………大塚啓子

### 懸賞告白 倒錯性の芽生

勝浦美佐緒……………(34)

マゾ小説 奴隷志願……………

獅子鼻明……………(42)

告白への考察(人間性の表裏)……………

谷村鉄玄……………(47)





長篇SM小説 宇宙のどこかで

乗馬スポンシリーズ「近作に寄せて」

〔詩〕捕われの少女のうた

あるフェチノート「おしめ」への幻想

〔体験・告白〕 輝義兄弟

〔告白と体験〕 愛 臍 讃 歌

〔告白〕 三面鏡と浣腸

女斗美 高校女子相撲選手権大会

〔告白〕 運命の桎梏に泣く女

波羅木利クラブ入会

〔通信〕 ゴムマニヤのプレイ

小説 「女 奴 隷 物 語」

〔通信〕 女子の寮の「降参ごっこ」

〔短信〕 再び吊責めへの誘いを

小説 狂宴の泥海

〔奇譚〕 三十九夜物語（第十八夜）

〔手紙〕 “暴君になって頂戴”

〔切腹願望〕 腹を切る

奴隷国探検 サルジニア探訪記

〔告白〕 肥満体狂崇

〔映画短信〕 最近の縛り映画

〔体験告白〕 綿ネルお腰の感触

下痢願望 トイレへの郷愁

マニヤの告白

或るマニヤの体験「SよりMへの移更」

当代女武勇列伝（諸岡恵子）

〔体験記〕 演劇教室

ロマチック ストーリー 華麗なお仕置

佐治麻造（50）

藤山秀緒（62）

菅谷はるみ（67）

土丸大三（68）

江戸輝男（70）

庄司美津彦（72）

山岸操（74）

雄松比良彦（76）

福田ヒデ子（80）

馬場守（82）

梅川幸子（84）

佐治麻造（86）

高木紀々枝（110）

中田明（114）

桂牧次郎（116）

辻村隆（122）

泉慶子（134）

川口富由（138）

阿留品又怒（140）

河場象之助（147）

東山映史（153）

福田千時（154）

山田那津子（158）

木村定吉（156）

諸岡堅雄（162）

岡本正治（168）

大中忠（170）



# マゾ資料

## M フ ォ ト 三 十 態

B7版 感光紙焼付

三十ポーズ（三十枚）一組 五〇〇円（送共）

略号（ま30）

美しい女性の手によって、その豊満な尻に敷かれるマゾ男。この男はマゾモデル募集に応じて合格した幸福な男です。これから、さてどのような虚められ方をするのでしょうか。自分をこの男の姿に置き換えて、よくごらん下さい。



一枚残らず全部未発表のとおきおきの馬乗り資料



ふくよかな真白い脚で首を絞められて、息もとまるような恍惚感にむせび、白羽二重の足の裏で顔を踏みにじられて、汚辱の沈潜の中に舌を出して足の指のまたを舐めさせて頂く倒錯感。

身も心も、骨のずいまで屈伏させられたという被虐感をいやというほど与えられるポリウムのある女の臀部は、どしりと背中の上に

据えられて逆にとられた後手の痛さが、たまらなく迫ってくる。

顔乗り、馬乗り、足舐め、踏みつけ、と、美女によって痛めつけられ、屈辱をいやというほど与えられる場面が、傲慢な女王様の勝手気ままなふるまいによって、次々と展開されてゆきます。

ものは試し、一度マニヤの方はごらんになっては如何ですか。



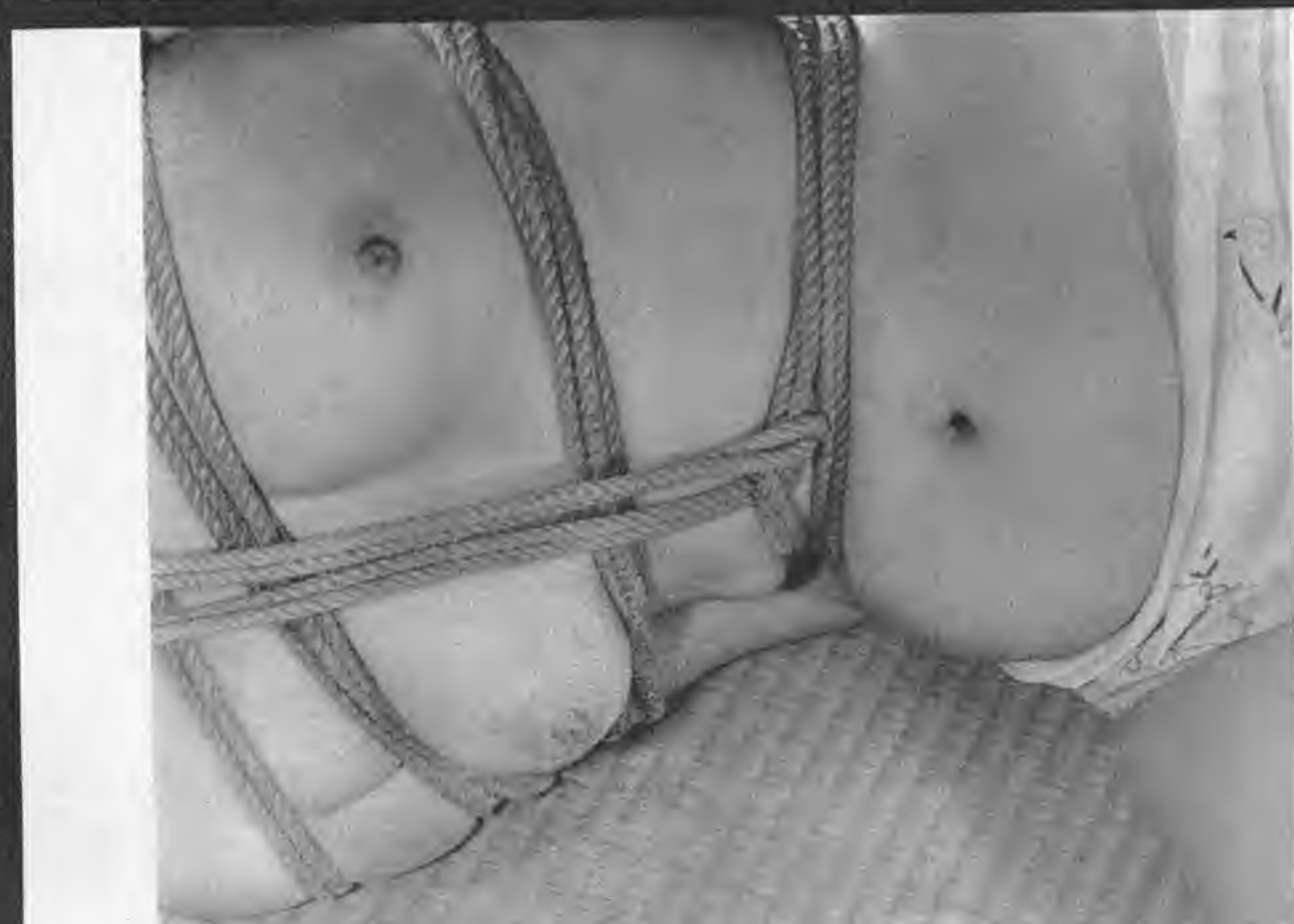
# 夢の緊縛 特選集

































# 皮革の臭気

画・孝馬四





枷の部屋







曲馬団の少女

黒川不二男シリーズ





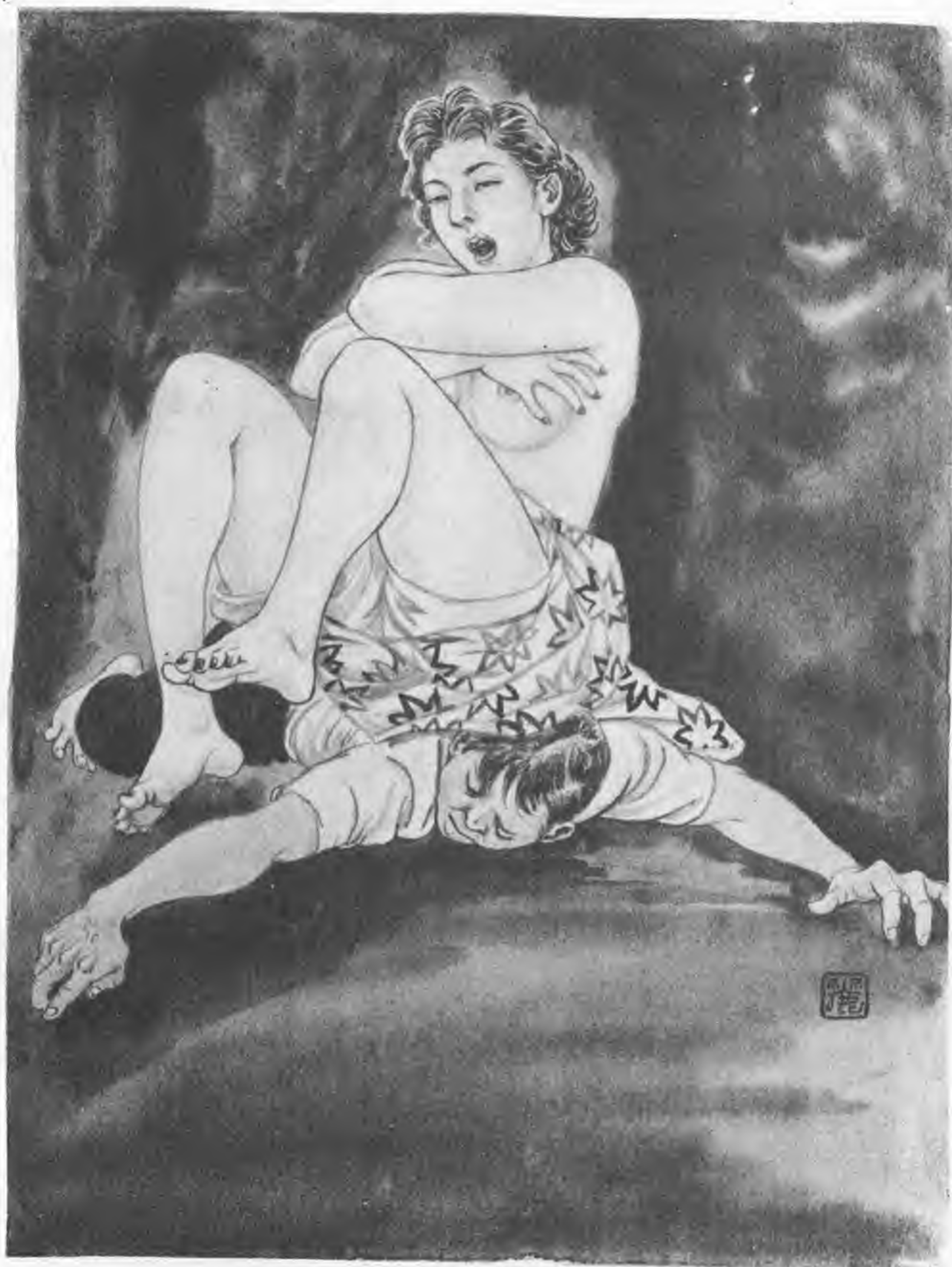
腰元血斗の果て





殿のあとを慕いて





尻に敷かれた亭主



# 人間馬の調教







女斗美絵巻





美しき＝いましめ＝

































新しい風俗文献研究誌

奇譚くらぶ

1862年 10月号

(第16巻 第9号 通刊 第169号)



殉教者 (長崎立山にて焚殺される神父)



懸賞「告白と手記と体験」入選

# 倒錯性の芽生

勝 浦 美 佐 緒

左 脇 富 士 夫 画

私は当年三十八才の男です。以下に記してまいります手記は、私の異常な半生をありのままに綴ってみました。

三年前、京都瓦町の或る書店で何気なく手に取って見ました一冊の雑誌、頁を繰ってゆくとつれて私の頬は紅潮し、胸はあやしく騒ぎ始めました。

私のことが書かれている。いや私ではありませんが、私と同じ心を持った人の生息が、そこに描写されている。

もの心ついてからの私は死のような孤独感に責めさいなまれながら暗い灰色の日々を生

きてまいりました。何故だかお判りになりますか？誰にも打明られない秘密、そうです、それは悲しい性<sup>さが</sup>に悶える、心と肉体の秘密なのです。私は早速その雑誌を買い求めました。餓えた野良犬が餌を発見して、それにむしゃぶりつくように、私は胸躍らせて一気に読破してしまいました。

私の心はそれを読み終えた瞬間から、あの死のような孤独感が、すっかり消滅してしまっているのに気がつきました。

私だけではなかったのだ。友達がいた。同志がいて私をなぐさめてくれたのです。

私は希望の光が皆さんと私の周囲に輝やいているのを、はっきりと見ることの出来る人間になりました。

私はアブノーマルな世界に住む人間です。でも、アブノーマルな人間でも、それなりに真実に生きたい願いは絶えず抱いて居るものなのです。

今度は私もそうした方々に私の辿ってきた道を聞いて貰いたくなりました。私には勿論、文章を小説風に上手に記せるような教養も才能もございませんが、ただ事実をありのままにお伝えして、私と同じ世界に住んでい



らっしゃる多くの方々を少しでもお慰めし、勇気づけられればと思い、また広く色々な方々の御批判を頂ければ、この上ない喜びでもございますので、拙文を顧みませずここに手記をしたためた次第です。

## ☆運命の星

先ず私の生い立ちから記してみます。

私が軍隊に入隊しまして異常な兵隊生活を体験させられました起因とでも申しますものは、いま静かに振り返って考えてみますと、やはり私の少年時代のなりたちに、大分影響される所が多いようなのです。

私の名は美佐緒と申します。

字で読みましても、音読致しましても、まるで女と間違えられそうな優しい感じの名前です。

大正十二年九月一日、関東大震災の余震が未だしきりに起っており最中に、呱呱の声を挙げた生れついで親不孝者でございました。

父はその時、私と母からはぐれたまま行方不明となり、父に連れられていた三つ年上の姉ともその時限り、生き別れになってしまいました。

渋谷区の幡ヶ谷で印刷所を経営し、工員の三十人余りも使っていた私達の一家は、それまではまあ相当裕福な暮らしをしていたらしいのです。

が、震災ですっかり焼け出されてしまった揚句、夫や子供と生き別れになった母は、火がついたように泣き喚く、生れたばかりの私を背にして、大阪の伯父夫婦を頼って、命から落ちのびたのだそうです。

母は、元関西歌舞伎の中堅女形、嵐吉之丞の娘だっただけに、人妻となり私達を生みましてからも、その容色は少しも衰えず、道を歩いておりましても、母を見て振り返らぬ人はいくらいい色白の美しい女でした。

伯父は当時、今里新地の近くで、待合とドサ廻り専門の色物興業を手がけており、外に三百人程収容出来る掛小屋を経営していて、まあその近辺では一寸した顔役でした。

私が高等科を終える頃には、母は娘時代に修業した挿花で、隣近所の娘や人妻たちに生花を教え、まあ親子二人の生活は細々でしたが落ち着いていたようです。

或る日、私は近くの映画館で、映画を観て外へ出ますと、もう町はすっかり黄昏れていて、時計屋の店先にある古びた標準の大時計

の針は、既に八の字を廻っているのです。急ぎ足で我が家の生け垣のところ迄きますと、ガラス障子に、母ともう一人誰かよその男の影の映っているのが眼に入りました。

(はて家には確か母大人の筈なのに……)

と、そっと生垣の内へ身を隠して内らの様子に耳をそば立てていますと、母の甲高い声で口早に、

「こないだあれだけ何遍も云いましたやろ、もうこれでおしまいだっせて。そやのにまたのこのこせびりに来やはるなんて、あんたも貧すりや鈍するで、だいぶん呆けはったんと違いますか?……云わしてもらいますけどな、わてはもうあんたとは赤の他人ですもんよってな。わてはあの時以来、後家になったつもりで、絹子とあんたの写真を御仏壇にお祭りして毎日お祈りしてますのや……それを今更ら何ですもん! すまんが用立ててくれやなんて、わてはお見かけ通りそんなかいしよのある女ごやありまへんねん。美佐緒にでも今頃のこの逢われたら事ですわ。ほんまに」

「お芳、そ、そんな薄情なこと云うもんやないで。儂かてあの震災にさえ逢わなんだら、こんな惨めなことにはならなんだのや。今頃



はお前、れっきとした印刷工場の……」

「社長はんでっか？あほらしい。ようまアそんな勝手な理屈がよう云えますなア……あんなはあの地震をええ幸にして、美吉野の菊千代と逃げはったんだすがな」

「それ云われたら面目ないが、菊千代の奴も儂の金だけが目当やったえげつない女ごやつたんや……、儂に一文の金もないと判ると、まるで掌返したみたいに薄情になりくさって、さっさと朝鮮人の成金と広島へ逃げてしまいいった」

「それで女道楽の目がさめたと云わはるんでっか？……わてはあんたのこと、色んなところから、何やかや聞いて知ってます。隠さはったかてあけしまへん」

「知ってるて何や？」

「ふん、ずうずうしい。未だシラ切ってはる。あんたには今、れっきとしたカフェの女給上りの奥さんと、その子供はんもいやはるやおまへんか！」

「……」

怒りに満ちた母の言葉を盗み聞きながら、私はがたがた震えてくるのをどうしようもなく、生垣の陰にうずくまっていました。

五分ばかり経つと、ぼそぼそと低い男の声

が玄関でして、

「はたらお前らも達者でな。わいも今度は最後の運だめしをやるんやさかい、これがあかなんだら生きてえへんつもりや。今日は一目、美佐緒の顔を見て帰りたいと思もったけど、逢わんと帰った方が情が移らんでええやろ。えらい夜分、邪魔してすまなんだなア……」

男はそつと格子戸を開くと、

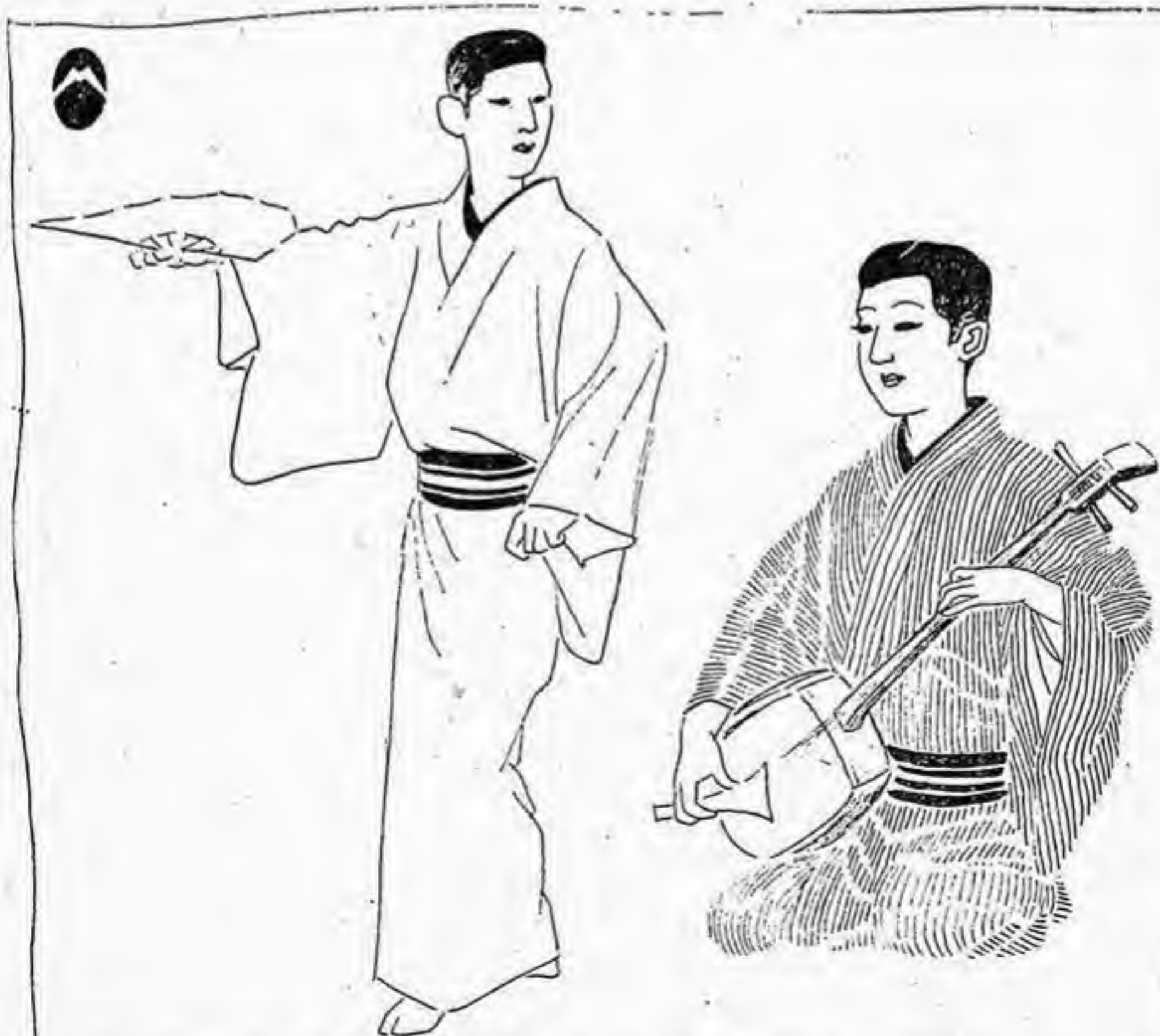
暗い露地の道にひよる長い影を

落して、とぼとぼと帰って行きました。

その男こそ、震災で生き別れになったまま

の私の父だったのです。

けれど私は格別、父を恋しいとは思いません





んでした。私には、生れた瞬間から、父は死んでしまったのと同じ状態だったのですから。私には今更、肉親への情愛は湧きませんでした。

その夜こそ、私が父と始めて逢い、そして最期の別離をした夜だったのです。

無類の男勝りだった母は、色々な誘惑や困難と闘いながら、母親の道徳を守り抜いていました。

女の肉体の中に棲む悪魔が、いったん暴れ出したら、男の極道者以上に仕末におえないものであることを、賢い母はよく知り抜いていたようでした。

体の余り丈夫でなかった私は、甘やかされるままに、上級学校へも進まず。さりとて奉公に出るでもなく、毎日をただなんとなく、赤本や小説本を読みあさりながら、無為に過ごしていたのでした。

ところが、その年の秋の末。私に始めて人生への扉が開かれたのでした。

極楽へか？地獄へか？そんなことは少しも判らぬままに、私は伯父の持っている親友楽劇座へ役者見習として加えられる事となったのでした。

母に似てまるで女のように優型で、美貌の

私に、早くから伯父は眼をつけていたそうです。

ゆくゆくは一座を持たせて活躍させてやるから、徴兵検査までこの子を預からせてくれと、伯父夫婦はしる母を熱心にかき口説き、どうとうあまり気乗りのしなかった母をうんと云わせてしまいました。

## ☆女形修業

親友楽劇座は、剣戟、現代劇、舞踊劇、等なんでもこい的一座で、若い座員は案外少なく、大半は四十代の尾羽打ち枯らした俳優で占められていました。

私は、座長格である歌舞伎崩れの中村市之助と云う、中年の役者に内弟子として預けられ、彼の身の廻りの世話をやきながら、芸事を仕込んでもらう事になったのです。

市之助は先年、妻を亡くしてからは、寡くらしを続けているとかで、挨拶する私の顔を、穴の開くぐらいじっと視つめ、やがて皺枯れた低い調子の声で、

「この子はええガタ（女形）になりました、旦那は、こら掘出しもんだす」

と赤い唇をべろりと舐めると、伯父に向ってお世辞笑いをするのでした。

「そやかてな市ちゃん、始めに断つとくが、お前、この子に手出したらあかんで。お前には妙な癖があるとか云う噂やからな、油断出来ん」

「へへへ、旦那、御冗談ばかり」

その時の私には、伯父が云った言葉の意味がどういう事なのか一向見当もつきませんでした。

関西一円の田舎を、ぐるりと一周する巡業を終えて六カ月ぶりに母の膝へ帰って来た私は、もう以前の私ではなくなっていたのでした。一寸した立居振舞にでも、全然、私の男が姿を消してしまっていて、娘の所作になり切っているのです。

母と久し振りの夕食の膳に向うと、母は私をまるで異様なものでも見るような眼付でじつと眺め、ふっと深い溜息を吐くのでした。

私は私で思わずぼっと頬が染まって赤くなり俯向いてしまいました。

「美佐緒、お前初めての一人旅で辛かったんと違うか？」

「いいや、面白かった。みんなええ人ばかりやさかいな、可愛がってくれはるし、芸事たんと教えてもらうた」

「……お前、ほんまにこれから役者で、ずっ



とやって行く気？」

不図、寂しそうな眼でじっと私を見つめながら母は云いました。

「……そら、お母さんが反対するのやったら、やめてもええと思ってるけど……」

「お前はどうかの……好きなんやろ、お芝居？」

「好きや」

「ほしたら、やったらええがな。人間好きなことをやらんと出世せんものや。お前がその気でしつかりやるのやったら、お母アさんも昔はやったことがあるのやし、力入れたげます」

×

×

あくる日、志摩半島方面への巡業に旅立つ私の手に、母は舞台へ立つ時には必らず胸へ納めときやと、生駒聖天さんの御守護札を握らせてくれました。

師匠としての市之助の世話で、私は女形に必要な芸事を毎日厳しく仕込まれ、躰けられて行きました。弟子の養成にかけては、流石に檜舞台に立った経験のある役者だけに、彼は私には立派な師匠でした。

日本舞踊、三味線、長唄、小唄から、ちょっとした茶の湯の手ほどき、衣裳の着つけ

方、こなしまで、演技に必要なものは、どんな身につけさせられました。

舞台では、市之助の後につく小姓や腰元役で、科白を喋るところまではなかなかでしたが、踊りの方では天分があったのか、すぐ娘ものをこなせるようになりました。

中村美佐緒、が芸名です。

読者の中には昭和十六、七年頃、人気のかかっていた私の舞台を御覧になられた方がいらっしゃるかも判りません。

この様な一座の演目は大抵、三本立が定石で、最初に舞踊劇かコメディ、二本目は新派家庭劇、お涙頂戴物、トリ(最後)に時代劇、或いは歌舞伎劇でチョンの幕になるのです。

一年目には、もう私は幕開きの軽い舞踊劇なら、どうやら勤められるようになっていました。

娘道成寺の清姫が十八番で、母も私の上達ぶりには驚いていた様でした。

「お爺ちゃんがええ役者はんやったさかい、やっぱり血引いてんのやで……」

と伯父も得意なようでした。

このように順調に育って行けば、私も孝行なよい息子であり、今頃はちよいとした女形で二、三十人の座の頭を勤めていたかも判り

ませんが、幸事魔多し！

平和そうに見えていた私の周囲にも、いや私自身の中にも、やっぱり悪魔はチャンスを狙って蠢めいていたのでした。

中村市之助、彼こそ、今、思えば悪魔だったのかも知れません。

もとはと云えば、私を今のような倒錯者の眼を開かせ、永久にそうしてしまった人間なのです。

憎い憎いと思ったこともありましたけれど、でも、私は今では彼のことを想うと胸が熱くなってくるのです。

琵琶湖が銀色にきらきら輝いて見える大津の町へ巡業に出かけた夏のことでした。

小屋をはねてから、宿へ引上げてくると、丁度その辺りは夏祭りで、座の連中は殆んど見物に出かけたとかで、離れには私と市之助の二人きりでした。

手摺にもたれて背を向けたまま波立っている湖水を眺めていた市之助が、つかつかと、浴衣と着替えている私の側へ来るなり、怒気を含んだ声で、

「美佐緒、今夜の舞台はありやア何や！あんな下手なセリで相手の役者が受けられるとでも思ってるのか？ええ？一寸可愛がってやり



やア直ぐつけ上がりやがって。なんぼドサ廻りの舞台でもなア、お客さんの眼だけのごまかされへんのやぞ。いっぺん下手な芝居を見せてしもうたら、お前のような実跡のない若い役者には、もう二度と客は寄りつかへんのや。一寸、気が出て娘っ子にやいやい騒がれやがると、すぐ調子に乗りやがって。科白だけやない、踊りもや。豚が中風病んできりきり舞いしとるみたいやないか。口惜しかったら、明日からもっと真剣にやれ！」

私は黙ったまま俯向いて齒を喰いしばっていました。湖水のざわめきが胸の震えのように伝ってきました。祭ばやしの笛の音が、私の心を郷愁へと、かき立てるのです。

その夜は二度もトチってしまっているのですから、市之助が腹を立てるのも無理はありませんでした。

が、彼は私が黙っているのを、或いは反抗と見てとったのか、

「なるほど、お前は衣裳をつけたら、そこらあたりの女子衆よりずっとええ女子になる。そやけどな、何んぼ作り事の世界が芝居や云うたか？役者はその嘘の世界を、お客さんに



真実の世界やと納得してもらおうように見せる、これが芸ちゅうもんの奥儀なんや、ええか。その根生がお前には入っとらんへんのや。綺麗なべべ着て、紅、白粉さえ塗りたくっ

とったら、もう一人前のええ女子になれたと思うのはお前の錯覚や。女郎屋の店先に置いたる安もんの鏡なら、そらお前のような根生でもごまかせるかも知れん。しかしな、俺の



眼はごまかせんで。……今晚の舞台でもそや。男に恋い焦れとる一人前の娘が、肌も凍ってしまふような雪の降つとる庭先で、嫌な男に折檻されてる大事な見世場や云うのに、お前の顔は、平氣の平左衛門。何んかいな、お前は。ほんまに荒縄で縛られて、ほんまにどつかれな芝居が出来んとでも思つてゐるのか？ええ、どうや」

市之助の語氣は鋭どく、そして執拗に迫つて来ます。

「師匠、そ、そんなことはあれません。私は何も怠けて、わざとやらなんだのと違います。今夜は何やしらお腹の工合が悪うて、すみませんでした」

「なんやと、腹の工合が悪かったと？ほんなら余計に苦しんでる表情が出やすい訳やないか。言い訳や、そんなことは」

あまりに執拗な彼の追求に、私も思わず、むかつとなりました。

「そんなに言わはるんでしたら、苦悶の表情ってどんなもんか、師匠いっぺん教えて見とくなはれ」

「何？教えてくれ、よし、一生忘れられんくらい骨身にこたえるように叩き込んだる」と怒鳴るように云うなり、市之助は私の浴

衣も引き裂かんばかりの勢で、床柱へあつと云う間に、帯でかんじがらめに縛りつけてしまったのです。

両腕にメスリンの帯が、きゅっと喰い込んで肌の色に血がにじんで来ました。あまりの息づまるような苦しさに、私は半ば口を開いて、放心したように首を仰向け、肩で荒い息を吐いてしまいました。

市之助は喘いでいる私の前へ鏡台を二つ並べて置きながら、

「美佐緒、我れと我が身の恰好がこれからどないな風になるか、よう見とくのやぞ。苦しなつたとか、痛いさかいとかで、鏡から一寸でも目を放したら最後、わしのこの鞭の鳴る数が増えるんやさかいな。そのつもりでおれよ。さゝ行くぞ」

睨みつけるようにして、私は一生懸命に鏡の中に喘いでいる自分を見つめました。

これが自分の姿なのか、この惨めに縛られた優男が、珠のように大切に育てられて来た自分の姿なのか。

ピシ！

あたりの空気を引裂くような鋭い響を立てて、皮膚が鳴りました。

ピシ！ピシ！

また続いて激しく打ちおろされる鞭、それは正に数匹の蛇が、私の背と云わず腰と云わず、匍い廻り、踊り狂っているとした見えません。

市之助は、これでもか、これでもかと絶叫しながら烈しく鞭を振りおろしてきます。

それでも私は今にもぐったりと息絶えそうな苦悶を耐えながら、鏡に映っている、自分の姿を喰い入るように睨みつけていました。

二つの鏡には、もがくたびに、躍る白い二本の足が、まるで絡み合った白蛇か何かのよう、妖しく映っています。それはまるでそれだけが生きて蠢めいている感じでした。

やがて鏡の中の私の顔は、ほんやりと霞みはじめ疼痛が、そのうち無感覚にまで昇華すると、今度は一種の喜びに似た戦慄が、腰から胸へつつ走るのを意識し始めるのでした。

× × ×

気がつくと、私は市之助の布団の上に静かに寝かせられていたのです。

「どうや、ちよつとは芝居の根生とコツが揃めたやろ」

市之助の眼はさっきとは、うって変って優しく笑いかけています。

「一寸もきついことあれしまへん。あんな折



檻やったら毎晩でもやってもらいます」

「はははは、強情な奴ちゃ」

市之助と私はその日から、毎日のように激しいケイ古に熱中するようになりました。然し、そのケイ古は台本にもないような責め場ばかりでした。

ドサ廻りの一座では、このような事は一般社会程、取沙汰される事もあまりなく、別に噂に昇るでもなく、私達は幸せな二人の世界に生きていました。

それは秘密な世界であるだけに、異様な悦びもまた深いものなのです。

ただ伯父と母にだけは知られるのが怖しく

て警戒していました。

旅先の宿では勿論一つの部屋に二人が泊る習慣でした。舞台の欲びよりも、その頃の私はもう市之助の虜になってしまっていて、彼の云うことなら、どんな無理難題でも、喜んできいてやれるのでした。

このような感情が所謂、異常でありアブノーマルな性格の現われであるとは、後年、軍隊に入隊する迄、その確かなことは私には判らなかつたのでした。

思えば、大津の宿で、市之助に折檻された夜、私の体内に潜そんでいた、その妖しい芽が、どっと噴き出したものでしょう。

## 懸賞（告白と手記と体験）原稿募集

### ☆賞金☆

優作	一篇に付 一万円	若干篇
秀作	一篇に付 五千円	若干篇
佳作	一篇に付 二千円	若干篇

### ☆規定☆

一、真実味溢れる告白、どうしても発表してみたいという自らの手記、或は自分で体験された貴重な事実を盛り上げた体験記を広く読者の皆さまの中から求めます。文章の巧みさよりも、実際に体験されたもので

あるという真実の裏付のあるものが大切だと思ひます。従つて必ず自作のものであることは勿論、未発表のものに限りまゝ。  
二、枚数には制限はありません。用紙も必ずしも原稿用紙でなくとも結構です。締切日も別にやかましくきめませんから、いつでも、どしどしお寄せ下さい。入選作は最近号に掲載の上、賞金をお送りします。応募原稿は読者原稿と区別するため第一頁に「懸賞告白」とお書き下さい。

それからの私は、もう坂道を下る荷車のように、異常の美味酒の中にとっぷりと浸りきってしまった。肉体は男性でありながら心は女性になりきって、いや、心ばかりではありません、体もすっかり女になりきって、身も心も女として、男性からの嗜虐の触手を求めるようになってしまったのでした。

やがて戦争の激化と共に私にも召集令状が来ました。これを機会に今までの常軌を逸した生活に別れを告げ、新しい人生の門出を迎える意気込みで入隊した私でしたが、この男性ばかりの軍隊という世界に於ても、正常な私としては扱ってはくれなかつたのです。

あとで考えてみれば、それも無理からぬことで、戸籍面では、たしかに男として出生しているし、又、召集令状も来て、立派な一人前の男性として扱ってしてくれたのですが、その当時の私といったら、立居振舞は勿論のこと、言葉づかいまで女のそれであつたのですから、殺伐な男性ばかりの世帯の中で、恰好のなぶり者となつたのです。

軍隊の内務班に於ける私の生活や敗戦当時のあの闇市はなやかなりし頃の爛熟した生活などについては、いずれ稿を改めてお話ししたいと思います。

(完)



## マゾ小説

## 奴 隸 志 願

獅 子 鼻 明

坪 内 篠 画

「君からの手紙は読みました。それが真実なら、きょうから二十四時間以内に出てきなさい。少し場所が遠いようだけど、一匹の奴隸として私の鞭の中で一生飼ひ殺されたいという、その覚悟があれば私の命令一つでどんなに遠隔な土地からでも今すぐにでも飛んできて私の足下にひれ伏せる筈です。まだ主従の誓約を済ませたわけではないので、今日の扱いは普通にしてあげますが、誓約が了ればその時から君は一人の人間ではなく、一匹の奴隸として私に奉仕するのです。」

節分の夜でした。私はこのようなご主人様からのお手紙をご生大事と肌身につけて、大阪から東京行の列車に乗っていました。

私の身装は、この寒い二月の初旬ではありましたが、デパートの八〇円均一売場で買った薄いナイロンのパンティー一枚きり、そのうえにはシャツもなく、素肌じかに戦時中着古した木綿の単衣の国民服の上下、靴下もなく素足に薄汚れた白のツック靴といったいでたちです。頭髮は昨日刈ったばかりの丸刈坊主頭です。懐中には例のお手紙の外には、乗車券を買った残りとして汽車弁代二百円ばかりがあるだけです。

ギッシリ詰った車内の乗客の注意は一樣にこのみすばらしい私の姿をぎょう視しています。温かいオーバーにくるまった紳士、豪華なミンクのオーバーに深々と身体を埋めたお

嬢さんや奥様達からジロジロと蔑視の眼で見られながら、私は片隅の座席で、折からのしんと肌に応える寒さ冷たさをじっと堪えて、ガタガタ震える身体をせめてものスチーマの暖かさで支えられていました。姿を大勢の人達から蔑視の眼で見られることも、私の被虐を満足させる欲びにちがいありません。然もこれがいよいよきょうからまだ見ない美しいご主人様の奴隸になるという、長い間の念願が叶えられての旅だと思ふと、得もいわれぬ嬉しさと倖せが、冷えた素肌に暖かく燃えあがるのでした。

翌る朝、初めて広大な東京駅にはふり出された私は、何回となく道行く人に尋ね回り、



やっと中野区にあるご主人様のお屋敷の前に着いたのは、もう午後の三時を過ぎていました。応接に出て頂きましたお女中様に、例のお手紙を出してお願いすると同時に、着てきた国民服とズック靴を脱ぎ捨て、コンクリート敷の玄関に蹲りひれ伏しました。お女中様は、「ちょっとお待ち……」といった奥へはいられました。かれこれ二時間もその場でその儘蹲っていました。やがて再びお女中様が出てこられますと、「奥様は今お留守よ、そんな処にては目障りだから、こちらへきなさい」といわれるままに案内されたのは、広々とした庭園でした。そして私はその飛石の上に正座を命ぜられ、奥様のお帰りを待ちますのでした。着てきた国民服もズック靴も、そのお女中様から命じられて、裏口のみ捨て場に投げこまされました。勿論それは覚悟してきたことですが、薄いパンティー一枚きりの素肌で冷たい飛び石の上での正座は苦しい修練です。

そのうちにトップリ陽も暮れて、四辺はすっかり暗くなってきました。お座敷の灯だけが明々と輝いています。奥様のお帰りはまだなのか、四辺は静まり返って、誰からも忘れ去られたように、私だけが広い庭園の石

の上に正座しています。急に家のことが考え出されました。といっても私には妻もなく、娘夫婦の家に厄介になっている独身ものなのですが、さぞ娘は驚いて八方へ私の行方を探し回っていることでしょう、もっとも僅かではあるが私の貯金帳と印鑑は、娘も知っていない私の机のひき出しに入れておきましたし、会社の退職金も受取る手続きを了えています

ので何とか役に立ててくれるでしょう。もう私は人間でなく一匹の卑しい奴隷ですもの、世の中のことは関係がありません。

こんなことを考えているうちに、ポツリポツリ降り出した雨が、二三十分もすると大降りとなり、私の素肌は全くズブ濡れに濡れて寒いというより、このまま凍え死ぬのではないかと思うほど感覚も薄れてきました。もう





何もわかりません、意識が遠くなって、そこに倒れてしまいました。

すると間もなく、電気にでも打たれたような激しい痛さを伴って、私の肌を打つピシリッという鞭の音。ハッと眼が覚めると其処にレインコートをお召しになった美しい奥様が立っておられました。私は驚いて身を堅くし飛び石の上に平伏しました。

「駄目じゃないか、そんなことで奴隷になる資格がないから今からすぐお帰り……」

と仰せられる奥様の声に私はおうおうおろとして水溜りの地面に顔をすりつけて、

「お許し下さいませ、お許し下さいませ、これから決してこのようなことはいたしません。何卒お許し下さいませ、そして奴隷にしてくださいませ、お願いいたします。どんな苦しいお仕置きでもお受けいたします

す、どうぞお願いいたします、お許し下さいませ、おゆるし……」

何回も何回も顔を地面にすりつけて、お願いする度に、私の尻や背に革鞭か下ろされます。その鞭の痛さも忘れてひたすら嘆願する私に、奥様もやっと鞭打つ手をお休めになっ

て、

「それでは今晚一晚其処に居なさい、明日改めて誓約してやるから」と仰せになってお座敷へ引とられました。

雨は益々勢いを増して土砂降りです。濡れ鼠のようになった私の腹の底まで込み込み

うな大雨です。私はその中で「有難うございます有難うございます」と連呼しながら、冷たく堅い石の上に正座して奥様を伏し拝みました。

翌る朝は愈々私が奥様の奴隷として誓約される嬉しい日です。雨も止んで、明るい陽差しがお座敷に輝いています。

お座敷の中央、あかあかと燃える電気ストーブの前のソファに腰かけられた奥様、一段下った板の間には女中様が、そして私は冷たいコンクリート敷きの土間に、雨に濡れた裸体のまま、顔を地にすりつけて平





伏しています。やがて女中様の手から洗礼の鞭が十回、私の背に尻に降されました。

「どう、覚悟は出来たかい」と奥様が仰っしゃいます。

「ハイ」私は鞭の下から声を出しました。

すると奥様のご命令で、私の身につける戒具の数々が女中様の手によって運ばれます。

先ず鼻の孔には奥様のお好みによって、鼻孔一杯に塞がる太い鉄の輪がはめられました。

私の人一倍大きい鼻の孔はこれによって一分の呼吸するすきもなくなりましたので、思わず口を開け、よだれを流しています。そして両手を繋ぐ手錠、足には足錠、最後に奥様御自らのお手が、私の額と胸と背にマジックインキで一三号という番号をお書き下さいました。私の名前は、きょうから獅子鼻明ではなくて、奴隸第一三号となりました。次に頂いたのは、一枚の誓紙です。私はこれを声高く読み上げるよう命じられました。

## 誓 詞

一、私は人間の皮を冠った罪深い一匹の卑しい奴隸でございます。

一、私は夏でも冬でも、夜も昼も裸体で衣類といえは腰に一枚の薄いパンティーを纏わせて頂いているだけで、鼻孔を塞ぐ太い鉄

輪、両手と両脚は三〇センチほど広げられる鎖をつけさせて頂いております。額と胸そして背には私の呼称一三号という文字を書いて頂いております。

一、私の食事は一日一回、女王様の御朝食のお残りである魚の骨、パンの縁を食べさせて頂きます。用便も一日一回お嬢様（お女中様のこと）の御監視ではい出させて頂きます。

一、私は一日中休みなく女王様のお身の回りのお仕事、お食事お洗濯御入浴御就寝等、忠実にさせて頂きます。御命令には絶対服従いたします。

一、私が若し、仕事をさぼったり、ミスをしたときには両手両脚を一つに縛って頂き、顔と胸そして腹に灯のついた蠟燭を立てて頂いて、熱い蠟涙を全身に頂きます。

一、私の仕事のない時は、手脚を縛られ、仰向けになって女王様のお机となり、お食事のときは同じく食卓となって使って頂きます、少しでも動いたときはお仕置きとして鞭打ち百回の刑を頂きます。

一、そのほか、女王様のお気分のお悪いとき等は、如何様なリンチもお受けして、女王様の御気分の晴れるのをひたすらお祈りい

たします。

右七カ条を守り、心から御奉仕することを無上の歓びとして堅く誓約いたします。

奴隸一三号

女王様

私がこれを読み了ると、女王様は、

「よくわかったね、……それでは毎朝私が起床したとき、毎夜私が就寝するときの一日二回づつ、私の足下にひれ伏して大きな声で読むのよ、そうしておまえが私の卑しい奴隸の分際であることを、肝に沁みてたたきこむと、わかった……」と仰せられて、鼻の鎖をグイと引き挙げられます。

「ハイ、よくわかりました、有難うございます」

私は平伏してお礼を申し上げますと、「じや、ほんやりしてないで仕事仕事、これお花」女王様はお嬢さまにお指図されます。私はお嬢から鼻鎖を引っ張られて立ち上りました。今日の第一のお仕事は、お廊下の雑布がけでした。短かく括り合された手に雑布をつかみ、足首を上上げて足の鎖が床に当たらないようにと命じられるまま這い回るのです。寒い二月の中旬、素肌の寒さにもかかわらず私の全身は冷たい脂汗でびしょ濡れです。



そしてその汗が先刻鞭打たれた数条のみみず  
脹れに泌みる激痛を堪えての仕事です。

フト横見をしたはずみに、立てていた脚が  
下って、とうとう板の間にチョッピリ傷をつ  
けました。さあ大変です、じっとストーブの  
前で私の惨めな姿を微笑みながらご覧になっ  
ていられた女王様にみつかりました。

「この怠けもの……」

というお声とともに、又もや革の鞭が雨の  
ように数限りなく続けさまに私の裸身全体に  
頂きました。

何回ほどお鞭を頂いたことでしょうか、鞭  
打ちが止むと、「お礼は……う」といわれま  
す。

「有難うございます、有難うございます」お  
鞭を頂く度に、必ずそのあとで正座平伏し  
てお礼を申さねばなりません。

そのあとは又引続き、よく注意してお廊下  
の雑布がけのやり直しです。それが済むと女  
王様のお下着の洗濯、続いて女王様のお食事  
です、誓紙にもありましたとおり、私は両手  
両脚は海老縛りにされて仰向いた裸身を固定  
し、胸の上には数多くの皿や食器類が載せら  
れます。それに一番辛いことは、ガスこんろ  
から降したての熱いお鍋やお土瓶が裸身しか

に載せられることです。ジジーツという音を  
立てて焼ごてで焼かれるような熱さにもジッ  
と堪えねばなりません、でもビリッとでも動  
こうものなら大変です、その熱さにも堪えて  
歯を喰いしばっています。

それが済むとお風呂のたきつけ、女王様の  
お支度が出来ると、私は鼻鎖を引ずられて浴  
室へ、そして美しいお肌に、卑しい私の手が  
少しでも触れないようによく注意しておなが  
し申し上げます、私の手脚だけではありませ  
ん、少しでも冷たい水の滴りをお尊体につけ  
ようものなら、私は水漕の中へ逆吊りに沈め  
られて、呼吸も絶え絶えに一晩中、悶え苦し  
み通さねばなりません。

やっとうご入浴が済めば浴槽の掃除、そして  
ご夕食の用意、又食卓となつての苦しみ、夜  
ともなれば、女王様お読書の椅子となり、い  
よいよお休みとなればご寝所の準備万端、お  
休みになるまでは、いろいろと責めのご研究  
のモデルとなり、漸くそれも済んで女王様が  
静かにお休みになられるのを見てはお廊下に  
下って誓紙の朗読、それが済むとお庭に降り  
て、庭園の飛石の上に正座して明日を迎える  
のです。

一日一回の残飯を頂くのみではヒシヒシと

した空腹を覚えて、一日中の激務にもかかわ  
らず眠ることも出来ません。

これが私の奴隸志願第一日目の日記です。

若し私が仕事にへまを仕出かして、私自身の  
体に傷をしたとすれば「この能なし犬め」と  
怒られて散々鞭打たれますが、女王様がご座  
興に、私の身体を切ったり突いたりされて傷  
をおつけになることは当然の権利です。

私は女王様から傷つけられても、何の治療  
も受けずに、そのまま血達磨になって立ち働  
かなければなりません。ということは、私の  
身体は、女王様が飼育される玩具に等しい生  
きものであって、私の身体ではありませんも  
の。聞くところによると、女王様は兵庫県の  
ある酒造家のお嬢さまですが、ご病気のため  
精神に異常がきたされ、ご両親からこの別邸  
を造ってお貰いになり、ご自由な生活をされ  
ておられるのだそうです。何卒一日も早く、  
ご病気が全快されて、あのお美しいおみ足を  
私にねぶらせて下さるような日の来ることを  
祈りながら、こうして一日一日ときたえられ  
ていく私は、辛い辛い毎日の責苦を受けるな  
かで、ほのぼのとした欲びに生きていくこと  
を希っています。





## 告白への考察

## 人間性の表裏

谷村鉄玄

○  
僕は本誌を読んでいて、読者の手になる告白に一番強く胸をうたれる。そこには嘘やいつわりがなく、そして、そこに語られている真実の生活の中に、自分自身の姿を見ることが出来るからである。

読者通信もその意味で僕にとっては楽しい告白文章の集まりである。その簡単な通信文の中に、僕はときに一大ドラマを見るような気がするところがある。

僕は本誌が創刊された頃の読者だが、以前は胸をうたれる告白や体験記が多くあった。

昭和二十九年から三十年にかけての本誌は

定価は百四十円だったが頁数は四百頁近くもあり、全く充実していた。僕はその頃の本誌は一冊の欠号もなく集め、ぼろぼろになるまで繰り返して読んでいた。

昭和二十九年七月増大号に山岡紫朗君の告白「義母への追想」という一文がのっているが、この文章の中に、僕の偶像の一端が書かれていたことは、本当にうれしかった。

その頃、僕だけが、こんな変てこりんな考えを持ちつづけ、しかも実行し続けているのかと思い込んでいた過去の汚点から、生れかわった気持ちで一杯になった当時の心境の変化は今でも忘れることはできない。

○  
僕は戦時中に中学時代を送ったため、環境そのものはかたくなな世界におかれていた。国体の本義、弘道館記述義、新論、宮本武蔵「五輪書」、山本常朝「葉隠」等を愛読し女性の如きは全く眼中になかった。ひたすら自分の身を鍛え修業に志したものであった。坐禅で足がいたくなるとき、もっと苦しめば強くなる、自己を苦境のどん底へおとすならば、もっと頑健になれる。一にも二にも、人よりも強くなることに気を配らされた。

しかし、日本の敗戦という一大転帰によって、僕の一身上についても大きな変化がもたらされた。嘗ては女性をあれ程けがわらしいものと教え込まれ、自分自身でもそう感じていたのに、その軽蔑しきっていた女性に拘束されたいという気持ちにさえなってきたのだから不思議である。

銀座の街にちらつく女性の脚線美にこよなく引きつけられ、電信柱につき当たったこともある。はては、靴磨きの男が女性の足のさきの靴をみがきながら、しかも、スカートの下からちらりと盗み見ているかの如き表情をしているのを見ると、うらやましくさえなってしまうのである。



こんなことが、あの終戦前の僕のどこを見てもでてこなかったのに、と思うと全く不思議な気持がしてくる。日本敗戦と共に開花してきた女性への関心が、当時の風潮とあいまって僕の心を伸び伸びと華やかに彩ってきたのである。

その頃、僕は単身上京して下宿していた。昼は或る通信社に勤め、色々な夢を描きつつ帰り下宿の小母さんの足をもませて貰った。小母さんというのは、今から思えば三十才ぐらだったろうか、その頃の僕には何かしら大層年上のように思えて圧倒されたものだ。

結婚して間もなく出征した御主人が南方で戦死されたとかで、勿論子供もなく、焼け残った郊外の家で一人住居していたのである。小肥りで色が白く、その頃の僕にとっては如何にも小母さん、といった感じであったのだが、衣料不足の当時の服装が多分に影響していたということも考えられる。

初めは中々もませてくれなかったが、毎日しつこく頼んだら、遂にもませるようになった。女性の肌に直接手をふれるということは僕にとっては初めてであった。僕は嬉しくて肩や腕ばかりでなく、足さきから脛へかけて特に念いりにもんでゆくのであった。

小母さんの足は色が白くて、指の爪は恰好よくととのっていた。脛なんか、押さえるとピンピンと弾きかえすような張りがあり、もみ終ったときの僕の掌は、彼女の皮膚の脂でべっとりとなるくらいであった。

僕が小母さんのところに厄介になっていたのは約半年ばかりであったが、僕の小母さんに対する「夢」はいろいろに発展していったが、現実には足をもませてもらうだけで、それ以上には行われずじまいだった。

○

佐津直帆君の「若き女の足に狂う」という告白文を読んで大いに共鳴した。

僕も若き女の足には、こよなく憧れているということを告白する。あの細い足で頭や顔をふみにじられる時の嬉しさは、何んともいえぬものである、この事は君と同感である。

今、僕は君と同じ考えを聖母マリア様にさげている。マリア様は僕を強く叱って下さる。あの御足で私を踏んで下さるのだ。

右足で踏みにじられたら、左足でも踏みにじらるべしと考え、この事を懇願すると、又左足にて踏んで下さる。僕はその御足を限りなく尊いものに考える。

踏みつけられるたびに、マリア様はにんま

りと笑顔を作つて下さる。ねっとり脂くさい足の裏の美しさは何ともいえない。僕はこのマリア様の美しい足によって踏み殺されたという気持を抱く。

美しい女性の足の下にひざまづきたいという気持を抱くのは、男性として当然であると考えられる。そして、美しい女性を独占したいと考えるのも当然であろう。従って、SとかMとかいっても、その派生するところのものは一つであると推量される。

マリア様の美しい御足で踏み殺されたいという僕の願いは、一つの夢である。輝く光りと共に「ああ」と思ったら、いつも目がさめてしまうのだ。そして佐津君の「若き女の足の狂う」が、現実の僕を更に一層浄化してくれるのである。

○

このようなことを考えている僕も、平常は至って何ら変りばえのしない、いやむしろ、固いとさえ見られている公務員であるが、一度仕事をはなれて、自分の趣味に熱中するとなると、事程左様に普通の人とは一風変わった方向へと派生してゆくのだから妙である。

従って或る反面、二重人格者といわれても仕方がない。しかし、考えようによっては、



ゴルフに熱中して、雨の中でも傘もささずにクラブをふるっている中年の紳士や、麻雀で徹夜をして、翌日は眠くて仕方がないといっている青年達と、そう大して違っているとは思えないのである。

僕は職業柄、宴会の席に侍ることが比較的多い。そんな時、酒が相当まわってくると、男は勿論のこと女にしたって、話題はいわずと知れたエロ話である。人の噂や悪口を云いあうことに比べたら、猥談の方が当りさわりがなく、いいにきまっているし、誰でも猥談を聞いて怒る者はないのだから、酒席の話題としては、これが最良に違いない。第一初対面の者同志にしたって、共通の話題といえ、これに限るのである。

殊に美しい女性（水商売の女は別）を前にして、酒を飲んだり笑わせたり、猥談を交したり（と、いつでも女の方からは積極的にはしないだろうが）するということは、インテリと自称する男にとつては興味があるようだ。殊に僕は、良家の夫人といった落ちついた気品のある女性が好きである。

例えば、芸者とか仲居とか、バーのマダムとか女給とかいった水商売の女性はピンとこない。と、いうよりも逆にこういう職業の女

性は、縛り上げてうんといじめてやりたいという気持が湧いてくるのである。今までも酒宴のあとを利用して、あり合せの紐で、この種の水商売の女を数回括りあげたことがあったが、いつも、そういった時に僕の注意が集中されるのは、起き上ろうとしてもがいている女の足である。

女が縛られた時の足は、僕にとっては本当に可憐で美しく見える。だから、僕は緊縛フットを見ると第一番に足へ目をやる。もし足先が写っていなかったりしたら、僕にとっては画竜点睛を欠くことになるのだ。

## ○

良家の女性に対しては、その足で踏まれたいと願う僕。いや、その女性が高貴の方であったら踏み殺されてもいい、というよりそういう女性より踏み殺されることが最高の感激であるという気持が強いのに、その反面、接客業者である女性であつたら、如何に美人であつても、いな、美人であれば美人である程括り上げ、押し倒し、足が宙に舞うところを見たいという僕の心理は全く不思議という外はない。

SとMは表裏一体といわれているし、その傾向を併せ持っている人の告白も読んだこと

があるが、この僕のように極端なのは知らない。これは一体どういう説明を加えたらいいのであろうか。

先にも書いたように、僕の昼は謹厳で勤勉な紳士である。しかし、空想の世界では完全に人間という動物の世界の生物でしかない。多くの人達も、実際はこうであると思うのだが、殆どし人は仮面をかぶって、真実の姿を喋りたがらないのだらうと思う。

例えば、「都市に於ける交通難の打解について」といった案件に関して会議を開き、その重要な一員として貴重な発言をしてきた紳士が、その帰途の車中から見た街角を歩く婦人を見て、自分の性向にマッチした空想を馳せたとしても、誰かがとがめることが出来るだろうか。その夜の宴会で、飲めないという若い妓に無理に酒を飲まし、逃げようとする女の足を握って引き戻したって、誰がこの紳士の行動を非難するだろうか。

僕は出来る限り多くの人達の告白や体験を書きたいと思う。どうか、愛読者の諸君、どしどしと偽りのない真実の文章を持ち寄ろうではないか。

（おわり）



## 長篇S M小説

## 宇宙のどこかで

△或る無期徒刑囚の告白から▽

佐 治 麻 造

## 特殊白線地帯にて

タクシーに乗せられて、私が奥様に連れて行かれた郊外の其のアパートは、高い塀と、深い木立ちを回らせた立派な建物でした。よく肥えた婦人が出迎えて

「これなのね。確かにお借りしたわ。」

「ちょっと、此の登録権利証のここへサインしといてね。じゃ約束通り月に二、三回は遊びに来るわよ。」

「その代り、念押しとくけど借賃は只ね？」

「そうよ。ね、あんた、この男に今説明しておいてやったら、どうお？ このアパートの事をさ。」

「そうね。けど、この男、いい体格してるわ。ショーにも十分使える

わねえ。」

「あら、例の見世物にも使うつもりなの？」

「いいでしょ？ けど見世物なんて云わないでさ、ショーと云ってよ。人間きが悪いわ。」

「ホホホホ、ま、御随意に。これお前。このアパートはね、普通のアパートとは違うんだよ。すぐ分るけどね。」

深々とソファアに坐った奥様は、紫煙をくゆらせ乍ら足許の私に云いました。私がその床に正座させられている室は、天井の高い大きなサロン風の落着いた部屋で、多数のテーブルや椅子やソファア等がおいてあり、昼間でもカーテンを殆んど閉めて、柔かな間接照明の光が、一隅のカウンターの奥の棚に並べた酒瓶や、豪華で落着いた調度品を程よく照らして居ります。



「あら、あんた、足錠を外してやってよ。絨氈が痛むわ。」  
 「そうね、うっかりしてたわ。」

奥様のお話によると此のアパートは、つまり有閑婦人達の遊興の場なのでした。此のサロンの外にダンスホール等もあり、独立した各室にはそれぞれハンサムな青年や、逞ましい男達が住んで居て、今は昼ですから夜の精気を養うべく、各々の室で憩うて居るのでしよう、ヒソソリとして居ます。

「今何人居るの？ 男の人は。」

「ええと十二人程よ。けどね、此頃は昼間にやって来る御婦人がかなり増えたわ。今だって二人来てるの。フッフ」

「商売繁昌で結構ねえ。けど取締りの方はどうなの？」

「それがやっぱり一番気を使うわねえ。御客様をよく選ばないとひどい目に会うわ。」

そこへ一匹の女奴隷が現われました。錠のおろされた黒い革褌だけの体は、浅黒く上品に引締って、中肉中背の、スラリとした三十五、六の女でした。伸ばさせて貰って居る真黒い髪を紐で束ね、鼻環と革の首環だけで、手足は自由にしています。体に刷られた奴隷登録番号の外に額に3と赤くマークを打っていました。

「おそいじゃないの？ ベル鳴らしてから何分経ったと思うの？」

「す、すみません。あの。」

「言訳は駄目だよ。そら。」

マダムはソファに坐ったまま手を延ばして、足許に跪いた女奴隷の両頬を激しく平手打ちしました。

「お茶でも淹れて持っておいで」

「ハ、ハイ」

女奴隷は立ち際に彼の方をチラと眺めてカウンターの中に消えましたが、その黒い瞳が一瞬ギラギラと燃え整った顔に血が上った様でした。

「女奴隷は何匹使ってるの？」

「五匹よ。奴隷頭になって取仕切ってる1号は、もう五十過ぎてるけど、他のは皆二十台と三十台よ、すぐに自由にしてやらなきゃならないのは都合が悪いからさ、刑期の長いのはかり買ってるんだけど、高くついたわ。」

「あら、そう云えば此の男いいの？ だってさ、もう二年もしない中に私に返して貰うつもりなんだから、此のアパートの事を他所でしゃべるかも知れないわよ。」

「それはいいのよ。その男は未だ十七、八年残ってるんでしょ？」

「奴隷は証人にはなれないし、証拠さえなけりや大丈夫よ。」

「フーン。それならいいけど。所で、此の男に私が使ってた戒具は届いてるの？」

「来てるわ。大きな箱にずっしりと一杯入ってたのねえ、あんたと云う人は。」

「フッフッフ、だって苦しがるの面白いんだもん。せいぜい使用してやってよ。」

「私はね、余りごてごてと鎖錠しない方よ。逃げる心配はないもの。」

そこへ1号がやって来て、跪きました。マダムのお下がりの服を着て、鼻環だけの五十年配の女でした。既に労苦の皺が刻まれた顔に赤く1の番号が刷られ、素足の足裏の皮は厚くひび破れて居ました。



「これが、此の間話した男奴隷だよ。こき使っておやり。ええと十一号にしようね。」

「ハイ。奥様、男手がございますと便利ですね。これ十一号、こっちへ来るんだよ。」

地下の奴隷部屋に連れて行かれた私は、奴隷頭の女奴隷の手で額に番号を刷られ、革褌を嵌めて締め込まれ、革の首環をつけられて手錠を外されました。ガランとした地下室には、その三分の二程を鉄格子で仕切って檻が設けてあり、その檻の外には粗末なベッドが一つおいてありました。

「お前は当分の間、檻の外に繋ぐからね。そりゃそうと、ここのこととは聞いたかい？兎も角私の云う通りにキリキリ働くんだよ。マダムも余りひどいお仕置はなさらないけど、ただ御客様に対しては、これっぽちでも御氣に召さない事したら凄く罰を受けなきゃならないよ。それから、お前は男だから、この男の人達に苛められると思うけど、それは仕方ないねえ。さ、では手始めに門から玄関の辺りを掃除。」

殆んど掃除する必要もない程の通路や植込みの辺りを這い回って居りますと、出て来られた奥様が声を掛けました。

「じゃ二十五号、じゃなかったわ、十一号ね。しっかり働かなきゃ駄目だよ。いいかい？」

「ハ、ハイ。」

「けど手足も括ってないし、楽だろ。」

「ハイ。もう勿体ない位でございます。」

アパートのマダムが口を挟みました。

「けど、様子を見た上で、矢張り施錠するかも知れないよ。ね、あ

んた。此奴が氣に入らない真似でもしたら、こらしめてやってもいいでしょ。拷問道具は一揃あるのよ。」

「あら、どうぞ存分にやってよ。大抵のことに驚かない筈だしちよっとやそっとでは、こたえない体してるわ。けど殺してしまつてはいやよ。じゃさよなら。あーあ、又これから今夜も働かなくちやいけないのねえ。奴隷はいいわね、何の心配もなくてさ。」

奴隷頭の女に何やかと雑用を命じられ、初めての家でまごまごし乍ら立ち働いて居ますと、やがて夕方近くなって、各室の男達もボツボツ姿を見せ、外出して居た連中も帰って来ました。女奴隷達も通りすがりにジロジロと私の方を見て行きます。見様見真似で支度を手伝いましたが、オロオロしてへまばかりやり、マダムや奴隷頭に叱りつけられ通しでした。顔は柔和ですが、眼付きだけは鋭い、黒い背広の男がやって来ました。隅でオドオドして居る私の方を顎でしやくって

「ああ、あれですかい？ マダム」

「そうよ。いい体してるじゃない？」

「そうですねえ。これならいけますよ。今夜から初めましょうや」

「ああ、いきなり？」

「そうですよ。稽古なんかなしで充分でさ。自然のままの方がいいですよ。ところで。お前は差し当って夜は門番だ。扉の内側で突っ立ってろ。お客様が見えて、覗窓から会員証をお渡しになるから、俺の所へ持って来て見せる。会員以外は絶対に通しちゃならねえぞ。男の方も三、四人おられるが、殆んど御婦人ばかりだ。いいな。」

「ハ、ハイ」



私は入口の扉の内側に独り立ちました。扉には頑丈なカンヌキが設けてあります。

色白の優さ男や筋骨逞ましい男達が、派手なスポーツシャツやリゅうとした背広姿等、思ひ思ひの粧いでサロンに集まって来て、物憂げにあちこちに坐りました。

「マネージャーがね、やっぱり男の奴隷には嵌めとかなきゃいけないってさ。何しろ、お客様は御婦人ばかりなんだからね。」

奴隷頭の女の素足で絨たんを踏んで近付いて来て、私の両手に馴れた手付きで手錠を嵌め、さっさと立去りました。その音に気付いた男達は、私の方を眺めました。

「お、男じゃないか。」

「ウン。いい体してるし、面もいけるじゃないか。」

男達に飲物を運んで来た若い女奴隷が私の方を見てウィンクしました。額の赤いマークは4で、ぶりぶりとした小柄な女です。

「おい、4号。嬉しそうな顔をするなよ。」

「フッフ、そりや嬉しいだろうて。しかし両方共これじゃなあ。」

赤いシャツから毛深い腕を見せて居る男は、4号の革褌の錠前を指で弾いて笑いました。とっぷり昏れてしまつて暫くすると自動車は停まる音がして、扉のノッカーが鳴りました。覗き窓から白い手袋が渡したものをマネージャーに持って行こうとした途端、近くの椅子に坐った男の足が、私の向脛をしたたか蹴り払いました。

「此の野郎。膝で歩かねえか。」

「ホホホホ、馬鹿ねえ、ほんとに。」

床に倒れた私を見て、生白い男が女のような笑い声を上げました。マネージャーの許可を得て、膝でいざって扉の所に帰り、カンヌキ

を外しますと、入って来たのは、豪華な洋装の大柄の婦人でした。

「おや、マダムいらっしやい。暫くお顔を見せませんでしたね。どこで浮気してたんです？」

先刻、私を蹴倒した赤シャツの男が、彫の深い顔に笑みを堪えて近寄り、薄いコートを脱がせて、しわを厚化粧で隠した婦人の額にキスしました。

「ウフフン。あれやこれや、中々忙しいのよ。けど今夜はゆっくりするわ。」

「泊って下さるんですね。嬉しいなあ。」

「ウフッフ。あら、これ何？」

私に気付いた婦人は、眉に縦じわを寄せて云いました。

「今日来た奴隷ですよ。十時頃からショーをやらせるそうですぜ。」腕を組んだ二人は奥の方に消えました。

或いは徒歩で、或いは自動車で、金と暇をもて余した婦人達は、ひそやかにやって来てサロンも賑やかになりました。やがて停った車は気配で奴隷が、更く乗用車だと分りました。足枷を嵌める音の数から考えると二頭立ての車らしく、現われた婦人は、それ迄の客の中では一きわ若く思える女性でした。男達の中でも一番品のあるタキシード姿の男が、シガーを捨ててにこやかに迎えました。

「今日は又一段と美しくていらっしやる。」

「ホホホホ、お上手なこと。」

婦人は私に気付いて、眉を吊上げて睨みつけました。

「あらッ。今日はマネージャーじゃなかったのね。道理で窓が開くのがいやに早かったし、黙って会員証を持って行っちゃまし、変だと思つたわ。」



「どうかしましたか？」

「いいえね。さっき覗窓から手を入れた時にね、此奴の息が手に掛ったのよ。ま、汚らわしいわ。奴隷だったのね。」

許しなしに口を利くことは禁じられて居ますので、私はお足許にひれ伏して赦しを乞いました。マネージャーがやって来て、

「とんでもない奴だ。そんなこと迄一々教えてやらなきゃ分らないなんて。こら立て」

扉の外に蹴り出された私は、鞭で三つ四つ打たれて呻きました。

「気をつけろ。馬鹿奴。あの御婦人は、飛び切りの上客なんだぞ。」

私が再び扉の内側に立った時には、その婦人は男の膝の上に横坐りに坐って、サロンでハススカクテルを啜って居ました。御婦人はかり八、九人やって来て、やがて十時も



少し過ぎました。

私は奴隷頭の女の手で生れたままの姿にされて、ただ鼻環だけをブラ下げたまま、サロンの奥の方の中央に敷かれた敷物の上に立たされました。同じ様にされた4号の女奴隷が連れて来られて向い合って立たされ、私達の鼻環と鼻環は四、五十センチの鎖で繋ぎ合わされました。眼も昏む思いでもじもじする私達は、

「こら、じっと立ってろ。気を付けだ。」  
叱りつけられ、私は齒を喰いしばって息をつめて喘ぎました。奥に引込んで居た連中も笑い乍ら出て来て、周りに席を占めて眺めます。

「此奴達は全然訓練して居りませんです。全くの云わば素人でショウ等と云えたものでもございませんが、自然のままの有様も又御一興かと存じます。」

女奴隷4号との、いわゆるショーを勤めた私には再び錠がカチリと鳴り、首環を締められ、両手首には重いU字環の手錠が喰い込んで、再び扉の内側に立ちつくしたのです。夜も更けて帰る客は帰り、泊る御婦人は室に引取



った後、私達奴隷は残り物をあてがわれて地下の檻に追い立てられました。用便を済ませた2号から5号迄の女奴隷は、檻の鉄格子の前に並んでうなだれます。

「4号はうまいことしたじゃないか。え？」

奴隷頭の女は、後を向かせたり、両手を挙げさせたり、脚を開かせたりして、女奴隷達を一人ずつ頭の先から足の先迄念入りに検査した後、物入から四個の手錠を取出しました。掻き回されて調べられた髪を撫でつけたりして居た四匹の女奴隷達は、一斉に両手を差伸ばして深くうなだれます。黒光りする頑丈な手錠を嵌められた女奴隷達は次々と鉄格子の扉を潜って檻の中に入りました。

「お前はね、さっきいい目をしたんだから、ちっとは埋め合わせして貰わなくちゃね。」

一番後回しにされた4号の若い女奴隷は、上体を深く折り曲げて両手で両膝を後から抱く様な恰好にされて手錠をかけられました。

よちよちと檻の中に入ろうとした4号の尻が蹴り飛ばされて、彼女は檻の木の床に音を立てて倒れて呻きました。奴隷頭の女は檻の扉をガチャンと閉めてピンと施錠すると、今度は私の手錠の片方を外し、檻の鉄格子の一本を潜らせて、再び嵌めて、そのまま出て行ってしまいました。

「ブッ倒れちゃって痛かったか知らないけど、もう喰るのは止めたらどうお？ やかましいわよ。」

檻のあちこちに寝転んだ女奴隷の一人が、4号に意地悪く云いました。

突然1号奴隷が入って来て、2号と5号はとび退いて離れました。「フフフ、お前達何してたのさ。」

奴隷頭の女は嘲笑い乍ら、粗末な寝衣に着替えてベッドに横たわって壁のスイッチに手を伸ばしました。真暗になった地下室で、五人の女達の気配を肌を感じ乍らウトウトとしかけた途端、パッと灯いた電灯に眼を覚めました。奴隷頭が傍らに立って大きく息をし乍らキラキラする眼で見下ろして居ます。女優の三升阿井子を少しお粗末にした様な顔だと思いました。彼女は黙って私の手錠を外して立たせ、下半身の錠も全部外すと、ベッドを顎で示しました。

「さ、これお飲みよ。」

1号奴隷は持って来た古牛乳を私に飲ませて呉れ、再び念入りに錠を施して、さっきと同様に手錠で鉄格子に繋いでしまい、スヤスヤとベッドで眠ってしまいました。

### 奴隷の懲罰

十時に叩き起された私達は手錠を外されて、追い立てられ、キリキリ舞いして仕事に掛りました。

「外回りや廊下の掃除は、もう私達がしなくてもいいのね。11号さん、しっかり働いて頂戴な。」

集めたシートや枕カバーを抱えて洗濯場に運び乍ら2号が私に声を掛けました。門を入った所には、昨夜の若婦人が乗って来た奴隷車が一台まだ置いてありました。駐車の鉄の足枷を両足にガッキとかけられた二匹の男女の奴隷が、革と木の轡を肩に乗せたまま、バーに繋がれた手錠の上に顔を伏せて突伏して眠りこけて居ます。口に咬まされた鉄のくつわから伸びた四本の手綱が風に揺れて居ました。

「近いうちに旅行しましょうね。コンディションを整えといてよ。」



ホホホホ」

「あんまり嬉しがらせないで下さいよ。」

朝化粧も一段と美しく満ち足りた様な顔つきの若い婦人が、男に送られて出て来ました。

「あんた、コーヒを淹れるの上手ねえ。男の癖にハムエッグなんかも手際よく作るし。おいしかったわ。」

「詰らないこと賞めないで下さいよ。鍵をお貸し下さい。足枷を外してやらなくちゃ。」

「ええ、お願いするわ。はい、鍵……。」

「こんな足枷は嵌めたり外したり面倒でしょう。手も汚れるし。監獄で懲役囚に使ってる様な第何種とか云ったつけ、鉄の環だけをいつも嵌めとく仕掛の奴があるでしょう。あれ便利ですよ。こら、起きろ。」

青年に蹴り飛ばされた二匹の奴隷は、よろめき乍ら立ち上って、腕で眼をこすりました。

「おや、こっちの奴隷は女なんですわ。頭を坊主にしてあるから分らなかったですよ。」

「フッフ、この二人はね、夫婦だったのよ。昨夜は二人並んで仲よく寝られて喜んでると思うわ。あ、その足枷は、ここに積んどいてよ。」

四本の手綱を左手に握った若婦人は、帽子を優雅にかたむけて右手の鞭を振り上げました。

「じゃ、さよなら。」

ピシリピシリと革鞭が鳴って、重い軛をゆすった二匹の奴隷は、ふらつく脚を必死に踏張って車を曳き初めました。見送った青年は

口笛を吹き乍ら引返して来ましたが、私を見ると砂利の上に正座を命じ、何の理由もなしに額を蹴り飛ばして、笑い乍ら家の中に消えて行きました。おひるも大分過ぎて漸くマダムも起きて来た様でした。

「11号さんてば。マダムが呼びよ。勝手口へ来いって。」

3号が呼びに来ましたので、勝手口で正座して居ますと、奴隷頭の女が蒼い顔で現われ、続いてマダムが豊満な体に薄い黒のガウン、銀色の帯を結んで出て来ました。

「1号。お前、昨夜この11号と妙な事したそうね。どう云うつもりなの？ え。」

女奴隷1号は、紫煙をくゆらすマダムの足許に跪まずいて、両手を合わせて必死に哀願しました。

「……あの……昨夜、お寝みになる時に、それとなくお願い申し上げたら……お許しになった様に思えましたので……。ずい分迷ったのでございますけど、つい……。申訳ございません。お赦し下さいまし。これからはもう決して……もう……。」

「お黙り!! そんな事、許してやった覚えはないわよ。お前、此の頃少しつけ上ってるわね。分際を思い知らせてやるわ。お前、鞭と手錠を持ってるだろ。それをお出し。」

「お、お赦し下さいまし。」

「うるさいね。さっさと出して着物をお脱ぎ。」

1号はポケットから手錠と、グルグルまるめた鞭とを出してマダムに差し出し、啜り上げ乍ら服を脱ぎました。マダムは啣えた煙草の煙に顔をしかめ乍ら、女奴隷の両手に手錠を嵌めて鞭を握りました。「後向いて膝をおつき。」



明るい所で見た1号の肌は、労苦の刻まれた顔に較べますと意外に張切って居ました。

鞭が背に鳴る度に、女奴隷は身をよじってヒューヒュー泣き喚きました。

「今の所は、これで一先ず勘弁しとくわ。それからと、11号。お前はまあ仕方なかっただろうけどさ、何故辛抱しなかったの？ まっすぐに立って両手を上に伸ばしてごらん。」

私も背中と胸と、腿の前後とに一ダースばかりの鞭を当てられました。

「1号。手錠は外してやるけど、当分服は着せてやらないよ。仕事は今迄通りさせてやるけど、気を付けないと3号を奴隷頭にするかも知れないからね。」

彼女はブルツと体を震わせて

「そ、そんな。分際はよく……よく判りましてございます。一生懸命働かせて頂きますから何卒……」

マダムは女奴隷の手錠を外してやると、笑い乍ら奥に入りました。

4号の女奴隷が、洗った物を抱えて干しに行き乍ら、鼻環を陽にきらめかせて私にウインクして通りすがりに云いました。

「フフフおぼちゃん、鞭喰ったのね。痛かったろ。フフフ」

からかわれた1号は立ち上って前を押え乍ら腕を震わせました。

「な、なにを云うの？ も一度云ってごらん。」「フフフ、何度でも云うわよ。もう鞭を取上げられて持っていないんだろ。いつもいつも私達をいい気になって鞭でぶってさ。いいさまだこと。」

怒った1号は走り寄って4号に平手打ちを喰わせました。云い度い事を云っては見たものの反抗する気はないらしい。4号は、撲ら

れ放題にビンタされ乍ら大袈裟に泣きました。

騒ぎを聞いたマダムがヘヤーブラシを片手に長い髪をなびかせて急いで出て来ました。すぐに事情を察したマダムは、

「4号。云っとくけどね、1号は奴隷頭なんだよ。窄衣かけて吊るして欲しいのかい？」

震え上ってひれ伏した4号の頭を、さんざんに踏みつけ蹴飛ばして、1号は怒りを晴らしました。

其夜のショーの相手は5号でしたが、昼間にマダムから受けた鞭痕が、痛くて堪りませんでした。夜が更けて、女奴隷達が手錠を嵌められて檻に閉じこめられるのについて来て眺めて居たマダムは、冷く1号に云いました。

「お前はね、昨夜の罰として、今夜から少しばかり辛い目に会わなくちゃいけないわよ。可哀想だから一晩おきにしてやろうかしらね。十回で勘弁して上げる。これ、11号、手伝うのよ。」

マダムに云われて物入れを開いて見ますと、いろいろな鎖錠類が沢山入って居ました。

声もなく震えて立ちすくむ1号の腰に鉄の腰枷が両側から嵌め込まれ、鎖帷が掛けられました。あぐらに坐らされた両足首は捕縄で縛り合わされ、その縄尻は両肩越しに背中に戻され、後手錠の鎖にからんで、グイグイと絞られて結ばれました。海老の苦しさに喘ぐ女奴隷の鎖帷の中心の金具に、天井の滑車から垂れた鎖の先がつけられて吊上げられ、哀れな女奴隷は少し尻を浮かせて、悲痛な呻きを挙げました。

「それでいいわ。さてと、十一号はこうしておくからね。」

小さな弁当箱位の大きさの金属箱の両側についている一ヶ宛の環



の片方が一本の鉄格子の下の方に嵌めこまれ、床に横になった私の鼻環を、もう一個の環がカチリと叩えました。思い切り衣紋を抜いたマダムの襟元やうなじはホンノリと紅に酔って居ました。しやがんだマダムは立ち乍ら

「いいかい。十時にセットしとくからね。十時になったら鼻環から外れるわ。そしたら7号を解いておやり。鍵はベッドの上においとくからね。分ったかい。」  
「ハイ。」

1号が苦しげに哀願しました。

「お奥様。お赦し下さいまし。お慈悲でございますから。もう苦しくて痛くて……」

「ホホホ。もうネを上げてるの？駄目よ。ああ、それから皆に云っとくけどね。こうして1号はお仕置を受ける訳だけど、やっぱり奴隷頭なんだから、そのつもりで居るんだよ。分ったかい？ 何故黙ってるのさ。聞えない？」

四人の女奴隷達と私は

「ハイ」

と声を揃えて返事致しました。

「ありが……とうございます。奥様。」

浅間しい姿で懲罰を受けている1号は、苦しげに喘ぎ乍らそれでも心から嬉しそうな声でいいました。

パチンとスイッチが消され、マダムが出て行ってしまおうと真暗になりました。



「おばちゃん。いくら呻いたって無駄よ。静かにしてくれよ。」  
4号らしい声が性こりもなく、1号をからかいました。



「そうよ。お前さんとちがって、こちとらは一日中働いてるんだからね。」

尻馬にのって憎々しげにいったのは5号らしく思えました。

「ちくしょう!! 4号と5号だね。明日奥様にそういつて鞭を借りて思い切りぶってやるから。ウッウウ。ああ、苦しい……」

「鞭位何さ。まあ、せいせい苦しむがいいわ。」

「ああ、ほんとに地獄ね。あんた達、そんなことしてないで早くねなさいよ。」

隅の方から3号の声がたしなめました。

「へ、ヘンだ。何よ、どこの御嬢様だったか知らないけど、人殺しの上、脱獄迄してさ。そんなこと云えた柄じやないだろ。」

それを云われるのが辛いらしく、3号はクックツと忍び泣きを洩らし、両手で顔を掩うたのでしよう。両手の手錠が触れ合う音がしました。

「私達は仕方ないとしても、あんたのこの手錠だけでも、出来ることなら外して上げたいわねえ。」

私の手を未だ握って居る4号が殊勝なことを云いました。

「その、3号のお嬢さん。そりや私はね、パンパン上りの空巣常習犯で前科もある女さ。この5号のお姐ちゃんね、枕探しでその上放火犯だよ。2号は何だっけ。あ、女強盗だったね。みんなそれぞれしたたかなもんだけどさ、鼻環をつけられたら、もうその分際になり切ってるんだよ。それにお前さんは何さ。時々上品ぶったことを口走りやがって。ヤキを入れてやろうか。」

三人の女奴隷は、真暗な檻の中で3号の体をさんざんに擦って苦しめ抜きました。

「ヒヒーウウ……ヒー、も、もう勘忍して。お願い。」

「フン。だったら、私達の足の指をお舐めよ。」

3号は嚙り泣き乍ら云われた通りにした様でした。

「おい、もういい加減にしろよ。同じ奴隷の身の上じやないか。」

「フフフ、あの人が折角ああ云って呉れたんだから、これで勘弁してやるわ。この手錠を嵌められてなきや、ビンタを喰わせてやるんだけどなあ。」

漸く檻の中も静まって、闇の中を高く低く1号の呻きが断続しました。

「あなた。十一号さんてば。」

頭を揺られて眼がさめました。檻の中から3号の端正な顔が心配そうに覗いて居ました。

「もう時間過ぎてるわよ。ホラね。」

気がついて見ると、鼻環はタイマー錠から外れていました。あわてて跳ね起きた私は、涎をたらしてグッタリ死んだ様になっている1号の鎖錠や捕縄を解いてやりました。

「……ウ、ウッウー、フーツ」

気丈な1号はよろよろと立ち上がり身の始末をしました。

「腰枷は外れないの？え、十一号。」

「ええ、マダムが持って行ったんでしよう。どの鍵も合いませんよ。」

「そうかい。じゃ嵌めとくおつもりなんだね。仕方ないわ。」

彼女は、フラフラし乍らも、女奴隷を檻から出して手のいましめを解いてやって、労役に追い立てました。午後、マダムのお許しを得たのでしよう、1号は鉄の腰枷に手錠と革鞭を吊って、意気揚々と現われました。3号を除く三匹の女奴隷が心行く迄鞭打たれて悲



鳴を挙げたのは申す迄ありませんでした。

其の日のショーの相手は2号でしたが、彼女が鞭痕の痛さに呻いてのたうつのが、却って客の興を誘った様でした。閉店間際になって、奥様が現われました。奥様とは、私の所有の婦人です。

「ああら、早速やって来たのね。フッフ」

「ええ、今夜は雨で暇なもんだから、早目にカンパンにしたの。おや、おとなしく働いてるかい？」

「ハ、ハイ。」

私は手錠の両手を合掌して深くうなだれました。

「大分消耗してる様ねえ。辛いの？」

「ホホホ、そりやね、あんだ。何年振りかで、連日だもの。」

「あら、毎日ショーやらせてるの？隔日位にしておやりよ。」

「フッフ、さ、うちの坊や達を見てやってよ。どれがお気に召したの？」

奥様は、毛深い逞ましい男を、残った男の中から選んで、頬を紅潮させて奥に消えました。

### 女奴隷3号の仕置

こうして、この特殊アパートでの奴隷生活が過ぎて行きました。

私の奥様は十日おき位にやって来ては泊って行かれ、其の度に私は地下室の闇の中で胸を掻きむしられる思いでした。毎夜のショーは2号から5号迄の女奴隷を各々相手にして勤めさせられました。上品な3号の時は、それでも楽しく思いましたが、4号や5号の時は本当に虫唾が走る様な心地がしました。一日おきに十回のお仕置きは、マダムの言渡し通りに、1号に加えられ、さしもの1号奴隷も

背身にこたえた様でした。二十日間嵌められ放しだった鉄の腰枷を漸く外して貰った1号は、私を繋ぐのもそこそこに、ベッドに倒れて泥の様に眠りこけたのでした。

「何さ。毎日、昼の間、かくれて昼寝してやがった癖に。あの豚みたいな寝息はどう？」

4号は檻の中から差出した両手で、今夜も私の手を握り乍ら毒ずきました。

「明日から又、威張るわよ。あいつの鞭ったら、マネージャーのよりも痛いものね。」

「監獄の看守をやった女なんだから仕方ないわよ。」

奴隷頭を勤めている女奴隷1号は、嘗ては刑務官として、監獄に勤務して居た婦人看守だったのです。其の彼女が、現在の身の上になった経緯については、其後彼女の口からかなり詳しく聞きました。が、後程述べようと存じます。

「【作者註】此の女奴隷が語った内容については、此の手記に於て詳しく記して居るが、余り長くなるので、別的一篇にまとめて、機会があれば御紹介したいと考えて居る。」

1号のお仕置きが済んで五、六日経ちました。今夜のショーの相手は3号の筈だと胸躍らせて、玄關番を勤めて立って居ますと、サロンで鋭い婦人の叫び声が致しました。いつも奴隷に車を曳かせてやって来るあの若い婦人のドレスに、3号が運んで居た飲物が引っくり返ってしたたか掛ってしまっただけです。全身蒼白になった3号は震えおののいて、その場にひれ伏して恐怖に身を堅くしました。上客に対する失態に立腹したマダムは「若奥様。誠にどうも申し訳ございません。此の女は充分懲らしめま



すし、勿論お召物の弁償もさせて頂きますから……」

「弁償なんかして要らないけど、一体どんな懲罰を与えるおつもりなの？」

「ハア、鞭で二、三十打って……窄衣でも掛けてやりますわ。」

「そんなの手ぬるいわよ。殺してやるのがいんだけど、自分の物じゃないから、そんな訳にも行かない。奴隷だって、責め殺したって事、判ったら、あとが少し面倒だしねえ。全く矛盾してるわ。じやね、お尻と足裏に焼爇でも当ておやりよ。」

「ホホホホ、ずい分又、おきびしいんですのねえ。」

余り気乗りしないマダムの素振りに柳眉を逆立てた婦人は、自ら見に行くと云って、濡れたドレスを脱ぎ捨てて、男の膝から立ち上りました。

「マダム。奴隷は、きびしく扱ってやらなきや駄目よ。」

「ホホホホ、若奥様の所みたいにも多勢の奴隷を使ったら、それでございましょうねえ。そう云う風になさなくちや、しめしがつきませんものね。」

マダムはお世辞を振り撒き、現われた1号は、3号の両手に手錠を鳴らして引立てました。

「焼爇あるんでしょ？」

「1号。確かあったわね。」

「ございますとも。」

1号の頬に残忍な笑みが微かに浮び恐怖に声も出ないで引き摺られて行く3号の後姿を見た私は、居ても立っても居られない気持ちでした。しかし、どうしてやる事が出来ましょう。やがて、微かに魂切る様な悲鳴が聞えた様な気がしました。続いて、今度は微かな

こもはつきりと、卒の様な絶叫が、サロンの音楽に混って私の耳を打ち、私は顔を掩うた両手の手錠をガチャガチャ鳴らせて歯を喰いしばって身もだえしましたが、サロンの連中は、どこ吹く風かと聞き流して笑い興じて居たのでした。

それ切り3号は姿を見せず、嬉しそうに3号の代りに出て来た4号は、意気消沈してしまった私を見て、齒ざしりするのでした。その様子が又、婦人客達のお気に召した様で、私の胸は煮えくり返る様でした。其夜更け、地下室に追われた私は、哀れな3号の姿を見て、涙をこぼしてしまいました。革の窄衣をきびしく締められた上から後手にひしひしと捕縄を打たれた彼女は壁の鉄環に鼻環をはめ込まれて、壁に向って立たされて居ました。両方のお尻には、無残な爇の痕がひどくついて居り、爪先立ちしてこちら向けた両足裏は殆んど一面火ぶくれでふくれ上って居ます。そして鼻環の位置が低いので膝を曲げねばならず、さりとて足裏を床に下ろすのは堪え難い苦痛なので、爪先に体重を掛けたまま膝を左右に開いて曲げた彼女、全身から脂汗を垂らして苦しみ呻いて居ました。地下室には未だ肉を焼いた匂が充満して居り、さしもしたたか者揃いの三人の女奴隷達も、此の光景を見て、息をのんでシユンとした様でした。

1号は電灯を消す前に、治癒促進剤を更に爇痕に塗りたくり、3号は声を絞り上げて泣き喚き、私は思わず耳をふさぎました。

「ひどい目に会ったわね。フッフ、こぼした相手が悪かったねえ。ま、今夜一晚我慢おし。」

闇の中で、3号の呻きが響く度、私の胸は千切れるばかりでした。そう云うことには敏感な4号の奴が口惜しそうに私の肩の辺りを強く抓りました。私は女奴隷3号が好きになっちゃったのです。其の後、檻の内外で少しづつ語り合ってた3号の身の上についてお話し申し上げます。(未完)



乗馬ズボン・シリーズ

## 幻想『近作によせて』

藤山 秀緒

## 「女神の塚について」

天高く馬肥ゆる秋、といわれるのに、私の体は次第に衰弱して行きました。

下腹ははって、気持ちかわるく、食欲もありません。

私は覚悟しました。死の近いことを感じたのです。身を灼くような欲望の嵐の中で、私は「女神の塚」「続太平洋にかける橋」「夕陽を染める乙女たち」を、矢継早に書きあげました。それは、私が前から発表しているように、私の生命のあるうちに、自分の作品を活字として眺めたいと思ったからです。

筆をとっては、どっと襲う嵐にたえかねて机にのめり、鏡の前によるめいて乗馬服のボ

タンをはずし、片膝立てて、盛りあがって下腹部を切り裂く秀緒。

気を取り直して、再び机にむかつては見て、去来するのは、目の前一杯にのしかかる乗馬ズボンと長ぐつのは、そして、あの身によじってしほり出す「ウーッ！」という苦悶の呻きの声ばかりです。

「女神の塚」は、一日に四、五枚のスピードで、約十日かかりました。失神さえいとわぬ一日十回近い切腹プレイの中で、息も絶え絶えになりながら綴る秀緒の乗馬ズボンシリーズは、「女神の塚」を境に、一きわ激しさを、白紙の上にたたきつけるようになりました。殆ど外出もせず、ドアを固くとざして、秀緒は床の上にのたうち廻りました。

プレイに疲れ果て、ソファにのめり込んで

乗馬服も、乗馬ズボンも、長グツもその儘、えびのようになって朝を迎えることも多いのです。厚いカーテンに遮られて、朝の日ざしは殆ど感じられぬままに、お昼すぎまで眠り込んだ日もありました。

ゆうべのメイキャップが、空しく見える起きぬけの鏡の中で、秀緒は寂しく笑いかけます。

馬場へは殆ど行かないのに、乗馬ズボンは何着も何着も、血と汗にまみれて、みじめな姿になって行きます。ソファの背も、それと気がつくほどに擦れ傷んで来ました。

ミルクを燗め、卵とベーコンの簡単な食事をすますと、秀緒に、再びメイキャップにかかると。

昨夜までの服を脱いで、入浴して全身をき





よめ、薄いパンティの上から、別の乗馬ズボンを穿きます。チェックのスポーツシャツの上からは川島芳子まがいのカキ色の乗馬服を着け、幅広のベルトでウエストを絞り、髪をたばねて鏡台にむかいます。まだ靴をはかないのは、襲いかかる嵐の激しさを怖れるか

らです。

面やせた鏡の中の顔が、カキ色の乗馬服に身を固めた己が姿を眺めているうちに、赫らみ、ひきつるのを感じます。

膝を揃え、何度も乗馬ズボンをたくしあげながら、秀緒は凛々しい眉、ひきしまった口もと、思いのかぎり勇ましく腹切るためのメーキャップに身も心も打ち込んでしまうのです。

お小姓を思わせるような、中性的なメーキャップが出来上ると、いよいよ黒革の長グツをはきます。

乗馬ズボンの脚部のボタンをかけ、固くひきしまった足を、ぴたりと吸着するように覆う黒革の乗馬靴の緊縛感……

鏡の中には、凛々しい女将校の姿が、浮かびあがっています。

机にむかい、冥想にふけた後、ペンをとって、死刑を宣告される高倉道子の、潔よい覚悟の様子へとストーリーは進みます。

のしかけるように体がおののき、

「あぁっ……」

思わず激しく喘いで机にのめりかけるのです。ああ、私は異常なのです。このようなことが、他の女性の方にあるとは思えない。

そして、その異常さを、いまこうして書かなければ居られない浅ましい欲望……

こうして書きつづけている今も、秀緒は、乗馬ズボン姿に身を固め、男物のワイシャツ姿でいるのです。

襲いかかる嵐と闘いながら、秀緒は、体をおこして、再びペンを走らせはじめました。

描写は、彼女が独房で、乗馬ズボン、革ジャンパーに身を固め、自決の練習をするシーンへと進みます。でも、

「ううっ……」

という自虐の描写が、私の体をしびれさせ私はたえかねて床に崩れました。

私は、ウーッ、ウーッ、と何度も呻きながら、あらぬ方に手をすべらせ、姿見の中のヒロインに、身も心もうちこんでのたうち廻るのです。

ズボンはいつしか幻の血汐に彩られてつめたく肌にまつわり、そして再び火と燃え、灼熱のるつぼとなって秀緒をさいなむのです。

夢心地の中で覚えていることは、私が、ただわけもなく、

「何の！何、これしきに……」

と口走ったこと、ウッ、ウッ、ウッ……

と、切腹の苦悶に泳えかねて呻いたこと、た



ただこれだけです。

拍車の音を、ちりちりとさせながら、ソファに跨り、お馬の稽古に身を灼くのも此の時です。

興果てて、ぐったりとする間もなく、十五分か二十分の後には、再び襲うおののきに、憑かれたようにペンを走らせる秀緒……

「女神の塚」のはじめの構想はこうでした。

切腹する高倉道子は、せめて皇軍が敵城を占領した時、自分の体の一部でもよいから、その地に埋めてほしい、と申出、遺髪と、かき切った腹から、まごころの象徴として臓腑の一部を、アルコール漬にして持参してくれるように頼み、刃を腹に突立てます。

（苦悶の描写は、あまり凄惨だったためか、編集部でカットしてありましたが、あのあたりはヤマ場の一つだったので残念に思いました。）

先ず一文字に、そして、引抜き、返す刃で鳩尾を抉り、そのまま下腹へ切り下げ、乗馬ズボンのベルトに達した作法通りの十文字腹のあと、

「うむ、こ、これより、た、高倉……高倉道子の……ま、まごころ……うつつ、まごころ……死、死んでも……戦の……う、う……

お供……こ、こ、この通りッ！」

引抜いた刃を右にとりなおし、左手をふるわせながら、さぐるように十文字の傷口の交叉点のあたりへすべらせ、血みどろの乗馬ズボンの膝でのび上りつつ、先ず人さし指と中指を傷口へ挿込み、ぐりっと肉をかきわけるように小手しらべをします。

「うう！」

呼吸を呑むように喘いで、決心したように上体をかがめ、そのまま、ぐっ！と左手首まで腹の中へ突込んでしまします。

「ウーッ……ウムウッ！」

執行官達、思わず顔をそむけ、そして、腹から絞り出す道子の絶叫に、我にかえって各々の乗馬ズボンのポケットをまさぐる描写もあったのです。

そして、道子は、苦悶に頬をひきつらせ、「アウッ！ウーッ！ウムウッ……」

唇をかみ、呻きを憶え、取乱さぬように最後の努力を傾けながら、腹中をまさぐる。

やがて、ぬめぬめとした臓腑の一端に指がかかったものか、肩で大きく喘ぎつつ、ひしと左手に何かをつかんだ様子。

「ウ、ウ、ウーッ！」

ああ、ぬらぬらと血汐にすべる褐色の臓腑

が遂に道子の左手首と共に露出しました。

……そして、この臓腑を、激しい意志の力で、二箇所を切って摘出し、執行官に手渡したのち、気がゆるんだのか、どさりと俯伏してしまします。

介錯を断っているのに、武士も及ばぬ十文字腹を仕遂げた道子に、ここで介錯を行うことは、武士道に反するという執行官たちの意見で、注射が打たれ、道子は意識をとり戻すのです。

「ううっ……」

我にかえった道子は、死にきれぬ恥しさに身を悶え、固く握りしめた短刀を取り直して「むうッ！むうッ！」

と、矢継早に体に突差し、苦しみます。

肩、胸、左腕と、突き傷は増し、革ジャンパーは朱に染まって行きます。

「高倉！のどだ！のどだ！」

執行官たちも、いまは彼女の死を早めてやるために声援を惜しみません。

「ウッ、ウーッ、キ、気力が……つ、つづかぬ！な、なんの、なんのッ！」

ぜい、ぜい、と喘ぎながら、道子は必死に刃をまさぐるのです。

道子は、何を思ったのか、体を海老のよう



にまげると、右手で左の肩を抱くように衿もとへ刃を擬します。

革ジャンパーの衿が立ててあるため、刃は直接肌にあてていません。

「うっ！」

最初の一掻きは革ジャンパー衿へ切り込んただけです。

力つきた道子の刃が、果して頸動脈をかき切ることが出来るでしょうか。

「がんばれ！」

「む、むう、むう……」

疲れ果てて道子は刃を肩にあてたまま、荒い荒い呼吸をつづけています。

そして、その呼吸が、迫ったと見るや。

「オウッ！ウ、ウ、ウ、アウッ、ウ！ッ……」

……

血汐が、ごぼっ、ごぼっ、と異様な音を立てて革ジャンパーの袴もとから溢れ出る。

ああ、道子は頸動脈を掻切ったのです。

そして俯伏せに苦しむこと数刻、彼女は、自らの意志の通り、介錯を頼まず、腹十文字にかき切り、臓腑をつかみ出して無念の割腹をなしたのです。

……このあと和田が駆け付け、死体を占領地へ運ぶ筋になるのです。

でも、途中で、注射のアイデアが浮かぶと、この筋は止めて、劇薬の注射で、燃えつくす生命の灯をくいとめようとするサデイスティックな描写にかえました。

そして、臓腑を引出して苦しむ処は、「夕陽を染める乙女たち」として実を結び、御覧のような凄惨な創作となりました。

## 「太平洋にかける橋」について

「太平洋にかける橋」の着想は、私宛の投書の中に、いま欧米では切腹のフィルムが流行していること、二、三世の女性の中には、日本人以上に武士道に憧れる人々もあって、これらの人々が、はじめプレイとして実行しているうちに、いつしかショウや映画のスターになってしまった話などがありましたので、それから、あのような作品を書くことになりました。

欧米には乗馬ズボンや長靴へのフェティシズムを持った人々が男女ともとても多いそう、それがハラキリと結びついた場合、外人には異様な興味をそそるものと思われます。

投書の中にも、同性愛の女性の方で、相手は米軍婦人将校、という例もあり、渡米カブ

キも、ハラキリで人気をたかめたときいています。投書には、そのシネを見せてもよい。というお申出でもあったのですが、是非モデルに、という書きぶりだったので、怖しくて御返事しませんでした。ですから、どこかの隅で、「太平洋にかける橋」は事実として存在すると思われます。

あの「太平洋にかける橋」でも、終りに、バーバラの腹切りへ持込もうと思ったのですが、やはり日本的なつましさの中に男装の夢を追うフェティシストの秀緒には、それが出来ませんでした。こんなとき、秀緒が男性だったら、一も二もなく、グラマーなバーバラの死を刻明に描いたことでしょう。法谷四郎様あたりにお書きねがったらと思うのです……

映画でも、モーリンオハラ、デボラカー、キャサリンヘプバーン、グレイスケリー、ドン・アダムス、ダニエルダリユーなどの、成熟した女優さんの中に、男っぽいレインコートや、スラックススタイル、或いは男装とさえいえる大胆なスポーツウェアを見ることが出来る、好んで男風に着こなした美女の役々が、私の好みを満足させてくれますが、やはり、この女性が切腹したら？と考えるのは、日本



の女優さんに限られるようです。

高倉みゆきさんのエレガントな感じは、びったりですし、別の感じでは、牧紀子さんもよいのではないでしょうか。

「夕日と拳銃」での三条美紀さんの乗馬服姿は、あの方のマゾ的な美貌と共に、そのまま腹切りへつながってくれるのです。

いまは、レインコートなど、男風のものが流行で、女性の好みも大胆になっていますので、映画にかぎらず、街を歩いても、男装フェチの方は、一目でわかります。

厚地のトレンチコートをがばっと着こなして袴を立て、ショートカットの髪、雨の日に傘もささず、レインチーフか、凛々しいフード、レインブーツをはいて歩いている方。

盛夏の街かどを、厚地のスラックスでジャツブラウスをスポーティに着こなした方、ラリーなんか、わざわざヘルメットや乗馬ズボン、編上げブーツで武装した女性ドライバ―。革ジャンパーに半長靴をはき、オートバイの後に乗って行くハイティーン。

みんな秀緒に限りない夢をプレゼントして下さいます。

ふと、行きづりに、すばらしいレインコートの同性を見かけると、思わずついて二三間

歩いてしまう秀緒。そんな時、私は、あのいやな思い出に遮られてしまうのです。それは自分が、つけられたときのあの気味わるさを感じ出してしまふからです。

レインコートや、スポーツウェアの着こなしは、外人の方が、私の好みにあうのですが切腹には、日本人の女性の方のイメージの方が、びったりします。

渡米カブキで名をあげたバラキリが、日本女性の手で世界を風靡する日も遠くないように思われて来ます。

こうして「太平洋にかける橋」は、正、続続々篇までつづき、ヒロインの死で結末をつけました。でも、続々篇を書いている時、私は、不治の病に死ぬヒロインを、自分の姿として描くことを忘れませんでした。

あれを書いている時、私は入院の期日に追われていたのです。自分では、これが秀緒の最後の創作になるかもしれない、というつもりもあって、このような最期をとげることが出来たらどんなに素晴らしいことだろうと思ひながら、ペンを走らせたのでした。

## それから

入院して手術をうけ、恢復に向うと、私は

何とかして生きよう、という気力が生まれました。

腹の傷は、切腹の幻想をたかぶらせ、私の心は妖しくときめきましたけれど、生きようと思う私の心は、馬装はおろか、奇クを手にするこゝさえ許さず、只管節制につとめて参りました。

引越しは入院の前にすませたようなものでしたから、新しいお部屋へ戻っても手はかからず、看護婦さんの必要もない位でしたが、無理に居て貰ったのも、一人住いで、いつもの生活に戻ることを怖れたからです。

でも、馬装への恋情は日々につのり、健康の恢復しきったいまでは、我慢することが辛く、このままノイローゼになりそうな気がして参りましたので、少しづつ、文章も絵も書き、プレイもはじめるようにしました。

病後、はじめて乗馬ズボンを穿くときの嬉しさは忘れられません。秀緒は、ズボンの一着に着に、それこそ頬づりし、汗の香をかき抱きしめてのたうちましました。

いまは外出には、後をつけられると困るので、スラックスを穿いて出ますが、自室に居る時はずっと乗馬ズボン姿です。

体もふとりましたが、今度不調となった時



は、もう恢復出来ないとのこと。ここ一年間位は危険信号です。

病後の第一作「燃ゆる星」は、その意味でヤマ場を幾つかにわけ、自制しながら、何日も何日もかかって書上げました。

いま書いているのは、投書の中からいただいた筋で、憲兵隊の拷問をうけた若妻が、実父の家で、切腹する筋、もちろん乗馬ズボンスタイル、拷問のシーンの責めもたっぷり、そして、医師の父に、死の記録を提供しつつ

「生体解剖」のような凄惨な割腹をとげるお話です。私の旧作「続々乗馬ズボンの女腹切」と、「燃ゆる星」をあわせたような筋で、あまり新鮮ともいえないのですが、病後の割腹描写が、どのような形で現れるか、自分でもヤマ場を書くのが楽しみです。

トレンチコートも、真紅に黒のボタン、ベルトや尾錠に革をあしらったのを新調し、いまそれを着て毎晩筆をとっています。ルームクーラーを全開して晩秋の冷たさの中でトレ

ンチコート、フードに乗馬ズボン、乗馬靴に身を固めて筆をとる秀緒を御想像になって下さい。

とりとめのないことを書きました。おゆるし下さいませ。菊枝が来る筈になっているのに、まだ来ないものですから、つれづれに書いたのです。新しい作品への御批評をおきかせいただければ嬉しく存じます。

(終)

# 〔詩〕

## 捕われの少女のうた

菅谷はるみ

芳彦さん――

私、縛られてるの、縛られてしまってるのよ！

縄が、麻のロープが、私の手足に噛み入って、厳しく縛り上げてしまってるのよ！

そして厳しく縛られた膝の上に突き転がされ、のめって蒼白な頬を、かおるさんの

太腿のストッキングに押しあてたまま動かないお嬢さん。

ロング・ヘヤーをうしろで束ね、淡い黄のオーバーコートのボタンはちぎれ、紅いセーター、ウグイス茶の膝上までの短いタイトスカートの暗色がかったナイロン・ストッキング。赤いサンダルのハイヒール。

かわいい膝小僧も太股までむき出しにした少女は、××製糖のタイビスト、木野咲子さんだわ。

捕われの中で、僅かに話し合えて知ったのは、皆んな、それぞれ、明るい元気な日々を楽しく生きている女性ばかりなのよ。

山本さんも、野原さんも心から愛する恋人を持ってるのよ！それが、ああ――

思いもかけない、手錠が、足錠が、縄が狼狽が、優しい女の手足を、こんな惨めな姿に束縛し尽そうとは……。

それだけじゃないの縛られてる人達――。

エビ茶のモヘアのオーバーコート、やや長めの髪、一ふさ軽く額にバンダし紺のボンネット、白の手套、紫色がかったスーツスカート。黒ハイヒールのお嬢さん、デパートにお勤めの村井悠子さん。





あるフェチ・ノートから

## 『おしめ』への幻想

土 丸 大 三

そのころ、私の入院生活はとても退くつだった。

もう胸の浸潤も退院してよいくらいに固まっていたし、一日四時間の安静時間をのぞいて、全く自由だった。

蒸し暑い日がつずいた。

私はそれまでの六カ月間、毎日のように私の目を楽しませてくれた、となりの女子病棟のうらの物干場への散歩の回数がふえていった。そこは花が咲いたように、美しい色とりどりの女性の干物のなかにまじって、白いズロースやパンティ、黒いブルマースなど、私の大好きなものが、いつまでも風にゆらめい

ていた。

ある日の夕暮。私はいつものように、その近くをぶらぶら歩きまわっていたが、ふと異様なものを発見した。黄いろく光ったもの、おしめカバーだった。しかも大人用の。

柔かいゴム布のうらから、赤い模様がのぞいていた。誰がこれをはかされているのだらう。と、好奇心にそそられた。赤ん坊のように、足をひろげられて、そしてバリバリと音を立てながら股の間にはめられるこのオシメカバー。私はそのあまりに赤い模様から、きっと女学生か若い女性にちがいないと空想した。いや、そうであってほしかった。

これまで、月経バンドには何度にもお目にかかったことはある、しかし、黒いパンティの中に黄色いゴムの当たっているバンドは、女性の生理的な血液で汚されているというだけのこと、私にはさほど魅力は感じられなかった。

私はとにかく、女性の尿に興味があった。毎日のように物干場に通ったのも、実はその女性の下着にわずかでもよいから、小便のアトがついていないかという関心のためであったともいえよう。しかし、大抵はその期待はうらぎられ、清潔に洗濯のおわったものだけしか干してなかった。時に使い古されたズ



ロースの肢の間に少し色のつきかけたものを遠目ながら発見すると胸がおどった。その部分を開に入れてかみしめてみたくなる衝動にかられた。

そして、その満たされない希望は、女性の下穿きへの愛著として私を妥協させていたのかもしれない。ズロースは女性の小便で濡らされることもある。その私にとって、女性のしかも、大人の小便で濡らされる運命にあるオシメやオシメカバーというものは、どんなに憧れの的であつたらう。

それが現実には、目の前に存在したということは、何というショック！

私は毎日夢を見た。白いシーツの上で若い女性が附添婦か、看護婦の手によって、オシメを穿かされるシーン——。お尻の下から股の間に二重か三重に、美しい花柄のついたゆかたで作られたオシメが通される。その上を腰のまわりに二重ぐらゐに横に包まれて、その上からあのぬめぬめとした柔かいゴムがびったりと締めて、ホックが左右に三つずつ……。

女は声も出さないで、じっとされるままにまかせている。パチリパチリと



ホックが止め終った時、その女の腰は赤い花模様のネルのオシメカバーでぶざまに包まれている……。全くぶざまなシーン。そのオシメカバーが赤くて美しいだけ、赤ん坊みたいにかバーをされている女の白い肌はぶざまである。

必ず数時間のうちに、そのカバーの中はこらえきれなくなった女の排泄物で、ぐしょぐしょに濡れてしまう。赤い花柄は黄色い生温

かい液体を十分に吸いあげる。そして、次にかバーをとりかえてもらうまでは、体を動かすたびに、ぐちゃぐちゃとぶざまな音を立てつつずけるだろう。

大きな赤ん坊、「よしよし、オシメをとりかえてあげましょうね」といわれながら、ホックを一つ一つはずされてゆく時の女の心理——。かすかなゴムの匂いにまじりあつた何ともいえない匂い。したたるように、ずぶぬれになったオシメ、つやつやと光るカバーの裏ゴムの布。

私は退院するまで、その幻想からぬけきれなかった。

私はそのオシメの主を知ることができないまま、また会社勤めの生活にもどつた。しかし、一度火のついた私の心は、いつまでも、その幻想からとらえられてはなれなかった。

オシメ——オシメカバー——。

私はどうしても、オシメカバーがほしい。私は大人のくせに、オシメを穿きたい。退院後、独身寮の一人寝の床の中で、私はオシメの幻想に悩まされながら、ひとりオシメ遊びにふけた。勿論、赤い



花模様のオシメが手に入るはずもない。私はデパートではずかしいのをがまんして、青い花模様のオシメを買ってきた。それを切って何枚ものオシメを作る時、私の手はふるえた。それを床の上で腰にまとして、カバーの代りに婦人用のパンティを穿いた。これも、はずかしいのを目をつぶるようにして小売から買ってきたものである。

そして、そのパンティの下にビニールの布をして、私のオシメこっこがはじまるのである……。

私はどこか地下室に拘禁されている。

体も手も嚴重にナワでしばられて、身動きもできないで冷たいコンクリートの上に横になっている……。

私は尿意を催してきた。がまんできなくて気が遠くなりかけている。その時、そーと女囚が一人入ってくる。私はたのむが便器などない。その女囚は自分のスリッパをぬいで、私の股にあて自分のズロースを穿かせてくれる。私は待ちきれないようにして、遂にあふれる液体に身をまかせてしまう。

女が笑いなから、その濡れたオシメをとりかえてくれる。

私はこの空想のなかで、現実にオシメの中に生温い感触に酔ってしまう。私のとうすい境……。

私は美しい若い女中を一人やとう。

私はその女中を床にねかせて、恥しがるのを無理にオシメをはめてやる。パチンとカバ

ーをはめてしまつて、私はその女中にビールやジュースを腹いっぱいさせる。

そして、そのまま自転車で買物にやらす。女中はスカートのめくれるのを気にしながら遠くまでペダルをふんでゆく……。そして、腹がはってきて、たえきれない尿意に苦しむ……。そして、どうとう、そのまましかぶつてしまつて……。

帰つてきた女中を私がからかいながら——女中は真赤になつて死にたいという表情を示して……。『おや、まあ、スカートまで濡らしてしまつて、ぐしょぐしょだよ』といいながら。

私の空想の世界はどこまでも拡がって際限がない。私は現実に自分の腰にまもっているオシメの感覚によつて、空想の泉が湧れることはない——。

女学生にオシメカバーを穿かして学校にやる。もし、その日に偶然身体検査があるならば、うすいシュミーズの下にすいて見える赤い花模様のオシメカバーをどんなにしてかくすだろう。



## 禪義兄弟

△体験、告白、手記▽

江戸禪男



「おい、おきろ！」

そういう声でけとばされて目がさめると七時半だった。兄貴はうつぶせになって煙草を吸いながら、片足でボクの布団をはねのけてきた。大きく背のびをしてとび起ると枕元の禪を締めあう。

昨日一日、兄貴が締めていた禪をボクが締め、ボクが締めていた禪を、今日は兄貴が締めるのだ。尻がさけるぐらいに力一杯締めるので、服を着ていても、いつも禪一本でいるような感じがこたえられない。

お互いに禪を締めあうと、フトンを片づけ窓をあけて朝日のさし込む庭で軽い体操をするのが日課のひとつなのだ。

新鮮な冷たい牛乳を胃に流し込み、兄貴は出勤の仕度だ。晒半反の腹巻を胸一杯にまきつけ、Yシャツとネクタイ、ズボンと禪男からたちまちサラリーマンに早替りする兄貴の仕度を手伝う。

靴をつっかけながら「行ってくるぜ！」とどなるように元気よくドアをあけた瞬間ふりかえりざまに、ボクの尻をどやしつけてビシッと叩いて出てゆく。

ボクはそれから、いつものように禪一本

のままベランダに出て手をふると、駐車場から白い齒をみせて笑った兄貴は、いきおいよく車をスタートさせた。ボクは居間にもどるとトーストをかじり、ゆっくりと朝刊をひろげて床にねそべって行儀の悪い姿勢で朝食を楽しむのだ。

それから居間兼食堂の洋室と寢室の和室の掃除にとりかかる。押入れに丸めてある禪の洗たくが次の日課だ。二本の六尺禪と腹巻、そして二本の赤禪だ。ベランダの軒にしずくの光る禪をひろげると籐椅子を持ち出し、オリーブ油を全身にぬると昨日の続きの日光浴をはじめめる。

さわやかな五月の太陽を全身に浴びて目をとじる。春さきから初めた日光浴は、皮膚の鍛錬と禪の跡を身体にきざみ込むのが目的で殆ど欠かしたことはない。おかげで兄貴もほめてくれる程浅黒く灼けてきた。夏がくるまでにボクの身体は多分、真っ黒になるだろう。

全く思いがけないめぐりあいでは結ばれた兄貴との生活も、もう一年になろうとしている。めぐるましく変化した月日だった。幸せな毎日ではある。

(未完)

若いオフィスガールにもオシメカバーを穿かせて街を歩かせよう。突然の交通事故で救急車にのせられて病院に運ばれる。その女性の心は？ いずれは皆んなが見ている前でスカートがはずされ、その下からぶざまなオシメを穿いた脚が出てくるのだ。しかも、事故の瞬間、ショックで洩らした小便をたっぷり吸って……。

○  
私はある新婚夫婦の旅行カバンに、そっとオシメカバーを入れておこう。

新床の上でふとでてきた大人用のカバーを花嫁は一体どうするだろう。

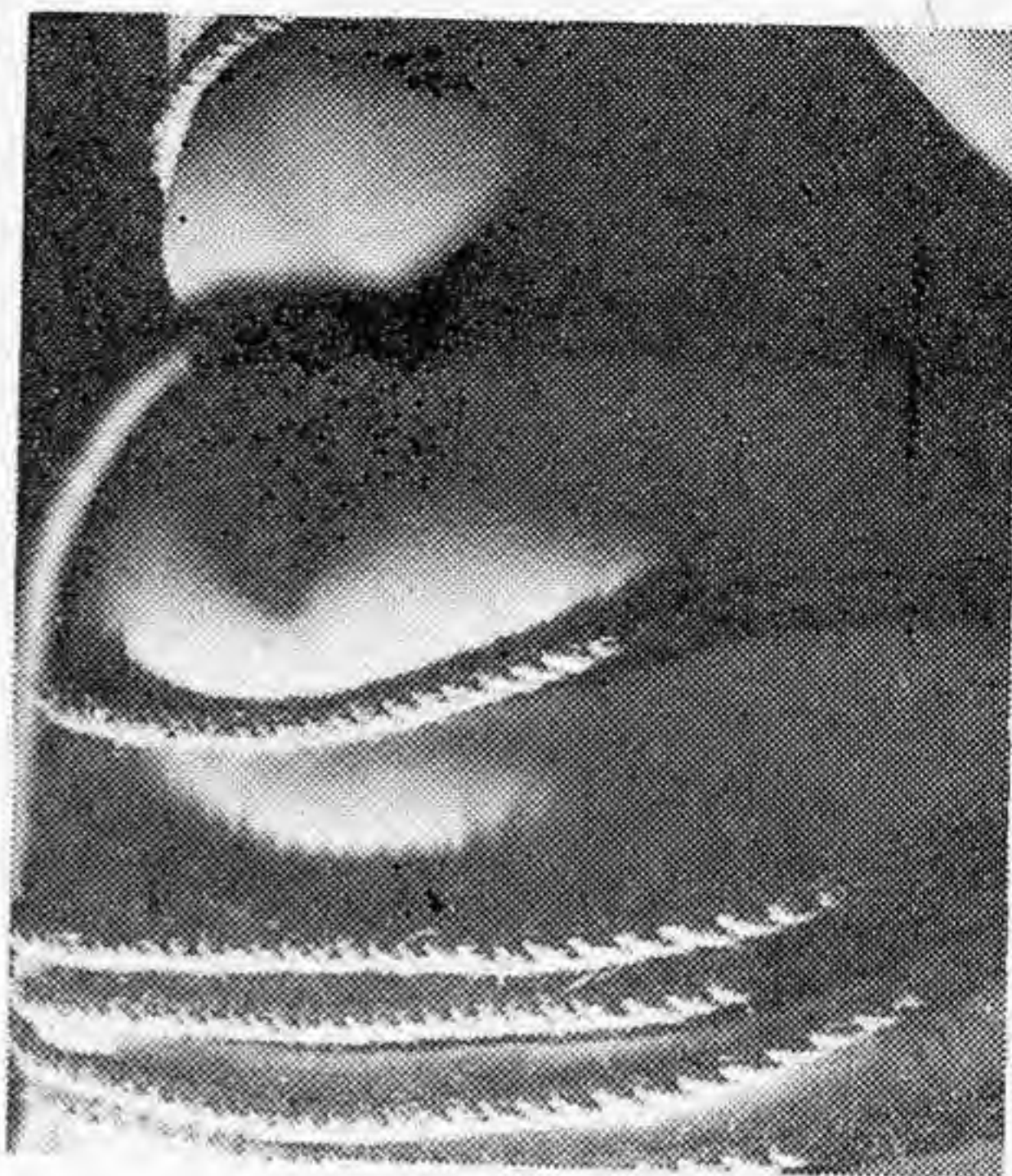
○  
新型大人用おしめショウ、美人モデルがファッション・ショウをやってくれる。

美人コンクールで水着のかわりにオシメカバーを穿かせたら。

○  
私の夢はつづいてゆく……。そして、私の今夜のこのノートをかいている間にも、私のオシメはずくずくに濡れてしまった。

(了)





△告白と体験△

## 愛 臍 讃 歌

“あなたの臍は、混ぜたぶどう酒を欠くことのない丸い杯のことく、あなたの腹は、ゆりの花で囲まれた山盛りの麦のようだ”

(旧約聖書雅歌)

庄 司 美 津 彦

「女性の最も美しいところはどこか」これは古来から何度も言われた男性にとって魅力ある問題である。或人はそのまろやかな乳房を言い、また豊かな腰部をたたえる。しかし私は、その柔かな腹部、なかなずく臍の美しさを讃えたい。今年もまた夏の季節、ビキニのシーズンがやってきた。美しい臍の窪みが見られる楽しい季節が来た。浜べに、海に、私は勿論彼女らの美しい姿を求めてゆくことだろう。

幼き頃より私の臍——ことに女体のそれに

対する憧憬は年ごとにつのり、今日に至っている。戦後のいわゆるストリップショーは私に望外の喜びを与えてくれた。もとよりかぶりつきに陣取って幾多の踊り子たちの臍を眺めたことだか知れない。しかしやはり美しい臍は美しい容貌の持主であってこそ、その美しさは倍加される。

映画女優の臍は、この意味で何よりも私の興味をつのらせてくれた。洋画はしばらくおき、邦画スターで臍を露出したのも数多いが、忘れ難く思い出すのは、新東宝時代の万里昌

代、三原葉子、前田通子のトリオや、可憐な三ツ矢歌子も「五人の犯罪者」では、その愛らしい小さな臍を見せてくれた。万里や三ツ矢歌子などは「お臍を出すのは恥かしい」といっているが、これはやはり実感であろう。

その他筑波久子、泉京子、柏木優子、毛利郁子、江波杏子などが私の好みに合っているが、あの若尾文子が「婚期」で、彼女の臍がクローズアップされ、一瞬ドキリとしたことも思い出す。京マチ子は「鍵」で、その豊かな腹を見せてくれたが、さすがに山本富士子



や有馬稲子などはまず見込みがない。

司葉子、香川京子、北沢典子などの純情スターの臍もまず拝見できぬだろうが、叶順子、水野久美、島崎雪子などのグラマーがついぞその美しいであろう臍の窪みを見せてくれないのは物足りない。外国では有名スターが惜しげもなくその美しい腹部を露出して心ゆくまで眼を楽しませてくれているが、願わくば日本の女優陣ももっと大胆に彼女のもつ宝を見せてほしいものだ。

“か黒かる汝が臍思えば心燃ゆるいつよりはかくせつなくなりし”

“深々と何か秘密をもちしごと、くぼみなれがほぞの黒さよ”

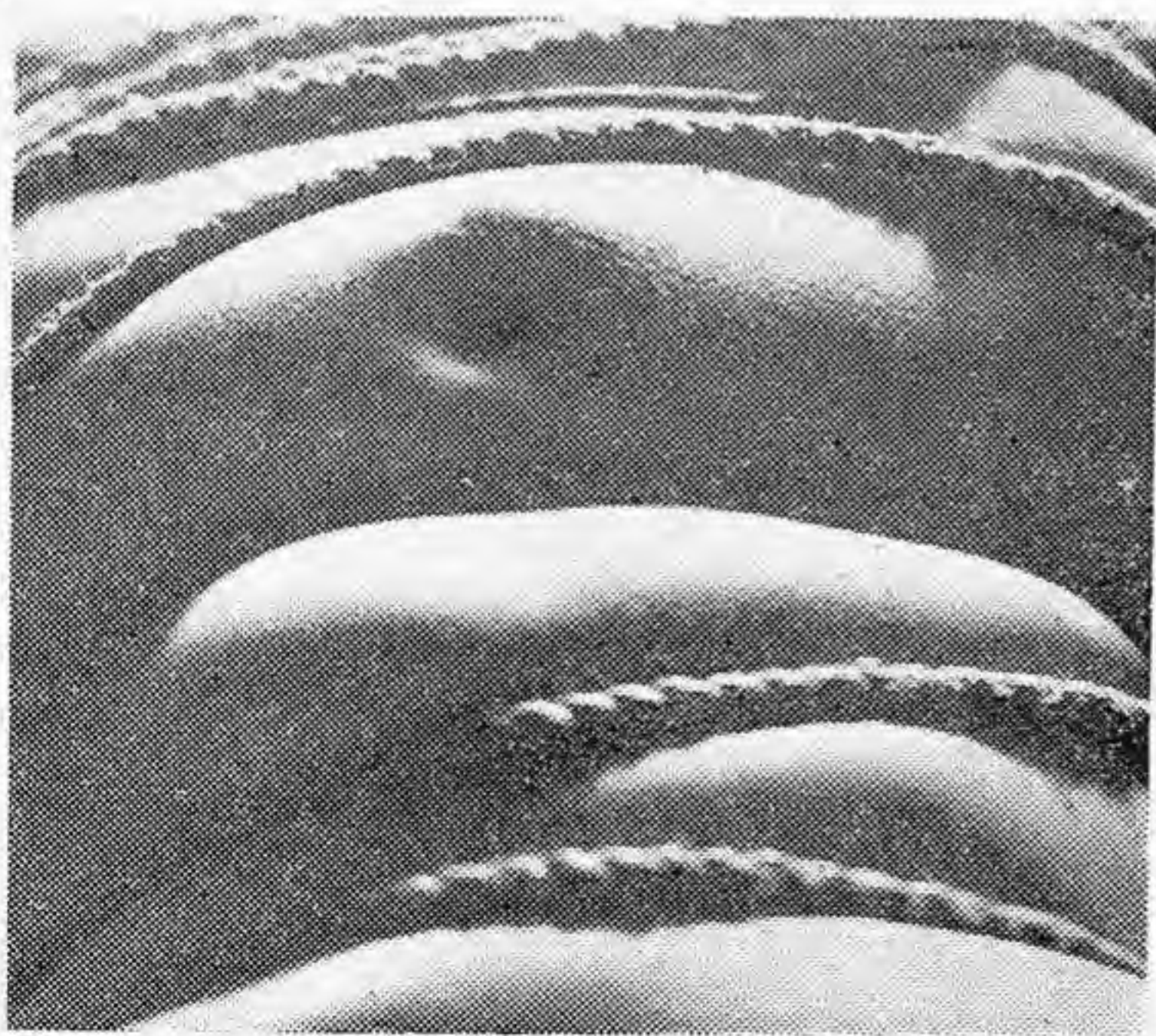
今日まで、私は多くの女優のビキニ写真や臍の研究に関する文献も多く手にした。既に「奇ク」に於ても玉稿が多々発表され、重複をさけたいが、一つのお願として今後とも臍を出した女優の映画や写真があったら本誌に紹介していただきたいと思う。

私には臍について、幾多の忘れ得ぬ思い出がある。あれは大学を卒業した翌年の冬だった。私はY温泉にある、ある会社の山荘を管理している叔父に代って一冬、留守番を依頼されたことがあった。

その時、大学時代の同窓生の菊地美智子からスキーの宿を頼まれ、彼女等五名を宿泊させたことがあった。そこで、私は偶然にも浴場で、彼女等の美しいヌードを隙間から見るチャンスをとらえた。それは、全くのぎょうこうだった。彼女等は子供のようににはしゃぎ、ある時は湯をかけ合ったり、お互の肉体をいろいろと批評し合ったりした。私は嬉々として戯れる彼女等を、どんなに素晴らしいと感じたことだったろうか。とりわけその豊かな腹部が息づくごとに静かに起伏し、そして中央の窪みが柔かに動く時、それは私にとって無上の喜びであり、臍の魅力を満喫した一時といっている。

菊地美智子の、その可憐な感じの肉体は、バラ色の美しい肌を見せ、その臍も小さくつつましやかに腹の中央に宿っていた。北川千里は裸になるとなかなか見事だった。臍は深女と窪み、黒いゴマが印象的だった。そして臍から下へ一直線に薄い正中線までも眺められて私の胸は思わずも早鐘をうつ

ようだった、加藤美奈子と堤雅子は渦巻型の縦長の臍だったが、既に人妻となっていた山中洋子は、その処女にはない美しい肌が見事に輝いていた。そしてその臍も――、洋子はその腹部をいかにも愛しむように撫で、肩から落ちる湯が二つの豊かな乳房から柔かな腹部へ、そしてその黒い中央の窪みからあふれて流れてゆく時、私はほんとうに美しいと思





った。

「ふくよかに豊かな腹に窪みたる汝が臍思  
えば心燃ゆるも」

「深々と泌めし黒さよ汝が臍を思えばいつ  
よりかくはせつなし」

三日間はほんとうに夢のように過ぎてしま  
った。彼女等が山荘から去っていった後、私  
は彼女等が入った湯に入って、しみじみと險  
に残る彼女等の美しい腹を思い浮べてみた。  
千里や洋子の、あの深く黒い臍——神はなぜ  
かくも美しく魅力あるものを女体に与え給う  
たのであろうか。

「ふと深き怖れを覚えちつとしてやがて静  
かに臍をまさぐる」  
(石川啄木)

その翌年の夏、この仲良しグループと私は  
H海岸で遊んだ。その時、北川千里は見事ビ  
キニスタイルであらわれた。私の驚きと喜び  
——それは何と筆舌に尽くすことがよう。  
白い肌に紫の布は美しい彼女の曲線美を心ゆ  
くまでたんのうさせてくれた。勿論、その豊  
かな腹部のふくらみと、深く窪んだ臍の黒さ  
も。

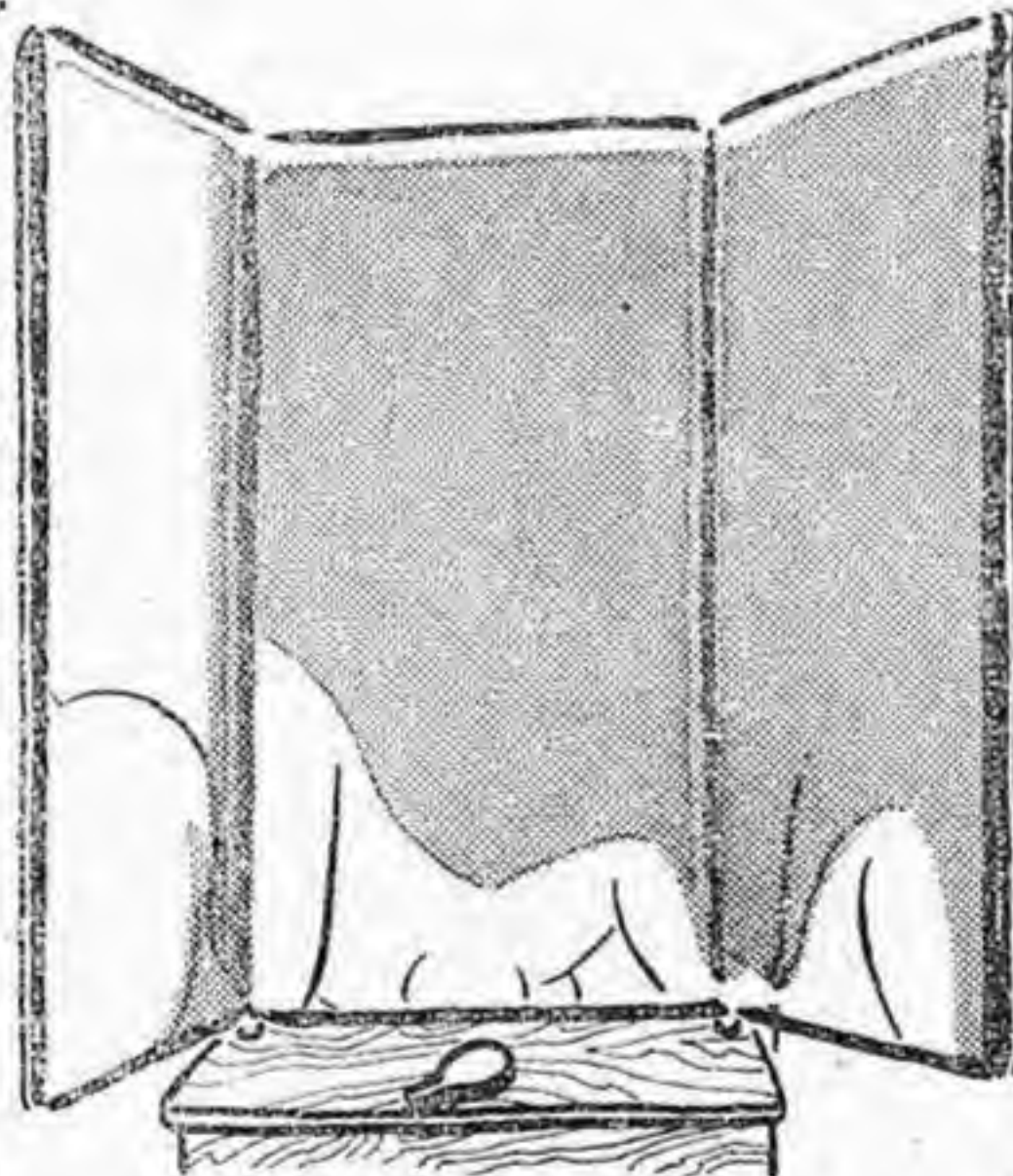
いったいに長女の臍は大きいといわれてい  
るが、正しく彼女のそれはいわゆる杏でも入  
ろうというほどの見事さだった。冬に見た時

よりも一層肉づきも良くなっていた。一泳ぎ  
した後、私は彼女と並んで砂浜に腰を下ろし  
た。

「ビキニだと、おへそが見えるので恥かしい  
わ。」

「いや、君のような美しい体なら、そのほう  
がずっとすてきだよ。」

仰向けに寝そべった彼女に、私は何度かそ



「立派な鏡台があるのに、三面鏡がいるの  
かい？」

「そうよ、姿見じゃ髪形なんか分らない  
じゃないの。ねえ、買ってよ」

やっと夫をとき伏せて買ってもらった三

の深く大きい臍窩へ接吻したい欲望にかられ  
ながら、その臍帯結さつの跡をむさぼるよう  
に眺めた。サンサンとふりそそぐ真夏の太陽  
は、丸い腹部の中央に鋭いノミでえぐったよ  
うな深い穴に渦巻く肉のヒダまで惜しみなく  
照らしていた。

また彼女達が海から上り、その濡れた水着  
が体にピッタリと密着する時、腹部の中央が見

△告白▽

## 三面鏡

## と浣腸

山岸 操

面鏡が今日ついた。一寸贅沢かもしれな  
いけれど、おしゃれをするには、どうしても  
ほしかった。姿見に向って手鏡で合せ鏡な  
んかするのは、もう時代おくれですもの。  
今朝も私は、この新しい三面鏡の前に腰



事に窪んで臍の形を見せる一瞬は楽しかった。とりわけ小肥りな雅子の、そのほうまんな腹部ははちきれそうで、思わず私は、鋭いメスでグザリとその中央を突き刺してみた。衝動にかられたりした。

私はよく電車の中などでBG達が豊満な腹部をスカートの丸みで見せていたり、哀愁たたえた容貌の人妻が、その妊娠した腹をいとはしむようにしているのを見ると、彼女達が我と我が腹から真赤な血潮を流しながら、その豊かな脂肪層を切り割いてゆく姿を妄想したりした。

それから数年、私の恋した彼女らは、ことごとく妻となり母となった。千里も洋子も雅子も——しかし私の女体の腹や臍に対するあくなき魅力への追求は、そのとどまるところを知らない。そして私は永遠にその美しさに魅せられてゆくことであろう。

今年もまた、ビキニのシーズンがやって来た。私にはあの楽しかった山荘や浜辺での悩ましく甘い思い出がよみがえってくる。そしてその美しい臍をもつが故に恋せし千里から得た、にがい苦しみの追憶とともに……。

(おわり)

を下して、ああでもない、こうでもない、と、おしゃれに余念がなかった。左右の鏡を四十五度にかけて、右の鏡に向えば、正面に私の左耳がはっきりとうつる。目玉を左一杯に回せば、なお、左鏡には私の後頭部がはっきりと写っている。三人の私、三様の私、ここで私は、ハッとしたのでした。

ずるずると私は三面鏡をベッドの後に引っ張っていったのです。鏡の下辺は丁度ベッドの縁とすれすれでした。左右の鏡を六十度位に開いて、私はベッドに横になると、そこには三人の私がはっきりと写っています。

早速、私は考えついた事を実行に移しました。誰一人いない密室。夫は会社に出かけ、鍵さえかければ私唯一人。窓を閉めカーテンを下した私は、スルスルと洋服、シミーズ、ブラジャー、パンティまで脱いでしまったのです。一糸まとわざるといのは今の私のことを言うのでしよう。誰はばかることなく、のびのびとベッドに横たわる。ああ、なんというのびやかな幸福感でしよう。

やおら起き上った私は用意するのでし

た、グリセリン浣腸器を。再びベッドに横になった私は、横臥し、膝を深く曲げてそっと浣腸器を手にするのでした。ああ、なんとという素晴らしい光景でしよう。

右側の鏡には、折り曲げた形のよい私の二本の足がすんなりと伸び足指の先端にかすかに浣腸器の内筒の先が写っています。

中の鏡には——。そして左の鏡には——。三面鏡で見る私の浣腸図絵。そこには三人の私がいるのでした。各々浣腸されている私が——。私は浣腸器にそえた自分手をそっと離してみました。私は、誰にも支えられていない浣腸器に、いろんな人の手を想像してみました。お医者様、看護婦さん、夫……。

こうして、三面鏡は、思いがけず私の大変な道具になりました。独りで自分の足を縛って、緊縛浣腸の醍醐味を満喫したり、イルリガートルによる、あの病院での浣腸が、看護婦さんの手によってなされます。私の様々な姿がここに再現されるのです。私は三面鏡浣腸につかれてしまったのでしようか。今日も夫を送り出してから、私は洗面器とエネマシンジをベッドの上に持ち込んで、鏡の開く角度とゴム球の位置を研究しているのです。



女斗美小説

# 高校女子相撲選手権大会

雄 松 比 良 彦

〔前書き〕

女斗美小説は村相撲、鬪相撲、興行女相撲など大変リアルな設定が多い様ですが私はいつかは実現もするかと思ひ空想の世界に飛びこみました。処女たちの熱斗の心意気は男の私では書き切れません。女の人に書いてほしいテーマです。女子の相撲をスポーツとして普及せんとし、「女子相撲教典」を執筆しつつ既に故人となった畏友K氏に拙文を捧げるものです。

近江木戸、志賀清林碑下にて

一九六二年盛夏

雄 松 比 良 彦

一、パンフレットから

全国高校男子相撲選手権大会は大正八年以来五十年近くの歴史を持つものだが、昭和三十×年に創設された女子相撲選手権大会も年々隆盛となり、今年は全国から参加校三十数校を得て非常に充実したものとなって来たのである。かえりみると女子柔道は講道館の指導もあって、かなり以前から、さかんに行われていたにもかかわらず、他の武道たとえば弓、長刀、空手、合気道及女剣のたぐいにくらべてもスポーツとしての女子相撲が行われるに至ったのは最近のことと云ってよい。それはやはり渾一本の素裸で取組むということ

が抵抗となつたのであるが、やがてこれも自然にうけ入れられて行つたものである。肉体を不自然におおいかくす過去の習慣が、やがて美しく逞しい肉体を讃美する新しい習俗に席をゆづつたものであらう。先ず二、三の私立女子高校に相撲部が設けられ、それと共に社会人の女子相撲部も誕生して、やがてその数もふえて行つた。そして現在では共学制の公立高校にも多数の女子相撲部が生まれ、中には男子相撲部と単一部制をとるところもあったが、やはり体力其の他、いろいろの点で男女は差異があるため、日本高体連では昭和三十×年に「女子相撲部」を新設し、バレーやバスケット同様、男子部から独立したも



のである。

元來女子の相撲の歴史をみると古代の伝説は別として近世では見世物として行われ、健全なスポーツとはいえないものがあつたのである。けれども男子の相撲といえども近世では多分にシヨ一的なものであつたのであつて、むしろ全国各地で行われていたいわゆる草相撲及武家の相撲がスポーツとしての正道であつたといえる。女子の相撲は男子のそれにくらべてはるかにすくなかつた様であるがところどころに記録をのこしている。

さて現在スポーツとして行われる女子相撲の組織は、大体男子のそれにならつて出来て来たものであるが大体を左に解説する。

一、出で立ちは相撲褌一本とする。褌は前袋及立褌に二ツ折りを横廻しに四ツ折りをを用い、女子の拇指と食指で握れる巾とする。前下りは更に二ツ折りにして三重と四重の下に右にとつてはさむ事、男子と同じ。布地ははじめは男子と同じものを用いていたが最近ではビニロンを用いる。又初期には処女の乳房を露わすのを嫌い、更に投げ倒されたときや土俵際のもつれで乳房を強打するのをおそれて晒木綿で胸乳を括つたが、かえつて战斗中これに敵の手がかかつてしごかれるため、まも

なく用いなくなつた。現在は日本高体連のルールブックにも上記四重の相撲褌のみとなつてゐる。鍊成された処女の乳房は激しい格闘にも耐える事が実戦で示されて来た。

なお公式戦のときは校名を記した布片を前褌にはさむ事、男子と同じ。

一、土俵はいわゆる女俵（おんなだわら）を用い、直径は男子よりも一、〇〇米小さいく、三、五〇米とする。その他の築き方は全く同じであるが、土盛りは男子より六センチ低く正三十センチとする。なお女俵は陰であるといわれるので土俵上の引き幕は最初是用いながつたが、このごろは男子同様に四ツ房をつけたものが行われる。別に不祥事もないようである。ただ神幣を四隅にあげるのを忘れてはならない。

一、その他の相撲場の造作は一般男子と同じである。試合の審判は男子審判員があたるときは白ワイシャツにズボン、草履を着用し女子審判員の場合もこれに準ずる（昨年から社会人女子相撲部には女子審判員を登場させたが高校女子はコーチ、教諭等男子が多い。）主審以下六名の審判も同じ。

一、選手は先鋒、二陣、中堅、副将、大将の五名とし、これに補欠を加える。

一、選手は頭髪を不用に長くしてはいけな。又金属のピン等を用いてはならない。断髪又はゴム紐を使用して結髪する。

一、選手は月経中の出場を禁じてある。生理の急転に關しては補欠一名をあてること。

一、選手は土俵に呼上げられる以前に水をつけ紙を用い塩をとる。土俵上に相対して蹲踞し塩を打ちチリを切る。仕切直しを一回、二回目にならず立ち合う。

その他いろいろあるが最後に高体連ルールブックから抜書きすると反則については

一、頭髪を把んではならない一、前袋を横からとつてはならない、一、突張りに際し手刀を以て敵の乳房を突いてはならない、一、後立褌に手をかける事は反則ではないがこれを握つて敵を吊り上げ又は投げをうつてはならない、

等と定めている。これらの禁手については審判員の注意によつて試合を続ける。従つてこれらをやめさせるのは審判員の責任とし、負けとはならない。又褌のゆるんだ場合战斗中止を命じて締め直す、その機会のない激斗の場合褌がゆるんで解け落ちてても負けとはならず、極まり手によつて判断する。これは



従来男子のルールに従って禪のとけた場合を負けとしていたが第三回大会の個人三位決定戦に於いて土俵際のもつれから切返した選手の禪が解け落ちたけれども勝とした先例を生かしたものである。

## 二、実戦記（参加選手のメモ）

### 団体決勝戦

東 N県立田島高校

部長 山田祐介

先鋒 宮下 京子 1学年 62 斤 168 斤

二陣 藤井 明子 2学年 58 斤 163 斤

中堅 戸田 清子 2学年 60 斤 167 斤

副将 榎本 静江 3学年 63 斤 166 斤

大将 庄司 満枝 3学年 62 斤 163 斤

補欠 早瀬 明美 1学年 58 斤 165 斤

禪は黒色

西 R県 私立相星女子高校

部長 外村 正夫

先鋒 市村 民子 2学年 60 斤 165 斤

二陣 小林 文代 1学年 61 斤 165 斤

中堅 岡本啓 子 3学年 63 斤 170 斤

副将 原田 君枝 2学年 60 斤 167 斤

大将 花房多津子 3学年 61 斤 167 斤

補欠 多田美千留 1学年 59 斤 165 斤  
禪の色は小豆色

（このメモは小林文代のものである、決勝戦に至るまでの勝ちぬいてゆく経過が詳しく書いてあるが省略）

……三時十分。外村先生に促されて控室に集合、禪を締め直し前禪に相星の校章をはさむ。この禪はこんど出場するのに同窓会が作ってくれたのだけれど、すこしすべりすぎる。前下りをたらずと、うちの校章が出るが、これは折りこむ。民ちゃんはここに真間の手古奈のお守を入れてる。あれは美人になるお守なのに。あたしは梟の漫画を締め込む。梟は戦の女神アテナの鳥。

東の入口から入場。美千留は禪の上に同じ色のうちのジャジーを着てタオルと紙をもつてついて来る。土俵上ではオガクズをまいて掃いている、これから三位決定戦が行われ、それからいよいよ決戦だ。うちに負けたK高校が三位戦の西方だ、こんどは応援だ。

あたしたちは西のマットに陣取って観戦。民ちゃん、啓坊、多津ちゃんは水桶のところへ寄って水をふくみうがいをする。啓坊は四回戦のときもつれて落ちて胸を打ったのが心配。すこし顔色も蒼い。あたしもさつきK高

校との試合でうっちゃりで負けたとき一寸指をついたのが痛い。多津ちゃんの声で五人そろってマットを下りて四肢をふむ。土俵上では西方の選手が、どんどん投げとばされてくる。縁起でもない。西方のS女高は先鋒から副将までストレートで負けてしまったが最後の大將戦だけは目のさめるような上手投で勝った。東方の大將の体があたしと啓坊の足元に転げ落ちて来る。勝った相手の肘が顔にあたって鼻血がパツと緑色のマットに流れ出す。気丈に立って土俵に上り礼をかわして降りて行った。さあ、私たちの決勝戦。晴れがましいがファイトが湧く。血の流れたマットを踏んで立ち上る。民ちゃんは左手に塩をつかんでマイクの呼出しを待っている。「選手、土俵へ。先鋒戦、東、宮下京子さん。西、市村民子さん」スピーカーが呼上げる。市村民子さんつまり民ちゃんが二字口から土俵へ上った。君枝さんが背中をたたき。民ちゃんは心配そうに眼をグルグルさせてすこしヘコタレてる様だ。二回戦、四回戦といっても投げつけられて自信をなくしてる。躊躇してチリを切り仕切りでぐつとかまえてるが丸いお尻が私の目の前でブルブルふるえてる。田島

の先鋒は三回戦では華麗な上手やぐらで勝つ



た人。立合いのベルが鳴った。土俵上の二人とびかかって挑み合う。一寸、呼吸があわない、ショッキリみたいだった。とにかく右四つになつてゐる。民ちゃんはアゴが高い、上手がとれてない。相手はモグリこんで前廻をひきつけてゐる。頭を乳房の谷にくいこませてゐる。拙い。右へ右へまわりながら内掛けをみせてゐるがきかない。民ちゃんの上手がとれた、しかし一重でのびてゐる。もう一重とりた、こたわつてゐるすきにズーッと寄せられた。まわりこむ、うまい、寄る、ここがだめだ、あそこはひきつけなきゃ。引くと見せた相手の下手投、民ちゃんの頭が正面土俵の徳俵にガツンとぶつかる。めっばう痛いらしい、顔をしかめて立上る。相手が一寸心配そうに手をかした。礼をかわして廻を押し下げながら土俵から降りてくる。「ついてないよ」平気さ、大丈夫？ 多津ちゃんが簡潔にいたわる。さア、あたしだ。あたしの番。塩をとってパツパと土俵にとび上った。池に石を滑走させる具合に塩をぶちまけてと、相手の眼を見すえながらチリを切る。これが中々つらい。あたしはどうも目をそらしちゃう。相手は田島高校の藤井明子という人、小柄だがきびきびしてゐる。三回戦のときダーツと寄つて出て

土俵際でうっちゃりをしぶとくらえ、とうとう右にうつちやられた人だけどあの押しは相当なもんである、尤も今は何も考えない。ベルが鳴る、可愛い顔だ、ダーツと低くとび出す、パンと肩をはたかれる、しまった、しあしのこつた、あたしはもぐつてゐる、乳房の下だ、右手で下からバシツと前廻がとれる。左を肩にまいた、右はおつつけて来た。苦しい、「フォームがひくすぎる、相手は廻ののびるのもかわせず身をくねらせてまわりながら前廻を切りにくる、これが命のつなだ、又はたかれる、うごかなくなつた。苦しい、上手がだめだ、あたしの上手はとられてゐる、しかし下手は殺してゐる、けど右でとつたと前廻は乳房の下までこじ上つてゐる、相手の前下りが落ちてゐるああたしの目の前でふるえてゐる。ぐつと上から押しつけて来たとき背中をパンとたたかれた、審判員のストップだ。あたしの後ミツがとけて立廻が右の腰までまわつてたのだ。締め直す間一寸力をぬく、又パンと来る、とたんにまきかえて下手をさされた、切れない。苦しい、シャニムニ足をおくって寄る、ズルズルと相手は下る。これはさそいだ、乳房に頬をあてて食い下る、鼓動がきこえる。土俵際、差手をかえず、前廻をコ

ジあげる、首をおこされた、必死だ、腰がのびてくる、乳房をおつかぶせてのしかかる、うつちやられるか？ 頬で頬をおしつけてこえる、ぐいと乗る、勝った！ 寄倒し、相手の手をひきおこす。落ちるとき右手を下敷きにされた。痛む。礼をかわし躊躇で勝名乗をうける、苦しい、夢中で降りる、仲間が笑いかける、水桶のところへ馳け寄つて水を含んだ。東の溜りでも、負けた相手があえいでゐる。ああ本当にくるしい！

中堅戦は啓坊が相手のノドを右手でねらつて一ペンに起すつもりでダッシュしたがパツとその手をはらわれてツンのめり、ヒヤツとした。とにかく立直つたときは右四ツ上手下手をガッチリ引きつけられ、正に敵の手中。かろうじて啓坊の下手がとれる、土俵をまわりながら上手をさぐつてゐる、啓坊の前廻がゆるんで乳首のところまでのびた、ダーツと体をあわせて抱き気味に吊りに出る、啓坊無茶だ。パツと相手の外掛け、敵ながら小気味よい、啓坊からくものこす。相手はのびた廻を握り直して腹を合わせ吊りに出る、啓坊も吊るが相手の後ミツがとけて廻がバラバラになり、手ごたえがない、相手のおなかと乳房が啓坊を抱き上げる、前廻がのびて落ちそう





告白

## 運命の桎梏 に泣く女

福田ヒデ子

私は字も書ききらない女です。私の母は仲居をしていて私を生みました。だから私は妾の子で養母(本宅)に引きとられると、私は厄介者扱いでした。

生みの母は私を本宅へ置いたままで転々と住込みの職場をかえ、父は新しい二号さんを作って家へ寄りつかず、私は里子に出されました。

始め私が連れてこられた処は〇市の郊外でした。(それは後で知りました。)

「ヒデ子、起きんね、いつまで寝ているんだよ」と、どなり声にハッとして私は目を開けました。まだ、昨日のことが夢のよう

に浮かんできます。

目をこすりながら、ねぼけ眼を開いてよく見ると、其処には私の第三の母となる女の人が立っていたのです。本当なら母の懷に抱かれて幼稚園に通っている筈の私でしたが、こうして三人目の母に悲劇的なめぐりあいをしたのでした。

その家は仕舞屋の平家でしたが、私のような幼い女の兄、男の兄がいました。中には十二、三才の女の子もいたようです。私はその家の新入りとして、始めて母の夫なる男の人に会われました。

部屋は全部板張りで主人(親方)の座っ

だ、啓坊は黒い、相手は白い、汗で水をかぶった様だ。右腿をからんで助かった。これで一呼吸、啓坊はあえいでるが戸田さんは静かなもの、一枚上だ。頬を押しあつて髪の毛がへばりついてる、ぐっと戸田さんがひきつけた、私の方をむいてる啓坊のお尻に立禪がムザンに食いこんだトタン、猛烈な出し投げて啓坊はスッ飛んだ。何しろ西土俵から東溜りまで投げたのだから凄い。勢あまって戸田さんの体もからみ合ったまま東溜りに転げおちた。豪快も豪快。

何と、物云いがついた。あたし達が見ても完敗なのに。審判員が土俵に上る、手振身振で何か云ってる。啓坊はマットの上であえいでいる。戸田さんは東溜りにジッと立っている。よほど息の長い女だ、何となく魅力ある。戸田さんの左肩が早く落ちたらしい。まだ談判してる。「完敗サア」と啓坊が苦笑して水を含む。多津ちゃんもうなずく。疑う余地なし。談判終る。やはり戸田さんの勝。文句なし。戸田さん、土俵に上り躊躇して勝名乗をうける、右手のこなしがイカス。敵ながらグッと来ちゃう。女だけどホレボレする体のひとだった。さてそれ処じゃない。一対二だ。副将戦。君枝さんは立合い一気に相手の肩口をつき立てて突き出す。我等の柏戸、健在だ。男みたいな人だ。相手の足元に校章布を投げてやってサッサと降りてくる。息もみ



ているところだけが、ごさが敷いてあったようです。

私はまず親方の前に座っている女の児、男の児について後の方に座って小さくなっていました。その中、私の驚くべきことが展開されたのです。

「あれ、ごめんなさい！」

それは、まだやっと歩けるか歩けない程の男の児でしたが、素裸の身をおさえつけられているのです。それまで私は見たのですが、それから後は恐しくなって良くは見ませんでした。唯、かなしい悲鳴が私の耳に聞えただけです。

私が始めてこの家に連れて来られた日に目撃した悲しい思い出は、年頃になってもいつまでも忘れることは出来ません。

それから、掃除の仕方が悪いの、子守りの仕様がわるいと、つねられ、打たれ、生傷のたえ間がありませんでした。それから三年、私は十を迎えていました。その頃になって、物心のついた私は、その家が何をやる家かほんやりわかってきました。

赤ん坊や幼児を貰い子して、或る程度使ひものになるまで育てて、見世物や曲馬団

サーカスなどの香具師に売るのでした。

私が香具師に売られたのは、十四才になった春ですから、その家で厄介になっていたのは数年になります。生れたときから悲しい運命を背負ってきた私のことですから肉身の愛なんか、一かけらも受けたことのない哀れなみなし児のみじめさを、しみじみと味わいました。

しかし、それでも、時には生きていることの喜びも悲しみも身にうけて、いつしか年頃となってゆきました。

その頃は「児童福祉法」とかいふむずかしい法律もなく、無籍者の私たちは学校へやってもらうでもなく、只、いつかは売られるために育てられていたのです。

私達と共に寝起きしていた子等も一人減り二人減り、中には病気で死んでいった子供もありました。しかし、幼かった私にとつて、その頃の精しいことは余り記憶に残っておりません。やはり、年頃になって香具師に売られてからのことの方が強く印象に残っております。

次には、そのことについて書きたいと思っています。

だれてない。君枝さんは男みたいだ。胸だつてそうだ。脚だつてそうだ。二対二だ。どうなるか？選手権だもの。胸がふるえて来る。外村先生がマットに來た。多津ちゃんに何か云つて。多津ちゃんは力強くうなずいて塩をつかむ。たのもし。だけど田島の庄司さんも立派でつよそうだ。場内は騒然として來た。二人、相對してチリを切る。あたしたちも腰をうかして、皆マットの上にしゃがんで土俵上を注視する。前髪を指でかき上げて多津ちゃんはおちついた物腰だ。むしろ小面憎い位だ。庄司さんもそうだ。まわりの者の方がエクサイトしてる。ぐっと仕切つて睨み合つてる。二回目、バシッとぶつかった、多津ちゃんとはとびこんだ、頭を下げて前髪をつかみに行つた、次の瞬間、小手に振つた相手の落着き、多津ちゃんは東土俵の砂の上にたたきつけられた。砂まみれになつた。相手は息もみだれてない。立つて手をさしのべる。茫然としてあたしたちは立っている。悪びれずに立上つた多津ちゃんの右腕、右乳房から腿までべっとり砂がついている。二人共禪も全く乱れてないのがやり切れないような幕切れだ。田島の大將——丸顔の庄司満枝さんは今大会全勝、無敗をかざつたが、落ちついてゆつくりと勝名乗をうける。多津ちゃんが降りてくる、馳けよつてタオルで砂を落してやりながら肩に頬ずりしたら、一寸涙みたいなのがチラついた。(終)



## 波羅木利クラブ入会



たたいて見せた。T氏は満足気にうなずくとスタスタと歩き出した。

昨日、T氏に明日の波羅木利クラブ入会には必ず六尺褌をしめてくる様に云われていたのだ。

私が、T氏と知り合ったのは、ある町の映画館の中であつた。その時の映画は主演の男優が最後に無念腹を一文字にかき切る壮烈な場面であつた。

グッサリ下腹に突き立てた刃を、苦悶

今日は待遠しいクラブ入会の日であつた。私は命じられた如く、ある郊外の停車場で待っていた。やがてT氏があらわれた。

「やあ、お待ちどう、じゃ案内しましょう私の云った様にして来ましたか？」

「ええ」と私はズボンの上からボンと下腹を

の表情もものすごくキリキリとかき切つてゆく。私は非常にエキサイトして、自分で切腹している様なサッカクにかられ、大きく息をはずませていた。……すると隣席の青年がツイと手をさしのべ、私の手を握りしめた。

こうして、二人の切腹マニヤは知り合った

## 馬場 守

のである。私も切腹の事となると、幼少の頃より興味を覚え、よく『少年クラブ』や『講談雑誌』にのった若侍や筋骨たくましい武士の割腹の絵をむさぼる様にながめた。

そんな私を波羅木利クラブに入会をすすめたのは彼である。彼も又切腹マニヤであり、若さにまかせて逞ましく露出した下腹を切りまくった。「プレー」私は彼を従卒、私を青年将校に見たて、互いに腹をひろげて切腹プレーに耽つた。

私は青年と相向う時、本当に此れから共に切腹すると思ひも新に、静かに下腹を撫でるのである。そしてキリキリと一文字にヘソ下を切り進み、重なり合つて倒れる時、彼のほのかな体温は彼の胸や腹から伝つて来て、私の陶醉を一段と深めるのであつた。

彼の話によつて、今日は切腹マニヤの集りである波羅木利会に入会する事にしたのである。彼は又、切腹の際、パンツでは丹田に力が入らず、やはり六尺褌をしっかりとしめて、切腹にかかる方がよいと言つた。そして私も昨夜買ったサラシをしっかりと締め込んだ。



やがて、とある家の前までゆくと、

——波羅木利クラブ——と小さく書かれた表札があった。案内を乞うと剣道のケイコ衣を素肌につけハカマをつけた若者達が出てきて皆、クラブ員である事を告げた。

どの顔も凛々しく、どの一人が腹を寛ろげても立派なものだと感心した。私はその中の一人に連れられて、脱衣室に入り、今まで着ていたYシャツもズボンも脱がされ、フンドシ一本の素裸にされた。

「さあ、入会式にゆきますから、此れをつけて下さい」と、真新しいケイコ着とハカマが渡された。

「ハカマの紐は禪の前袋の下目に結んで下さい。あとでプレーする時腹が出にくいから、こんな風に……」

若者は自分のハカマをほどこき、前袋を押し下げ、グイとしめなおした。その浅黒い下腹には、もう黒くなった筋が何本も左右に走っていた。わたしは愈々ハラキリ・クラブに来たのだとはっきり自覚した。

やがて連れだされた処は、二十帖ぐらいの居間で正面は一段と高くなり、本日の私の座であった。十五名程の会員の見守る中で、私はわるびれずに切腹の座に正座した。すると

クダンの若者が三宝にキラキラ輝く九寸五分をのせて私の前にすえた。

「本日より当クラブに入会される馬場君を紹介する。では、五つの鉄則の復唱」

一同は大きな声で

「一つ、本会員は日本男児の面目を保つ事、一つ、みだりに女色に溺れざる事、一つ、私情にはしり公私混合せざる事、一つ、会員同志は互いに密接に交際し他人をないがしろにせざる事、一つ、己れの責任に於て自決する際は必ず切腹自決する事。」

終ると一同盃をかわし盟約を結んだ。そして私は三宝にのせられた九寸五分を戴き別室に下った。愈々入会員の苦痛をためす試鍛プレーが初まるのである。其処で加えられたのは、大量のグリセリン浣腸である。腹中のものをすっかり洗い流された私は、その下腹にモグサを油でかためた紐状のものをまかれて又元の位置に戻った。

「馬場君、いよいよ本会員となれば、何時何処で腹を切らねばならぬかわからぬから、日頃のタンレンが必要だ」

目で合図すると、一人の若者が走り出てモグサの一端に火をつける。

「本当の切腹は此れ以上だ。よく辛抱するんだぞ」

だぞ」

ギリジシと火は下腹をやきすすむ。

「うううむむ、つつつつ、あつつ」

私はやけひばしを当てられる様な苦痛に身悶えた。しかし、姿勢を崩してはならない。

と必死に頑張った。

「介錯なしの切腹だ、頑張れ」

「あッ、ウームッ、クククウ」

私は言い知れぬ暑さに、目の前がかすむ様である。やっと終わった切腹に、若者は走り寄り、「よく我慢しましたネ、さあ、此れで立派な会員だ」と用意の油グスリをベツトリぬってくれた。私は若い同性達に囲れながら無上の喜びにしびれた。

○

その夜は、クラブの若者達が、立腹、無念腹、介錯腹、十文字腹、かくし腹、等さまざまな切腹姿態を見せて、私をたのしませてくれた。私は今までであった見聞や切腹夜話について夜おそくまで語り明かした。

一週間たったある日、私はクラブで一人の若者の華々しい切腹を見た。その若者は二十才の大学生であったが、ある酒場でフトした事から二人を殺めてしまい、どうしても自分も腹を切ると云うのである。



黒い詰襟のよく似合う若者は、皆に最後の別れをすますと上衣を脱ぎズボンを降し禪一本になった。そして私がした様に連れの若者に浣腸をうけて沐浴した。まだ水々しい体は死なすには惜しいのだが、彼の決意はかわらなかつた。

禪をしめなおすとハカマだけをつけた上半身裸体で切腹の座に着いた。逞ましく隆起し

た胸や筋肉にうごめく下腹は、今までに切裂かれるのを待った。運ばれた九寸五分を手にとり、しばらく左手で腹を撫でていたが、ムツと息を含んで突き立てた。

が切り口からあふれ、ガバツと前にのめる。「ウーム、クウツ、クウツ」逞ましい腹もムザンに引裂かれ重々しく肩で息をする若者も早や死へと意識は消えるようである。まだヒクヒクと身体をケイレンさせる若者の顔は十分に腹を切った喜びにあふれているようである。

## 通信

# ゴムマニヤのプレイ 梅川 幸子

はじめてお便り致します。私は当年三十八才の未亡人で本誌の愛読者でして、ゴムマニヤの一人です。

の合羽を打つ雨の音、マスクをはめられて、しいたげられてとあり、私もゴムマニヤの一人として一筆書いてみましょう。

最近の本誌に余りゴムマニヤの告白なり、手記が少く思われている矢先、古本屋で見つけた古い本誌に、古川裕子様のゴム引きレインコートに関する体験や告白を拝見しまして

この文を読んで、私のゴムマニヤとしての心情に一層拍車をかける事になった様ですが先ず私の身のまわり品から書いてみます。

## (一)、ゴム引きレインコート

裕子様のいわく「……少女の頃から恥しい悪へきがあり、母に折かんされて後手に縛られ猿ぐつわとしてマスクをはめられ、ゴムの合羽を着せられて、雨の激しい夜に庭の木に縛られて……」と、そして、これによってゴム

近頃は都会では余り見かけられなくなりましたが、羽二重や絹の裏にゴム引きをしたレインコートです。色、形（主に襟の形やボタンの位置など）にいろいろありますが、「46」サイズのものが最も丈けも長く、胴まわりも

ゆったりと大きく出来ています。

私ののは淡い地味な色ものを選んでいきます。

## (二)、防水マント

黒いゴム引きの防水マントです。これは男女物の別がありません。大きさも一定しているようです。

## (三)、ゴム長靴

これは農家で田植仕事の時にはいたり、魚釣りのときにはいたりする、つま先が足袋のようになつて、裏表共に総ゴム製の茶色いゴム長です。ひざ迄の長さのものと、腰迄の長さの物がありますが、私は腰までの長さの物を用意しております。

## (四)、ゴム手袋

お台所で使うゴム手袋で十分です。

## (五)、ゴムマスク





以上の品を用意しています。

雨の激しい夜半に、私はそっと起きると、裸になり、まずゴム長をはき、ゴム引きレインコートを着て腰のベルトをしめ、ゴムマスクをはめ、ゴム手袋をはめ、フードをまぶか

にかぶります。その上から防水マントをすっぽりと羽織り、フードをかぶり、フードについている小さいベルト（あごの所についている鼻から下をかくすためのベルト）をしめます。

小柄な私がこの姿になるとマントのすそが引きずるようで、足首までかくれます。そして、真暗な激しく雨の降る表へ出て、田んぼの方に歩いてゆきます。（私の家は街はずれです）

防水マントを打つ雨の音、素肌にじかに当るゴム引きレインコートの冷たくぬめぬめした感じ、腰まで届くゴム長の歩きにくい、くすぐったい感じ等、そしてゴムマスクの息苦しさ。（息をするのに鼻孔を出しておく方がよろしい。）

雨の中をしばらく歩きます。雨はゴムマントの上に激しい音を立てます。

私はへなへなと水たまりの中にしゃがみこみ、黒い花びらの開いたように、しばらく、そのままの姿勢で雨にうたれています。

私の全身は汗にまみれ、マントの外は雨にしぶいています。激情のひとつきが過ぎると、私は立ち上り、田んぼの横に流れている小川に入ります。ザブザブと音を立てて一歩一

歩、深いところへ入ってゆくのです。

冷たい水が次第に体をひたし、深いところでは胸のあたりまで水につかりました。膝をまげて、身体をかかめると首まで水の中に入ってしまった。なんという奇妙な姿でしようか。やがて、浅い所まで歩いて行って、流れに足を投げだすのです。

雨の日の夜。私はこの楽しみに自らを忘れてしまうほどです。家へ帰ると体を拭き濡れたゴムの雨具の手入れをするのです。

どなたか男女を問わず、私の様な楽しみを味ってられる方がございましたら誌上を以って御連絡下さいませ。又、どなたか、少女用の雨マントをお持ちの方、お譲り下さいませんでしょうか。七、八年頃前までよく見られた十四、五才までの女の子がよく着ていた雨マントです。赤いゴム引きのマントで、フードにたくさんの飾りのひだがついていて、大きく折りがえしのひさしがついています。（今日のように、レインコートが流行する迄よく着ていたマントです）

色は大抵赤いのが殆どで、青いものもあったようですが、ゴム引きの他の防水布のものもありました。大きさ、新古の程度は問いませんが、是非お願いします。

京都市右京区

梅川 幸子





# 『女 奴 隷 物 語』

△宇宙のどこかで▽より

佐 治 麻 造

## 女 奴 隷 三 号 の 告 白

清心女子大学を卒業した彼女は、或る会社の秘書として働きました。そして想い合う青年も社内に来て、夢多い日々を送って居ました所、或る夜、あの忌わしい事件が起って、彼女の運命を大きく狂わせてしまったのでした。

——二晩泊りで総務部の慰安旅行があつて温泉に皆で行ったのよ。そしたら……——

二晩目のこと、夕食も済んで、散歩に出掛けた同僚を追つて、少しおくれて室を出た彼女は人影のない廊下を

足早に急ぎました。突然現われた浴衣がけの男が矢庭に彼女を抱き締めて、無理に室の中へ連れ込んだのです。男は彼女が仕えて居る部長でした。数回云い寄つて、手きびしくはねつけられて居た彼は、酒の勢を借りて力づくで思いを遂げようと致しました。口を塞がれて必死に抵抗する彼女の浴衣がはだけ掛つた時、テーブルの上の果物ナイフに彼女の手がさわつたのが運命のいたずらでした。彼女が気がついた時には、部長の厚い胸に背後からナイフが突き立ち、大きな体はビクリともせずに畳の上に俯伏せになつて居ました。無我夢中でナイフを抜いた途端、ドクドクと溢れ出る血を見た彼女は悲鳴と共に室から飛び出したものの扉の外で氣を失つて倒れてしま





いました。気がついた時には、彼女は別室に運ばれて居り、既に当局もやって来て取調べを初めて居りました。抱きかかえられる様にして死体のある室に連れて来られた彼女は、遺骸を見てヘタヘタと坐り込んで顔を掩いました。

「あんたが殺したのね？様子を詳しく云ってごらん」

同僚の娘達や社員の連中も集って来て覗き込む中で泣きじゃくり口ごもりつつ訴える彼女の話を、うなずきつつ聞いた同年輩の婦人刑事は

「そう。じゃ、ともかく、あんたが殺ったことは間違いない訳ね。」

一緒にやって来た制服の警官と眼で相談した婦人刑事は

「じゃね、一緒においで。着替えしなくてもいいわよ。

あんたの身になれば正当防衛だったろうけど、ともかく殺人現行犯なんだからね。可哀想だけど。」

スカートの内側から手錠を取出した婦人刑事は、ビクリと全身をおのかせる彼女の右手の掌を握って引き寄せ、一尺程ふりかざした手錠をか細い手首に打ちつけました。

「こっちもよ」

左手首にもバシッと錠が鳴って鋼鉄の環が喰い込み、全身の血の気がスーッと引いて行くのが彼女自身によく分りました。

「さ、お立ち」

短い鎖に結んだ捕縄を握った婦人刑事は人垣をかき分けて先に立ちました。両手を揃えて差延べたまま、両手首を短く繋ぐ冷たく硬い鉄の環に無慈悲に曳かれて、彼女は空を踏む心地でその後にしたがいました。彼女の姿をジロジロ見乍ら、低く騒ぐ同僚社員の男女の声も殆んど耳に入りませんでした。が、仕事の上でも恋愛の上でもライバルであったタイプピストの娘の嘲声だけは鋭く耳朶を打って聞えました。

「いい気味なこと。正当防衛だなんて嘘よ。きっと痴話喧嘩の末の事だわ。座布団を並べてあったし、後ろから刺してるんでしょ。第一、着物だって乱れても居なかったじゃないの。二、三十年鎖で繋がれて来るがいいわ。ホホホホ」

こみ上げる涙を堪えて、いとしい男の姿を探しましたが、部の異なる彼が来て居よう筈もなく、顔を手で掩うて旅館を出る彼女の正面から、逸早く駆けつけた地方新聞のカメラマンのフラッシュが二つ三つ閃めました。

取調べの結果は過剰防衛と判定され、過失致死の容疑で四五日の後、彼女は送検されました。

——警察じゃ、割と同情して呉れたわ。他の連中の様に首に鎖つけられる事もなかったし、自分の服に着替えさせても呉れたの。けど、送られる時はやっぱり両手に手錠嵌められて腰縄を打たれたわ。手で顔を隠すことも出来ないし、ジロジロ見られて死ぬ程恥しかったわねえ。——





起訴された彼女は徒刑八年の宣告を受けました。

——破廉恥罪の囚人達は、もうほんとに恐ろしい程の哀れな恰好させられてるでしょ。そんなのが嫌でも眼に入るし飛んでもない事をしたと泌々悲しかったわ。隣りの独房に思想犯の娘さんが入ってたけど、しょっちゅう中、服を脱がされて鞭でぶたれてたわ。

——清心女子大の時の先生が法延付添人になって下さって、いろいろと弁護して下さいました。考えれば考える程、口惜しくなって毎晩固い枕をグッショリ濡らしたわ。けど、実地検証とかで、あの旅館に連れて行かれてあの晩の通りの事を男の刑事さん相手にさせられて……。実演させられる間は手錠は外して呉れたけど、革の腰枷は嵌められたままで、きつい顔した婦人看守が縄尻を持ってるの。もう恥かしくて恥かしくて眼が霞んでしまった位よ。旅館の人達が見てる前で、大きな音立てて手錠を又嵌められた時には、もうどうなってもいいと思ったわ。公判は五回程あったけど、私に同情して呉れる人も多い様だったのよ。けれど、人を殺したと云う事は、もうどうにもならない大きな事なのね。殊に私が殺した部長の奥さんが来て証人台で泣き乍ら証言した時には、事情はとも角として、本当に申し訳ないと思っただわ。傍聴席はいつも満員に近かった様ね。私が婦人看守に曳かれて法廷に入る時分には傍聴の人達はもう入って待ってるの。被告の入口は傍聴席に向い合っているのよ。捕縄のついた手錠を嵌められた姿で、真向から視線を浴びて入

るの。最初の時には、足がすくんでしまったわ。知らない人に見られても顔が真赤になるのに、会社の人達が多勢来てるのがうつむいててもハッキリ感じられるのよ。

被告席のベンチに傍聴席に背を向けて腰掛けて裁判官達が出て来ると、並んで坐ってる婦人看守が手錠外して呉れたわ。それなら、室に入る前に外して呉れたらどんなにか嬉しいのにも思ったものよ。公判の間は隣の婦人看守は退屈なものだから膝の上においた手錠をカチャカチャともてあそんでるの。必死になって裁判の成り行きに神経をとがらせて居ても、其の音を聞いたりキラリと光ったりするのが眼に入ると、もう心が滅入ってしまう様だったわ。公判が済んでおじぎが終ると婦人看守がすぐに私の前に立って、きびしい顔して手錠を振り上げるの。両手を揃えて出さなくちゃいけないし、皆に見られてると思うと背中が熱くなったわ。けれど看守さんも幾分は可哀想に思っただわ。静かにやさしく嵌めて呉れたものよ。しかし判決の言渡しを受けて、覚悟してたものの矢張り茫然として立っていると、いきなり手を握られて強く打ちつけて嵌められてしまったの。手首の骨がズキンと痛んで、バシッバシッと大きな音がして……。思わず喘いでしまったわ。刑が決って赤い着物を着せられた時は、眼の前が真暗になってしまった……。肘と膝迄の洗いざらしの赤い囚衣に着替えさせられた彼女は股革のついた革の腰枷を嵌めこまれ両手の手錠を前で固定されて宣告の日の午後、直ちに刑務所へ唯一人護送さ





れました。

「お前はね、同情してやっていい点もあるし、非破廉恥罪なんだから、今迄は大目に見てやってたけどさ、これからはそうは行かないよ。」

彼女の腰枷の後ろに捕縄をつけた婦人看守が前に回って捕縄の縄尻で頬を軽く打ち乍ら云いました。

「いろいろな事は、宣告の中に盛込まれてあるんだからね。これからはもう、自分が人間だと考えてると、ひどい目に会わされるわよ。人を殺しておいて八年位の徒刑で済むなんて、ほんとに有難いことよ。分ったかい？おいで。」

「ハ、ハイ。あの、もう何も穿かせては貰えませんの？足には。」

「何だって？ 馬鹿なことお云い。何なら足錠でも穿かせてやろうか？」

金網を頭に被せられ、素足で引立てられた彼女は通用門を出た所で立ちつくすいという男の姿を認めました。ままならぬ身をもんで思わず声を上げた彼女に縄尻が腿へ鳴りました。

「お黙り、キリキリ歩くんだよ。馬鹿。」

哀れな女囚を黙った見送った男の両眼にはキラリと光るものがありました。

汽車の座席に新聞紙を敷いて女囚を腰掛けさせた婦人看守は、腰の革サックから手錠を取出して女囚の両足首に嵌め、両手のいましめを検査した後、捕縄を握ったま

ま隣りに坐って雑誌を拡げました。

——被せられてる金網は割と目が荒いのよ。ジロジロ見てる人々の顔が、こっちからよく見えて、ほんとにみじめな気持だったわ。舌を噛んで死に度いと迄思ったけど死ぬと云う事を考えただけで、もう怖くて体がガタガタ震えるの。何とか云う注射の効き目なのね。今、こうして浅間しい奴隷働きしてるけど、自殺しようなどとは全然思わないわ。残酷な薬ねえ。——

情なさ悲しさに絶え間なく頬を伝う涙が乾いて痒くて堪らなくなった彼女は、身を屈めて指先で頬の辺りを掻こうとしました。手錠の短い鎖とそれを腰枷に結合する金具が低くガツと鳴り股革が突き上げて押える情けなさ。どうしても指先が顔迄届かず被せられた金網と頸との間で、両手をもだえる度に手錠はきつく締まって来ました。そして堪らなくなつて頭を振った途端、金網はスポリと脱げて落ちてしまったのです。膝で顔をこすった彼女は顔を上げることが出来なくなつて、くくくと嚙り泣きました。

「どうしたの？ ホホホ、ちゃんと坐ってないと痛い目に合わせるよ。」

「お、お願いです。網を……網を被せて下さいまし。」

「おや、お前。自分で脱いじまったんだろ。勝手な事、お云いでないよ。」

意地悪い看守は、拾い上げた金網を荷棚に放り上げてしまいました。





「云いつけ通りに出来ないの？馬鹿だね。」

婦人看守は彼女の髪を握ってグイと乱暴に引起し、彼女は悲痛な呻きと共に身を起して喘ぎました。

「ね、あれごらんよ。やっぱり恥かしいのねえ。」

「可哀想に。何をして縛られたのか知らないけど、仲々上品ない顔立ちしてるじゃないか。」

上体は起したものの、深くうなだれた彼女に人々の視線が集まって、やがて散って行きました。

「ウワァ、一杯だなあ。」

「あなた、あそこ空いてるわ。二人分揃って。」

或る駅で乗って来た健康そうな若い夫婦連れが、彼女と婦人看守の前の空席に坐ろうとしました。

「あらっ。ちょっと、あなた。懲役人が居るわ。」

幼児を抱いた婦人は、驚いて大声を上げ、女囚は真赤になって身も世もなく恥じ入り、深く首を垂れて嗚咽を忍びました。

「いいじゃないか。他には並んだ席はないよ。」

窓際に腰を下ろした婦人は眉をひそめ眼をパチパチさせ乍ら、前の女囚の哀れな姿を眺めました。思わず足に後に引いた女囚の足錠がカチャカチャと音を立てました。

「あら、足も括られてるのね。可哀想にねえ。けど、これなら安心だわ。」

みじめな思いに震える女囚の上体は、次第に前に屈んで行き涙がポトポト膝に落ちました。

「駄目だね、お前は。何故ちゃんと真直に坐ってられないの？」

女囚はあわてて身を起して体を固くさせて屈辱を忍びましたが、婦人看守はポケットから捕縄と金具を取り出して彼女の髪を掴んで自分の方にねじ寄せました。

「真直ぐに坐って居られる様にしておいて上げるわね。そら。」

金具のネジが鼻の壁に締めつけてしっかりと取付けられ、結ばれた捕縄はグイと上に吊られて荷棚に結ばれました。何をされるのかと、おそれおののき、そして余りの事に茫然となった女囚は鼻の壁の痛さに悲鳴を洩らして泣きました。

「そうしてるがいいわ。立ったら承知しないから。いいね。フフフ。」

脚に力をこめて尻を浮かせると、顔は漸く真正面の位置に來ますが力を弛めると顎を突き出て斜上を向いたまま左右に動かすことも出来ないのです。流す涙も涸れ果てた彼女は人々の視線に晒されたまま、固く眼を閉じて婦人看守の無慈悲さを悲しみ恨む外ありませんでした。

## 女囚刑務所の生活

彼女が送られた所は女囚ばかりを収容して居る刑務所でした。

——九十九号と云う妙な囚人番号を両手の甲に刷られて雑居房へ入れられたの。初めは三級だったわ。——





其の刑務所では女囚は四階級に分けられて処遇されて居ました。雑居房と云うのは、四米に六米位の板敷きの監房で四名を収容するのが規定になって居ます。三級囚の雑居房は便器の他はそれこそ何もありませんが、二級囚の雑居房には薄い寝具があります。一級になると粗末なベッドと洗面の設備のある窓付きの独房が与えられます。四級囚が入れられる独房は板敷とてないコンクリート床の小さな低い陰惨なものでした。

五十二号 重失火罪 徒刑五年

六十二号 業務上過失致死罪 徒刑九年

七十三号 思想犯 徒刑十五年

この三名が彼女と同房した女囚でした。

「私ね、繁華街で化粧品のお店やってたんだけど、アイロンを消し忘れて、百軒近く焼けてしまったの。死人も出るし、とうとう執行猶予にもして貰えなくて。主人は亡くなってないけど、もう大きな息子や娘もあるのに、いい年をしてこんな身になっちゃって……」

五十才を越して居る五十二号は情けなさそうでした。六十二号は彼女より二つ三つ年上の薬剤師だった女で、調合を過まって二人の男を死なせてしまったのでした。七十三号は四角な顔の浅黒い女でしわがれた声で云いました。

「何だって？ 乱暴しようとした助平男を殺したって？ 可哀想に。それで徒刑八年なんて全く言語同断だわ。私かい？ 私はね、ともかく弱くて貧しい者のためにさ、一

生懸命やったのよ。それが気に入らないのよ。けど出たら又やってやるわ。あんた達には分らないだろうけど、いいのよ。出たらもう六十才になってる訳だけど私はね八十迄生きたらいいと思ってるわ。けど刑務所ってものが出来てほんとに楽ねえ。私が若い時には徒刑なんて制度はないから監獄におち込まれてさ、ほんとに辛かったものよ。」

「しッ、あんた声が大きいわ。革鞭で打たれるわよ。鞭は痛いからねえ。ほんとに。」

固い木の床にゴロ寝した彼女、女囚九十九号はあれこれと思ひ悲しんで、刑務所の第一夜をまんじりともしないで過したのでした。

「あんた。起きるのよ。」

揺り起された彼女は、あわてて起き上って、まごまごし乍ら用を足し四名揃って並んで正座しました。鉄格子の前に立った婦人看守に冷たく見下ろされ乍ら罪名と刑期を大声で云わねばなりません。

「九十九号は新入りだね。昨日も云われただろうけど、よく見習って神妙に勤めるのよ。他の三人もよく教えておやり。」

当番の女囚達が配る食事を済ませると、直ぐに監房から引き出されました。

「出たら並んで手を揃えて出して待ってるのよ。動くよ。ピンタ張られるわ。」

六十二号が小声で注意して呉れました。





手錠を束にして重そうに持った当番女囚を従えた婦人看守が一人で二個から三個の雑居房を受け持ち、監房の前に横一列に並んだ女囚の両手に片端から手錠をはめて行きます。あちこちで叱りつける声やビンタを加える音が響きました。拘置所での未決囚生活の時でも、いくら非破廉恥罪とは云え監房から一步でも出るや否や手錠を嵌められてしまうのが当然の事でありましたが、今こうして赤い囚衣の女囚達の中に混って一列に並び両手を前で揃えて手錠の音が近づくのをじっと待たされて居ますと、諦らめては居るものの今更の様にみじめな気持で胸が一杯になってしまふのを、どうすることも出来ません。彼女の番が来て前に立ったきびしい顔付きの婦人看守がジロリと見据え冷たくて黒光りのした重いU字環の手錠がギリギリと嫌な音を立てて両手首に喰い込みました。

「おや、九十九号。眉をしかめたりして、何だと云うのかえ、不服なのかい？」

極めて事務的に処置されて嵌められる手錠の情けなさに無意識に眉をひそめて唇を噛む彼女に罵声が浴びせられ往復ビンタがたて続けに鳴りました。今迄は少し位口惜しそうな顔をしてもおとなしくさえて居れば見逃して呉れたものでしたが、刑の執行を受ける女囚の身になった今では嫌な顔どころか感謝の気持をすら表わさねばならないみじめさなのでした。

「ヒーツ、も、もう堪忍して……」

「フフフ、未だ顔は歪んで居ないよ。お前、手錠が嫌なのかい？そんな気持で居るとヒーツ云わなきやならない様になるわよ。」

「ハ、ハイ。よく分かりました。ありがとうございます」  
彼女が追い込まれた作業場には大きなミシンが沢山並んで居ました。手錠を外された女囚達はそれぞれのミシン台に繋いである二米程の鉄鎖で腰をくびって締めつけられて鎖の先端の錠がカチカチと鳴りました。

「九十九号。お前は最初は雑役だよ。」

女囚達の手錠を順々に外してやって、列の端の彼女の前途来た婦人看守は、そのまま鍵をしまい込み乍ら云いました。外して貰えると思って差出した両手を力なく下ろした彼女は手押車を押して材料や仕上品を運搬する仕事を命じられました。

「半分も教えては呉れないで、すぐに撲ったり蹴ったりするの。けど看守が片手に持つてる鞭で打たれるよりはましだと思ってハアハア云い乍ら働いたんだけど、その中に仕上品を床に落したのよ。そしたら生れて初めて鞭でぶたれちゃったわ。着せられてるものは薄い囚衣一枚でしょ。じかに当てられるのと大して変わりなかったわ。ほんとに痛いと思ったものよ。背中を二つばかりだったけど、あとで着物が摺れるのが堪らなく辛かったわ。手錠のままだもんで腕がだるくて棒みたいになってしまふし、手首はすきすき痛むしもう大声で泣き出したくなったの。けど歯を喰いしばって汗をポタポタ流して





唯もう黙って働くより他仕方ないんだものねえ。一口の水だって自由に飲めないし、刑罰って本当に辛いものだと思っただわ。

第一目の苦役を終えて房に帰った彼女の全身は硬張ってズキズキ痛みました。

「辛かったでしょ。手首がひどくなってるわねえ。明日からは外して呉れると思うわ。ちゃんと正座しなきゃ駄目よ。又鞭でぶたれるわよ。」

六十二号囚が口を動かさないで低声で慰さめて呉れました。

「ミシン踏むのは一番楽な労役なのよ。順繰りに掃除もさせられるし、土方みたいな事もさせられるわ。集めたごみの仕分けもあるし、古ボルトなんかの銷落もしんき臭い仕事よ。」

「そんな事よりもさ、町に曳き出されて便所の汲取りやらされるのが一番こたえるわ。」

「あ、あ、そうねえ。もうそろそろ、私達の番じゃない？」

同房の女囚達の話を聞き乍ら、彼女は固い床の上に涙を落して忍び泣きました。

### 便所汲取所外労役

少しは様子が分った五六日後、彼女達四名は股革の付いた腰枷を嵌められて二人宛腰を連鎖され、汲取車を曳かされて所外に追われました。木製のタンクに四個の車

輪がついて居て前の車軸から延びた二本の梶棒の先を横に連結した木の棒があつて梶棒の外側には、更に左右一本宛曳き鎖がついて居ます。六十二号囚と腰を連鎖された彼女は右側の曳き鎖を肩に掛けて手錠の両手で握り、六十二号は梶棒の中に入って横の棒に両手を掛けて胸に当てました。六十二号の左側には五十二号が、そして更にその左の梶棒の外側には七十三号囚が鎖を握って溜息をついて並んで居ます。木製タンクの蓋の上には踏板や二個の桶、そして二本の天秤棒と四本の大きな柄杓が積まれて居てよく洗われては居るものの滲み込んだ悪臭があたりに立ちこめて居ました。一台の車に一名の看守と四人の女囚がついて全部で三台の汲取車は、それぞれの方向へと朝の街に車輪を軋ませて散って行きました。

——やらなきゃ仕方ないものね。一生懸命にやったんだけど、何しろ最初なもので、こぼしたり体に掛けたりするし、素足でしょ、ほんとに情けなかったわ。ゲーゲー云う程臭いしね。手錠は外して呉れたわ。天秤棒を二人で担いで踏板を昇って車の中にあけるんだけど、腰の鎖が桶に当たってジャラジャラ云うし、ジロジロさげすみの眼で見られるし、手が汚れてるから眼をこする訳にも行かないし。なんでこんなひどい事させられなきゃいけないのかと思って口惜しかったわ。——

何十軒か回って汲取ったタンクは一杯になりました。車の横手にブラシ下げた四個の手錠を婦人看守が手袋の手で掴んで顎をしゃくりました。漸く人通りが繁くなっ





た街路の片側に腰鎖を鳴らせて並んだ四名の女囚は両手を揃えてうなだれました。汲取労役の際に使用される手錠は、女囚達の手で手入れをされては居るものの、隅々に汚物がこびり付いて居て回転軸はギシギシと軋みます。

「可哀想なものねえ。手を使う仕事が済んだら、早速手錠かけてるわ。」

「けど、おとなしく縛られてるじゃない？」

勤めに急ぐ娘さん達がジロジロと哀れな女囚達を眺めて通り過ぎました。海岸に在る此の小都会の汚物は大半が海に捨てられます。女囚達が海岸に曳いて来た車の内容物は栓を抜かれてドブドブと船に移されました。空車を曳いて帰った女囚達は、車の内外や諸器具、手錠、腰枷、連鎖等を掃除させられた後、シャワーを浴びて囚衣を洗濯させて貰ったのでした。洗い終えた囚衣を干した女囚達に、そのまま手錠が嵌められ房へ追い込まれました。

「代りの着物は呉れないの？」

手錠の痕をさすり乍ら不審気に訊ねる彼女に

「そうなのよ。私達は着た切り雀なの。乾く迄、このままよ。」

「汲取り労役は辛いけど、その日は休めるから、嬉しいわ。」

女囚達は鉄格子の内側に並んで正坐し、昼食を待ちました。彼女が横目で見ますと、他の三名の肌には所々鞭

の痕が残って居り、特に七十三号のお尻から腿にかけての新しい数条の赤いみみず腫れには眼をそむけたくありません。

「む、鞭なんかも、じかに当てられますの？」

「そりゃそうよ。監獄みたいに無暗矢鱈と当てはしないけど。」

七十三号が殆んど口を動かさないうで云いました。

「看守の奴等、皆手に持って居るだろ。着物の上からなら連中の虫の居所次第で勝手気儘にぶたれるのよ。本式に肌にじかに当てられる時は、あそこの監視台の前でさ、見せしめのためにヒューヒュー云わされるわ。あんたみたいなお嬢さんには少しこたえるわねえ。」

「シッ。声が高いわよ。又嵌口具嵌められて、ウーウー唸らなきゃならなくなるよ。」

「嵌口具位平気さね。ほら監視の奴、居眠りしてるじゃないの。私達だけのために御苦労なことだこと。アーア出たいわねえ。ほんとに。」

六十二号は、ムッチリとした両腕を上には伸ばして溜息をついて舌をペロリと出しました。

夕方になって一日の労役を終えた女囚達が追われて帰って来ました。手錠を外す音と鉄格子の閉まる音がしきりして静かになりました。一人の若い女囚が連れ込まれて監視台の前で突き放され身をもんで嘔り上げました。

「もうそろそろ誰かやられる頃だと思ってたわ。」





七十三号が素早い動作で首筋の辺りを掻き乍ら低く呟きました。泣き乍ら囚衣を全部脱いだ若い女囚は天井から垂れた鎖と床の鉄環とによって手足を大の字に拡げて立たされ、大声で叫びました。

「四十五号は労役を怠けましたので、鞭を一ダース頂戴致します。お願い申し上げます。」

語尾は泣声で消え前後に立った婦人看守の革鞭が替る替る恐ろしい音を立て初めました。

——じっと見てる事なんか、とても出来ない程こわかったわ。打たれ終ると茶色の薬を大きな刷毛で鞭痕に塗りとくられるのよ。そしたらガククリしてたのがビクッと動いて、それこそ血を吐く様な悲鳴を挙げてのたうち苦しむの。見てて咽喉がカラカラになったわ。それから三日程したら、私もやられてしまったの。廊下を磨かされてただけど、つい物陰で身を起して一息入れたのよ。そしたら見付かっちゃって鞭十五を云い渡されたわ。同じ鎖の六十二号は這って居たから五つだって。其の後でも度々鞭を喰ったけど、罰の基準なんていい加減なものなねえ。囚衣を脱いで手足を拡げて鎖に吊るされた時は齒の根が合わなかったわ。平気な顔で鞭を当てる看守がほんとに憎らしくて。薬を塗られた時も気が狂う程痛かったけど、着物を着た時も又堪らなかったわ。——

生れて初めて肌に受け終えた鞭の痛さに呻き喘ぐ彼女の両腕は後にねじ上げられてガッチリと手錠を嵌められそのまま房に突き入れられました。

「痛かったら。いつになっても痛いものだけど、初めてのは、ほんとにこたえるものねえ。」

「あ、あの……手錠外して呉れないのよ。どうしたのかしら？ ヒーッウツ体を動かすと摺れて、もう……ヒー……」

「手錠かい？ それはちよくちやくやられる事よ。何と云ったって仕方ないわ。何かして欲しかったらお云いよ。」

其の夜彼女は固い床の上でのたうち回って呻き乍ら、囚われの身のみじめさを、つくづくと思い知らされ涙の涸れる迄泣きました。

——ほんとに自分の殺したあの男が恨めしくて堪らなかったわ。来る日も来る日も手錠嵌められて檻から出されて、命じられる労役を嫌悪なくやらされて、そして又括られて檻に帰るのよ。何の楽しみもないし、毎日毎日が切なくてみじめで。夜なんか堪らなくなって監房の壁を思わず叩いて呻いたわ。そしたら情容赦なく後手錠をかけられるの。窄衣も掛けられたし海老責や鉄砲手錠もやられたわ。所外で労役させられる時なんか、どうなってもいいから逃げたらと泌々考えたわ。けど腰に鎖つけられてる身なんだものねえ。意地の悪い看守にかかると連れて帰られる時に道端に跪まずかされて捕縄を念入りに打たれた事もあるわ。——

何とか降級もされずに一年余の呻吟の後、彼女は二級囚にして貰えました。二級囚になると社会との文通が月一回許されます。





——彼からの手紙読んだ時は嬉しくて一晩中泣いたわ。出獄をいつ迄も待って居ると書いてあるんですもの——

### 一般刑務所への護送

或日、作業台の前に坐った彼女が懸命に紙箱を作って居ますと

「九十九号。事務室へ出頭よ。」

ガチャガチャと段ボール紙を綴じ合わせる足踏器械の音に混って看守の声がしました。特に冷酷な若い婦人で彼女もつい一週間程前に、窄衣の上から捕縄を掛けられて獄庭を倒れる迄走らされた看守です。ビクッと立ち上がった直立不動の姿勢を取ろうとした彼女の腰を作業台に繋いだ鉄鎖が、ジャラジャラと鳴ってガッと張りました。

「動作が鈍いじゃないの？ 馬鹿!!」

鼻の先がツンと上向いたちよつと愛らしい様な顔に、意地悪い冷笑を浮べて近寄った婦人看守は、ルージュの紅い唇をゆがめていきなり女囚の頬を撲りつけました。

「申、申訳ございません。お赦し下さいまし。」

撲られ放題に撲られ乍ら、女囚は手を合わせて哀願しました。腰の鎖を作業台から解かれた女囚は、台の横手に吊ったU字環手錠を取って。

「お願い申し上げます。」

「馬鹿。それじゃないわよ。」

腰の革サックから第一種手錠を抜き出した婦人看守

は、手錠の二つの環を重ねて右手に握り左手の掌にガチャガチャと打ちつけ乍ら叱り飛ばしました。女囚の両手首に、手荒く手錠を喰い込ませた婦人看守は更に腰縄を打って女囚の尻を革靴で蹴上げました。事務室に入る前に、扉の外で両足にも足錠を施され、膝で歩いて平伏した彼女は、遠方の刑務所に移送される旨を云い渡されました。又浅間しい姿で汽車に乘せられるのかと思うと悲しくなりましたが致し方ありません。既に受領のための看守も来て居て、囚衣を着替えた彼女を鋭く検査した後、腰枷を嵌め股革を締め上げ、そして手錠を嵌めてしまいました。

「遠方を御苦勞様ねえ。荷造りが済んだら、お茶をもう一つどうお？未だ時間あるでしょ。」

「ええ、有難う。でもさ、何故一人だけ移すんだろ？面倒臭いことするわねえ。」

「まあ、いろいろあるんでしょうよ。そんなこと、どうだっていいじゃないの？出張旅費貰えるんだから。フフ。」

待たされて居る間、彼女は事務所の中を這い回って、お礼を云わされました。

「さ、おいで」

腰縄を曳かれて、うなだれて門を出ます。

「金網被せて欲しい？」

「ハ、ハイ、ハイ。お願い申し上げます。」

「ホホホ、未だ恥かしいの？ほら。」





護送の婦人看守は、手に持った金網を拡げて彼女の頭に被せて呉れました。飲まず食わずで用便すら許しては貰えず、汽車の床に身を固くして正座し、両手首に喰い込んだ手錠を悲しく見詰めたまま一夜を過ごした彼女は、或る小駅で降ろされて、細い雨が降る中を二十分ばかり歩かされました。移送されて来たのは、首都から汽車で二時間ばかりの所に在る町の外れに高いコンクリート塀をめぐらせた刑務所でした。

——少しでも、好きな人や家族に近い所に繋がれることになって嬉しかったわ。その刑務所はね、男も女も一緒に収容してるのよ。私は一三〇号だったわ。男囚の監房と女囚の監房とが向い合っただけで並んでるのよ。そして、廊下側も鉄格子じゃなくてコンクリートの壁になってて小さい鉄の扉が一つあったわ。やっぱり四人一緒に入れられて。前の刑務所じゃ婦人看守ばかりだったけど、今度は男の看守も居るのよ。男の看守にビンタ張られるのもきつかったけど、鞭打たれた時には、もう体が保たないと思う程痛かったわ。男囚の方じゃ又、体格のいい若い男やいい年した連中が、娘みたいな看守にヒーヒー云わされてたわ。見てて、ほんと気の毒だった位よ。男と女は、はっきりと区別されて扱われてたけど、時々は一緒になる事もあったわ。けど一言でも口を利き合ったらそれこそひどい目に会わされたものよ。一緒にの房に居た女っぶりのいい女囚は、もと料理屋の女将さんで、脱税でぶち込まれてたんだけど、その人ったら、しょっちゅう中男

囚と口を利いては嵌口具嵌められてウンウン唸ってたわ。一年半程で漸く一級にして貰って独房のベッドに寝た時は嬉しくて涙がこぼれたものよ。けど、いくら一級でも監房の外じゃ、やはり手錠はめられなきゃいけないのが情けなかったわ。一級になると面会させて貰えるのよ。あの人や、母や兄妹も来て呉れて、二重の金網越しに会ったんだけど、泣けて泣けて最初の時には碌に話も出来なかったわ。はめられてる手錠が見えない様に下の方に隠してたんだけど、あんまり涙が出るので、とうとう両手で顔を押えてしまったの。——

彼女の両手に光る手錠を見た彼は、眼をしばたたき乍ら

「まだ、そんなにされてるんだね。可哀想に。さぞ不自由で辛いだろう。外してやったらいいのになあ。」  
「こんな、ああ恥かしいわ。こんな浅間しい姿を、あなたに見られて。けど心配しないでね。もう慣れてますもの。」

彼女はまぶしそうに彼を見上げて無理に泣き笑いを浮かべ、彼は暗然と声をのみました。

半年程して待ちに待った外出が許されました。

「一三〇号。よく、神妙に勤めたわね。外出させて上げる。最初だから二十四時間よ。最高六十時間迄許される。規程だから、心掛け次第でふやして貰えるわよ。そら、これが心得よ。よく読んで間違いない様にね。今、九時半ね。十時にまけといて上げるから明日の午前十時に





は所内に居なくちゃ駄目よ。さ、あそこにお前の服が出てあるだろ。手錠外して上げるからお替えよ。」

三年半振りて人間並の衣類を着て、靴をはくと無性に涙がこぼれました。衣服には消毒薬の匂いが滲み込み、はだしに慣れた足には、靴が窮屈でした。

「あ、あの。此の手の番号は、そのままですか？」

「ああ、それは消してやる訳には行かないのよ。手袋ないの？ お金、少しある筈ね。駅の近くのお店で買いよ。あ、それから化粧品なんか未だ使える？ 古くて駄目なら貸して上げるわ。」

久し振りの化粧の半ばで、彼女は何度も嗚咽して手を止めました。早くから日を予告しておいて呉れたら迎えに来て貰えるのに、と彼女はつくづく恨めしく思いました。固くなったハンドバッグの中を探して見ましたが、ある筈の白手袋は見当らず、手首に歴然とついた手錠の痕と、両手の甲に黒く刷られた囚人番号をみじめな思いで眺めた彼女は、事務室に続く職員通用門から塀の外にションボリと出ましたが、それでも嬉しくなって空を仰いで大きく息を吸いました。

駅へ急ぐ彼女は行き交う人々が彼女の身分を知って居る様に思えて体が硬張りしました。洋品店で白手袋を買う時の恥かしさ。小娘の店員がニヤニヤと嘲けりの色を浮べて、彼女の手を視線を注ぐ口惜しさに、その娘の頬を張り飛ばしてやり度いと迄彼女は思いました。汽車に乗る時、入れ違いに降りて来た四名の囚人を見て彼女は暗

然として見送りました。二人宛腰を連鎖されて消え入る様な風情で曳かれて行く彼等は、金網で顔はよく見えませんが、その中の二人は女囚らしく、丸い肩の辺りが小刻みに震えて居ました。汽車が動き出すと、彼女は初めて解放感を心底から味わってホッと吐息をつきました。駅弁とお茶のおいしさに、自分が哀れになった彼女は暫し箸を休めて涙を拭きました。駅のホームには、電報を見た彼が立ちつくして待って居ました。

喫茶店のテーブルの下で手を握り合った彼と彼女は互いに眼を見詰め合って声もありませんでした。

「お母さんには知らせたの？」

「いいえ。遠いし。不意に帰って上げようと思って。ああ、おいしいわ。」

「けど、明日の朝は又。二十四時間じゃ短かいなあ。」

おいしそうにコーヒーを啜る彼女を見詰めて彼は暗然としました。楽しい一日はあっと云う間に過ぎ、二人は夜更けの公園を泣き乍ら散歩しました。

「じゃ、明日の朝、駅で会おうね。」

彼女の家の前で彼は手に接吻しようと、彼女の手袋をやさしく脱がせかけました。

「あッ駄目、駄目よ。勘忍して」

抗う彼女の手を取って強引に手袋を脱がせた、彼は細い手首に痛々しくついて居る手錠の痕をやさしく撫でてやり、番号の刷られた手の甲に唇をつけました。

翌朝、母と彼は汽車に同乗して彼女の帰獄を送って呉





れました。汽車の速度の早いこと、駅を通過する毎に彼女の心は鉛の様に重くなりました。

「しっかりするんだよ。もうあと半分なんだから。」

「ええ、けど、あなた、お勤めはいいの？ 昨日も今日も私のために休んでしまつて。」

「ウン。心配しないでいいよ。けど、實際嫌になつちまうよ。今度の課長は女なんだぜ。ほら、君と仲が悪かつたタイプストの娘が居ただろ。あの女が事もあろうに一念発起しやがつてさ、マネージメント・コースに合格して、僕の課の課長さ。」

彼女の胸は嫉妬と心痛で、張り裂けるばかりになりました。

「ハハハハ、心配しなく共いいよ。僕には君だけで。」

あと一時間足らずで再び自由を奪われてしまわねばならない自分の身が、ほんとに切なくてやるせなくて、彼女は喘いで身をもみました、彼女が刑務所の職員通用門のベルを押したのは十時五分前でした。道の向う側で、母はもう涙ぐんでオロオロし、彼は唇を噛んで腕組みして悲しみを堪えて居る様子でした。

「誰れ？」

「ハ、ハイ。あの、一三〇号でございます、只今帰って参りました。」

「フン。穴から両手を入れてごらん。馬鹿!! 手袋脱がなきゃ駄目じゃないか。」

番号が確認され扉は開いて彼女はよろめいて入りまし

た。踏み込む一步が、鉄丸をつけられた様に重く感じられ、振返った彼女の眼前で鉄扉が無慈悲に閉じられました。

「初めての外出は嬉しかったろ？ え？」

「ハイ。有難うございました。」

「じゃ、早く着替えて。」

力の無い動作で囚衣に着替える彼女の頭の先から足先迄嚴重に検査した婦人看守は

「さっさとおしよ。楽しい目をして来たんだろ。今日は便所掃除をさせてやるからね。」

腰の革サックから手錠を取り出して嵌める準備をし乍ら、口汚く叱りつけたのでした。

## 女 囚 の 外 出

——そして月に一回は外出させて貰える様になったんだけど、そうすると、何かにつけて其の外出を取消しにしてやるって脅かされたわ。月一回の外出をどんなに楽しみにしてるかをよく知ってて苛めるのね。四回目の外出は、とうとうあの意地の悪い看守のために取消されてしまったの。その上、丸一日の間裸で捕縄打たれて木的首枷迄嵌められて正座させられたわ。悲しくて泣いてると鞭で打たれて。ほんとに些細な事が理由なのよ。口惜しくて口惜しくて、殺してやりたいと思つた程よ。今頃はあの人に会つてのにと考えると気が狂いそうになつたわ。そしてその次の外出の時に、とうとう唇だけじゃ





なしに、総てを彼に与えてしまったの。鞭の痕をやさしく撫でて呉れたわ。

外出の許可時間も次第に長くして貰える様になって一年近く経った頃には最高の六十時間を与えられました。

「あの女課長の奴がうるさくて仕方ないんだ。そして近頃はもう諦めかけて来たのか、僕に辛く当ることもちよいちよいあるよ。」

「ね、あなた。お願いだから、あの女のこととは云わないで。私、あなたを信じるわ。」

「……………」

「けど、あの人は綺麗だし、課長だし。いつでも、あなたと話できるのねえ。そして私は女囚で、明日は刑務所に帰って腰に鎖をつけられる体なのね。ね、私もう切ない。気が狂いそうよ。」

二人は夜の更けるのも知りませんでした。翌日の夜、午後八時の帰獄にぎりぎりの列車に乗った二人は、日が佳いのか幾組もの新婚旅行のカップルを見せつけられて涙ぐみました。涙をこらえて夕暮れの窓外を眺めて居た彼女は、途中停車の原因が踏切事故のためと知って蒼白になって飛び上りました。

「あなた。どうしましょう。遅れるわ。そしたら……………」

「心配いらないと思うよ。事故証明を貰えばいいじゃないか。」

「そうかも知れないけど。しかし囚人なんですもの。そ

んなこと通らないかも知れないわ、どうしよう。」

夢中であたりを見回す彼女に、どこかで見た婦人の顔が見えました。その婦人も蒼くなつて、そわそわして居ます。

「あらッ。あんただったの。久し振りねえ。こっちの、そのあそこに移されてたの？」

「そうよ。全然知らなかったわねえ。外出？」

「ええ。あんたも？」

その婦人は、彼女が前に居た刑務所で一時同じ房に入られ、同じ鎖で繋ぎ合わされて居た事もある薬剤師の女囚でした。

列車は約一時間おくれて到着し、彼と彼女達は転ぶ様に降りて駅事務室に駆けつけました。

「そしてその証明書は、どこに出すんですの？宛先無しじゃ発行出来ませんわ、フフフ」

助役の婦人の意地の悪さに三人は齒ぎしりしました。

「刑務所に提出するのですよ。」

彼が思い切つて云いました。

「あら。やっぱりそうですの、それなら不要ですわ。刑務所には通知しましたよ。問合わせがあったのでね。じゃ、こちらの手袋のお二人は女囚なんですわ。」

ジロジロ眺められて二人の女囚は真赤になつてうつむきました。

「そうですか。じゃ早く行こうよ、車はないのかな。」

「ホホホホ。もう急がなくてもいい様ですわ。ほら、





向うから、看守さんが二人やって来ましたわよ。」

制服姿の婦人看守の二人連れを見た女囚達は唇をワナワナ震わせて崩折れてしまいました。

「あら、あそこに二人共居るわ。」

「ほんとに。……これ、お前達。何してるの？ 早く帰らないと駄目よ。汽車が遅れた事は知ってるけど、それ以上遅くなると……」

生気を取戻した二人の女囚は立上って看守の方に近付いて深くうなだれました。

「さ、こっちへ来るのよ。」

婦人看守達がそれぞれ腰の革サックから手錠を取出すのを見た女囚達は、習慣によって反射的に両手を揃えて差出しました。途端愛しい男に見られて居るのを思い浮べた彼女は、両手を差伸べたままで身もだえして嘔り上げました。

「ああ、帰る迄勘忍して頂けないかしら？」

「何だって!! 寝呆けないでよ。手袋をお脱ぎ。馬鹿だね、二人共」

彼が声を掛けました。

「看守さん達。此の人達は、外出を許されてるんでしょ。だったら、何も、こんなところで慌てて嵌めないでもいいじゃないですか。」

「ホホホホ。あなたは、どっちの女のいい人なのかしらね。お気の毒だけど、もう外出時間はとくに過ぎてますよ、これッ一三〇号、何故手を引込めるの？」

——手錠嵌められるのは、もう慣れてるし、集った人々に見られるのは我慢出来たわ、けどあの人の見てる眼の前で、情容赦なく縛られるのはもうほんとに悲しかったわ。その上に腰縄打たれて繋ぎ合わされて、縄尻で打たれたの、歩けて。あの人は黙って刑務所の入口迄一緒について来て呉れたわ。唇を噛みしめて。月の光に照らされたあの人のあの時の横顔は眼に焼きついてるわ。うっとり横眼で見てたら、ピンク噴ってしまったけど、最後迄並んで歩いて呉れたの。嬉しかったわ。——

帰獄した二人の女囚を待つて居たのは、残酷な懲戒でした。

「いいかい。いくら不可抗力な理由があつたって、どうしたって駄目なんだよ。降級は勘弁してやるけど、懲戒を加えるからね。明日から毎朝鞭半ダース。それから窄衣かけて三十分間馳足。夜は就寝前の逆海老にしてやるから、そのまま監房の前の通路を一往復這うんだよ。列車が事故を起したら、何故走って帰って来ないのさ。走って倒れたら這いずってでも帰って来なくちゃね。其の稽古をさせてやるわ。いいかい？ それから、外出は当分禁止よ。勿論のことだわ。」

後手錠、足錠を掛けられて床にひれ伏して言い渡しを受けた二人の女囚は身をもんで慟哭しましたが、赦される筈もなく、手錠と足錠を背で一つに結ばれて逆海老にされ、鞭と足蹴に追い立てられて、喘ぎ喘ぎ床を這って息も絶え絶えに漸く辿り着いた独房に放り込まれ、血の





様な涙を流して呻き悲しんだのでした。

——文通も禁止されたの。毎朝の鞭と窄衣馳足、夜の逆海老匍匐の懲戒は十日程続いたのよ。死ぬ程苦しくて辛かったわ。けど、そんな肉体的な苦痛よりも、それから三カ月間の文通、外出の禁止の方が精神的にこたえたわ。寝てもさめても、思う事はあの人のお事ばかり。それに例の女課長の事もあるし、心配で心配で。手紙だけでも許して下さいって、それこそ床で額をすり減らす程に哀願するんだけど駄目なの。駄目なだけじゃなしに、その上、あの人から来た手紙を四、五通束にして見せびらかしてからかうのよ。手錠を腰枷の前で留められてたんだけど、あんまり口惜しいので、思い切りもがいたら、てきめんに手錠が締まっちゃって、手首が千切れそうになったわ。その時、手錠で締めつけられた傷痕は今でも残ってるわよ。自由を奪われた身の悲哀と云うものを肝に銘じて味わさせられたの。——

三カ月の後、再び外出を許された彼女は宙を飛んで彼の許へ駆け付けました。ヒタと顔を寄せ合って黙ってお茶を啜る彼と彼女のテーブルの傍らに人影が立って含み笑いが聞えました。

「フッフ、仲よくやってるわね。」

見上げると例の婦人課長が嘲笑を浮べて見下ろして居ました。連れの若い婦人も見覚えがありました。

「このとこ、ちょっと出して貰えなかった様じゃないの？ やっと外出させて貰えたのね。あんた、あと何年

だったっけ？」

細いシガレットに火をつけ乍ら婦人課長は、あたりに聞えよがしに大声で話し掛け、彼女は口惜しさに身を震わせてうつむいて唇を噛みました。

「そんな大声で言わなくても、いいじゃありませんか課長。」

「へえ、あんた、又えらく此の女の肩をもつのね。ま、無理もないけど。あんた、監獄の味はどうお？」

「監獄じゃないですよ、刑務所です。お願いだから、大きな声出さないでやって下さいよ。」

「フッフ、監獄だって刑務所だって同じ様なものだわ。要するに女囚なんですよ。人間並みにお茶なんか飲んでさ、生意気な罪人だこと。ホホホ、何よ、そのくしゃくしゃの顔は。」

店内の人女の視線が集まり、彼女は穴があれば入り度く思いました。

「ね、出よう。」

彼は婦人課長を睨みつけて立上がって、彼女を促がしました。

「ホホホ。逃げなくってもいいじゃないの。口惜しかったら其の手袋を脱いでごらんよ。フッフ」

屈辱に堪え兼ねた彼女は自制心を失ってしまいました。矢庭に手袋をむしり取った彼女は

「そんな見たいのなら、ホラ見せて上げるわよ。一三〇と番号が刷ってあるでしょう。おっしゃる通り、私は女





囚よ。明後日は又刑務所に帰らなきゃならない身よ。けど、それがどうしたって云うの？」

口惜し涙を湛えた彼女の黒い大きな眼は怒りに燃えました。

「ホラ、両方の手首の傷は手錠の痕よ。捕縄を掛けられたり、鎖で繋がれたりするのが、どんなに辛いかわりもしない癖に。私はね、ただ乱暴されるのを防いだだけよ。大変な結果にはなったけど、一生懸命にその償いはしてるわ。あんたなんか兎や角云われる事はないの。」馬鹿にし切って居た彼女に、手きびしく逆ねじを喰わされた婦人課長は、たじろいで顔を紅潮させました。

「云ったわね。女囚の分際で。」

女囚と云われて彼女は口惜しさが、更にこみ上げました。

「何よ。女囚、女囚と云わないで頂戴。あんたには関係ないんだから。」

カッとなった彼女は手袋を婦人課長の顔のあたりに投げつけてしまいました。

「この人の事を根にもってるんでしょ？ お気の毒だけど、此の人はもう私の物よ。口惜しかったら」

彼に制せられた彼女は、はしたない事を口走った自分を恥じてうなだれました。

「まあ。物を投げつけるなんて。ようし」

眼配せを受けた連れの娘は外に走り出しました。

「も、もう互いにいいじゃないですか。課長、失礼しま

すよ。おい、行こう。」

「ちょっとお待ちよ。あんた、今何時だと思ってるの？勤務時間中よ、女の子と遊ぶのは後にして、さっさと社にお帰り。」

彼は唇を噛んで眉をふるわせました。

「あ、それからね。あんた、現場へ三、四日出張して欲しいの。少し遠方よ。急ぐから今夜発ってね。詳細はあとで指示するわ。ホホホ」

顔を見合わせて茫然とする彼と彼女を眺めて、婦人課長は勝誇った顔付きで傍らのテーブルに坐って給仕に飲物を命じ、低く笑いました。

「課長。誰かと替って下さいよ。お願いします。」

「駄目。あんたでなくちゃいけないのよ。フフフ」

事情を薄々察した周囲の人達の間には、同情の声も聞えましたが、婦人課長はどこ吹く風かとばかり紫煙を吹き上げて脚を組みました。

「ああ来たわ」

先刻出て行った娘に案内されて制服の婦人警官がやって来ました。

「どうも御苦勞様でございます、いえね、ついさっき此の女が私に物を投げつけたんですの。よく見ると外出を許された女囚の様に思ったもんですから、ちょっと御耳に入れと思うましてね。ホホホ」

婦人警官の制服を見た彼女の膝はガクガク震え、咽喉はカラカラになってしまいました。両手の甲の囚人番号





を確認した婦人警官はうなづいて

「お前、折角外出を許して貰ってるといふのに駄目じゃないの。」

彼が懸命に事情を訴えましたが耳もかさず。

「ま、ともかく交番までおいで。此の手袋を投げつけたのね。事情は兎も角として、受刑中の身なんだろう？ とにかくおいで。おや来ないの？」

婦人警官が腰の革サックからカチャカチャ云わせて取り出した手錠を見た彼女は彼の腕にしがみ付いて嗚咽しました。しかし婦人警官は無表情な顔で彼女の手を掴んでバシッバシッと手錠を両手首に喰い込ませ、鎖に捕縄をつけて引き立てました。余りのみじめさに、手の甲の囚人番号も忘れた彼女は手錠の両手で顔を掩うて、雲を踏む様な心地でよろめきよろめき、曳かれました。

「外出証を見せてごらん」

交番の机の前に立たされた彼女は、不自由な両手で、机につけた外出証を取り出しました。

「今朝、出して貰ったばかりなのね。それで、一体どうしたの？」

「ハ、ハイ。私が悪うございました。お許し下さいませお願い致します。」

「そ、そんな。君は何も悪い事なんかないよ。あの女が余計なことを云って、からかうからいけないんだ。何も謝まることないよ」

交番の中迄ついて来た彼は、口をとがらせて、必死に

訴えました。

「あなたは、此の二三〇号の……その彼氏なのね。あなたの気持も分るけど、此の女は現在、刑の執行を受けて居る身なのよ。外出中でも執行は停止されて居ないんです。だから、少し位の事は辛抱しなくちゃね。可哀想みただけど仕方ないわ」

彼の顔は怒りと悲しみにゆがみました。

「お前どうお？ 手錠で締めつけてやったら、少しはのぼせが下ったかい？」

「ハ、ハイ。あの、お願いですから、刑務所の方には黙って下さいまし。此の通り拝みますわ」

「ホホホホ、じゃ、黙ってて上げるから、二時間ばかり、そうして立ってなさい。道の方に向いてじっと真直ぐ立ってるのよ」

「ハイ。あの、あなた。済みません、ほんとに」

「退けたら『A』へ行くからね。待っという。ああ、可哀想に……」

彼女の顎のあたりを軽く愛撫した彼は涙をこらえて足早に立ち去りました。

「あら、晒し者になってるわ、ホホホホ」

婦人課長と連れの娘とが現われて、哀れな彼女の姿を心ゆく迄眺めて嘲笑し、彼女の胸は、押えても押えてもこみ上げる怒りと悲哀で張り裂けてしまいそうでした。

アベックで脱走





其夜、復讐心に燃えた婦人課長の出張命令を無視した彼は、とうとう彼女と一緒に小さなホテルに泊ってしまいました。

「大丈夫？ こんなことしてしまつて」

彼女は濡れた瞳で訊ねました。

「何とかするよ。心配しなくてもいいよ。けど、本当にお前が可哀想で可哀想で……」

「私嬉しい。こんな身になつても、あなたに可愛がつて貰えるなんて。もう……ほんとに。」

「ね。此の前は、ひどい目に会つたなあ。事故の為にさ。痛めつけられたんじゃないのか？」

「そんな話はよしでしょう。思い出しても、ぞっとするの。」

「やっぱり苛められたんだね。可哀想に。」

せきを切った様に彼女の胸に顔を埋めて受刑生活の苦しさ辛さを訴えました。

「たった一時間余り帰るのが遅れただけで、ずい分、ひどい事をするもんだなあ。まだ三年以上もあるのか。未だ長いなあ。」

「早く自由になりたいわ。其のみじめで辛いことつたら幾ら話を聞いたって、想像もつかない位よ。どんなことされたって口答一つ出来ないんだものねえ。けど話を聞くと監獄ではまだまだひどいんですって。これ以上ひどい目に会わされたら死んだ方がましよ。懲役囚になると鼻環や鉄の首環を嵌められて、着物も着せては貰えな

いし、手も足も錠を掛けられ放しだと云うことよ。」

「刑務所じゃ、どうされているの？」

「監房の中では体は自由にさせて呉れるわ。けど、檻から一步でも出る時は手錠を嵌められるの。仕事する時は台に鎖で繋がれるし、外に出る時には腰を連鎖されるし。諦めているけど情ないものよ。そんなお話しは止しましょうよ。せめてこうしてる間だけでも忘れて居たいわ。」

「うん。しかしこの体に鞭を当てたり、窄衣を掛けたりされてるんだねえ。そう思うと身を切られる様だよ。」

「だから、今迄でも余りお話しし度くなかったのよ。」

「うん。そして今はどんな仕事させられてるの？」

「いろいろな事よ。毎朝檻から曳き出されては、勝手氣ままに命じられる労役をしなくちゃならないの。けど、今頃は主に敷物を織らされたいわ。ともしんき臭くて根の要る仕事なの。男の囚人にも古靴下を解かせたりさせてるわ。今日外出する時も一緒だったけど、脱税で挙げられた呉服屋の若旦那だった人が居るのよ。その人が云ってたけど婦人用の古靴下の汚れたのを解かされるのが一番情けないって」

快い疲れにいつしか眠り込んだ二人は、翌朝人目を避ける様にして静かな山の温泉へ出発しました。翌日は離れ離れにならねばならない二人は、明け方近く深い眠りにつきましたが、眼が覚めた時は既にひる近くなって居ました。





「あなた、大変だわ。もう間に合わないわ。どうしましょう。」

おろおろと泣き乍ら死物狂いで身支度を急ぐ彼女をじっと見詰めていた彼は、意を決した様に強く抱きしめて囁きました。

「ね、逃げようよ。お前を地獄の様な所に帰すことは、とても出来ないよ。それに僕も今のままじゃ駄目にされてしまうし。」

「そ、そんな……大丈夫？いえ、とても、そんなこと、出来っこないわ。捕まったらどうなるの？すぐ捕まるに決っているわ。」

「しかし、もう時間迄には帰れないよ。そうしたら、又、罰を受けて、もう会えなくされてしまうかも知れないんだぜ。」彼の腕の中で抗う彼女のもがきが次第に弱まりました。

「ね、どこか静かな遠い所へ行って考えようよ。一緒に死んでもいいし。」

「死ぬの？ええ……いいわ。」

彼女はブルツと身震いし乍ら、うっとり彼の眼を見詰めて弱々しく微笑みました。

「死ぬのは最後の事さ。医者の友人も多勢居るし、顔を変えて変名でもして、どこかでひっそりと暮そうよ。君のお母さんには済まないけど……」

「そんな事……仕方ないわ。私、あなたさえ、それでよければ、おっしやる通りに致しますわ。ね、もう離れなく

てもいいのね。嬉しい」

それから二人の懸命の逃亡が初まりました。彼が苦心して両手の囚人番号を消して呉れましたし、お金は出張旅費がたっぷりありました。

——二十日間程の事だったわ。じりじりと追われていた事は分っていたけれど、楽しかったわ。ノイロンの中和剤の方は割と楽に手に入って、一緒に死ねるのが待ち遠しいとさえ思う様になれたけど、整形して呉れる様な医者とは中々連絡がつかないの。苦心して変装したりして……何しろ新聞には写真が載るし、全国手配されてるでしょう、人目を忍んで逃げ回るのに疲れ果ててしま……。

追い詰められた二人は、山奥の鄙びた温泉宿に憩うて手を取り合って泣きました。

「もう、諦めましょうよ。所詮無理だったの。風の音にも、おどおどしなくちやならない暮しは、とても出来ないわ。」

彼の憔悴し切った顔を見詰めて、彼女はホロホロと泣きました。

「私はもう、どうなってもいいの、けど、私のためにあなたの一生迄狂わせてしまつて。許してね。」

「そんな事云わなくてもいいよ。ああ、ではもう……駄目だったなあ、やっぱり。じゃ、明日山に登って、どこか見付からない所で一緒に……」

「嬉しい。嬉しいわ。けど私達って、ほんとにどんな





星の下に生れたんでしようねえ。ホホホホ。笑いだくな  
ったわ。」

死の準備を整え、最後の眠りについた二人は、翌朝逮捕されてしまいました。踏み込んで来た刑事達は、彼に対しては衣服を整えることを許しましたが、彼女には下着をつける事さえ許ませんでした。

「舌嚙むといけないから、くつわを咬ませとかなきやね。」

手錠を嵌められ腰縄を打たれて茫然と坐り込んだ彼女の顔に、はれ上がる程ピンタが飛び、我に返った彼女は声を絞って号泣しました。鉄棒が奥歯に咬まされ、唇が裂けてしまう程強く後頭部に結ばれました。

「服は着たかい？ま、直ぐに脱いで貰わなきゃならないけどね。手を出して」

がっちりした体の婦人刑事の一人に背後から両肘を握まれた彼は痛さに呻きました。

「逃げおうせるところだったのかい？馬鹿だねえ。さ、来るんだよ。」

二人の婦人刑事は、彼と彼女の片腕をそれぞれ抱いて意気揚々と引き立てました。

「ア、ウ……アウ……ア……ウ……」

いましめに慣れて居ない彼は、流れる涎れを拭おうとして、腰縄に押えられた手錠の両手をがチャガチャガと切なく動かし、上体を屈めて、無駄な努力をみじめにもがいてくつわに押えられた口で唸りました。汽車に乗せ

られて、彼と離れ離れにされ、両足にも手錠を嵌められて床に正坐させられた彼女は、初めて血の様な涙で頬を濡らしました。人々の視線が肌に突き刺さる恥かしさも忘れて、彼女はひたすらに彼の身を氣ずかって身もだえを続けたのでした。

### 脱獄女囚の苦難

——小さな都会の警察に一応連行されて取調べられて留置場に放り込まれたの。初めて首に冷たい鎖と札をつけられた時は声を上げて泣いたわ。鞭でしばかれてノイロンの注射をされて、後手錠にされて……。鉄格子がガチャピーンと閉まった時は胸が塞がる思いがしたわ。泣いてもだえる度に鞭で打たれたけど私ばいいのよ、けど其の晩、あの人も三回曳き出されて鞭打たれたの。遠くの方で鞭の音と、あの人の悲鳴が聞えて来ると、もう悲しくて申訳なくて、転げ回って泣いたわ。翌る日、曳き出されて、生れて初めて革の褌をじかに締められたの。そして物凄く頑丈で重たい手錠を前で嵌められて、両足も鉄枷と鎖で繋ぎ合わされて嵌口具嵌められて……。あんまりきびしく錠鎖されたのでガタガタ震えてると、あの人も曳かれてやって来たのよ。——

常用して居た六尺褌一本だけの姿で引立てられて来た彼は、彼女の浅間しい姿を見て声を立てて身をもだえました。

「お黙り!!」





婦人警官に撲り飛ばされた彼は、腰縄で押えられた手錠をガチガチ云わせて、よろめいて口惜しげに唸りました。

「ああ、僕が悪かった。可哀想に……。僕が余計な事さえ言わなかったら……」

嵌口具を咬まされて、彼の血を吐く様に悲痛な声は途切れてしまいました。

——そして又汽車に乘せられて拘置所に連れて行かれたの。私が前に入られて居た所よ。此の前の時とは違つて、今後は破廉恥罪の未決囚の扱いを受けなきゃならぬの。それ所が脱獄囚でしょう、普通以上にきびしい扱いをされたわ。髪をバツサリと根元から切られて、革の首環を嵌められた時は眼の前が真暗になってしまつて……。連れて来られる時には、人にジロジロ見られて悲しかったけど、あの人と同じ鎖で繋ぎ合わされてると思うと嬉しかったものよ。しかし、あの人は、そのまま拘置所から連れて出られて、どこかの警察へ行つてしまったの。腰を繋ぎ合わせた鎖を解かれる時には、いつ迄もそのままで繋いでおいて貰えたらと思つて切なかつたわ。

手首足首に嵌め込まれた鉄の環は、もう四六時中、外して貰えないと知ると、その重さが身にこたえたわよ。脱獄囚だからと云うので、布の赤い揮の上から鎖環をかけられて強く締めつけられて、その上、房内でも後手錠にされて首環に吊り上げられたままなの。用便は日に二回しか許してくれないし、囚人食を啜る時も後手のまま

よ。今から考えると何でもない事なんだけど、その時はもうみじめで悲しくて腹の底から泣けて来たわ。刑務所では粗末乍らも普通の食物を興えて呉れてたのよ。だから囚人食の臭いが胸にこたえて、中々啜り込めなかつたわ。

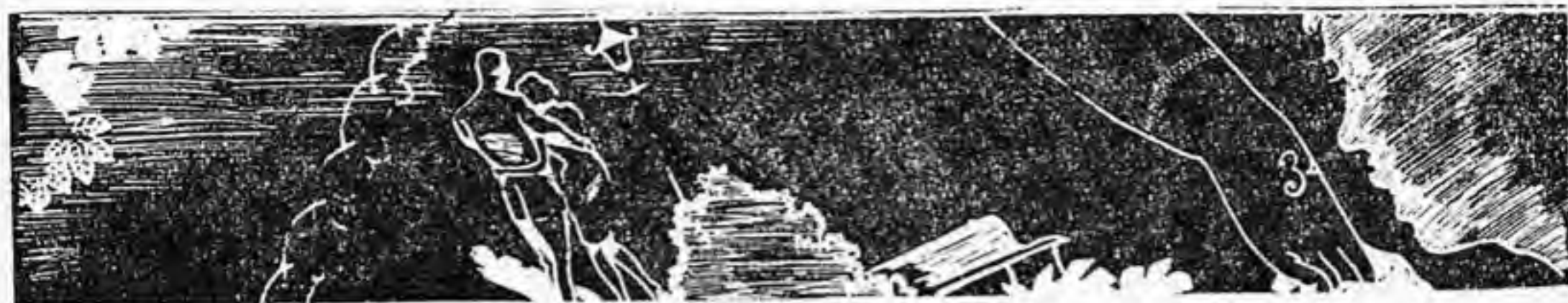
彼女の罪状は瞭然たるもので検事の取調べも二回で済み唯一の公判も五、六分間の後には有罪の宣告を以て終つてしまいました。

——脱獄の罪は仕方ないと諦めたわ。私が悪かつたのよ。けど重侮辱罪と云うのが付け加えられたのには腹が立ったわ。前にお話したでしょう、刑務所から外出を許されて彼と会っている時、あんまりなことを云うので私が手袋を投げつけてポンポン云つてやつた女の事なのよ。たとえどんな事情があつたにせよ。徒刑囚として私の行動は罪になるんだって。傍聴席で例の女が笑い乍ら眺めているの。今度は誰も弁護も同情もしては呉れないし、口惜しくて情けなくて、重い罪石を背負わされ乍ら自由の身になったら、きつと仕返しをしてやらなくちやと泣き泣き考えたわ。——

一カ月以上経つて、刑の言渡しを受けるため曳き出された彼女は、変り果てた姿の彼と一緒にされ、思わず鎖錠を鳴らせて身もだえしました。同じ思ひの彼も嵌口具の奥で微かに呻いてうるんだ両眼をカッと見開いて彼女を見詰め、鞭痕のむごたらしい裸身をもがきました。

「今日はお前達二人だけよ。一緒に歩くのも、これで





お終いだろつから、アベックの味をようく味わせてやるからね。ええと、女の方は鎖鐐は掛けばなしなのね。」

婦人看守の手で鎖鐐を強く締めつけられた彼は、初めてのことで、其の屈辱感に全身をおののかせました。

二人の手錠が外され、背負わされた重い鉄の罪石がずしりと肩に喰い込み、第一種錠が後手に嵌められます。いとしい男の体は無慈悲に小突き回してきびしい鎖錠を施して居る婦人看守を見ると、其の憎らしさに彼女の胸は張り裂けんばかりでした。第二種足錠を除かれ、男を前にして前後に並ばされた二人の両足に残酷な足枷が嵌められました。黒くいぶした厚い木製の長い枷が二組準備され、その各々には一米程離れた足首を嵌め込む穴が設けてあります。二人の囚人の右足同士に一组の枷が、そして左足同士に他の一组が嵌め込まれました。二組の枷の前後には四十センチ程の鎖がついて居て、枷同士をも連結して居ます。

「フッフ、どうお？　そうして歩く訳だけどな、ようく歩調を合わせて歩かないと転んで足首が痛むわよ。悪くすると足首が折れるかも知れなくてよ。ホホホホ」

ずっしりと足首を押えつける枷の重さと痛さ、そしてこのまま歩かねばならない不安さに、よろよると立ちすくむ二人の鎖鐐を連鎖し乍ら、婦人看守は笑いました。

「さあ、号令を掛けて上げるわね。最初は左足から踏み出すのよ。いいね？　婦人看守は髪の乱れを撫でつけ、再び被った制帽を少し斜めにヘアピンで留め、ネクタイ

口を直して、鞭を床にピシッと鳴らしました。

「気をつけえ!! やすめ!!」

ビクリと緊張した二人の囚人はホッと体の力を抜き、肩をゆすって罪石の重さに肩をしかめて堪えました。

「気をつけえ!! おいちに：おいちに：フッフッフ、そう、そう、うまいうまい、一二、一二……左右、左右……」

——若し転んだら、罪石は重いし、後手錠だし、どんな事になるかよく分ってるから、それこそ死物狂いだっただわ。一步々々に全神経を集中して、やっと法廷に着いた時は脚が棒みたい硬張ってたわ。無事に歩けたのが不思議な位よ。号令を掛けて貰って立ち止って彼の体を見ると体中脂汗にまみれて、喰い込んだ鎖鐐が汗で濡れて、んな姿を見ると、もう胸が詰って眼が見えなくなっちゃったわ。残酷な足枷を一応外して貰ったら、足首が俄かに凄く痛み出して来て堪らなくなったの。皮が破けて血が滲んでるし、いくら脱獄囚だと云っても、あんまりな扱いだと思っただわ。——

彼の刑は脱獄幫助と、出張旅費の使い込みによる横領罪とによって六年の懲役でした。彼女の方は、徒刑の残りを無条件に三倍して懲役刑に振替えられ、更に脱獄逃走によって十年、その上更に重侮辱罪に依る三年を附加されて、合計二十二年の懲役と云う、胸もおしひがれる様な宣告が与えられました。



## 通信

## 女子寮の「降参ごっこ」

高木紀久枝

六月号をそつと開いて見ると、まさかと思  
っていた私の「女子寮の争い」が載っている  
ではありませんか。一瞬私はドキッとして、  
恥しいやら嬉しいやらで頬がかーっとほてる  
のを感じました。間もなくおてんば連中が聞  
きつけて集まってくると、「まあー驚いた、  
紀久ちゃんたら、やるわね」「あーら、すご  
い！いかすわよ」「いやー紀久ちゃん、見な  
おしたわ、素敵ね」と口々にほめそやしたり  
冷やかしたり、お陰で私は穴があつたら入り  
たい位でした。

でも、そんなことに刺戟されて、皆も益々  
あられもない女同志のふざけ合いに一層興味

をそそられたのでしよう。何かと云えば逃げ  
たり追っかけたり、はては組み付いて転がし  
合いの組打ちが始まるのです。以前でしたら  
そんな時、態と一人がおどけて転がったり、  
余程の場合でも一人が捻じ伏せられて押えつ  
けられると、他愛もなく「イヤー、降参、降  
参よ」と云って、あっけなく終っていたので  
すが、此の頃では、そんなことにも馴れっこ  
になつてしまつて、誰もそう簡単に降参を云  
いません。

ですから、お互いに負けん気を出し合つて  
ドタンバタン、上になつたり下になつたりし  
ながら、白い脚を太もものあたりまであらわ

に、寝技で争つたり、遂には力勝つた方が非  
力な女を馬乗りに組み敷いて、「さあ、どう  
だ、降参か」とさも得意そうに押え付けてい  
る光景を見る機会が、急に多くなつてしまし  
た。そんな時、皆は二人を取り囲んで、やん  
やと拍手を送りながら「わあーッ、〇〇さん  
がんばってー」「××さん、負けちゃ駄目だ  
わヨ」「しっかりねエーッ」と黄色い声で勝  
手気ままに応援したり、面白がつてけしかけ  
たり、もう大変な騒ぎになるのです。

時には、隣室からまでドヤドヤと多勢が押  
しかけて来て、まるでやじ馬の様にがやがや  
わいわい言いながら、一緒になつて見物する



場合もありますが、そうなる、二人は流石に恥しさに真赤になり、急に中止してしまつて「まあ、バカねッ、見せものじゃないわ」「あっちへ行つて！」と腹を立てたふりをしながら、追い出すこともあり、そうでなければ、かえって皆に見られたために、意地を出して負けられなくなり、あられない女同志の組み打ちに熱が入って、人目も構わず一層激しさが加わる場合もたまにはあります。

そんな時は二人共相当のおてんば同志ですから、馬乗りを組み敷かれた位では、中々降参を云わず、見ていてもはらはらする程面白い勝負になります。それでも腕力の弱い女同志のことですから、上になった方が、ぐいぐいっとにじり上って、負かした女の首の上にどっしりと跨れば、もう勝負はついたも同然、組み敷かれた方は間もなく降参を云うより他はありません。

若い女ばかりの人垣にびっしりとかこまれて女が女の真白い太ももの間にギューッと顔をはさみ込まれて、全身の重味で喉をしめ上げられ、悲痛な表情で、あわれにも手足をばたばたさせている異様な光景を見えます。私まですっかり興奮してしまつて、身体中が熱くなる様な気がします。

私だけでなく皆も、完全な押え込みで首の上に跨れば、女の力では跳ねかえせないことがわかつて来たのでしよう。此の頃では負かした相手が早々に降参と云わない限り、必ず相手の顔の内股にはさみ込む押え込みを実行したがる様になって来ました。矢張り三隅千恵子さんの仰云る通り、女が女を組み敷く場合には、こうするのが一番良いのかもしれない。

特に今でも忘れられないのは、体重が六十キロもあるデブちゃんの満子が特別チビの少女を苦もなく押え込んだ時の異常な印象でした。少女のあどけない顔が、満子のむちむちと盛り上った大きい太ももの間に、キッチリとはさまれて、両方から強い力でしめ付けられるものですから、少女の真赤な頬が白く柔かい内股にめり込む様に喰い入って見えなくなり、鼻と口だけがやうと満子の肥った太ももの間のせまいすき間から僅かにのぞいているのです。少女は細く小さい脚をばたつかせて、のれようとするのですが、四十キロにも足りない彼女では、てんで問題になりません。あま



り可哀そうな気がしたものですから、私もうい同情してしまつて、「満ちゃん、もういいわヨ、許しておやりよ」と云ったので、それをしおに少女も降参を言いましたので、やっ





と終わりました。でも後になってから、あんなことを云わなかったら、もっと面白くなったかも知れないと考えて些か残念な氣もしました。其の時ばかりはデブの満子が何となく魅力的で幾分うらやましい氣持になったのでし

皆で八人、集って遊んでいる中に、例によって誰かが「降参ごっこ」を始めようとする様子、私はふっと思いついて押しとどめ八人全部で「降参ごっこ」をすることを提案してみました。

た。

私達の女子寮では、最近こうしたことが再々繰返えされていますが、どうせ若い女同志の氣安さからのふざけ合いで、喧嘩ではありませんから、負かされた方が力及ばず降参を云えば、二人共キャッキョと笑い合って格別悪びれる風もありませんし、仲たがいする様なこともありません。ですから、誰からともなく、「降参ごっこ」と云っているのですが、今では「降参ごっこ」が私達の女子寮の名物になっている感じがします。勿論それも女子寮内部でのことです。ですから、寮外には殆どそんなことを知っている者はありません。

先週の土曜の晩には、とっても面白い「降参ごっこ」の大会と云っては少し大げさでしょうが、そんな催しをしました。丁度おてんば連中が

私達の女子寮は階下と二階になっていますが、其の時の八人は都合よく四名ずつ居ましたので、紅白の二組に分れ、ジャンケンで各の順番をきめて、結局四組の降参ごっこを行ない、勝者の多い組が優勝と云うことにしました。皆は「わあー面白いわ、紅組がんばりましょうね」「あーら、白組が勝つわよおあいにくさま」と始まる前から大変な張り切り様、ぐるっと輪になって腰を下した真中で、次々に女同志の「降参ごっこ」が展開されるのです。今度は紅白の対抗ですから、皆もそう他愛なく負かされて、降参というわけにも行かず、相当激しい組み打ちになりました。

最初はお相撲か柔道の様に立ち技で組み合って、互いに相手を捻じ倒そうと争うのですが、満身の力をこめて押し合ったり、見よう見まねで足をかけるやら、腰をひねるやら、やがてドウィツと転がれば、今度は寝技になって相手を組み敷こうとします。髪は乱れ、スカートは翻り、十七、八才の若い女性のはちきれそうな肢体が、烈しくもみ合う光景は見事といえば見事かもしれません。

皆も息をはずませ、手に汗をにぎりながら紅組は紅組へ、白組は白組へ、キャーキャー、



と応援を送ったりして大変なにぎやかさでした。私は白組で、三番目になっていましたが自分の順番がくると、何んとかなく全身がふるえる様な感じがしました。前の二組は一对一で勝負なしになっていますから、此処で私が勝って二対一と紅組をリードして置かなくては、白組が不利になるわけです。幸い私の相手は、あまり強くない邦子ですから、私は最初から勝てると思っていました。それでも、いざ降参ごっこが始まって、組み合ってから

は、もう無我夢中、何んなことをして、どうなったのか、はつきりとは覚えていません。

とにかく押しつ押しされつ、争っている中に脚がからまって中心を失い、どっと二人は折り重なる様にして転ってしまいました。

次の瞬間、私は無意識の中に両脚を邦子の胴に巻きつけ、丁度胴絞めをする様に彼女の身体をはさんでいましたので、寝技になってからは私の方が有利でした。何度かは跳ねかえそうとするのを、しやにむに押しつぶさつて、のしかかり遂には仰向けに押し伏せに邦子の胴の上にとっかと馬乗りに跨ることに成功したのです。

紅組からは「邦ちゃん、負けちゃだめよっ早く跳ねかえして」としきりに声援が聞えま

すが、私はそうはさせじと素早く邦子の両腕を膝に敷いて、一気に首の上までにじり上ると、真赤に紅潮した顔を太ももに挟み込んで完全な押え込みに移りました。これには流石の邦子もいささか参ったのでしょう。くやしそうな表情に眉をしかめ、唇を喰いしばって私を押しつけようと脚をばたつかせるのでした。「わあー紀久ちゃん、やったわね。起したらだめよ」「もう紀久ちゃんの勝だわ、がんばってえ」と白組の声援も聞えます。

暫くの間はじたばたしていた邦子も、とうとう思いあきらめたのでしょう、やがて、降参と云って私の勝ちになりました。そこでやっと邦子を放して立ち上ると、彼女も続いて起き上って、「くやしいけど、紀久ちゃんの押え込みには負けたわ」と笑っています。

それで白組は二対一で紅組をリードしましたが、最後の四番目の組が残念ながら白組が負かされましたので、再び二対二の同点となり、遂に此の日の紅白対抗は引き分けの勝負なしに終わりました。それでも四組もの降参ごっこを次から次に行つて二組に分れての対抗は此の時が初めてでしたし、皆すっかり興奮して取り乱していました。

此の時の降参ごっこが中々面白かったもの

ですから、今私達は次の計画を話し合っています。つまり今度は紅白両方の組から十人宛選手をえらんで「降参ごっこ」の試合をしてみようというのです。そして両方共体重の軽い者から一人ずつ出て降参ごっこを行い、負けた方は引込んで勝った者は何人でも次々と負けるまで続けて出るわけです。そして、十人全部負けてしまった組が負けになるので、此んな勝ち抜き試合が実現されれば一段と興味深いでしょう。

でも、私達の女子寮は全員で五十名ばかりですから、其の中から二十人が出場するとなれば殆ど半数に近いわけですし、それ程人員が揃うかどうか、少々疑問に思っています。私としては十人宛などでなく、全員一人残らず出場して降参ごっこをしたなら、さぞ壮観でしようと思いますが、此れは先ず無理の様に思います。

だって、私達の女子寮にも随分分らずやの女がまじっていて、親しい女同志の心安さから、はしたない降参ごっこをしたり、取っ組み合ったりしているのですが、それを真に受けて感ちがいするのでしょうか。一度捻じ伏せられたり、組み敷かれたりしただけで、すっかり御機嫌を損じて腹を立てるやら、はては



居たたまれず女子寮を出る者さえ居るではありませんか。殊にふだんからお淑やかで何となく上品ぶってる女に多い様ですが、此れには全く困ってしまいます。後になって、おてんば連中が聞きつけて、「まあ、馬鹿にして



△短 信△

## 再び吊責めへの誘いを

——豊島津利さんへ——

中 田 明

便りを出して返信を受けるまで、これ程気長に待たされた事も、今までの私にはなかった事でした。心の中では御返事を鶴の

首まで長くして、乞い願わくば嬉しいお便りをと希求する反面半ばあきらめるのが当然という相反する気持の重苦しい交錯とに明け暮れし、奇ク誌の発売だけが唯一の裁断となる手がかりとして、どれ程奇クの発売までが心待ち遠しかった事でしよう。

しかし期待にたがわず御返事頂けた事を、誌上掲載の便を計って下さった奇ク編集部の方に感謝を捧げると共に、何より嬉しく貴女に御礼申し上げます。

丁度一ト月間をおいて、奇クが八・九月

合併号として書店に飾られたその日は、私にとつてまさによき記念日だったと申せましょう。

本文中に貴女の私に対する御返事を見出した時の喜びようは、きっと貴女に御想像願えるでしょう。滅多には得られぬ幸運をつかんで、本当に驚歎と歓喜の叫びをませこぜにして心の中で思わず喝采をいたしました。

今回頂いた御返事によって、一層具体的に貴女の吊責めマニア振りを拝察する事が出来、間違いなく信頼を基にして今後は親しく交歓出来るように私には思われます。是非共ブレイの実践が果されます様切望し

等とくやしがるのですが、後の祭りに終るのです。

そんなわけで皆も三隅千恵子さんの最後のとどめには誰しも興味を持っていますし、真似をしてみたい気持はあるのですが、未だ実際に行動した者は誰も居ません。押え込みで首の上に跨り顔を太ももの間にはさみ込んで同じ女子寮の友人同志では、あまり悪い様な気がして、最後のとどめだけは真似が出来ないのでしよう。其の中、誰かが思いきって、皆の目の前でやって見せれば、真似がしやすいのでしようが、私自身も「誰かがやって見せないかしら？」と云った気持があります。それでも私が真先に千恵子さんの真似をして組み敷いた相手の顔の上に、まともに跨って見せる勇氣はとてありません。

私はどちらかと云えば、お茶目でおっちょこちよいの方ですから、友人にふざけ合いに引き込まれたり、私の方から引き入れたりであられもなく女同志取っ組み合う度数は、おてんば連中の中でも、あまりひけをとりません。勿論勝って相手を組み敷く場合が多く、三度に二度までは、首尾よく押え込んで喉首を絞め上げ、遂には降参を云わせるのですが中には、私よりずっと体格もよく腕力の強い



て止みません。

しかし、貴女がお便りの中で「一切をおまかせするには貴方の御人柄も拝見致したい……」と云われておられる事は私とて御同様と申し上げるべき事柄で、そうした相互の理解を深めた上で、誰にも指弾されぬ立場を築く事が、急務だと考えられるのです。御同感頂けるものと信じます。

奇クの既刊号中グラビアの責めフォトの中では、何といっても素晴らしいと思うのが吊責めの数々のポーズです。そこには全く偽りのない本格的繋縛の実際感と被縛の強烈な迫力と独特な拘束美が認められて、飽かずに眺め入るだけの横溢した魅力を感じます。しかし協力的なモデルを使つての短時間内の撮影であればこそ、苦悶や残虐さがオブラートでつまれたように却って美しさがかもし出されているのかもしれない。それが全くのSMプレイのスナップであるとしたら醜さを極度にさらけ出してしまふようになるのかもしれないが言葉や文字から受ける印象でも、吊ると云う事自体は最も完全な拘束を意味し、SMプレイの可能性を高めて興味がつきません。例えば、貴女が刺戟を求められ、それが内攻的な形で自己演出されるのだと云われる浣

腸も、吊責めと併用されたとするなら、貴女が渴望しておいての身を以って知る悦虐のひとつときが、どんなに効果をあげ得難くなる事でしよう。喜んで私は貴女のそうした秘めたる生活の伴侶となります。

貴女を素材として吊責めの写真撮影が出来るなら是非記録しておきたいアイデアがいくつか思い浮びました。一つは晒を太陽の国エジプトの神秘的ミイラのように身体中くまなく巻きつけて丸々二十四時間以上も食事通便を断つて、時には胴吊り、逆さ吊り顎吊りなどして責めてみたり、海老責めの形で吊り上げる事も、蒲団むしにして吊る事も、外出着のままの着衣ポーズで様々に変化をつけてみるなりしてのムードある撮影シーンをまた写しなどしてみたいと思います。

時には右のような悪魔的思案にとらわれる私ではあっても、実際は全く穏便にして温良な暮らしの中に生き、社会の秩序と良俗をいたずらに乱すような不名誉は働かずにいる一介の善良な市民です。その生活の中で求めるアブプレイのひとつときは、全くの憩であり、人間理解の手がかりなのだと勝手な倫理をはきますが、それもどちらかと云えばユーモアの一つだと御理解願いたいものです。

友人も居ますし、同じ友人に勝ったり負けたりする場合もあり、どうかすると、残念ながら馬乗りになり敷かれて、逆に私が押え込みで散々な目に合わされるはめになることもあります。

そうなれば流石の私も、いくらじたばたした所でどうにもなりませんから、いい加減で降参と云いますが、別に負かされても、何とも思いませんし、それ程くやしきもありません。でも矢張り喉首の上に乗られて全身の重味で絞められれば苦しくてたまりませんし、反対に自分が勝って押え込みをする時には、何とも云えない程の快さを満喫出来るのですから、もっとももっと強くなって誰にも負けないうようにならないかしら？ などと夢の様なことを考えたりしています。

此んなことばかり書きますと「まあ、何と云うひどい女子寮だろう」とびっくりなさるかも知れません。

十名宛の対抗「降参ごっこ」が実現されましたら、又お知らせ致しましょう。皆様出機げんよう、さようなら。

編集部様

高木紀久枝

愛読者の皆様



小説

# 狂宴の泥海

桂 牧次郎

東京湾は泥海である。そして、その畔の家も濁っていた。和泉家の人々、不思議な人々であった。もの皆腐れる時、水ばかりが高きより低きへ流れていく。悲しい泥海の狂想曲であった。狂乱の狂ほしい思い出。音もなく迂りだす追憶の、果てしない夏の入道雲が重くなって、海に向うから生まれてくるような、狂ほしい情炎の季節であった。

僕が学校の寮を出て、此の不思議な邸に下宿するようになったのは、何の運命のいたずらであったろう。卒業論文に歌舞伎演劇史にテーマをとったので、なけなしの金をはたい

ては、帝劇だの東劇だの（その頃、歌舞伎座も明治座も復興してなかった）に顔をみせ、現代のそれを参考にしようとしていた頃だった。いつも出合っお嬢さんらしい娘がいた。洋装の時もあったが大抵は和服にきちんと帯を結んでいた。二三度逢う中に心にはのかなものを感じるようになり、何かの期待をもつて出かけるようになった。

女の名は和泉順子ということを知った。僕と順子とは紋切通りの友達となった。そして、順子は僕の寮住いに同情して自分の家に下宿せよといい出したのだった。

☆ ☆ ☆

和泉家の人々。豪商だった父は先年亡くなったが生活に不自由は感ぜぬという母の貴子と妹の洋子の三人ぐらし。僕は順子のすすめに甘いたい気持は十二分にあったが、これでは近所の手前もあろうかと一応は辞退した。だが、近頃、物騒だし又妹の家庭教師としてもせひと云う言葉に、又とない渡り舟と、早々に寮を引上げて移りすんだのが、東京より電車で四十分。F市の小高い丘の邸であった。最初の夜から大へんな歓待ぶりに、僕は少からずあわてた。



「ほんとに、いいお方に来ていただくことができて、私共も——」と、貴子未亡人は上機嫌である。妹の洋子は色が浅黒く茶目っ気の横溢した無邪気な少女。夕食後、二時間程、洋子の勉強をみて後は、客間によばれて、順子が運んでくる茶菓にもてなされ、未亡人のとりとめもない話相手になって、当がわれた離れの八畳の部屋に帰えるのが十一時、徹夜で勉強して、四時過ぎ、うつらうつらしていると、「学校がおくれますわよ。」と順子が生にきたり、部屋を掃除してくれて、全く僕にとっては何か、ぼーっとして、悩殺されそうな生活がはじまったのだ。一週間目のこと。例の世間話の時間になると、洋子は疲れてねてしまう。未亡人と順子と僕とが話している、

「そうそう昨夜、この向うの家に強盗が入ったんですって？」と未亡人。

「へーえ」

「そして、皆、こんな風に後手に縛られて、何もかもとられたっていうのですわ。先生。」

未亡人は自分の手を後に廻して、説明しながら、ながし眼に僕をみた。

「それに、ほら、順子、あのA子さんね、ずいぶんな目に、あわされたという話じゃない

の。」

「今頃の強盗って、只で帰らないとかいうけれど、悲惨ね。A子さん。」と順子が憂いげに眉をひそめる。僕は何か妖しい気持ちに胸がコトコト鳴っていた。時計が十一時を打った。

「ね、先生、おねがいがございますのよ。」

廊下から庭に下り離れにいく途中で順子がささやいた。

「先生？だめです。あなた迄、そんな呼び方なさないで下さい。」

「いいえ、きいて下さらなきやだめですわ。」

「何です。」

「あのね。今晚ね。ママと妹を驚かしてやろうと思うのよ。ね。手伝って下さらない。」

「どうなさるというのです。」

「あのね、模擬強盗を行うだけなのですわ。」

「えッ何ですって!!」

「シッ大きな声しないでよ。」

白いしなやかな手がのびて僕の口をそっとおさえた。女の白い顔がすぐそこにある。

「つまり、先生じゃなくなつて、そのう小田さんに、強盗に入っていたのだよ。縁側の雨戸、鍵かけないでおくわ。」

「だって、そんなこと。」

「いいのよ。万事OKよ。」

「そ、そんな無茶なこと、僕は——」

「いいの。あなた、案外弱虫なのね。」

それから順子が僕に教えてくれたのは、実に驚歎に価する遊戯なのであった。

「一寸まってね。」と引返した彼女はどこから一包にした風呂敷包を渡し、いや応なしに命令するように耳うちするのだった。歴史は夜作られ、サタンは夜来るといふ。夜は人の心をかき乱すのか、不思議な力に僕は金縛りになったようで、そのまま黙ってうなづいていた。

「いいわね、ぬからないことよ。」

ほの白い顔がやみに消え、雨戸がピシャンと閉められた。僕は机に向かい風呂敷包を解いた。一条の捕縄。手拭。はらい下げの軍隊服。覆面用の黒布。ジャックナイフ。それに地下足袋一足。僕はワクワクと血が狂い高鳴るのを覚えた。歌舞伎の責場の一つ一つが強烈なシーンとなって眼前を渦巻いた。夢中で扮装した。未亡人を縛り上げる、順子を高手小手に、そして洋子をふとんむしに……思っただけでもゾクゾクする快感が僕を襲った。扱一服煙草をゆっくり吹かし、庭先にとび下りて息をこらした。遠くで犬が吠えていた。三十分ばかりたったろうか、約束の雨戸に手



をかけた。

音もなく開く。廊下に這い上るともとのようにしめた。瞬間、「だアレ。」未亡人の声だ。ギクリとする。落付け。どうせ強盗さ。種明しすりやとんだ茶番劇さと、ぴたりと壁に身をつける。

「そこにいるの、だアレ。どなた。」

灯りがついて、障子があく。衣づれの音がして未亡人が出てきた。すかさず「しずかにしろッ」とふくみ声でいうと、そのまま廊下の暗がりには引ぱりこんだ。未亡人は落ついていた。

「ね、お願いします。女子供ばかりの所で。手荒なことなさないで下さい。」

どことなく媚をふくんだ声だった。無言のままねず伏せると、手さぐりで後手に嚴重に縛り上げること成功した。そして口に手拭を噛ませようとした時だ。トントンという足音と共に廊下に現われたのはスリッパ一枚の洋子であった。しまったと思った。

「ナニ、ママ、そこで何してんの。」

「洋子ちゃん。騒いではなりませんよ。強盗が入ったのよ。ママは、ほれ、今、こんなに縛られちゃったの。」

僕は未亡人を引立てると、部屋の中に転がして、猛然と洋子におどりかかった。ねむけ眼をこすり乍ら、未だ何事か確め得ぬ洋子は突然視野をさえぎって飛出してきた黒い影が異様な強盗の姿であると認めるや「キャッ」と金切声を上げ、バタバタと奥の間に走り込んだ。

大声で叫んでいる。万事休す。近所に来られて本物にされたら、もとも子もない。勝手の戸をこじあけて逃げだし、何くわぬ顔でふとんにもぐり込み、今に大騒ぎになるぞと心配した。何事もなかったように母屋は静まった。

順子はどうしたのだろう。それにしても、この静けさはどうしたのだろう。僕





は狐につままれといふような気がしてきた。

翌朝、洋子が起しに来た。朝食の時にも順子の姿はなかった。未亡人も見えない。

「順子さんは、どうかなさったのですか。」

「お姉さまね、昨夜から、お仕置にあつてゐるのよ。」

「えッ」

「そう、昨夜ね。強盗が入つたの。洋子、大声で泣いちゃったら、あわてて逃げだしたでしょ。でもね、ママ、も少しで殺されそうだったのよ。」

「そーお、大変だったんだね。ぜんぜん知らなかったよ。」

「それにね、お姉さま一人で眠つてたのよ。」

調べてみたら、お姉さまがいつもしめる雨戸の鍵がしてなかったのよ。それで、ママがお仕置にかけてるんだって。」

「お姉さんのかい。」

「ええ、そうよ。」

「どこでだい。どこに二人はいるの？」

「それは、洋子にも分らないのよ。地下室じゃないかしらと思うんだけど、入れてくれないんだもの。」

そこへ、

「先生、お食事おすみなら、一寸……。」

と未亡人が現われて、はれやかに笑いを浮かべながらいった

「実は、先生にも立合つて頂きたいのでございますのよ。」

誘われて下りたのが地下室である。地下室というより立派な茶の間である。ちゃんと電灯がつけてある。今にして思えばつまり、この地下の部屋部屋は豪商和泉太郎氏の秘密の倉庫であり、悦楽の部屋でもあったのだ。

未亡人は床柱を指さした。あつと叫ぶところだった。緋じりめんの長襦袢一枚にされた若い女が、むごたらしく荒縄を以て縛り上げられ、その背に廻して高く吊られた両腕の十指がピクピクと疼れんしていた。

「こ、これはどうしたのです。」

「先生、みて下さいました。この子は罪をうけねばならぬのです。」

未亡人が髪をつかんであおむかせる。まぎれもない美しい順子の青ざめた顔だ。

「どうだい。まだ強情お云いかい。」

「何が、どうしたのです。一体。」

と僕は早くもオロオロしてきた。

未亡人は革の鞭をもって、順子の肩を強かに打つ。身をのぞけらしながら順子は齒を喰いしばっている。僕はたまりかねて、昨夜の

ことを白状に及んだ。美しく桜色に上気した順子の顔が羞恥と苦痛にゆがんで、弱々しい視線を僕からそむけようとしていた。

「ホホホホ。そうでしたか。やはりね。順子とグルになったのですね。オホホホ。とんだチョンになって、お生憎でしたわね。では、先生、こんどは、こちらの演出による狂言ですわ。犯人逮捕つてことね。さア神妙になさい。……オホホホホ。」

弁解する余裕もあらばこそ、未亡人はかくしもった細引で、いきなり僕を後手に縛り上げるのだった。不思議な感覚が、未亡人の器用な手さばきでグルグル巻にされるに従い、体内をぞくぞくと流れてきて、何の抵抗することも出来ぬまま、僕は順子と共に部屋の中に引据えられ、狂ほしい程の未亡人の鞭を受けた。声をたてると、猿轡をはめられ順子も僕も気を失ってしまった。

何か背中に結わいつけられたまま、まっくらい土間に投げ出されると、

「オホホホホ、木曾殿と背中合せの寒さかな」ってね。」

という未亡人の声がしたのを、かすかに記憶しているだけだ。

何時間たったのか、昼か夜か、それさえわ



からないが僕は次第に意識を取り戻した。身動きも出来ない。背中合せに若い女と縛られている。まっくらな闇の中だ。

「順子さんかい？」

「は、はい。」

「痛かあなかったかね。可哀想でたまりませんでしたよ。僕、本当に——。」

「いいえ。いいんですの。あたくし、あなたまで、こんな目に合せて、ごめんなさい。」

「ううん。仕方ないよ。警察沙汰にされるようになります。順子さん。馬鹿なことしましたね。あッ痛い。そんなに、動く腕が——。」

「あたくし、自然に体が震えてくるのです。」

「そういうば、大分冷えてきたようですね。」

二人はいつしか黙って、背中に廻されている両手をかたく握り合っていた。

「このまま、永久に、縛られていたいわ——」

順子は、ポツンと云った。

やがて、さっと一条の光がさしこむと、未亡人が立って

「オヤオヤ、二人ともたわいないのネエ。」

と、うち笑い、先ず順子を背中合せから解くと、そのまま、引立てようとする。

「ママ、許して、かんにん」

「うるさい子だねエ」

未亡人は手早く猿轡をかませどこかへ、順子連れ去ってしまった。

僕はだらしくも、かなわぬとしり乍ら叫んだが、空しい反響がこだしてくるだけだった。小半時もすると今度は僕は目かくしをされて引立てられた。階段をのぼる。右に左にどこか分らないが、やがて奥まった部屋らしい所で縄を解かれた。

「これで、一部は終了ですわ。先生、お風呂はいかがです。どうぞ、ごゆっくり。」はっとして眼かくしをとると、此処は風呂場につづく脱衣場らしい。扱、体を兎に角休めようと思ひ服をぬぎ、風呂場に足をふみ入れるべくガラス戸をあけたとたん。湯気のもうもうとしている中に、一人の美女が細い鎖で後手にきびしく縛られふくよかな乳房にも二筋三筋喰いこんでおり、その端は、天井に近い壁際から出ているシャワーの鉄管に吊し上げてあり。今しも、そのシャワーから夕立のような水が、美女の頭から首から背と、全身をぬらしていく所であった。「あッ」と叫び反射的に飛びすさるうとした僕の体はつるりとタイルにすべって転び、鈍い頭の中で、湯殿の入口の戸にガチャリと鍵をかけられるのを聞いた。「オホホホ」未亡人の笑い声だ。僕は飛

び上って、シャワーの水を止めようとしたが、無駄であった。鞭の跡が紫色にのこり全身はすき通るような青白さ。雨中に苦しむ鎖にかけられた人魚。ああ何という大胆な構図であらう。

☆ ☆ ☆

その事があって、僕も順子も、四五日発熱して床につき、未亡人と洋子の手厚い看護をうけ全快したものの、僕は全く未亡人の囚となり、秘密の享楽の奴隷となり下がってしまった。種々様々な姿態で、僕と順子は協力させられた。が常に未亡人は絶対の女王であり僕の上に裸でのしかかったり、その脂切った豊満な肉体を惜しげなくぶちつけて来、僕は又彼女の命令で、順子を凌辱したり、さもなくば、未亡人に二人一緒に責められるかであった。そしてそのことは地下室が大抵利用された。しかも洋子の感知せぬ世界の出来事であった。而して、未亡人は秘密歌集「妖花」を綴り、順子は詩集「晴雨計」を綴っている。

以下その抄出である。

後手に縛めし時の快感よ、心ときめき我が鞭は鳴る。

猿轡かませし美女の身もだえに亡夫を偲びて心ときめく。



責められて責められて泣きし悦虐の二十の  
春は夢の如はも。

美しきが故にその体の憎かりき吊しあげた  
る女をみるに。



たのしみは縛られて猶泣きじゃくる女の背  
に鞭の鳴る時

名を呼べば面はゆかひに面そらす縛られし  
娘の首根白きも —— 以上「妖花」より

「誰か」

誰か私を目茶目茶にして下さい。

私の肉体にサタンが住んでいるのです。

誰か叩きだして下さい。

ああ、誰か、私をこの世で一番むごたらし  
く縛り上げてほしい。

このすんなりとした両腕を

このふくよかな胸のあたりを、

この均整の保った胴のくびれを、

この健康そのものの両足を、

誰かグルグルしめつけて下さい。

私はキリストがうらめしい。

数多くの殉教者が羨ましい。

誰か私を逆さ磔にして下さい。

私はこの世で最も悪い罪人です。

さあ、存分に、先ずこの蕾の口から猿轡を

して下さい。ああ、胸内に火が灯る。

おおクオヴァデイス順子よ。

誰か順子の願いをかなえて下さい。

—— 晴雨計より ——

(おわり)



# 「奇譚三十九夜」物語

~~~~~(第十八夜)~~~~~

辻村 隆

灼けつくような真昼の太陽も、漸やく西に沈むと、六甲の山頂は涼を求める人々で、ひとしきり車の往来が激しくなります。

都会のむせかえる熱気と煤塵から遁れて、八人の退屈男はナイロンの六甲の別荘に涼気と獵奇を求めて次々と姿を現わしました。冷めたいビールが満座に行き亘り、ひとしきり飲を交した頃、今宵のホステス——ナイロン氏の愛妾、パロマ夫人がナイロン氏に代って、にこやかに一同に、爽やかな声をかけたのです。広間の大時計が午後十時を打ちます。

「私は、彼より、皆様方の月に一度の愉しいひとときのつどいを、折に触れ聞いておりましたが、今夜、斯うして始めてお目にかかれて本当に嬉しいと存じます。私の今夜の趣向が果して御意に合うか

どうか。兎も角、私は彼のよき理解者として、暑さ凌ぎに、精一杯、私なりの努力をして見たのです。間もなく支度が出来ると思います——」

こういって、豊満な小麦色の肌を惜しげもなくむき出しにした器量抜群のパロマ夫人は透きとおるナイロンのイヴニングドレスの裾を、あざやかに引いて、次の間へと妖精の如く消えたのでした。

ナイロン氏の夫人が長年の心臓病で、床につききりのため、バー『パロマ』のマダムが本妻に変わる夫人の地位にある事は、退屈男達も既に承知しておりました。勿論、ナイロン氏が、バー『パロマ』の出資者であり、パロマ夫人の数年前からのパトロンであることはいうまでもありません。



「では、そろそろ御案内しましょうか——。私自身、どんな企みがあるか知らされていないのですよ。」ナイロン氏の言葉にかぶせて、「本當かい——。然し、流石に日頃の薰陶が行き届いていると見えて、立派なる物腰ですよ——」

ステッキ氏が茶化すとも見えぬ面持で、囁やきました。一同はぞろぞろと席を立ちます。

かくして……………

#### 第四十三話 六甲の夜は更けて

戦時中に某財閥が、保身の為、万金を投じて作った。別荘の下の地下室は、その後ナイロン氏の手によって恰好の地下室に改造され、彼の好みから、世界中の数々の珍奇な貴具が、陳列されてありました。

地下室に通ずるのは三帖程の小部屋全体がエレベーターの仕掛けによって、ボタン一つで静かに沈下するようになっていました。

一同が次の小部屋に案内され、ナイロン氏が人知れず、押したボタンによって、音もなく部屋が沈下した事は、流石の猛者達も、誰一人として気付きませんでした。

「さあ行きましょう——」

たった今、這入ったドアを開けた時、皆は、一様に奇異の感に打たれましたが、ドアの外の模様が一変して、ポツカリと黒く口を開けた、太い木組みの岩室が見えた時、人々は、等しく呀々と驚嘆の声を洩らしたのです。鉄の扉が、ギーッと重いきしみを響かせて内側へと開きました。

微臭い湿気と、冷めたい夜気が、人々の鼻孔と神経を撫で過ぎました。

「お待ち致しました。さあどうぞ——」

仄暗い闇から浮かび上って来たパロマ夫人は、三十三才の脂の乗り切った肌を、僅かに羽毛のバタフライで包んだだけの姿に、黒い編目の肩口迄もある手袋だけの姿で、妖艶な笑みを浮べて出迎えましたのです。

圧倒された人々は、日頃の退屈も消し飛んで、無言の儘、金魚のうんこの様につながって地下室に導かれました。

西欧の刑罰に使用した鞭の数々、貴具が壁の四囲に無気味に陳列されてあるのが、仄青い螢光ランプの光に深い陰翳を残して輝らし出されて来ました。

馴れた眼が、地下室の奥の、四個の等身大の女人像を認めた頃合をはからったかの様に

「皆様、御覧遊ばせ。あの四人の女の立姿は、何れも生体解剖による処女の剝製で御座います。若い美女の永遠の美しさを保たんが為に、私が精魂こめてつくり上げたものです。何を隠しましょう。私こそは、明治の末、剝製師として、悪魔に魂を打って人間剝製をつくり断頭台の露と消えた緑川黄人の孫娘なのです。

祖父の遺志を継いで、私は祖父のなし得なかった処女の剝製をつくる大事業に取り組みました。祖父から遺された口伝書を頼りに……どうして、私が、そのような大それたことに没頭し始めたか、きっと皆様は疑念を持たれた事でしょう。あらッ、駄目ですわ。先刻入った扉は、私が、この夜の為に特別に作り上げた、特殊錠によって、ビクともしませんから、私の意志によらねば、絶対開きはしま





せんね。今更お逃げになろうたって、三十九夜の同人ともあろう方が、卑怯ですわ。逃げたり尻込みなさる事だけはおやめ遊ばせ——無駄ですもの……。」

突如、恐ろしい変異が起り始めた。

ナイロン氏が声をふるわせてつめよりました。

「お前、そ、それは本当か——」

「冗談と思ってらっしゃるの。一度嘘と思うなら開けて御覧遊ばせ

——。ホホホ、私が何故、貴方をパトロンに選んだか——。理由は簡単ですわ。一切外部から遮断され、どんなに大声を立てても、喚いてもヒソとも洩れまい、この地下の密室が得たかったからですわ。その為、私は三十以上も年令の違う貴方を、心ならずも選んで、私の体を投げ出したのですわ。貴方の嗜虐の対象となつて、易々とされるが儘に、或る時は逆吊りにされ、気分に向くがままに、鞭打たれ、犬のように首輪をはめられて、両手枷で、口で餌をうけたのも、この部屋を、一日も早く、私の自由にしたかったからです。

貴方は幸いにも、七月から八月末頃までの、二カ月間、この別荘を使われるだけでしたわね。それが私のつけ目でした。私は冬の寒い時も、白雪をかきわけて、着々と、その準備に没頭していたのです。夏季以外は、バー『パロマ』を訪れるか、それとも、芦屋の別邸を御利用なさった貴方は、私のこの計画に全然御氣付じゃなかったわね。でも貴方の嗜虐そのものも、いえ、私を縛ったり、飼育して下さったりする束の間にも、私に対する愛情の発露を泌々と感じていました。その事に対して、私は決して恨んでなんかおりませんわ。そのいたわりの氣持をどれ程嬉しく思いました事か——。



でも貴方は、私のこの顔——ええ、この顔に対して優しかったのだと思います。

自分で申し上げるのも鳥濱がましい、この美貌が、若し作られた顔であつて、本当の私の生れ乍らの容貌が、世にも醜くい、二眼と見られぬ、浅ましい顔であつたとしたら、貴方は、果して、この私を、あの様に愉しく飼育なさつたでしょうか——。

祖父が、私の余りにも無残な醜貌を憐れんで、一生一代の顔のつくり替えと云う大仕事をなしとげてくれたのです。顔の皮を剥がれた美貌の少女は、勿論命を落しました。併し、その少女の落命によつて、私の顔は生れ変り、こうして皆様の前で、憶面もなく、顔を曝け出してゆけるのです。

祖父の技術が卓抜だったのでしよう、私の醜い顔面を取去つた後に移植された美貌は、何の崩れも変化もなく、毛生え際や耳下や顎下の傷跡も年月と共にその跡型を消し去り、私の皮下細胞が、移植された顔面で活々と活動をつづけ、私自身の顔となり、血や肉が流通して今日の日に到つたのです。

前人未踏の何人もなし得ない、優れた整形術を会得した祖父も、その整形術によつて、何処かで、誰かが犠牲にならねばならなかつた為に、遂に、恐るべき殺人鬼として、あたふた、その卓越した技術を誰にも告げず、世を去つたのでした。母は祖父の血の凍るような技術の口伝書と、私の剥がれた生れ乍らの顔面を握つた儘、死ぬまで遂に私に打明けませんでした。母の死によつて、私は家財を整理した時、古い文庫の奥から、この二つのものを見つけ出し、一時は私の醜い残骸の顔に、息の止まる思いで、死を決した程でした。けれど、今一つ残された口伝書は綿々と、微に入り細を穿ち、数百頁

に細々と書き残され、剝製の苦難と、成功の喜びで末尾を結んであつたのです。私はその時、口伝書の最後に残された祖父のなし得なかつた、遺言とも云うべき、処女剝製の一件に、私に美貌を与えてくれた祖父の思いが、ヒタヒタと迫つて来たのです。

悪魔に魂を打った私は、処女を求めるべく、水商売の道に我から足を踏み入れました。漸やくにして、雇われマダムとして、『パロマ』に落付き、ホステスとして入店する娘達を、次々、口実を設けて、旨酒に強烈な催眠薬を仕込んで、細かに彼女達の身体を調べては見ましたが、十人に一人も処女には当らなかつたのです。一方ではパトロンである。貴方の嗜虐に易々としてなびき、仕事の場を着々と固め、他方で、処女を物色して、過去三年、漸やくにして、八人の処女を、この地下に連れ込み、女の手一つで、涙ぐましい、努力と苦心を重ねて、そのうち四人の処女剝製に成功したのです。残る四人は空しく、彼女達の体を切り刻み、赤肌にむいてバラバラにした挙句、失敗していたのです。

パロマ夫人の鬼気迫る声は、密室にくぐもつて、妖しく嗽々と一同のハートをしめつけていった。既に夫人の手には何時とり出したのか、小型の拳銃が握られていた。

「今宵、皆様をお招きしたのは、私が自信をもつて九人目の処女を剝製にする、その実験を、貴方達にお見せしたかつたからです。唯、お気の毒ですが、邪魔しない条件として、壁に並べておいてある、椅子に座つて戴きたいのです。勿論ノーと仰有る方はありません。フフ、貴方も一緒に……。さあ、お座りになつて……。」

優しい声で、パロマ夫人はピストルを凝しながら、八人の退屈男を、八個の椅子に座らせた。ジリジリと彼女は後ずさりして、壁間



のボタンを押した。

ガチャンと、金属音が激しく密室の空気を震わせて、瞬間、パネが椅子の肘掛から飛び出して、彼等を一齐に椅子に固定させた。

呀っと云う声が、あちこちから洩れた。

「お静かに——、貴方達の命は保障しますわ。邪魔されないためよ。さあ、次は私の云う通り、あとなしく、椅子の両足に、左右の足をつけて頂戴——」

パロマ夫人はジロジロとうすら笑みを浮べ、銘々の両足が、椅子の足にくっついたのを確かめると、再びボタンを落した。

空気を乱して、金属音が飛び交い、一同の両足は、椅子の脚からぐるりと円を描いて飛び出した、金属環で束縛されてしまった。

「手にも首にも、金属環が飛び出して、締めつけるよう仕掛けてありますが、皆様方は紳士でしょうから、胴と足だけで充分でしょうね。では始めますから……」

一同を見廻してから、パロマ夫人はさも、満足げに、大きく息を弾ませた。ピストルを羽毛のバタフライに押し込むと、四個の処女像に向って歩いた。右端の処女像の傍らに、円筒形の金属桶があった。彼女はその前に立って、把手を引くと、円筒は二つに割れて、一人の娘が、円筒の中に、首、胸、腹、腿、足の五カ所を三厘許りの鉄帯で締められて佇立していた。声の出ぬよう、皮衣の嵌口具がしっかりと娘の口を締めつけている。

パロマ夫人は円筒の中のボタンを押す。すると、シユルシユルと異様な金属音を残して五本の鉄帯が円筒にスルスルと滑り込んだ。

娘はそれでも蒼褪めた顔で、佇立した儘である。円筒の底に両脚首がすっぽりと嵌っていて、鉄の足枷がとれていないからだ。

パロマ夫人は娘を凝視し、白い珠をかざして娘に近づいた。恐怖に引きつった娘の眼前で、珠が徐々に円く弧を描き出す。パロマ夫人の唇から、妖しい呪文のような言葉が洩れる。判っきりそれと分る催眠術だ。

娘の視線が弱まり、軽く眼を閉じる。

恐怖の充満した顔が、温和に還元する。

頬に赤味がさし、唇がほころびる——。

夫人は更にボタンを押した。娘の足首をしめていた鉄板の枷が二つにわれて、円筒に吸いこまれる。夫人は導く——。

娘は自ら嵌口具を外して静かに円筒を出て、誘導につれて退屈男達の眼前を静々と歩を運んでゆく。

輝く白磁の肌、蕾から果実へ移行せんとする乳房——、ゆたかな黒髪、まぎれもなく処女の青麦の如き体臭をこぼして、娘は中央へ——。

幾多の血を吸った生体解剖台がそこにある。娘はためらいもなく、それに昇ると、長々と体を横たえた。

剝製に憑かれた女吸血鬼パロマ夫人は、数個の器具箱を開いて器具の台に並べる。

螢光の光が更に暗くなる——。

パロマ夫人の眼がけいけいと輝やいて、太い注射ポンプが、娘の右腕につきささる。

「処女の命は昇天しました。どうか皆様、私の成功を祈って下さい——」

じろりとパロマ夫人は男達をねめ廻し、妖しい北瘦笑みを浮べて、ポツリと云った。



恐怖と好奇の視線が中央に集中する。

心なしか娘の体は硬直して見える。

キラリとパロマ夫人の手にメスが光った。

首から胸にかけて、夫人の手が数度撫で降されるや、一曳——、メスが走る——。皮膚の切れた裂目から鮮血が溢れて、忽ち、娘の皮を真赤に染めて行く、溢れる血はタラタラと床に糸となって伝う。更に胸から腹へかけてメスは走る——。ドクドクとあふれる血に交って、腹部がもり上り、パロマの手がそこに差し込まれると見るや、長い大腸がうこん色を呈して掴み出された。

「……助けてくれ……」

男達の間に悲鳴が上る。

パロマ夫人はキッと振向く……。

「や、やめてくれ……助けてくれ——」

「ホホ、叫んだのはスバルさんね。それから誰？」

鬼気の迫る声で、むずと血にまみれた腸を掴んだ儘、パロマ夫人はスバル氏に近づく。

女吸血鬼の唇は耳までさけているように見える。白い肌に返り血が点々として、正にこの世のものとも思えぬ凄惨さである。

スバル氏の毛穴は総毛だった。冷めたい汗が全身をぬらし、咽喉はカラカラであった。

一瞬、パロマ夫人の鬼気迫る相が崩れた。「じゃあ、よろしゅうね……」

スタスタとパロマ夫人は入口に近づく、黒いガウンを羽織った。スイッチをひねると、仄青い螢光は消えて、突如として、視界はめくらめく許りに明るく燦然と輝やいた。

「どう——皆様、このお芝居、お気に召しましたでしょうか。椅子のベルトは自由に手で開けば元通り、椅子に納まりますわ。お立ち遊ばせ——」

パロマ夫人は艶然と声を上げて朗らかに笑った。

「この腸詰如何——、どうソーセージなのよ。あの娘の体内から溢れる赤きポートワインの血を汲んで、これを召上れ……。憶病ナンバーワンはスバルさん。そうでしたわね」

「いや、恐れ入りました。いやはや……何とも……。それにしても迫真の演技には驚嘆の外ないね——」

「昔はメリヤスの肉襦袢——現代は肌にそっくりのナイロンの肉襦袢——。この肌着をつくるのに、あの人、随分苦労したのよ——ねえ、貴方……」

ナイロン氏はニヤニヤ笑って応えない。

「どうあの四個のマネキン人形——、本ものそっくりでしょう。ああ疲れちゃった。Bちゃん、もう起きていいのよ……」

B子と呼ばれた生体解剖実験台の娘は体を起した。

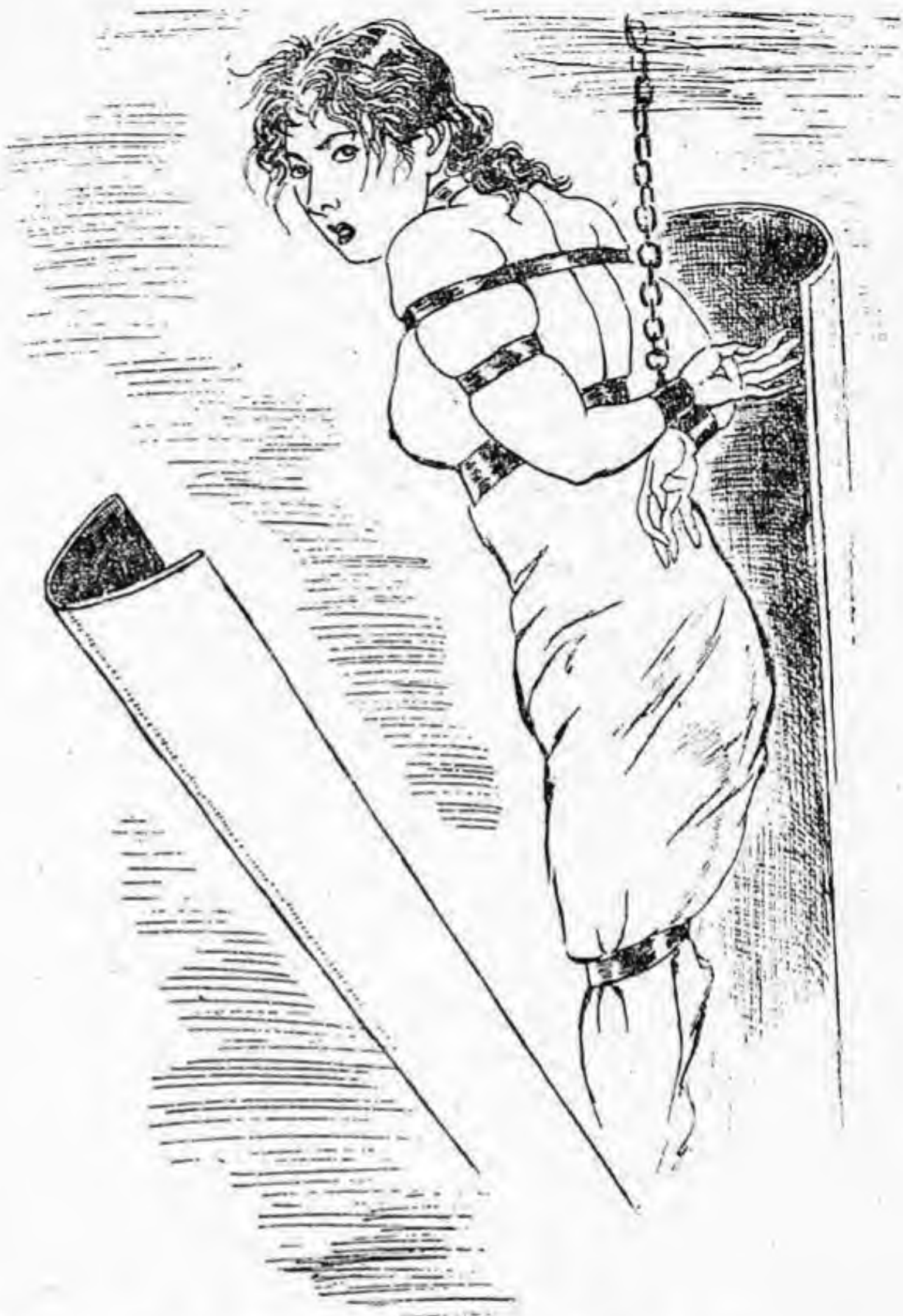
「どう、皆さん、素晴らしいモデルでしょう。パパと私が、金の草鞋で探した娘よ……」

パロマ夫人は煙草を咥えると拳銃の引金をひいた、パチリと火が点じる、タネを明せば何でもなかったのです。入口の扉はわけもなく開きました。私達は再び大型のエレベーターで元の部屋へとつて返したのでした。

「スバル氏が一番弱いつてことが判っきり証明されたわけですね。これが今夜の第一の収穫かも知れないね——」

ナイロン氏は、愉しくてたまらないと云った破顔一笑を、遠慮な





#### 第四十四話 マキの御神水

「羽村京子女史が、ガクガクと骨の髄まで震わせて喜びそうなシーンを拝見して、大変参考になりました。京子女史でしたら、女の腹を裂くところを、微に入り描かれるのでしょうが、彼女の『わたし料理して下さい』に対する、ナイロン氏のショウが御返事ととって戴ければ幸いです。」

そこで私は、とやまかずひ氏が随喜の涙を流しそうな見聞談を皆様に御披露したいのです——」

スバル氏は、卓上の冷えたビールを一気に飲み乾して咽喉をうるほすと、口辺の泡をふいて改めて口を切り出したのです。

マキが小学五年生、ティジが小学四年生であった。夏休みの日課で、隣家同志の二人は、今朝も裏山へ薪拾いに出掛けた。

くスバル氏に投げたのです。

「お次ぎは憶病の罰でスバル氏が話します。如何でしょうか——」

ナイロン氏の声に、生気を取り戻した人々の声が——「賛成——異議なし——」と軽やかに渦を巻くのです。

弱いレッテルを貼られたスバル氏は、照れて頭を掻き乍ら、では一席と改まりました。

山笹をかきわけて、小枝を集めていたティジが、急に喚いた。

「痛タ……ッ、さされた。アブにさされたよう……。」

ティジは肩を押えて、マキの方に飛んで来た。マキは驚いて、ティジの肩を見てやった。小さな赤いポツリとした刺し口を中心にして、肌は見る見る赤く腫れ上って行く。

「これは痛いわな。治してやるから、そこへしゃがみよ……。」



マキはティジを押えつけるようにすると、大急ぎで後向きになってパンティを脱いだ。

さやさやと生温い液が、ティジの肩口に降りそそいだ。マキは両手をビショビショに濡らして、自分の体内からほとぼしり出る液体をゴシゴシティジの刺傷口にすり込んだ。

不思議に重苦しい、ズキズキする痛みは去って、赤い地腫れは引いていった。

「ほんにマキちゃんのおシッコは、よくきくんやなあー」

「うん、死んだお父ちゃんが云った。蜂やぶとや、あぶにさされたら、これが一番いいんだとよ……。何でもアンモニヤたらがきくんやて……」

そして、始めて試して見たマキ自身、小便が、虫刺されにかくも効果があるとは、ほんに不思議なものだと、我乍ら感心した。

マキの尿が、虫刺され以外にも効くことを発見したのは、同級生のユキだった。

その日は女の子二人で山へ植物採集にいった時、ユキは誤まって樹の根元につまづいて転んで、膝小僧を大きくすりむいた。

突嗟の事でもあるし、マキはヒョットすると、これも小便で治るかも知れないと単純に考え、

「うちが治したげるし……一寸じつとしてやな——」

とパンティと足許まで下げると、其の場にしがんで、採集用の瓶に採集した。白く澄んだ尿を、手に掬って、ユキの膝小僧にかけ懸命にもんでやると、ユキの血はとまり、傷口の痛みがケロリと去った。

「マキちゃん、治ったわ——」

「そうやろ、どんなけがでも、なおるんやで……」

とマキは少々得意になって、小川で手を洗っていた。

小学六年生までに、マキは数回、そうして、虫刺され、きりきず、やけど、腫物などを治してやった。

医学的に云って、尿にアンモニヤが混っているの、虫刺されにはよく云われることだが、その他の傷全般が治るのは、医学的に云って不可解なことであった。

中学生になる頃は、その噂がパツと村中に拡がって、

「マキの小便は万病の薬水やで——」と知れ渡った。

年頃になって、マキもポツリと女めいてくると、もう、友達同志の首や肩や手足に、気易く小便をかけることが気恥かしくなってきた。マキの心とは反比例して、近在の人々が噂をきいては、空缶や、化粧品の空瓶をもっては、マキにお裾分けに預かろうと、遙か山道を越えて来たりした。

血清でないと助からぬと云われる、蝮蛇にかまれた女房が、マキの小便でもむと見る見る毒気が吐き出されて、数時にして治った。山には毒虫が多い——。蛇を始め、百足、山蛭、などの害も、マキの尿で、忽ち快癒していった。

「夜中に激しい腹痛になってのう、ええいものは試しと、マキのおしっこを貰いにやって、のんで見たら、えらいもんじゃ。ケロリとはらいたが治ってしまったわい。ありゃおしっこ考えるとバチが当る。神さんの下さった御神水じゃで——」

それやこれやで、マキの尿は奪い合いの形だった。朝起きると、マキの家の便所の前には、既に数人の人々が、手に手に缶や瓶をもって並んでいた。マキは次々と、缶や瓶をうけては、配給してやら



ねばならぬことになった。

「そんな莫迦なことが——マキの小便で治って、おらの小便で治らんと云う筈がない。一ぺんためして見たれ——」

と気の強い奴が、自分の傷口にジヤアと降りかけて、こすったら、尚更悪化して、非道く化膿したため、あわててマキの御神水を分けてもらってぬったら、ケロリと数日で治ってしまった。

そんな噂が噂を呼んで、マキが中学を卒業する頃には、マキは遂に便所の肥壺をぬらすことがなくなりました。

マキの父親は早く亡くなって、彼女は母親の手で育ったが、最近では、おしっこの貰い賃に、色々と米、野菜、時には鼻紙につつんだひねり金まで、もらう様になり、母親は、マキの御神水で、すっかりラクに暮らせるようになった。

マキの御神水が余りよく次々と待ち受けて持って行かれるので、時には不足をきく場合すらある。少女の



一日の排泄量なんて、きまったものである。供給より需要の方が多いのだから、偶には母親がマキに変わってそっとお茶を濁すこともあるが、全然効目がないからすぐ怒鳴り込んでくる。

そろそろ娘盛りになって来たマキの、便所に入るところを、鵜の目、鷹の目ねらっているんだから、彼女もおちおちしてられない。いつ何処で、彼女の排泄の姿を見られていないとも限らない。況して人間、小さい方許りでない。マキだって大きい方の場合の便所行きだってある。そんな時、どこからか覗かれているようで、マキは段々ノイローゼになって来た。

マキの御神水を求める者が多くなるにつれて、遂には、始末のちり紙まで求める者が出て来た。患部にしつとりと濡れた、そのちり紙を貼ると、少々の疵や、痛みは薄らいでいったからである。

マキは或る夜、そんな環境に堪えられなくなつて、遂に母親にも内緒で、家出した。

始めて見る大都会で、マキは途方に暮れたが、足にまかせてぶらぶら歩くう



ち、『お手伝いさん求む』と貼紙した一軒の大きな家に、前後の思案もなく飛んだ。

女中さん沸底の折柄、足柄金造氏の奥さんとき子さんは、精しく身元も調べず、すぐさま使ってくれることになった。

山間の僻村で育っただけに、マキの働らきは、素直でマメマメしい。

ここでマキは、村でたかられた様な心配もなく、遠慮なく御神水を肥壺に撒き散らすことが出来た。

「マキが来てから、不思議に蛆が湧かなくなりましたよ。変ですねえ——」

主人金造氏と、とき子さんの話のやりとりを蔭で聞いているマキはにこっとした。

彼女の尿中の強い殺菌力は、蛆をも殺してしまうものらしい。

足柄金造氏は余り大きくない三流の製薬会社の、常務取締役をしていた。奥さんと子供二人の家族である。長男はマキより二才上で薬科大学に通学している。妹はマキより三才程年下で、中学在学中であった。

金造氏の製薬会社も、最近は大企業の人に押されて、ここらで一発起死回生の妙薬を出さないと危なくなりつつあった。

ユーウツそうに出勤する金造氏に、マキはふと、自分の小便を売って見たらなどと考えて見るが、モノがモノだけに仲々云い出しかねていた。ホルモン剤に、妊婦の胎盤が非常に効果があるのだから、マキの小使にしても、効果があっても何の不思議でもないのだ——

長男の大学生が、ここ数日大学を休んでいるので、聞けばいぼ痔

になったと云うのであった。足柄金造氏の勤める、R製薬発売の、

『ヘモナオール』の坐薬を挿入するが、捗々しくない。よたよたと便所へ通い、数十分を費やして痛々しく、へっぴり腰で出てくる、

長男の金太君を見ては、マキは遂に我慢しきれなくなった。彼女は、『ヘモナオール』の坐薬を、そっと一個箱からとり出すと、便

所でその銀紙をとり、柔かい半透明の坐薬を潰さない様につまんで、彼女の御神水をたっぷりそそぎかけ、再び元の様に銀紙でくるんだ。「坊ちゃん——マキがいいお薬を差上げます。この薬を使

って御覧なさい——」

何喰わぬ顔で、マキは金太君に坐薬を差出した。

「マキの気持は有難いよ。だけど、親爺の会社の『ヘモナオール』をふんだんに使っても駄目なものが、たった一個の坐薬で治ると思ukai?」

「まあまあ、マキを信じて下さいよ」

半信半疑で金太君は、マキの真剣な顔をじっと見ていたが、急に眉をしかめて、

「あっ、いててて……。マキ、そいつを挿し込んでくれよ。あー痛い痛い」

と布団の上で転がり廻って、尻を押えた。

マキは瞬時、ためらったが、思い切って、金太君をうつむかせると、祈る様な気持で、その坐薬を挿入してやった。

痛みは数分で去った。金太君の喜びは相当なものである。マキの手を握って離さず、キスもしかねない程の、感謝感激振りである。

「マキの薬を一回使ったきりで忽ち治った。」

帰宅した金造氏は洪い顔でうなった。『ヘモナオール』の信用が



た落ちであるからだ。

「マキ、その痔の薬を覚えてくれないか——」

金造氏は散々、問いつめたが、マキは笑って応えなかった。

マキと金太君は急速に近づいた。二人は金造氏夫妻に隠れて度々デートしたが、何故かマキは金太君に最後の一线だけは許そうとしなかった。それが金太君にとっては口惜しくてならない。ドンファソをもって自ら任じている彼が、たかだかお手伝風情を陥落出来ないことであつては、足柄金太の名にかかわる。

なだめたり、すかしたりしたが、そこまでくると、マキは悲しげに首を振った。

マキも金太君が好きである。併し、それとこれとは別の様な気がする。

そうした不満でもなからうが、赤線で金太君が悪い病気を貰った事を知った時、マキは悲しくなった。

大っぴらに親爺にも云えず、金太君は、マキにもそっぽをむいて、イライラした顔で、秘かに、マイシンの抗生物質や、サイアジンなどを服用していたが、余程悪性なのか、すっきりとしない。

彼は怒りっぽくなり、遂には、こうなったのもマキが許さないせいでと、無理を云い出した。薬科大学生だから薬に精しいのだが、自分の病氣となると、焦って儘にならぬものらしい。彼は遂に弱音を吐いた。

「ねえ、マキ。何か良いクスリはないものかねえ。僕が悪かったように思うよ。何か重苦しくって仕方ないんだ——」

マキはその日を待ちうけていた。

「本当に坊ちゃま、私に任せて下さいますか？それなら、きつとお治

ししますわ」

マキは溜めておいた御神水を褐色の薬瓶に入れ、金太君の部屋を訪れた。

「洗滌すればきつと治ると思いますわ——」

「いいよ。マキの気の済むようにやればいいさ——」

金太君は再度の奇蹟を願っていた。

薬物でこじらせた性病が、まるで嘘のように数日の洗滌で快癒した。

今度こそ金太君はマキの手を押し戴いた。

洗滌液の、色、匂い等で、腐っても鯛の金太薬学生である。どうもハルンらしいと気付いたのは、最初の洗滌の日であった。

変に思つて、マキの挙動に気をつけていると、彼女は便所に入る際、大切そうに薬瓶と漏斗をもって入るのを見かけた。

「ねえ、マキ。ボクのこの難病を治してくれた恩は一生忘れないよ。併しマキ、云ってくれ、この洗滌液は私のハルンだと——」

「あつ、どうしてそれを——」

「ボクは薬学生だぞ。見損なわないでくれよ」

「すみません」

マキは真赤になつてドキマギした。

「併し不思議だなあ——ハルンで治るとは……」

そこで、マキは痔のことや、村での出来事を包み隠さず金太君に告白したのである。

万病の特効液『万貴』がR製薬から売出されたのは三カ月後であった。R製薬としては会社の運命をかけてPRに努めた。

ダイヤガラスの瀟洒な小瓶に、僅か三ccそこそこの黄金色の液体が、なんと一瓶二千円である。誇大広告と思つても、溺れる者の薬つかみ族が、欺された気で買つて、使用してみると効果はテキメン



であつた。

金造氏宅では、一滴もこぼすまいとして、マキの御神水集めは、専ら金太君がかかりつ切りで、カテーテルによって蒐集した。

カテーテルで最後の一滴まで吐出すると、まきは便所に行つても、一滴の御神水もこぼさずに、排便の用を足し得た。

金造氏は、マキの御神水を頭からじかに注いでもらつて、薄くなりつゝあつた。頭髮の失地回復に努めたし、とき子さんは、更年期的のヒステリー症状を、御神水の注入によって無事克服した。

マキは何もせず、一日中遊んで、出来る限り水分の多いものを摂取して、例え少しでも多く排泄する様心掛けるのが日課だった。

「マキさん、ボクと結婚してくれないでしょうか——」

或る日、金太君が、恐る恐る切り出した。

「結婚すれば、恐らく不幸になりますわ」

「どうして、こんなに愛しあっているのに……」

「何故だか私も分りませんの。でも予感がするのです」

マキの財産は、既に数千万円を越していた。原価は只だから、儲かる一方である。でも結婚と云う、肉体の結びつきによって、神秘が破壊されそうな予感が、マキはするのだ。

金造夫妻は勿論大乘気である。金の卵を我が手にする様なものだからだ。

ハネムーンの夜、金太はマキに願つて、『万貴内服液』を服用した。もりもりとした精力感が、金太をポパイの様にはり切らせた。

その刹那——。

マキは下腹に猛烈な激痛を覚えた。

便所に立ってみると、生れて始めて、マキの御神水は米のとぎ汁のように真白く濁っていた。

マキは撫然として、手首を強く噛んだ。うっすらと血のにじみ出た傷口に、白濁液をこすりつけたが、傷は反つてヒリヒリと痛み、悪くなるような気がした。

「矢張り、私の予感は當つたわ。結婚と云う男女の結びつきによって、私の神秘は失なわれたのだわ」

少量の在庫品『万貴』を残して、万能薬、マキの御神水は、一夜を限りに消え失せていった。

マキの眼に涙が浮んだ。

「これでいいんだわ。女だもの、何れ一度は結婚する身なら、金太さんに許した事が、せめても私の心の慰さめになるわ——」

新婚の夜の旅先まで追いかけて来た。ダイアグラスの瓶の一杯つまったポストンバッグを、旅館の二階の窓から、ガラガラと溪流に捨て去ると、満足げにぐっすりと熟睡している金太君に、そつと別れの投げキッスをして、マキは身支度を整えて、静かに出ていった。

マキの消息は、その後杳として知れない。

「マキの様な女が、若し日本中で唯一人あつたとしたら、こんな童話めいたお話も起つてくると思うのですが……」

三十九夜の物語始まって以来、一度の縛りと云う言葉も現われないう、奇譚もひとつはあつてもいいのじゃないでしょうか……」

スバル氏の話は終わりました。

流石に寒冷線の六甲山上の夜気は冷めたく、スカイラインにつらなる山々が、夜明け前のもやに、うっすらとその黒々とした山並みを覗かせ始めたようです。

窓をあければ、早鳴きの名知らぬ小鳥のさえずりが、静かな空気を破つて、チクチクと冴えて耳に入つて来ました。

退屈男達は、これから、有馬へ縦走しようと、眠らぬ一夜もものかわ、曉天を見上げて、一斉に立上りました。





〔手紙〕

# 「暴君になって頂戴」

泉 慶子

小父さま、

小父さまに幾度もお会いしていながら、改まってお手紙を差上げるなんて、おかしいでしょう。けれど、口では申上げられないわ。手紙にして見て頂いた方が、より一層妾の心持が分って頂けると思っ、思いきって、このノートを差上げます。

会社のお友達が土曜日になると、朝の中からソワソワして、急にオフィスの中まで浮き浮きと明るくなった様な気がします。

A子さんもB子さんもニコニコして、お化粧に立って行ってしまったわ。妾も何処かへ行こうかしら。窓から見る空までブルーに澄み切って、こんな午後、彼氏と何処かへ行って見たいなあ、そう思うのも無理やないでしょう。妾は銀座の午後のペーブルメントを身も心も軽く歩き出したのです。プロ野球もいいし、六大学だっていいし、兎に角、会社を早く出てしまいたかったの。

和光の前、あそこには随分沢山の人が待ち合わせているのね、驚いてしまった。早くパ

ートナーが来て嬉しそうに去って行く人、地下鉄の下り口を見たり、日劇の方を遠く眺めたり、幾本目かの煙草をグツと靴で踏みつぶしてショーウィンドの時計をチラッと見上げる人、おかしい様な、可哀そうな様な、妾はフフと微笑みかけながら、自分だって可哀そうな一人だったと、急に気付いて、何の理由もなく地下鉄の階段を下りてしまったの。

映画を一つ見て、お茶を飲んで、サア今日もまたかくてありなんなんて、一人つぶやきながらハチ公の銅像の処へ出て来たの。マア



あすこも随分人が立っている処ね、若い人も年配の人も、女も男も、皆んな誰かを待っているのよ。

地下のストアの階段の方を見たり、バスやハイヤーを眼で追ったり、駅の時計を眺めたり、そしてみんな心のどこかが跳っているような落着かない表情や態度をしているわ。それが其の人達にとっては嬉しいのでしょうか。

時間がドンドン経って行くのなんか、少しも苦にならない。あの女の人には、どんな男性が現われるかしら、この人には洋装のお嬢さんが来るかしら、あの紳士はどうかあ、他人事とも言えない位面白い見世物よ。けれど、気が付いて見ると、誰も待って居てもくれない妾なんか、本当につまらない。

そうした時、小父さまにお会いしたのは。

初め、小父さまは妾の前を、何んの気もなしに通り過ぎて行ってから、此方を振り返ったわ、そして少し立ち止まって考えている風でした。それから、又妾の方へ引返して来たの、妾の前に立つとソツと顔を近付けて来ました。

妾がそれでも黙っていると

「少し一緒に歩きませんか」

妾はその言葉に、今までずっと永い間待ちに待っていたパートナーに漸く会えた様に、脚の方が、小父さまと一緒に歩き出していたの、本当におかしいわ、どうしたのかしら、余り周囲の人達の甘い幸福さに妾まで興奮してしまったの、何処というあてのない散歩、丁度恋人同志の二人の様に、けれど小父さまと妾では親子見たいでしたわ。

「幾ら上げたらいいの？」

妾を何んだと思っているのだろう。

「知りません」

少し怒った様に響いたかしら。

道はもう薄暗く、坂になっていました。遠くでボツと赤い灯が一つ見えているのが何かうるんでいるようでした。

「酔っているから、お茶を一緒に飲むだけ、

いいだろう」

何処をどう云う風に歩いたのか思い出せないけど、樹のこんもりと茂ったホテルの前に出ました。男のボーイさんが心得顔に案内して行ったルームは、調度もカーテンも其れほどケバケバしくなく落付いていて、妾はホッとしました。

そして初めて小父さまを明るい光線の下で見ると、本当によいお父さまと云った安心感

が湧いて来て、この方なら大丈夫だと思いました。

「君は若いんだね」

と妾を上から下まで眺めていられたわ。

「若さっていいね」

ともおっしゃった。

妾を一体いくつと見たのだろう。小柄だから十七八位かと思ったかしら、妾だってもう廿一よ……。

## 二

「オン・ザロック、それにサンドイッチ、君は？」

「何んでもいいわ」

ボーイさんが（御ゆっくり）と挨拶して行ってしまいました。

「とうとう二人だけになったな」

妾はどうしていいか分らない。この人、本当にいい方かしら、本当にいい方だわ、妾の知らない世界へ案内して、いろいろなものを見せて下さったり、教えて下さったりして下さる方だわ。妾は其の時、直感的にそう思わずにはいられなかったのね。でも悪い人だったら、どうしよう。其んなことないわ。それからそれへと想像の翼が未知の天空を駆け廻ってくるのでした。





した。

「イヤッ」妾は飛びのく様にしました。

「ね、お約束して、さっき

一緒にお茶を飲むだけだとおっしゃったでしょう」

「そりゃ云ったよ、嘘じゃないさ」

「じゃ、そんな事して、イヤ」

「お酒を飲んでいるだろう、だから一寸、でも、安心おし、約束するよ。」

ウイスキーが妾の体の中にも廻り始めたのか知ら、ポーとなって来て、何んだか心が軽くなって行く様だ。

「きっとお約束して、そして、私のからだには、指一つ触れないと」妾は一生懸命だった。

「おお、よし、よし、約束する、小父さまが保証する」

その時二人はベッドの端に並んで腰かけていましたわ、小父さまは矢庭に腕を妾の背に廻わすと、グッと抱きかかえようになさいま

おかしな方、御自分で小父さまだなんて云

って、妾はもう其の時はクスリと笑う位の心のゆとりが出来ていました。

隣りのバスルームからモウモウと湯気を上げて熱湯のほとばしる音、……

映画で見る様に石鹸の泡を一杯かき立てた湯槽の中に妾は悪戯っ子の様に手と脚をのびのびと拡げて、後から入って来た小父さまに石鹸の泡をピシャピシャとはねかして上げたわ、アア面白かった。小父さまも「この悪戯小僧め」なんて、おっしゃって御自分で子供同志のお風呂や合戦の様に、妾に水を飛ばすじゃありませんか。妾はキャキャ云って遊んで上げた。こんな面白い遊びってあるかしら、時々大人って子供の様に遊びたいものなの。シャワーで、すっかり石鹸の泡を洗い落すと、大きなバスタオルを待っていた様に拡げて妾をすっかり包んで、それはそれは親切に、すっかり拭いて下すった。

「慶ちゃん」

いつ妾の名を知ったのだろう。「さっきのおいたのお仕置だよ」

妾の伸ばしていた両腕をグッと後に廻して、まるで高手小手に縛ってしまう様に組合わせた妾の両手を片手でシッカと押えてしまわれました。



「小父さま、もう一つお約束して」

妾達はすっかり服を身につけて愈々このホテルを出ようとしていました。

「今度の日曜日に、もう一ぺんお会いして」

無理にも下さるというゲルトはキッパリお断りしました。妾そんな種類の女じゃありません。小父さまも、すっかりお分りになったでしょう。

### 三

妾の方が、今度は小父さまをタンと待たせて、焦らして上げようかと思っただけでも、どうしても出来なかった。でもお約束の時間には本当に小父さまも来て下すったわ。何も知らない石の上のハチ公はどこを見ているのだらう、待ち人來ると走り寄って行った、あの人達のように妾はお会い出来て嬉しかった。

多摩川へタクシーが朝の微風をつっ切って飛んで行った。どこも彼処も、何もかも初めて見る様な新鮮さが溢れていたわ。ゆっくり流れている川の向うに甲州の山脈が遠くかすんでいて、車は一層スピードを早めてハイウェイを下って行きました。

ハイヒールで歩くのに、川原の砂利まで少しも苦にならないなんて、人間て勝手なものね、しまいには靴をぬいでピチャピチャと水

の中に足を浸すとその冷い事、とても心地よかったわ。その時小石がグラツとゆれて、片手を小父さまの肩にかけてしまったらしめたわね。

妾には其の日の事が、今でも一つ一つハッキリ思い浮べられます。

しかし、そんな事よりも妾が生れて初めて小父さまに、ああ恥しい、縛られてしまったのね。

少し遅いお午御飯を食べようという事になって川に沿ったお料理屋に行ったら、長い長い植込みの間を女中さんが案内して呉れて、離れへ通されました。広いお庭の中に一つ一つ建っている一軒家、お玄関もあれば、お風呂まで付いていたわ。

其の時、おビールもサイダーも、それからお料理まで来てしまったのに、御飯の前に一緒に一風呂浴びようなんて、おっしやるんですもの、妾、困ちやった。

今日はこの前の時の様に悪戯ッ子にならないとお話して置いたのに、小父さまったら。無理にビールも飲されちゃった。然し本当は妾お友達と少しは飲んだ事もあるのよ。

今日は酔っては駄目と思っていたから、大人しくしていたのに。

だんだん気持が大きくなって行って、なんだか、東京の中にいる様な気がなくなっ

てしましましたもの。小父さまもニコニコして妾が可愛いと云ったお顔をしていたら。

「慶ちゃん」

「えッ」

「君を一度縛らせてくれない？」

「イヤよ」

妾が半分怒った様子をして小父さまの手を払いのけたけれど、また悪い小父さまの御趣味が始ったと思うと、心のどこかでクスリと笑いたくなってしまつて、仕方なく承知しましたと云う風に首を縦に振ってしまうのでした。

「慶ちゃん、有難う」

妾、本当に幸福だった、男の人にこんなにまで愛しまれて。

ああ、その瞬間、突然妾のとき棄てた細帯をとると（いいだろう）と矢庭に妾の両手を背に廻して、手首にその紐をかけ、残ったのを更に乳房の上へ一廻わして、グツと締め上げてしまわれました。妾、少しも悪戯なんかしないのにも思っても、もう自由が許されない女になつていたのでした。妾はハツとしました、もう小父さまのお顔も見られない位恥しさが先で、うなだれ、そこへへナヘナとくず折れました。

然し、妾達は最初のお約束は終いまで守り通しましたわね。けれど妾にとって其の日の



こと程、強烈な印象はありません。

四

お別れする時、この次は何日とお聞きしないではいられない位になりました。妾はもう小父さまと離れられない様になってしまった

んですもの。

これも忘れる事が出来ないことです。

会社の人達の秋の慰安旅行に、風邪を引いたと嘘をいって欠席して、小父さまと箱根へ初めて一泊旅行に参りましたわね。小田急の



切腹願望

腹を切る

川口 富由

むき出しになった下腹をプリプリと切り裂く。激痛にゆがむ美しい顔には、脂汗がにじみ、丁度ヘソ下まで切り進んだ時、「ウッウーッ」と悲壮なうめきをあげる切腹する若侍！愛する部下と共に腹を切る特攻隊員、逞ましい青年の切腹に興味を覚えます。

最近の奇クは男性ハラキリの記事が少なくて残念です。旧号の切腹マンガラ等大変よかったです。腹を切る”なんと勇

壮な事でしょう。そして、そこには責任感と友情が現われます。日本人の誇りです。同じ死ぬなら腹真一文字にかき切って死にたいものです。終戦の時、多くの人が割腹自決していますが、私も戦地で二、三の青年将校の切腹を見ました。

その人は二十五才の歩兵中尉でした。愈々明朝切腹するという晩、我々部下を集めて別れの宴をひらきましたが、一段と気が沈む中で中尉は渾一本で黒田節を舞いまし

ロマンスカーもよかった。登山電車からケールブルカーの中は小父さまの本当のお嬢さんの様に澄まして、しかも少し甘えていました。旅館へ着いて宿の女中さんから（お嬢さま、お嬢さま）と云われて、妾なんだか困ってしまったことなぞ今思い出しても嬉しい。

コンコンと湧きあふれる無色透明の温泉に伸び伸びとつかって、暮れて行く山の景色を眺めていた時は、いつまでもいつまでも、こうして二人切りでいたらと思いましたが。小父さまだって、きっとそうお思いになったいたことでしょう。慶子は小父さまのものよ、小父さまのおっしゃりたい事は慶子の方がよく存じていました。言葉なぞまだるっこしくて、何も云わなくとも二人の間には直ぐ分っているのですもの。

そして慶子は、いつもの様に縄で縛られた女になってしまったのでしたわ。

アア、箱根の宿、妾にはもう一つ忘れられない、あの鞭打ちが待っていたとは。

「きっと慶子も喜ぶよ、わたしも嬉しい」

小父さまは縛られた妾に初めて鞭の洗礼をして下すった。女って本当に不思議ですわ、小父さまのおっしゃった事。容赦なく振り下ろされる鞭から逃れようと、しかも声を立てまいと歯をくいしばり、縛られたまま転々と身悶え、のけぞらせ堪える苦痛、それにも拘



た。学生時代、ラグビーで鍛えた体は見事にひきしまり、浅黒く陽に灼けた肌は六尺の白さと対照的した。腹筋も見事な発育ぶり、で数時間後に切腹される人の体とは思えませんでした。

やがて明方近くなり、愈々切腹の準備にかかりました。切腹の座は毛布を三枚敷き、三宝がないのでミカン箱の上に紙をしいて中尉の家宝の九寸五分を置きました。介錯は不用とのこと、その切腹を最後まで見守る事になりました。中尉は死後の体が見苦しくならぬ様、衛生兵を呼んで浣腸を十分に受けられました。そして水浴の終わった体を真白い禪でつつまれました。

とっておきの軍装に身を固めた中尉は、居並ぶ我々に一人ずつ固り握手を交わされ静かに切腹の座につかれました。私達はじいーと中尉の動作を見つめました。

「俺も腹を切るのは初めてだから、十文字腹を切るから、仕損じたら介錯は頼む」と言われ、上衣のボタンをはずされ、次いでズボンの前を押しひろげられました。そして両手を差し入れて、もみ上げる様に下腹に安らぎを与えられ、ムンズと腹切刀を

取られました。

ムキ出しになった下腹は、朝日に照らされて美しく輝き、形のよいヘソがこれから加えられる割腹も知らぬげに鎮座しています。撫でること数分。大きく呼吸をととのえられた中尉は太ももに満身の力をこめながら、「ウムッ」とばかり力いっぱい刃を突込まれました。

ビューと血汐がとびちりましたが、「うッ、うおー」と腹をヘソ下へと切り進められました。「つーつーつー」と激痛が全身をおそい、みるみるうちに肌が蒼白になってゆきます。

「こ、これが切腹だッ」と叫ばれ、キリキリと右脇腹まで切り広かれたとき、灰色の腸が流れ出しました。私達はあまりの壮烈さに息をのんでいましたが、更に腹をミソ落に当ててグイとヘソをタテに割って、見事に十文字腹に切腹され血の海の中にうっぶされ、しばらくケイレンされていましたが間もなく出血多量で絶命されました。

その時すごい絶叫が二回きこえました。それは日頃中尉に愛されていた二人の従兵が腹を切ってあとを追ったのです。

わらず却って妾の心は小父さまと一つになつて行く様な夢見る心地に引込まれて行くのでした。

子供の様な妾をここまで馴らし、教えて来て、到底慶子一人では開くことの出来ない扉の奥まで見せて下すった小父さま。妾は何んと言ったらいいでしよう。山の湯の宿に夜気を切って響く鞭の音、どうして暴力が否定されるのか知ら、暴力だって理由があるわ、女に対する男の暴力、妾を自由のない女として踏みにじってしまう位の勇気をひそかに待ち望む様になっていたのに。

妾はこれを誰に話したらいいのでしょうか。女として身も心も捧げてしまうことこそ本当の愛情じゃないのかしら。会社のお友達にさえ語り合う事は出来ない、妾の心の秘密。

女は最初に全身を捧げた人を一生忘れる事が出来ないといいますが、慶子に小父さまを一生忘れる事の出来ない人になぜして下さらなかったのでしょうか。

小父さまのバカ。多摩川の散歩の時、箱根の宿のこと、妾が高手小手に縛られて、鞭の洗礼を受けたあの瞬間、言葉に云い現わされない迄の恐怖と戦慄とを今一度お与えになって、どうぞ小父さま、あの満ち足りた幸福感を、そしてああ、妾の暴君になって頂戴。



## 〔奴隸国探検〕

## サルジニア探訪記

(第一回)

## 阿 留 品 叉 怒

アラビア語を研究して、多少は喋れる関係もあって僕は、サルジニア国にナハール君という友人を持っている。

ナハール君はトアン・ク・ブジャンの後継者といわれた大へんな富豪で、僕がサルジニア国を訪れた時に見た彼の家は、ちょっとした城とっていいような、おもむきを持っていた。

言葉がとりなす縁で知りあい、旅費、滞在費はナハール君が負担するという好条件に、僕はナハール君の財力を一応は予測していたが、城のような住居を見て、ナハール君の底知れぬ財力に度胆をぬかれてしまった。

ナハール君は飛行場からの道中、いたずらっぽい目で僕を見ながら、「着いたら、もっとおどろくことが沢山あるよ。楽しみにして待っていたまえ」

などと云っていたが、僕は遠くに見る住居の豪華さにすっかり圧倒され、それ以上想像力をはたらかせる余裕を持たなかった。

城へ着くと共に、玄関には多勢の召使いがずらりと並んでナハール君を出迎えた。

僕がちょっと不思議に思ったのは、かれらが皆その首に、いろんな金属でつくられた枷をつけていることだった。

ナハール君は、僕のいぶかりに気づくと、

召使いたちがうやうやしくお辞儀をしている間を、たいへん傲慢に歩きつつけながら、

「これは皆奴隸なんだよ」と説明した。

かねてからサルジニア国が、奴隸を公認しているとは聞いていたが、実際にお目にかかるのは、それがはじめてだった。しかし僕は、それ以上の関心をさとられまいとして、ナハール君の速足にしたがって玄関を入った。

そこで僕は、すべてが豪奢をつくし、一つ一つがおそろしいほど高価なものにいつただろうと思われる家具調度のたぐいに目を見張らされた。



その辺り一帯を支配するサルタン（土侯）を父に持ち、いろんな利権でうるおっているサルジア国の貴族の裔であるナハール君が豊かなのは、しかし考えてみれば、当然のことだったかも知らない。

僕の心には、羨望など、おどろきの方が強すぎて、あまり浮かんではこなかった。

「遠い旅をしてきたのだから、風呂へでも入

ろうか。日本人は風呂好きだからね」

日本に留学し多少はその風俗を知っているナハール君は、僕への好意からそう云った。

「遠慮なく、気軽にやってくれたまえ」

すると召使い、いや奴隷達が輿を持ってやってきた。彼らは手枷と鎖よって、輿の棒につなぎとめられていた。

ナハール君は気楽にそれに乗り、ためらっ

ている僕をうながした。

「この屋敷にいる間、これを利用してくれたまえ。だだっ広いものだから、一々歩きまわるのは大変だからね」

僕とナハール君を乗せた二つの輿は、やがて風呂場へ着いた。

それは大理石で敷きつめられた、香水の匂いのプンプンする、素晴らしく清潔で豪華な風呂場だった。そしてその前には、ビニールの水着をまとった、多くの奴隷女たちが、首枷と、手枷とをつけられ待っていた。それらの枷は小さく、鎖は繊細であり、あきらかに金でつくられていた。類似の金属などというのは、ナハール君に対する礼を失したこととなる。

僕はそれらの奴隷女たちの手の動きに身を任せ、すっかり裸にされるとナハール君に従い湯槽につかった。

湯加減はすこしぬるいかなと思うぐらいであったが、周囲の豪華さ、美しさ、そして用命を待って、大人しくたたずむ奴隷女たちの、さまざまな色彩の水着に眩惑され、すっかり良い気持になった。

「君」とナハール君は僕に云った。「女達が着ているビニール着は日本から輸入したもの

奴隷女





のだよ。風呂場には、おあつらえの衣裳だろ  
う」

僕はただ感嘆の言葉を吐くのみだった。

やがて良い気持ちになった僕は、奴隷女たち  
に身体のすみずみまで洗わせ、旅の汚れをお  
としてさっぱりした。

この時感心したのは、奴隷女たちが軽いさ  
ざめきのように手枷の鎖を鳴らしておりなが  
ら、それを僕の肌にふれさせるようなことが  
すこしもなかったことである。

僕が感心したと告げると、ナハール君は、  
そんなことをすれば、きびしい罰が待ってい  
たし、風呂場からもっとつらい他の仕事へま  
わされるからだと説明した。

どんな罰か、またどんな仕事なのか興味を  
感じたが、僕はその時、なぜともなく質問を  
しなかった。しかし間もなく、それらはすっ  
かり明らかになった。

与えられたガウンに身を包み、ナハール君  
と向いあって腰を下したのは、おどろいたこ  
とに女体でつくられた椅子だった。かの女た  
ちは生きたままでねじまげられ、組みあわせ  
られて立派な安楽椅子を形成していた。

最初、なまあったかい、小さく鼓動の聞こ  
えてくるその椅子に、なぜともない落着きの

なさを感じた僕も、すこし経つと、慣れも手  
伝って、その座り心地のよさに感心した。

「なかなか良い椅子だろう。ここまで仕込む  
にはずいぶん時間がかかるんだよ。勝手に身  
動きされたりしちゃ台なしだからね」

僕がうなづいていると、足枷の鎖を鳴らし  
ながら、たくさん奴隷女が手にかくわしい  
料理を捧げ持ってきてきた。彼女たちは、  
紗でつくったすけた衣裳をつけていた。

そして一方からは、首枷と手枷と、足枷だ  
けで、絹のびったりくっついた衣裳をまとっ  
た女達があらわれ、組みあわさり、重なりあ  
ってたちまち立派なテーブルを形成した。

料理はその上へ次々と並べられた。それは  
僕が一年かかってでも食べられないほどの分量  
であり、高価なものばかりだった。

ナハール君は、それらのものをつつきなが  
ら、僕にも慈恵し、

「これから座興をお目にかけよう。罰しなけ  
ればならない奴隷を、君のために残しておい  
たんだよ」

と云った。

やがて一人の奴隷女が、金でつくられた優  
雅な鎖などは、おおよそ較べものにならない  
ほど重々しく頑丈な鉄の枷に、首と手と足を

縛られ、鞭を持ち、皮のジャンパーを着た女  
に引っぱられてあらわれた。

奴隷女の口には嵌口具がはめられ、皮ジャ  
ンパーの女に首の鎖を引っぱられてよろめき  
鞭をあてられたりしていたが、僕とナハール  
君の腰かけている椅子のところまできて、じ  
やらじやらと鎖を鳴らして膝まづいた。

嵌口具がとられると、奴隷女は上下座して  
云った。

「わたしめの落度から、大切な御主人様の身  
体に風呂場で鎖を触れさせてしまいました。  
どのような御処置もおうけます。どうかよ  
ろしく願います」

ナハール君は冷酷な口調で、

「鞭打ち十回、更に十日間、檻に入れてつる  
しておき、それが済めば水汲みをやらせる」  
と宣言した。

鎖がふれたくらいで、それはちとむごい処  
置ではないか、と僕が云うと、ナハール君は  
見せしめのため、きびしく罰しておかないと  
奴隷というのはすぐ怠けたり、云うことを聞  
かなくなるのだと答えた。そしてそんなこと  
を云いながら、床の上にうずくまっている他  
の奴隷女に、料理を囁んで吐きだしたり、投  
げ与えたりしていた。



すると奴隷女たちは、あらそって床に吐きだされたその料理を奪いあった。しかもかれらは決して手を使わず、動物のように舌と唇でそれをした。

「手を使うことは許されていないのだよ。」

ナハール君は説明しはじめた。

「こいつらの手は僕のためにだけあるのだからね」

その時、するどい鞭の音がしたので、僕はおどろいて、その方を見た。

それは先程の奴隷女が、僕たちからよく見えるよう部屋の中央で両手を吊り上げられ、皮ジャンパーの女に、鞭打たれている音だった。悲鳴が聞こえないのは、その口に嵌口具がはめこまれているためと分った。

しかし女が身をくねらせ、あえぎ、拘束する両手首の枷から逃れようと必死になっている様子から、その苦痛がなみなみのものでないことが分った。

鞭音は更に続き、奴隷女の身体にはたちまち赤いみみずばれが走った。そして、その度に、奴隷女は苦悶の表情をし、身を蛇のようにくねらせた。

「そう熱心に見なくても良いよ。あんなのはほんのはじまりなんだからね」

ナハール君は尚も食欲を衰えさせず、口を盛んに動かしながら云った。

奴隷女の鞭打ちが済み、かの女がおしめカバーをはかされ、やっと身をかがめなければ入れないような小さい檻に、折りたたむように押し込まれ、鳥籠のように部屋の隅に吊り下げられると、ナハール君は、

「あの姿勢は、なんでもないようだと案外苦しいものらしいよ。あれをやられるのを奴隷たちはいやがるからね」

と云った。そして僕が多少の同情と共に檻の中の奴隷女を見ていると、

「君も、このめす犬たちに餌をやったらどうだね」

と言葉をつづけた。

僕はナイフで鳥肉の一片を切りとり、ナハール君にならってそれを待ち構えている奴隷女に投げてやった。

するとかの女たちは、鎖を鳴らせ、それを奪おうとあらそった。

「どうだい、興味がわいてきたかい？」

ナハール君は笑いながら云い。

「客が来るとめす犬どもはよろこぶんだよ。噛みもしないで、あたらしい肉をやったりするからね。毎日の餌からみれば、それは大変

な御馳走なんだからね。しかしあんまり良いものをやっているのと切角の餌を食べなくなるから困るんだよ。そんな時は矯正所へ送ってやれば良いのだけど」

と続けた。

僕はその奴隷を矯正するところとは一体どんなところだろうと、漠然と想像した。しかしそんな僕の心を察したもののか、ナハール君は微笑をうしなわずに云った。

「奴隷矯正所というのは、まあいえば、監獄みたいなところだよ。とてもむごいことをされるので、奴隷どもは大変おそれているんだよ。お望みなら、いずれ機会を見て見学させてあげても良いけどね」

そんな話を聞きながら、そろそろ満腹しはじめたので、僕は口で食物を拾っている奴隷女や、檻の中で苦しそうにかがんでいる奴隷女などを眺めていると、ナハール君が、

「そろそろ、ほんものの余興にとりかかろうかな」

と云った。そして彼が合図すると、両手、両足を一本の太い棒に鎖でくくられ、二人の奴隷女にかつがれた、まるでとらえられたけもののような恰好にされた奴隷女が、つり下げられている手足の痛みに顔をしかめながら



あらわれた。

その奴隷女は、ナハール君の前までかつがれてくると、やっと床の上におろされ、棒を除かれて膝まづかせられた。

そして嵌口具をとられると、恐怖にふるえる声で云った。

「わたしめは、御主人様のいたわり深いお扱いにもかかわらず、逃亡いたそうとした愚か者でございます。こうして捕えられ、すっかり心をいれかえ、御命令にしたがうつもりでございます。どうか御存分に罰をお与え下さいませ」

嵌口具をとられた、その顔を見れば、未だ十七、八才のあどけなさの残っている少女である。

しかしナハール君の表情には、いささかのあわれみも浮かんでいなかった。

「逃げようとするなどとは図々しい奴隷だ。

逃げられるはずはないじゃないか。おまえの足の裏と手の平と額の両隅には入れ墨がしてあるから、どんなに上手く隠したって見つかるに決っているんだ。それに、その入れ墨は一と月宛に薬をのんでいないと非道く痛むんだ。そろそろ薬のきれる頃だが、その前に捕えられたのは幸運といえはいえるだろう。も



(生きな椅子)

っとも、当分のあいだは薬などやらないがね。入れ墨が暴れだし、おまえの身体をいじくりまわし、苦しみにのたうつ経験を一度するが良いのだ。そうすれば心根も変わるだろう。いずれ矯正所へ送ってやるが、その前に僕のおそろしいところを一度見せておいてや

ろう。他の者への見せしめのためにもね」その奴隷女には、早速ゴム製のパンティが穿かされた。

「苦痛に失禁して、僕の住居を汚されちゃ不愉快だからね。もっともそのような時には、当人になめさせてきれいにするんだけど」

とナハール君は説明した。

やがて資道具が運ばれてきた。それは巨大な水車のような車と、その下に敷かれたピカピカ光る鉄板で出来ていた。

奴隷女は首枷と、手枷と足枷を鎖で連結され、その鉄板の上に立たされた。

「見ていれば分るけど、最初にちょっとあの鉄板に電気を流してやるんだよ」

とナハール君は説明しはじめた。

「すると奴隷の足の裏がそれを感じてとび上る。鉄板に落ちればもちろん電気が待っている。仕方なしに水車にとびつくわけだ。しかし水車は回り、奴隷の身体を鉄板に近づける。説明はこれくらいにして実物を見ていよう。その方がずっと面白いからね」

ナハール君は無雑作に、傍らのスイッチをひねった。

すると余程強い電気が通じているのであるうか、奴隷女は悲鳴と共にびよんと、激しい



勢いではじかれたように跳び上った。

しかし身体は重力の法則通り鉄板の上へ落下せざるをえない。

またしても悲鳴と、はじかれたような跳躍……三度目に、奴隷女はやっと水車の一端に、鎖で縛られた不自由な手でしがみついた。もちろん水車は動きはじめ、切角しがみつきの電撃から逃れようとしている奴隷女の身体を元の位置におし戻そうとする。

やがて悲鳴と、気狂いじみた跳躍が再開され、ふたたび奴隷女は水車にしがみつく。そして又しても鉄板に触れ悲鳴をあげる。

今度は奴隷女は、しがみついた水車をよじのぼろうとしはじめた。しかし鎖と枷に縛られた手足が思うように動かず、よじ登るより先に足先は鉄板についてしまう。

そして又しても悲鳴と跳躍。

「ああして運動している中に、水車の回転はすこしずつ早くなってゆくんだよ。」

ナハール君は食後の葡萄酒を口に含みながら、面白そうに説明した。

「それだけあいつの足は鉄板にくっつかざるをえないし、同時に水車も早くなるという訳なんだ。それにもう電気を送ってやる必要はないんだよ。あいつが回している水車のおか

げで、あいつをとび上らせるに足る電気は充分おこせるんだからね。全く合理的な処置だよ。」

水車は回転を増し、悲鳴と跳躍はますます間をちぎめ、殆ど間断なくおこなわれるようになっていた。

「水車が早くなるにつれて、電圧もすこしずつ上ってゆくんだよ。もっとも障害を与えるほどには上らないようにしてあるんだけど。」

やがて奴隷女の悲鳴はかすれてきた。それでも鉄板から逃れようとする跳躍はけいれん的につづけられていた。

「僕は矯正所へ送ることにした奴隷は、その前に必ずこの水車踊りをさせてやることにしているんだよ。」

「かしなせ横へとんで鉄板から逃げださないんだらう」

僕はやっと疑問を提出した。

「不可能だね」

とナハール君は落着いてこたえた。

「だいいち鉄板は相当広いし、電気の衝撃は足が鉄板につくかつかないかにやってくるんだ。横にとぶ余裕なんかないよ。それにあの鉄板の上に立たされると、物を考える暇なんかなくなるのだね。電撃を避けるために真っ

直ぐ跳び上るのはこれは動物の本能かも知らないね。それに仮にそんなことを考えるたいしたやつがいたとしても、代りにもっときびしい責めにあわされることが分っているんだから、ああしてまっ直ぐ跳びつづけるよりないんだよ。」

奴隷女は鉄板の上に、投げだされたように倒れた。ゴム製のパンティを除いては、鉄の枷と鎖はどうしても電流をうけざるをえない。

奴隷女の身体は、鉄板の上ではじかれたようににびんぴんぴんと踊り狂い、そうしながら起ち上ろうととして、口を大きく開き、声にならぬ悲鳴にあえぎながら、いろんな不自然な恰好をとった。

しかし一度倒れた身体は、枷と鎖と、絶え間ないのうちの跳躍にはばまれて、どうしても起き上がることができない。

僕にはそのえびのようにはね回り、苦しみもがく奴隷女の、喘ぎや心臓の鼓動までが聞こえてくるような気がした。

やがて水車は回転をゆるめ、しばらくして停った。

当然、水車がおこしていた電気も停り、奴隷女は鉄板の上に、ぐったりと、まるで失神したように横たわり、動かなかった。



その身体は汗で光り、大きなあえぎが全身を波打たしていた。

「さあ、起つんだよ」

皮服の女は、奴隷女の首枷に引き鎖をつけ、それを荒々しく引っ張りながらうながした。奴隷女はよろよろと、大へんな努力をしながら立ち上った。

「さあ、御主人様によくお礼を申し上げるんだよ」

二度ばかり、よろめく太股に鞭をあてられた奴隷女は、唇を、腕を、いや身体全体をワナワナとふるわせながら、やっとナハール君の前にまでたどりつき、膝まづいた。

「おしおき有難うございました」

その声は恐怖と疲労にかすれ、やっと聞えるか聞えないかだった。

ナハール君はそ知らぬ顔をしながら、葡萄をなめていた。

「もっと大きい声でお礼を云うんだよ」皮服の女は奴隷女の背に鞭を振って云った。

「ヒーッ、有難うございました。おしおき有難うございました。」

その声は、奴隷女の精一杯のものらしく、前よりわずかに大きいものだった。しかしかすれて声には依然として変りはない。

ナハール君は、残酷にも未だ知らぬ顔をしている。

また奴隷女の背に鞭が鳴った。

「ヒーッ、おしおき有難うございました。」

やっとナハール君は、葡萄酒の杯を女体テーブルの上に置き、奴隷女の方を流し見た。

「むさい、早く矯正所へうせろ」

そしてまた杯をとりあげた。

皮服の女にうながされて立ち去る奴隷女の表情はいたましく、その足どりは老人のようによろよろしていた。

「あれを見せておけば、当分逃げだそうなどという奴隷はいなくなるよ。あたらしく入ってきたのは別だけどね。あれも、その口なんだ。僕の国には自分の娘を奴隷に売ろうとするような貧しい国民が多くてね。もっとも結婚する場合でも、娘は男に買われる習慣があるから似たようなものだけど、それにいろんなルートを通じて、世界各国から輸入される奴隷がいるし、そんなのをあわせれば、僕のところだけで日々十人ぐらいいは新顔が増えるんだよ。矯正所へ送って、片輪にされたり、殺されたりして減少する頭数は、結構これで補充がつくというわけなんだ。それから未だ反抗奴隷が二匹と、奴隷同志のいさかいをし

たのが二匹と、器物破損の罪を犯した奴隷が三匹と、そのほかにもちょっとした罪を犯した奴隷が十数匹いるんだよ。今、そいつらは檻に閉じこめてあるけど、これから懲戒しなくちゃならんだ。でも長い旅をしてきた君は疲れているだろうし、そう急ぐことでもないから、ゆっくりやろうと思うんだけど、君が希望するなら、これから続けても良いよ。どうだね？」

ナハール君の言葉に僕はある誘惑を感じたが、疲れもあり一応今日は辞退して、又の日に、ゆっくり拝見させてもらうことにした。

「そう、その方が良いよ。はじめての君にとっちゃ、今日のやつだけでも多少刺激が強すぎたかも分らんからな」

ナハール君は笑いながら云った。

そして僕が輿に乗り、案内された寝室には、安楽椅子と同じ構成で、ねじ曲げられ、組みあわされた奴隷女のベッドが置かれていた。椅子やテーブルで慣れていた僕は、疲れからくる睡さも手伝って、その上に横になり、丁度頭のところに突き出ている大きな乳房を枕に、ぐっすりねむってしまった。酒と、満腹と、そしてひそかに食物にいれられていたかも分らない睡眠薬が、僕の熟睡の、疲労より重要な原因であったかも分らない。

(つづく)



# 肥満体狂崇

河場象之助

崇 狂 体 満 肥

147

その頃、私の体内には不思議な情念が渦巻いてどうにも仕方のないことであった。いつからそんな変てこな性癖が、私に巣喰い始めたか自分でもよく判らないのであったが、兎に角、そのため何も手につかないのであった。私はその当時、医大予科の学生だったのであるが、そんな変挺な情熱の萌しはじめてからというものは、勉強も運動も親しい友人と話すことさえ何故かいとわしい気持になったことであつた。それは若さのもつ一図の感情といつてしまえば、それ迄だが、私にとって、それを解決せぬことには、勉強も何もかも凡て無駄なことだと思えるのであった。

私が情熱をもやしたのは女性ではなく或る種の男達なのだ。といえは「何だ珍しくもないソドミアか」と云われそうだが、正にその通り新味のない事は私も認める。だが私にとってには私の人生の最重要なことなのだ。この性癖のみが、私の人生のすべてではないかとさえ時には考えた程なのだ。私にとってどんなに重要な事柄であつたことよ。その時代の若い学生に見られるように私は朴歯を響かせマントをなびかせて、その古い大都市の繁華街を、別に何の用のあるのでもなく、毎日のようにさまよっていたことであつた。

新鋭詩人から貰つた黄色い詩集を手にして横町のうすぐらい喫茶店でコーヒ一杯で何時間もねばったり、そんな所で友人達に会えば、判りもしないのにカントがどうの、ヘーゲルがどうのとかだべったり、果てはあやしげな性慾論をぶつたことであつた。だが性慾といえは、私の性慾はしゃべっている事とは似てもつかないデフォルメされたものなのだから、得意になつて喋っているのが、それは虚偽に満ちていて、だんだん苦痛になつて来たというものだ。私は女性に対して何の興味も湧いたことなどないのだから、なのに、どうしたわけだろう。或る種の男を見た丈で又考



えた丈でも、とめどもない感情は流れ、どうにも物狂わしいことであった。

それは肥満した男性で、私とその性癖に氣付いてから程なく、とりわけ中年以後の肥えた人々に対して一層の熱情を抱いていることを知った。マントをなびかせ都大路を闊歩していても、どこかの肥満体の重役タイプの人などが歩いて来たりする時に、もうどうにも私の血液は或る方向へとめどなく流れて行って仕方ないことであった。そうした立派な人に会った日は寢床へ入っても、その幻影がつまでも頭にこびりつき眠ることなど到底出来ぬのだった。

そうした男を心に画いて様々な空想に私は飛んで私のみの持つ楽しみの中へと陶醉したわけだ。何とはかない、だが何という素晴らしい法悦であったことか。私がはじめて気づいた事なのだが、私はこの上ないマゾフィストの一種なのだった。何故なら、私の夢に画くは常に傲然と肥満した口髭のある紳士で、常にその人の家来とか召使とかいった役を私自身に与えていたのだったから。

私の御主人は勿論私を愛してくれる。常に私を意のままになる家来として愛してくれるのだ。この上なく私は旦那様を尊敬して居

り、その人の為なら、封建時代の殿様に対する家臣の如く水火の中でも飛びこむのを辞さないのだ。その命令ならどんな無理でも喜んでするというものだ。旦那様は暴君であって、御氣嫌斜なれば私をば足げになさるのだ。そんな場面をどんな興奮をもって私は考えたことだろう。そして太鼓腹の殿様が私を足げにし、私を踏みつぶすという荒唐きわまりない漫画の如き図を画いては、悦に入るのであった。殿が入浴の時には私が衣類をお脱がせしお背中をお流しし、ああそれは空想とはいえず、私にとっては法悦という如き生やさしいものではないのだ。

どぎつく胸を休めるため煙草を喫いサモワールのコーヒを深夜沸さねばならぬことであつた。寢床に戻り天井の節穴を眺めているといつしか又肥大した殿様が現われて苦めるのだ。私はある落度のために殿様のごきげんを損ない殿のお坐りになる所の敷物にならねばならなかったり、はては犬になっているのだった。犬の私は凡める事をして御氣嫌を取り結ぶ。

私はいつか夢路の中へと入るのだった。殆んど毎夜、一方そうせぬ事には、私はいつか寝つかれないようになってしまったからでも

あつた。夢の中できまって同種類の事をくり返すのであつた。その殿様が日本人でなく、どこかアラビアあたりのサルタンだったり、フランスのいつか見た映画の中の王様である事もあつた。時にはいつか街で見かけ無意識にその人の後をつけていた所の立派な紳士のこともあつた。何れにしる肥えた富裕な男であることには変りないのである。

そして驚いたことに肥満した男も私も全裸なのだ。私はそんな男の太った身体に寄りそつて常に私は主人の哀れな而も寵愛をうける僕なのだ。夢というものは覚えてしまうと、記憶の外へ逃げいくら思い出そうとしても、思い出せぬ奇妙なものなのだが、そして唐突もない断片のみが、思いがけぬ時になり鮮かに出現するものなのだ。

一つの夢を私は今でも鮮明に思い浮べることだ。広いシャトーのある風景、その一隅で私は釣をしている。波紋が散ると澄んだ空や木々の緑やシャトーが水に映るのだ。口笛を吹きつつ私は糸をたれるのだ。それは面白いようにつれるのだ。様々な大小の魚、はては三角の魚や人間の顔をした魚まで数え切れぬ程釣ったことだ。それはインターバルなど殆んどない程の速さなのだ。私はふと気づくと、



私の廻りに人の気配のすることだ。

見れば家来をひきつれた城主が肥満した体を王衣と王冠に包んで、微笑して立っているというわけだ。私は直ちに平伏したことであった。するとにこやかに王様は「苦しゅうない、頭をあげい、そちの名

は何と申す」「そちは大変な釣りの名人じゃな」そんな言葉をいただき、王は御満足で私をば家来にして頂くといいった奇妙な夢なのだ。私はこの夢をどんなに喜んだことか、もう一度見たいと思ったのだ。そして続きを何度見たいと思ったことか、でも不幸にしてもう私の夢に現われてはくれなかった。肥満した王様のお側に仕える私がせめて夢の中でも肥満体への思いを満してくれるのであったなら、どんなによかったであらうに。その続きをまるで子供のように色々私は考えたことだ、王様の足から

太鼓腹からお尻からむさぼるようにさするのだ、常に私は大王様お気に入りのお伴としてその側に侍っているのだ。

私の夜毎の夢も、いつかマンネリズムに陥



ってしまったのも、尤もではないか、何故なら、私にとってその変った性癖をなくさめ得る手っとり早い方法が、上述の空想のなかにしかないとしたなら、ああそれは悲しい事に現実の出来事ではないのだ。この判りきった

ことが、その頃の私にとって、は、この上なく切ないことであったのだ。そして現実にくうした歓喜の世界に浸ることが可能だろうか私の捉える大問題だったのだ。

色々とは考えたのだったが、到底それは不可能に近かった。せめて出来るささやかな喜びをだが私は発見した。

それは銭湯なのだ。そこなら裸体の肥満体を見れる！何故もっと早く、それに思い到らなかったのだろう。私はその日から古い都会のあらゆる銭湯へ通ったのであった。そこで理想の体軀の持主を探し求めた。繁華街の裏手の湯に時々最も理想に近い男の来るのをいつしか知るようになった



た。すぐにそこで時々見る  
数人の内、私の最も好む人  
が心を捉えはじめた。その  
人は毎夜八時頃、きまって  
そこに現われるのを発見し  
た。それは五尺七寸恐らく  
三十貫はありそうな壮大な  
五十男だった。

便々とした腹の素晴し  
さ、口髭の立派な堂々とし  
た風貌、それは夢の中の王  
様と、寸分違わぬではない  
か。豊満な太り方でべっ  
りとついた腹の脂肪がゆら  
ゆらと揺れる頼しさ、遅し  
く太い首や胸、だが何と云  
っても太鼓腹こそ私を恍惚

とさせるのだった。夢中になって私の理想に  
近いと考える体に見とれるのだった。私はそ  
れから毎日、その時刻にそこへ通いつづけた  
ことだ。下宿から三十分もかかる銭湯へ、そ  
れは考えた丈でも胸躍る日課だった。

そして待っていて来ない時の失望はどん  
なであったろう。仕方なしに湯から上って衣  
服をつけている時、その人が入って来た時に



どんなに私は後悔したろう。もう少し辛抱し  
て湯に入っていればよかった！そこで出来る  
丈ゆっくりと私の着物をつけたものだ。もし  
てその人の脱衣する光景を、そっと見たもの  
だ。夏のことで浴衣一枚のその人は悠々と浴  
衣を脱ぎ、太鼓腹をゆらしながら大きなパン  
ツを脱ぐ、そしてタオルを持って湯槽の方へ  
ノッシノッシと歩くのだ、当たり前なことなの

レがあるのだ。その人は尿意をもよおしたと  
見え、浴槽から出てそのままトイレへ行くの  
だ。その得がたい機会を思っ私は一寸緊張  
したことだ。その人が帰って来るのを見計っ  
て気どられぬように——気どられる筈はない  
のだが——尿意もないのに同じ所へ行ったの  
である。その便器の所へ行くのだ。  
幸い他に人は居ない、その上あの旦那の後

だが私はどんなに興奮して見  
入ったことか、二三日後、その  
人が湯槽に入ろうとする時故  
意に、その人の張り切った臀  
部に私の手がふれてしまった  
様なふりをして僅かに豊かな  
肉体に接したという喜びに  
浸ったことだ。或る時など混  
雑を利用して、太鼓腹に少し  
ばかり触れることも出来た。  
どんなにいつも思ったこと  
か、この人の下僕となり色々  
な願望を満せたらと思つた。  
その中、私に満足をあたえ  
る機会が訪れたことがあつ  
た。というのはその銭湯には  
湯槽のある浴室の隣りにトイ



には一人も来なかった。もう一つ幸いにもそこには、便器は一つきりだったし大便の方はないのだし、その上私に最も幸運な事には、その便器がつまっているではないか！ ああそこにはなみなみとたたえられたあの人の尿があった。あふれるばかり美しく輝いて、このようにすべて私の為になっているような好条件を何度感謝したことだろう。

あたりに人の居ないのを確めてから私は勿体ない気がして、手にもったタオルをその中に出来る丈多く浸み込ませたものだ。そして幸運は重なるもので、そんな事の間誰も入って来なかった。安堵の胸をなでて浴場を出たわけだ。タオルが使えぬので仕方なしに体を拭かずに服をつけ、神酒のしみこんだタオルを大事に持って帰ったのである。

○

その夜からそのタオルが最も貴重な物となったのは勿論だ。大事そうにそれをおしいただいては、あの時の神酒の味を思い出しては悩しくなるのだった。

いつしか華かな夏も去り虫の音しげき秋となっていた。私はその前二月の休暇で帰郷していたのだ。貴重なタオルを布地につつんでトランクの底にかくし汽車に乗った。この秘

密の自分へのおみやげを自宅の押入にかくして時々とり出しては、あの肥満の人へ思いを馳せたのだ。そしてなつかしきあの人に逢うためにその日も又銭湯へ行く、するとそこに懐しい肥体があるのだ。休暇中毎日毎日思慕した太鼓腹が悠々とそこにゆれているのだ。もうたまらなくなつて湯槽の中で叫声をあげそうになつてしまつたが、それをやとおさえた。何故か顔の赤らむ思いであつた。我慢せよ、私は私にいいきかせたものだ。こんな楽しい秘密とお前は別れるというのか？ 自制しなかつたら、一切は終りじゃないか、だがその人の便腹を見ると、私の胸は高鳴り、心臓が破裂するのではないかと思う程であつた。

それ以上、そこに居る事は卒倒するような気さえして早々に上つて外へ出てひんやりとした夜気にあたつた。平静にかえってから湯の前の本屋に入つてペラペラと頁をめくっていた。ふと外を見ると、あの人が今や家路につくのを見たのだ。浴衣はもうセルの単衣に交つていた。秋の来たのを感じながら無意識に後を追っていた。悠然たる歩行、自信に満ちた歩行だった。頼しい後姿、酸いも甘いもかみわれた巨木の如き後姿だ。堂々たる歩き

方のペースの何という乱れなき事よ。ああ貴方は勝利者なのだ！ その人に走り寄り、私の思いをぶちまけようと思つた。でも私は危くも自制したのだった。

○

私の苦悩は益々つづいて行つた。それから二日後、又もあとをつけて、そうした思いをぶちまけようとしたが駄目だった。仕方なくその人の家をつきとめた。大きな薬屋の主人であつた。それから何度その前を通つては、その主人を見ようとしたことだろう。そして銭湯、私は回数を減らさねばならなかつた。というのはその肥満体を見やると、もう胸が高まつて卒倒しそうになるからだ。こうなると苦痛というものではないか、夜が来ると私はその人の画をかいて暮してしまうのだ。何故ならノートを開いて勉強しようとしても、いつかそんな画をかいしているのだ。冷静になつて見ると甚だ馬鹿げたことと考へ、こんな愚につかぬ思慕を忘れようと一心に本を読んだりした。そのため忘れ去ることも出来そうに思えた。

実際試験で忙しくこうした想念も一時おあずけの形とならざるを得なかつた。だが、ふと一人孤独の感情にとらわれる時に、又その



面影が頭の中を去来するのだ。払いのけようとすればする程、鮮明の度を増して―再びあの肥満体を眺めるといふ慾望に勝てなかった。変てつもない湯槽や蛇口、多くの裸像、ああそのなかで一きわ遅しくも肥満した、あの人の傲然たる姿が、今日もどっかとあぐらをかき、その布袋様の如き色つやのよい腹を洗っているではないか。その巨体に近づく、私の存在など眼にもつかぬ如き様子で彼は洗っている。私はこの上なく彼を憎しくなったことだ。『こんなな思いを寄せて苦しんでいるのに、私は貴方への思慕の告白さえ出来ずに悩んでいるのですよ』私はこう心の中で云ったことであつた。

○  
私は、それから益々強い思いに沈んだことであつた。そして遂にとんでもない名案を考へたことであつた。肉体にふれることが不可能なら私の出来る奇妙な行為であるのだ。肉体でなくても、あの人の肌につけるもの、着物、襦袢、パンツ、褌、この中のどれかを自分の物にするのだ。私はこの着想がこの上もなく非凡な、オリジナリテイのある方法のように思へたことであつた。そして世にも類のない楽しい行為に思へた。  
そして一夜眠りもせずその方法について

思いをめぐらした。番台の眼を盗むということが第一、それから彼の人の眼を盗まねばならぬ、そして他の客にあやしまれぬ如くせねばならない。それから又あの人は何時も鍵のかかる箱の中へ衣服を入れずに、籠の中へ入れることも思い浮べた。彼の人の籠の隣に私も脱ぎ殆んど私の籠をそのごく近くに置き、あの人の一番上にのせるパンツを知らぬ振りで私がいましてしまう。私はするとパンツをはかないで行った方がいいかしら、そうだ。脱ぐときに眼につかぬようにしてズボンを脱げばよい、パンツとズボンと同時に脱いでしまふ人だって居る位だから、いや―ここで私は殆んど声を立てて笑ってしまった―彼の特大のパンツを私がいいたなら、胸の上まで入ってしまうだろうということ考えたから―やはり人の見てない内にそつと丸めてタオルにくるんでもって来るのが一番よい―不思議なことに私はこんな馬鹿げきつた事を殆んど夢中になって考えたことだ。それは考えても愚にもつかないことなのだが、私は真剣そのものだった。そして私にとって、幸運にもその計画は見事に成功をもたらししてくれた。

何度も何度も隙をうかがったのであるが、その都度番台の女がこちらを見ていたり、人が見ているようであつたのだ、遂にある日、成功したのだ。それは日曜のため

か、珍しい程客が多くて、私の行為が客の混雑のためにまぎれたためであらう。私はすばやくタオルにパンツを包みまわして、何気ない顔をして外へ出たことであつた。成功！  
何という勝利だ。こんな喜びは誰にも判るまい。私はそれは嬉しくなつて、横町のスタンドで安酒をひっかけたのであつた。だが急に不安に襲われたものだ。彼が今頃脱衣場へ上つて、あの籠の前で着物をつけようとして、パンツのないのに気付き、どんな顔をするだろう。一寸気の毒なような気がして来た。着物一切を盗まれたわけではないのだから「不思議なこともあるものじゃ」などと呟きながらノッシノッシと巨体を重そうに運ぶ姿がちらついて又激しく興奮したものだ。一寸まわつて来たせいかあの素晴らしい太鼓腹への狂崇が五体の中にうずく、そして今度は何という卑劣な事をしたものだと悔いの念が湧く、讚美する人のパンツを盗むなんて―少したつと再び計画の遂行がこの上なく嬉しく「何て、俺はオリジナリテイに富んだ男だろう」と大声に叫んで女を驚かせたりした。確かに安酒に少々酔つていい気嫌になつていた。そして夜気は頬に快く大きなパシツへの喜びに浸りつつ歩いたことであつた。酔が完全にさめたのであらう。下宿に近づくとき又不安となつて来た、若しやあの時誰か見ていたなら―私の



奇妙な行為を皆知ってしまうようになったら——恥しさに後を見たものだ、だが誰も私を追っては来ない。そう思うと不安は再び一掃されたのだ。そしてそのパンツへの思いが私を夢中にした、その大きなパンツをはいて室中歩き廻るのだ、そしてその匂いをかきなめまわすのだ。

ああ何たる素晴らしい法悦ではないか、あの

## 〔映画短信〕

### 最近の縛り映画

東山映史

東映作品、大友柳太朗主演の「むつつり右門捕物帖、紅蜥蜴八へにとかげ」は松田定次監督が本格的スリラー篇をめざした娯楽捕物帖。物語は江戸八百八丁を恐怖のるつぼに落し入れた殺人鬼、紅蜥蜴をめぐる右門の活躍を描くもので、この中で、殺人鬼紅蜥蜴と関係がありそうに見えるナゾの女、料理屋の仲居頭。丘さとみ扮するお直が、奇怪な動きをするが、最後に紅蜥蜴といっしょに捕えられ、後手に緊縛された縄つきで、満員の芝居小屋の中をひかれてくる。

近頃、中々色気のましてきた丘さとみが、後手に縛られ、うなだれた姿を花道の上をしおしおとひかれてくる、ちょっと哀愁を帯びた緊縛シーンだった。そしてサジキで縛られ

便々たる腹の下敷きになって苦しさに喘ぐという私の年来の夢を、そのパンツによって実感の出る空想のプレイにさえもすることが可能なのだ。太鼓腹の前で平伏する空想の図もパンツのおかげで実感が倍加されるというものだ。そう思うと私は下宿への道が何とも待ち遠しく思えるのだった。そして高級車を走らせる人々も、青春の楽しみに酔っている男

たまま、殺人をテーマにした舞台の芝居を眺めている。そして最後は右門のはからいで毒殺の罪を見のがしてもらい、恋人の紅蜥蜴と結ばれるという。

この映画で、もう一つの見ものは、紅蜥蜴の拷問シーンだ。殺人犯として捕えられた紅蜥蜴が、進藤英太郎扮するアバタの敬四郎に「白状せよ」と責問（せめとい）にあう。

両手を天井に高々とつられ、ムチでビシビシとたたかれる。床から高い吊り責で迫真的演技。それだけ紅蜥蜴に扮した戸上城太郎は一寸いたいたしかった。「長い映画生活の中で、こんなはげしい責めにあったのは、はじめてで苦しかった。」と紫色にはれ上った両手をなでさすっていたという。

また、大映作品、山手樹一郎作の「江戸へ百八十里」が久しぶりの橋蔵、嵯峨三智子コンビの明るい朗らかな時代劇だが、この中で嵯峨三智子扮する福姫が、すばらしいサルグ

女の姿も、皆下らない人種に思え「こんな私独得の陶醉を私のみが知っているのだ、ざまを見る」そう呟くのだった。

読者の方々は、何という馬鹿らしい男なのだと思われるかも知れないが、必ずや私のこの奇妙な告白に、同感なさる方も居られるだろうことを、確信していることをつけ加えるものだ。

—終—

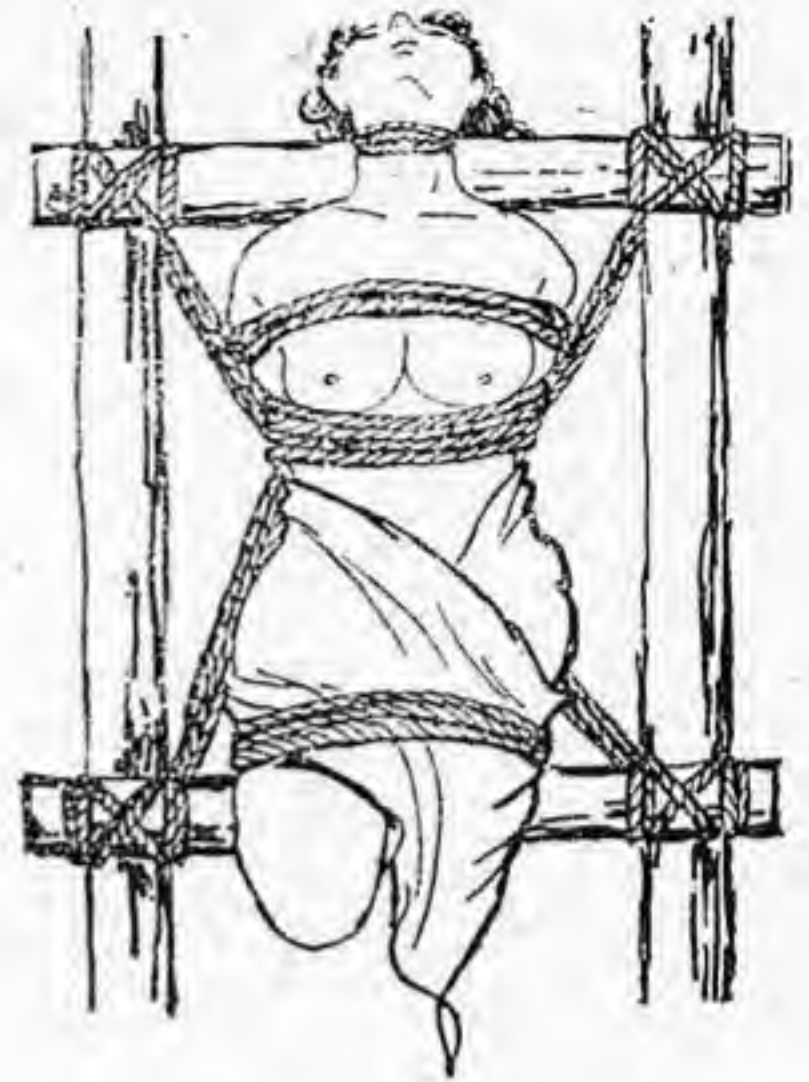
ツワ、緊縛シーンを見せてくれる。

橋蔵は若殿亀之助と双生児の兵馬の二役。お家騒動にまきこまれた亀之助が毒をもられ倒れる。その代役となった兵馬が將軍の娘福姫と見合いをして、二人が江戸への道中をすれる。だが、その途中、反対派の刺客にねらわれる。それで、兵馬はついに、福姫と手に手をとって逃げる。

だが、追手の追求は急だ。そして、ついに福姫はおびき出されて、兵馬を倒す人質となる。森の中の荒れた寺の中に手足をしばられる猿グツワをはめられる。嵯峨三智子の身もたえる姿はさすがに美しい。二カットほど、床の上で不自由な身体でうごめく姿を見せてくれる。そして、刺客を倒した兵馬に、刀で縄を切ってもらって助けられる。

だが今度は、兵馬が名をいつわるフタイの浪人として捕えられる。橋蔵が高手小手に縛られて引かれていく。後手縛りをはつきりと見せる。橋蔵ファンは、ちょっとしびれるシーンだろう。





## 「体験告白」

## 『綿ネルのお腰の感触』

福田 千 時

私は一つの秘密の楽しみを持っているのです。それは桃色や赤色の、あの起毛された柔らかな布である綿ネルを素肌にまいて、あの

何んとも云えない感触を味わうことでした。その内、これらのネルが主に女の人が和服を着たときの肌着たるお腰に用いられている事が分り、綿ネルのお腰フェチシストになってしまったのです。そして今では、一日でもネルを手ばなせなくなってしまうました。しかし夏だけはネルを着用出来なくて残念です。

以下その成行を少し述べて見ます。

私は小さい頃より綿ネルに心が引かれていたようです。その頃、知り合いの家に行って泊ることになった時です。押入から蒲団を出す時、私は綿ネルがたたんで入れているのを

見つけて、それがほしいと云って皆を困らせたそうです。

私が十四才ぐらいになるまでは、ただ綿ネル地だけに心がうばわれていたようです。これは私の家では誰もネルのお腰を使わなかったためでしょう。しかし私が十四才の冬の時です。親類の女の人が和服を着てやってきました。そしてこたつに入る時、裾が乱れて桃色のネル地が見えたのです。私はそれがお腰というものである事が分りませんでしたので、何故女の人が着物の下にネルをきているのが不思議で仕方ありませんでした。そして、その女の人が風呂に入っている時、私が何げなく風呂場の前を通るふりをして、戸のすきまをのぞいて見ました。それはあのネルを見

たかったからです。すると、その女の人が着物を脱いでいる所で、長じゅばんを脱ぐと、その下には上の所が白い布で、その下の長い所は全部桃色のネルで出来ているものをまいていました。私はそれを見ると何故か胸がたかまってくるのを感じましたが、見つかってはいけないと思いそれなりで終わりました。

しかし、それいらい、あの白い布と桃色の綿ネルで出来た布を、忘れる事が出来なくなり、いつかはそれを手にふれて見たいと思っていました。しかし、そのような機会もなく、半ばあきらめていました。ある日、友達の家遊びにいった時、その友達の姉さんがあの白い布と桃色のネルで出来たものをぬっておりました。私はそれを見ていると、やがて縫



い上り、それを払げてたたもつとして居る時、私の見ているのに気がつかれて、男の子が女のお腰なんか見るものではありませんよ、といいました。

この時、はじめて女のお腰というものが、どんなものかを知ったのです。そして色々の本を見てみると、お腰は和服を着た女の人が素肌になつたものだとなつたのです。それらしい、和服の女の人を見ると、きつとあの一ばん下には、あの柔かい綿ネルがピッタリまきついているのだらうと思ひ裾のあたりをそつと見るのでした。そして風呂などで裾が乱れると、たしかにチロツと綿ネルが見えるのでした。又和服をきて自転車に乗っている女の人では、よく綿ネルのお腰が見えました。そして女の人は、あんな柔かい綿ネルをいつも着る事が出来て、大変気持ちが良いだらうと思ふと、うらやましくさえなりました。

私が十六の時、私の家に女中さんがきました。三十才ぐらいの人で、名をきみ子といい、家では「おきみさん」と呼んでいました。又、おきみさんは大抵和服を着ていたので、私は彼女がどんなお腰をしているか、見たくてたまりませんでした。しかし、はずかしくて、そのような事も出来ずにいると、ある日、私

が学校から帰つて見ると、だれもいなく、おきみさん一人だけいました。私が帰つたのでおきみさんは市場に買物にいくので、私が一人入るすをする事になりました。するとあの綿ネルとお腰に対する欲望がむらむらとわき上り、おきみさんの部屋に入り、悪いながら押入を開けて行李や風呂敷つつみを開けて見ました。

その時、私は胸はどきどきして、手はふるえました。おきみさんは主に和服をきていたので、行李の中も反物やきものるいでした。

ネルがなかなか分らないので奥の小さい行李を開けた時です。その中にある柔かい桃色の綿ネルがお腰用にたつたのが5枚、赤色の長いのが2枚、桃色の一枚ありました。又その下には新しい桃色のネルのお腰が2枚、少し洗つて、もう起毛も少くヤワラカさのなくなったのが1枚ありました。そして部屋の隅に置いてある籠の中にある着物をめくつて見ると、その中に一遍も洗つたことのない新しいのと、少し使つてよごれた赤と桃色のまだ起毛の取れていない、とても柔らかな綿ネルのお腰を見つけたのです。

私はすっかりむちゅになり、前に出した綿ネルを部屋中に広げ、あのよごれた赤の綿ネ

ルのお腰をまき、桃色のをははすりしたりしている所へおきみさんが帰つてきたのです。そしてそのような私を、見られてしまいました。そこで私はあやまり家の人にはだまって出てくれるようたのみますと、そうすると約束してくれました。そしてまだ家の人が帰つてこなかったで、おきみさんは私にぼちゃんはそのなにお腰やネル地がすきなのとたずねて私がそうだと答えると、私が下着の上からあの赤色の綿ネルをしめているのを見て同じお腰をするなら下着を取つて直接ネルを腰にまいてごらんさい、とても気持ちよいのですよ、といいました。そして私は今でも桃色のネルのお腰をしているのですよといひ着物の裾をめくつて桃色のネルのお腰を見せてくれました。そしてあのよごれた赤と桃色のネルのお腰は明日洗うからよかつたら今晚までもかまいませんといったので、私はその2枚のお腰を夜ねどこの中でまいて見ました。その時のあのネル特有の感触は忘れる事が出来ません。それに一遍も洗つてなかったで、起毛も取れておらず、三十女の肌の臭もついて、とても柔かくほんとに気持ちよく楽しい一晚がすごせました。これが私をはじめて女の人がまつつたお腰をさわつたり自分の



腰にまいた最初でした。そしておきみさんのいる間は毎晩彼女の綿ネルのお腰をしていました。これは彼女も私の気持を分ってくれ家の人にも云わなかったので、何の心配もなしに心ゆくまで綿ネルのお腰をたのしむことが

できました。

その中、彼女がやめる時がやってきたとき、おきみさんは、私に二三枚ネルのお腰を上げましようと言われましたが、家の人に見つかるに困るのでことわりしました。しかし今でも

## <告白>

或るマニヤの体験から

### 「SよりMへの移更について」

木村 定吉

カメラ雑誌等に依るヌードの裸体美の観賞から、自分で実際にヌードを撮影して、そのモデルのポーズの不足分を自分の裸体で補ない、その姿態を眺めるのは、鏡に写る姿と違いフォトにした自分の極端な姿に何か心の内で満足していたのが、店頭で奇クを見てからは、急速に幼少エリのSへの潜在意識に目が覚め、優美な縛り強烈な責めと種々と空想の世界に迷いついに自縛自演で、そのスナップを収めて、コレクションの数を増し、全裸と縄の責めから着衣、特に女性下着の着用の責めに沈溺して、その下着の種類に愛着を感じて、コーセッ

ト、ブラジャー、ガードル、等々各種を集め、その入手に付いては、洋品店々頭に於ける羞恥心が快楽に変換する頃には、女装愛好となっていた。

一応女装のプレーに一時的に耽った頃、その姿態を自縛することについて、対手になるパトロンの存在を気にしてきたが、適当な対手のないまま自縛を行い、女装愛好と併行して、崇拜する女性の使用した下着に対する願望の渦にまかれ、此の頃、奇クの旧号時代で萩千恵子、伊吹真佐子、春日ルミさん等の撮影に使用した、ビキニ型、ブリーフ等の実費頒布等の記事が誌上にで

残念に思います。それから綿ネルのお腰をまとう事は出来なくなりましたが、よその家の物干や友人の家の風呂場等にある洗たくしかけの綿ネルのお腰を手でさわり、その柔い感触をたのしみながら、おきみさんのいたころをなつかしく思うのでした。

私が十八才の時、学校のつごうで一人で下宿する事になり、十月ごろより下宿生活に入りました。そして私の部屋の向いに物干があり、よくネルのお腰などが干されはじめられると、あの欲望がはげしく起ってきたのです。

ここで私の女の人の綿ネルのお腰について考えている事を述べましょう。女のお腰に綿ネルが多く用いられるのは、あの特有の肌ざわりからだと思うのです。ネルでも本ネルにはよい肌ざわりはしません。やはり綿ネルの起毛の多いものが一番肌ざわりが良いようです。私の好きなネルは起毛の多い桃色赤色の綿ネルです。又女の人のお腰がネルであることは、ネル地の両端のミミで分ります。又あまり洗たくすると起毛も取れて柔らかさがなくなるように思います。

新しいネルのお腰を少し女の人がしめていて汚れかけた時分のが起毛も取れてなく体臭もついて、しかも柔らかく最高だと思えます。私はこのようなお腰をさわらせてくれたりゆずってくれる女の人があればよいと思います。あのおきみさんのような女性に今一度



た事が有り、その入手になやむが、私はとうとう入手できなかった。

女性に対する自己のS的傾向は、この頃より逆に自縛の度を強め、自虐的になり、自己の緊縛は吊責、切腹等に変化して、浣腸の実行に依り内攻的な責めに、その責めの重なるごとにその美感に酔い、その度合の変化は、各種の液体から気体固体にまで及ぶも、過度の行動に依るマンネリ化と共に複数のプレーを願望して、此の頃から未完成乍らMに移更している自分で行う浣腸と相手から強制的に行われる羞恥をとまなう浣腸と比較して、その対象者の援助を求め、始め女性の援助を求め、後男性の援助を求め、対象者の得られない時、益々自虐的になり、自己を責めるMから他より責められるMを希望する様になり、始めは外的苦痛を嬌悪して優美な責めを希望していたのが、対象者の出現に依り、極度の緊縛を望み、ムチ打ロウ責等と併行した浣腸責めに依り苦痛が快楽に向い、その快感はMをなおいっそう満足なものにする。

完全なMになっても女王様のドレイになる事は、Mの人なら誰でもなれる訳ではなく、コプロ志願と一緒の場合のみ成立す

る。なぜなれば一般的な下僕労働だけでなく、トイレ代用等になると足首崇拝等と訳が違うからではないかと思う。この処理については、一般のM自認者でなく、強度のMでありコプロ志願者でなければ、完全なドレイとは云えないと思う。私はコプロ志願ではない。今でもSに対する潜在意識は皆無ではなく、何かのチャンスが有り、氣持の許せる女性なり男性が有れば、緊縛したいと思う事は強く残っており、元のSに逆転する。

現在の私はM的行動にのみ走らず、SよりMに移更する中間の課程で、一番欲張った言い方かも知れないが、各種各様の好みに応じられる様にセーブして反省しながら、プレーを行いたいと思っている。吊責めについては特に興味があり、特定の女性が有れば自分のアイデアを活してフォトを作成し、又私自身を吊られて見たいと願っている。相手のプライドを傷付けない様に、更に今後の奇クより新知識を吸収して新方面に伸びてゆきたい。

以上は私の体験から簡単にまとめたもので有り、暴言があれば各人各様なので各々の進む路は違うのですから御容謝下さる様お願い致します。

あいたいものです。又お腰は晒の部は代りに白ネルでつく太くしひものないものがよいです。

このようなわけで、私は洋装の女性には関心がなく和服着用の女性にだけ関心があります。話を元にかえて私が一人で下宿するようになってから、私は今一度ネルを肌にあふれて見たく思いついに呉服屋に桃色のネル地と仕立上りのお腰を買いにいったのです。すると店の女店員がこのネルなら肌に直接さわっても気持よいですといって出してくれた桃色のネルを三メートルと同じ生地で作ったお腰を3枚買いました。このときは本とうにはずかしい思いをしました。それくらい平気でネルのやわらかさがなくなると新しいお腰やネルを買いました。私は今二十一才ですが、まだ一人なので夏いがいは毎晩素肌に桃色のネルのお腰をまき赤いネルをかけてねています。これから妻をもらうなら、和服のすきな、しかもネルのお腰をよくする、そして私のような者を理解してくれる人がいたらと思います。色々大変な事をかきましたが、少しでもお腰フェチシストの方の参考となればさいわいです。

「終」

編集部の皆さま、モデル嬢着用済みの綿ネルのお腰はありませんか。又奇クの読者の女性でネルのお腰をゆずってくれる人はいませんか。あれば誌上通信に出してください。



## 下痢願望マニアの告白

## “トイレへの郷愁”



山田那津子

浣腸とか、下剤の使用とか人工的な下痢について興味を持たれていらっしゃる方々も、色々な作品を通じて拝見致しておりますが、浣腸

の過程の中、注入の方よりも排泄の方にも興味を持つと申しましょうか、愛好していらっしゃる方が、全般的な浣腸マニアの中に相当

いらっしゃる事を拝見しまして、わたしばかりではない事に秘かに意を強くしているもので御座います。

常日頃、仕事の関係で、お勤めをしておりますので、仲々暇がなく、お勤めや家事の合間に祭日などの予定外の規則的な生活以外の余裕が出来ますと、つい浣腸や下剤への郷愁にかられ、何となく落ち付かなくなりまして、下痢の欲望が起って参ります。

勤め先では、大勢の同性がいらっしゃると思いますが、仕事が事務的な仕事と、台に向って一日中、休憩時間の外は椅子に腰掛けて手先だけで細い部分品を扱う仕事がほとんどだという関係でしょうか、便秘に悩まされる方が随分多いように存じます。

休憩時間に診療所へ参りますと、風邪のお薬を貰う方、疲労のためにビタミン注射をされる方も多く見受けられますけれど、便秘でお通じがなく、下剤を貰っていらっしゃる方もかなり多いので御座います。

体質によって下剤服用によって平常の様にお通じが付く方も多いのでしようが、時々職場で、下剤を服んだらえらくてしようがないと、始終云っていらっしゃる方もありますし、あまり体には応えなくて、下痢のほうは相当激



しく起る方もあるらしいのです。

時々一緒にお薬を貰いにいかれた方で、仕事中に慌ててトイレへ立っていかれる方がありますが、大体平常胃の丈夫でない方の中には便秘と下痢が自然に不規則に交互に起って丁度よいお通じという状態がほとんどない方が多いようです。

わたくしも主として小用にですが、一日に何回かトイレに入りますが、その様なわけでしょうか、トイレの中が汚れている事が絶えません。私自身御承知の様な性癖をもっていますので、少々汚れている位は却って興味をひかれます。然しめったにひどい汚れ方には出会いませんが、年に何回かは便器ばかりでなく、便器の後の方から両脇にかけて扉の下の際間から流れ出る位にひどく汚れているのを見ることもあります。

不消化でひどい下痢を起したときは色も大體において薄く、噛み砕かれた形が其のまま残っていて、胃液や腸液が作用しないまままで混っているので実に生臭い、嫌な臭を発しています。

下痢の症候によっては、最初普通の軟便を排出して終った頃に、さして便意もなくほとばしる様に水様軟便を噴出する場合もあり、

この様な時に終ったつもりでお尻を持ち上げた途端に噴出したものならば、その他に相当な腸内粘膜の損傷による粘液が混っていることもあります。

胃の丈夫でない関係で便秘、下痢を繰り返す型の人の場合ですけど、不消化便と違って、よく消化されており、トロツとした式が多いようです。

下剤で通じをつけた時は、下剤がよく効いていますと、消化不良便に外規は良く似ていますが、臭いは悪くないのが多いようです。

わたし達のお勤めは寮生活ではなく全部が通勤なのですが、おトイレはお通じの方は平常ならば朝出勤前に済まして来るはずで、お小用の方だけに通うのが普通なのでしょうが今申しました様に随分トイレが汚れておりまして、水洗式でない関係から下の溜りの途中に斜のコンクリート壁がありそれに伝わってズリ落ちる様になっているのですが、そこにも平常の固型の排泄物はほとんどなく、大部分が流れる様なゆるい排泄物ばかり目に入ります。

勤め先で便意を催す位ですから、お通じが平常の方でなく、お腹をこわしていたりさきに申しました様に、便秘の治療に下剤を服

用したりして、不意に便意を催した方のものが大部分だと思えますが、トイレの汚れ方といい、あまりにも数が多いので驚くばかりです。共同便所や、駅の便所など、ほとんど例外なく汚れている事から考え合えますと別段不思議はないかも知れませんが、いつも毎日掃除をされる清掃係の方が、男子の便所に比べて、女子の便所は汚し方がひどくてしょうがないと、ブツブツ云われます処を見ますと、やはり女性のお腹はデリケートで、そこうも多いのか知らずと考えてはいます。

わたくし自身、胃腸は丈夫な方で今迄おトイレを汚す様な急激な下痢や、下剤を使わなければならぬような便秘には、ほとんど罹ったことがありませんでした。

今のお勤めをする様になってから、ふと気を付けて、今申した様な事に興味を覚えまして、トイレの中で下高便を見ては胸をおどらしている中に、妙は下痢に対する願望を感じる様になり、浣腸や、下剤の使用で満足させております。

こうして芽生えた下痢願望の性癖が今のお勤めをする様になりました、ふとした事からお勤めになれた気のゆるみに乗じる様に、本格的に出て参ったので御座います。



今ではお勤めと家事で規則正しい生活を致しては居りますけれど、祭日等の余分のお休には、どうしても一度プレイをしないと気分が落付かないので御座います。

矢張りプレイは下痢願望である他上、浣腸でも、下剤使用の下痢でも、切迫感があって、トイレを汚しそうになったり、下ばきを汚しそうになったり、時には自宅で外出しないときには、黒い二重まちの下ばきをはいて、切

迫のあまり洩らしたという想定でわざと保つだけの程度に出来るだけ多く洩らして見たり致しております。洩らすには浣腸ですと綿花で押えておいたり、バンドを使ったりすれば、大丈夫ですけれども、浣腸を特に大量注入する事自体人目をはばかりますので実現しにくく、つい軽易な方法として下剤を使うことが多いのが現状で御座います。

私共がプレイに使います使用法を御参考ま



でに、お知らせしたいと存じます。すべて下剤は一回量に限度がありまして、それを超えるとひどい腹痛が起ります。最初に休日の前日昼食前に一回量の適量を服みます。

次に夕食後に一錠位を服んでおきます。すると夕食后間もなく、第一回の便通がありますが、最初普通便で後大部分はダラダラした極軟便を相当大量に排泄致します。後は夜半に一回か夜明け方一回、更に朝一、二回かなり軟かい便を排泄しますが、後の服用を中止すれば午後になって少しゆるい位の便が出る丈で段々普通に戻ります。

この程度では、こらえていても噴出する様なことは、極端に我慢さえしなければ減多にないと思いますが、先程申しました洩らす様なプレイには量が多いし、又水分ばかりではありませんので、バンドでも服の部分から外へ洩れると思います。

そこで朝食前か直后にもう一錠服用して、お茶を盛んに飲むとよいと思います、そう致しますと、朝一、二回排泄の後、本式の水様下痢便が午前、午后にかけて何回も出ます。水分が欠乏致しますので、お茶を絶えず飲んでおきますと、一回分はさほど多くはありませんので、さっきの様にバンドでも、黒の



下ばきに綿花を当てていまして、股ゴムさ  
こ強くしておけば外へは洩れは致しません。

後服用しなければ夕方には下痢は止まりま  
して、翌朝お勤めに出る朝には清々しい普通  
便を通じます。もう翌日は下痢に悩まされる  
ことは御座いません。

こんなプレイを時々繰り返してはおります  
ものの、時には思い掛けない失敗を致すこと  
も御座います。

昨年でしたでしょうか、例によって自宅で  
プレイをする積りで、服用を始めました処、  
急にお友達にさそわれて、お祭を見に行かな  
ければならない破目になりました。休みの前  
日の昼の分と夕の分の服用が終った処で、ま  
だ第一回のお通じがありませんので、気持が  
よくないのです、出掛にトイレに入って見ま  
したけれど、普通便が少し出ただけであとが  
中々出てくれません。こうして普通便の残っ  
ております処へ、ゆるい水分の多い下痢が下  
って参りまして溶けますと、激烈な便意が来  
ることが判っておりすだけに、何とかして  
お断りしようとして一生懸命なのですが、相手は  
遠慮だと思われたらしく、どうしても聞いて  
貰えませんでしたので、やっとお腹をこわし  
ているから其の辺までといって、とうとう外

出してしまいました。

出かけに万一を考えて下ばきに大量の綿花  
を入れまして出掛けましたけれども、お祭ど  
ころでなく、トイレをいつも探しては歩いて  
いる始末で、ようやく駅前通りで別れました  
けれど、ホッとした途端にグッと催おして来  
て、あわてて駅のトイレへ駆け込みましたが  
紐を締めて下ばきを引き下した途端、かがむ  
か、かがまぬ内にザーッと噴出して参りまし  
て、いつも勤め先で他の方々がトイレを汚さ  
れるのを、胸をときめかせるとはいいい乍ら、  
冷たくながめておりましたのに、それこそ扉  
の下から流れ出るかと冷汗が出た位、いつも  
のプレイの時よりずっとゆるくなって水様に  
近くなった、その割にポリウムのある下痢  
便をトイレの中のタイル床の上に洩らして終  
い、次々と迫る便意にお腹一極の下痢便を激  
しく噴き出させてグッたりし乍ら、幸い挟ん  
であつた綿花でそそのの後始末を大体致しま  
して、早々に帰宅致したことも御座います。

帰宅致しました処、運動によって外で飲ん  
だ飲物が早く下りたのでしうか、又々タイ  
レへ駆け込んだ様な次第ですが、スリル充分  
で本格的なプレイで御座いました。

(おわり)

## ●今月の新版● フェチ・フオト

### 一 ゴムカバー着縛り

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(かは)

ぬめぬめとしたアメゴムのオシメ・カバ  
ーが身の自由にならぬ下半身にはかされて  
これから排泄の汚辱にむせばんとするカバ  
ー・プレイの三場面。ゴムの臭気が鼻の先  
に匂ってくる迫力。

### 二 脱がされたバンド

大手札二枚一組 二五〇円  
梨花悠紀子 略号(めに)

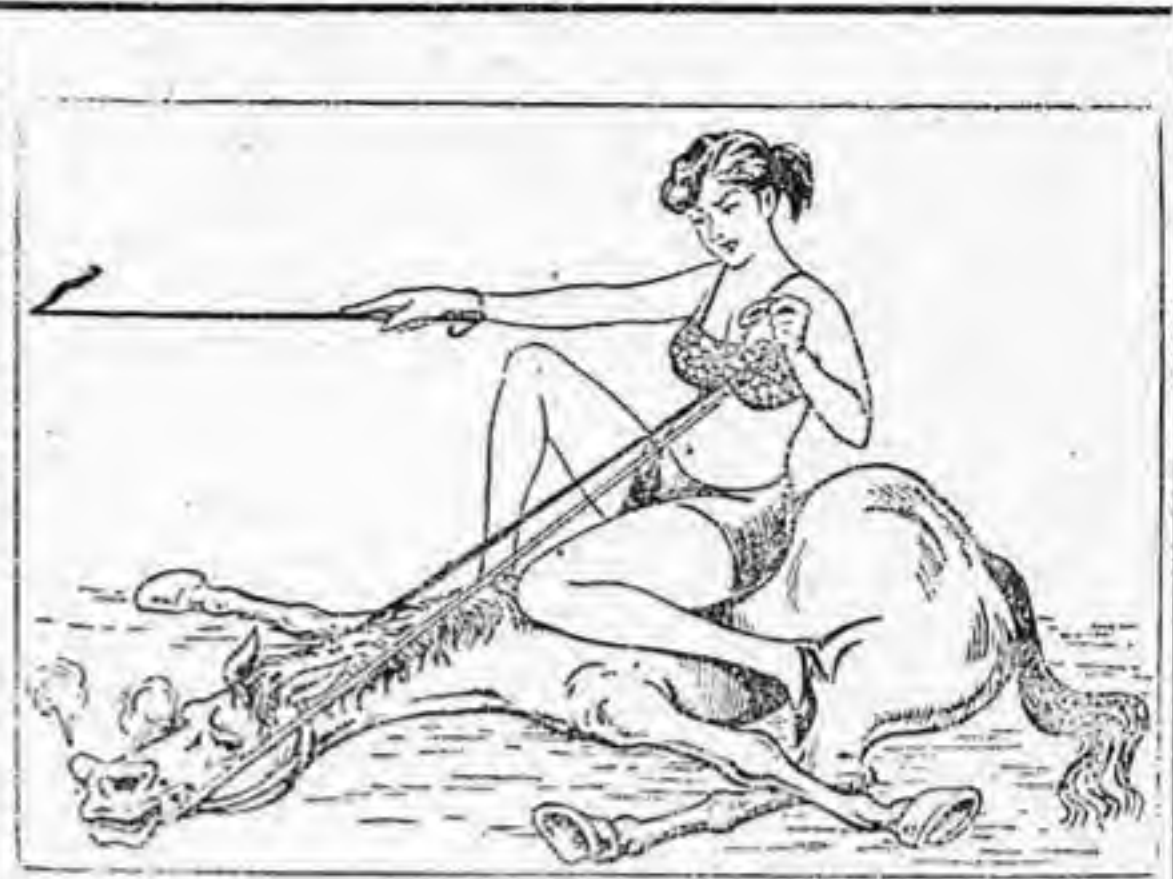
見るのは勿論のこと、手にとるのさえ恥  
しいメンスバンドを他人の手で脱がされる  
というは、なんといういらだたしいことだ  
ろう。でも、後手に括られてるんだもの。  
仕方がないわ。

### 三 アテゴムの猿ぐつわ

大手札二枚一組 二五〇円  
梨花悠紀子 略号(めほ)

後手にしぼられた身体には、メンスバン  
ドをはかされ、口には、バンドのアテゴム  
が鼻も口もすっぽりと掩いかぶさって猿ぐ  
つわをかまされてる息ぐるしくも又、悩  
ましい陶酔のひとつとき。





# 当代女武勇列伝

— 諸岡恵子の場合 —

諸岡堅雄

強いばかりが男じゃないと申しますが、と  
 いて弱いばかりが女じゃありませんまい。い  
 ま慶応大学の剣道部にいて男子部員と一緒に  
 合宿生活をしているあたくしの姪などは、こ  
 れこそほんとうの近代娘。鮮かな竹刀捌きで  
 ピシリピシリと男子部員を打ち据えているさ  
 まを見ていますと、むしろ強いばかりが女じ  
 ゃないと言いたい位です。

ほんとうに近頃の若い女の子は強くなりま

した。強くないまでも強くなりたいと願う女  
 の子の何と多いことか。六月十二日付「東京  
 新聞」に法政大と学芸大の女子剣道対抗試合  
 が紹介されていましたが「剣道をはじめた動  
 機は？」という新聞記者の質問に、学芸大の  
 小倉千寿子さんは「男に負けたくないから」  
 と答え、また大妻女子大の高砂栄子さんは  
 「女は弱いものという世間の観念に対して抵  
 抗を感じたから」と昂然と言いつつ、いま  
 す。つい数年前までは「健康のため」とか、  
 「美容のため」とか答えていたのを考えると、

何たる変り方でしょう。私の宅へは柔道をお  
 やりになっっている美しい令嬢や若夫人が「柔  
 道ママ」のこのあたくしを慕ってよくお見え  
 になり、その旺盛な征服欲をむき出しにして  
 気焰をあげたりなさっています。ところが  
 れはどこまでもサロンでの内輪話。ところが  
 前記女子大生たちは新聞記者に向って公式に  
 発言しているのだからびくつきします。

あたくしが柔道をはじめた頃は、柔道は礼  
 には始まり礼に終るとやかましく言われ、粗  
 暴な行い、みだらな言動は厳にいましめられ



たものですが、この頃の柔道女性の勇しいことは驚くばかりです。ボーイフレンドとふざけっこしても負けてやるという謙譲の美德などどこにもなく、衆人環視の中でも平気で相手を組敷き、降参させるのですからオドロキです。昨年夏、志賀高原のキャンプのとき、隣のパーティが夜中あまり騒ぐので注意しに参りましたところ、二人の女子大生が四人のボーイフレンドを相手に上になり、下になりの大乱闘——といっても喧嘩ではなく、ふざけっこであることは一目で分りましたが——。

見ていたところ、どうでしょう。一人のみるからに逞しいグラマー女性は、大腿をひろげて男ども三人の上に跨り、もう一人の小柄の女性は「女子プロレスのヘッドシーザーよ」と言いながら、一人の男の首を股に挟んで締め上げてしまったのです。そして言い草がふるっています——「おばさま、びっくりなさった？ あたしたち強いでしょ？ こうして押えつけてると、身体がじいんとしびれるみたい」

「でも、もう夜遅いんだから静かにしてね」「ええ。いいわ。男どもがわめいたら、あたしお尻で口をふさいでやるから……」

「お尻の下で口動かしたって外まで聞えやしないわ」

「あなたたち随分勇敢ね」

「こうでもしないと、こいつたち言うこときかないのよ」

あたくしたち若い頃は、ふざけっこしても大勢人が見ているときには、男にはわざと負けてやったものです。つまりハナを持たせたものですが、随分世の中も変わったものです。

## 二

とにかく女子の若い世代が、こう強くなつては、男たちも安閑としていられなくなります。女子の柔道人口だけでも、三十万から五十万といわれているこの頃です。これら逞しい女性が、これから続々と家庭に君臨するのですよ。

先日の新聞に、夫婦喧嘩でいつも負けてばかりいる亭主が、その夜も焼酎か何か一杯きこしめし、「働きもない癖に酒ばかり飲んでやがって」と女房に怒鳴られたことから組合いの喧嘩になり、またいつものように押えつけられ、ぎゅうぎゅういわされた揚句、表へホイとつまみ出された。それまではよかったのですが、この飲んだくれ亭主は女房に

やられた鬱憤晴しに、銭湯帰りの他処の奥さんに襲いかかり、自分が女房にやられたと同じ恰好で相手を押えつけ、ボカボカ殴りつけているところを御用という記事が出ていました。この男、警察で「いつも嬬にやられているので、いっぺん女をやっつけてみたいと思ひ、つい手が出てしまつて……」と言っていました。が、女房の太い腕をみるといまにも殴られやせんかと常にビクビクし、その大きなお尻を見ると、それがぐうツと眼の前に迫つて来て「またあのお尻が……」と癪にさわつたり、そして「一度はやっつけてみたい」と敢ない野望を起したりで、すっかりノイローゼになっていたそうです。

この新聞記事を読んで、あたくしはかつてわが「奇ク」の懸賞入選作品となった日文世古六氏の「あわれ誠一郎」を想い出し、思わずふき出してしまいました。あわれな男は誠一郎だけではなかったんだと……

「電車の中などで見る若い女たちが、皆小男で非力の誠一郎の眼には、背丈も自分より高く腕も太くたくましく見えるのであった。それで誠一郎はそんな女たちの誰彼に、何んだ女のくせにと、自分の及ばぬことを思わずに反感を持つのであった。」



その誠一郎が偉大な五体の持ち主妙子と結婚します。妙子は誠一郎よりもそのお母さん、つまりしゅうとめを大事にする古い型の女。性の欲求不満から彼は妻にあたり散らすというのがこの作品の初まりで、そこで御多分に洩れず夫婦喧嘩となりますが、どんなに暴れても結局は妙子に押えつけられてしまう。はじめは「お前」といつていたものが、ついにはお母ちゃんというようになり、妙子の方は「あなた」といつていたのが「お前」と呼ぶようになる。

「ね、お前、男のくせに女のわたしに、こんなにされても口惜しくないの？」

妙子は組敷いた誠一郎の身体にどっしりと大きなお尻で跨って、あわれみを乞う誠一郎の顔を見下しながら云う。

「一ぺん位負けておくれよ。たのむから」

と云うのであるが、妙子は笑って

「男のくせに、なさけないことを云いなさんな。負けてもらって、勝って何がおもしろいの。それよりも、私に実力で勝てる様になりなさい」

と云ってどうしても負けてくれなかった。

ああ、一ぺんでも女の子に勝って自由にしてみたい。いっそ十二、三の子供を相手にして

みようか。いや、やっぱり一人前の強い女に勝ってみたい。これが誠一郎の念願であった——というところで、作品は終わっています。が、このような哀れな男どもは世間には随分いるようです。

誠一郎のように非力で、しょせん問題にもならない男が「一度でもいいから勝ってみた」などというはかない望みをもつことは、ただ自己をスポイルするだけです。女性というものは男がむやみに恐れたり、反対に挑戦的であつたりすると、こっぴどくやつけたくなるものです。知合いのY夫人はよくご主人をおトイレ型に組敷いてしまうそうです。が、これもご主人が二言目には「女のくせに」「女だてらに！」と罵り、ひどく挑戦的に振舞うからなのです。組敷かれても「やっぱり君には勝てないや」とか、「こうやって下から見上げると君は特別きれいだなあ」とか言えば、いかな女豪もたちまち闘志を失って優しい妻に立ち返るのに、このご主人は組伏せられると腕にかみついたり、腿に食いついたりして暴れるそうです。こうなると女性はいよいよ興奮し、この人が？……とあきれほどこ惨酷なことを平気でやるようになります。あの優雅なY夫人がおトイレ型に組敷いて止

めをさすなんて、想像もできないことなのです。

### 三

このご主人に限らず、殿方には、「男の意地」とやら申す妙なものがあつたようです。うちのご亭主も結婚当初は多分にこれを持っており、長い間、あたくしを悩ませました。二言目には「おい、おれと柔道やろう。実力三段といつても、君は女だからなあ」と言うのです。しかしあたくしは主人と柔道するため結婚したではありません。もしそうなら、あたくしよりもっとうんと強い柔道家と結婚していたはず。だれがサラリーマンなんかと結婚するものですか。余りうるさいので言つてやりました。

「こんな狭い六畳や八畳で柔道なんか出来ないわよ。それに鴨居も低いし、怪我するわ」「大丈夫。おれはそう簡単に投げられないからね」

「だめ。だめ。そんなにあたしとやりたければ、先生の道場へ行きましょうよ」

「うん。でも大勢、お弟子さんが来てるんだろ？」

「昼間ならそんなにいないわ。横山さんの奥



さんと本庄さんのお嬢さんたち四、五人よ。ねえ、そうしましょ」

「うん」とはいったが、主人の顔にはありありと当惑の色が浮んでいました。何が故の当惑か、その意味はもちろん直ぐ分りました。皆んなの眼の前で負かされるのがイヤだったのです。そこであたくしはこういいました。

「心配ないわよ。あたし負けて上げるから」

これはからかって云ったのではなく、事実あたくしはその心算でした。さきほど書いたように近頃の若い人なら、だれが見ていようとそんなことは平気でしようが、古い道德教育を受けたあたくしには、衆人環視の中でぶんの夫を投げつけたり、押え込んだりではできかねたのです。ところが、このあたくしの言葉がかえって夫をしげきしたのです。男の意地というのでしょうか。

「何んだって？ もう一度言ってみろ。負けてやるとはなんだ」

彼はほんとうに怒ってしまいました。困ったなあとは思いましたが、あたくしも若かかたし、それに少々短気でもありましたので、「そうじゃないの？ あたしが勝ったらみっともないでしょ。第一、あんたデマとばされてどうしようもなくなるわ」。

「絶対君が勝つときまってるのか」

「それや勝つにきまってるわよ」

「何！」と言うが早い、彼はとびかかってきました。思ったよりも力があり、不意を食ってあたくしは仰向けに倒れましたが、そこは心得のある有難さ、力にまかせ我無沙羅に押え込んでくる彼の両襟を下から十字に絞め上げ、ひるんだところを腰をひねって跳ね返し、上からかぶさって、押えつけてやりました。

「どう？ 口惜しかったら跳ね返してごらんなさい」

「こいつめ！ 生意氣いうな！」

顔をまっ赤にし、両襟にかかったあたくしの両手を払いのけようとしますが、黒帯女性に向ってこれは無駄な抵抗というものです。しかし彼の抵抗が激しくなるにつれ、あたくしも初めの冷静さを失い、次第に手荒になっていくことが自分でもよく分りました。

どれ位時間が経ったのでしょうか。相手の胸板に馬乗りになり打ち跨り、彼の右手を左腿の上に逆手にとって押え込んでいる自分を発見したのでした。このときが馬乗り第一号です。

「どう？ もういい加減降参したら？」

「畜生。きょうは負けといてやる」

当時彼はバリバリの第一線記者だっただけに負けん気は一倍だったらしいのです。しかしいまの手合せで彼の手の内をすっかり読み取ってしまったあたくしには、こんな負け惜しみがおかしくて仕方ありませんでした。

「ふっふふ。女と侮って不覚の一敗なの」

「あたりまえさ。二度と同じ手を食うおれじゃない」

「おっほ。何度やったって同んじよ」

「生意氣言うな！」

「ほんとうよ。ねえ、もうこんなこと止ましようよ」

あたくしはほんとうに止す心算だったので、主人の方はあべこべに妙な敵愾心をもつて、その後も機会あるごとに挑んでくるのです。わざと負けてやろうか、それとも徹底的にノシてやろうか、かなり長い間思い悩んだのですが、負けん気のアタクシは、考えた末、後者をえらびました。

#### 四

主人は仕事の関係で夜が遅く、そしてしたか酔って帰るのが常でしたが、彼の社会的活動を高く評価していたあたくしはそういうことはいささかも苦痛ではなく、夜がどんな



に遅くてもちゃんと起きて待つており、帰宅後お酒をまたおねだりしても厭な顔一つみせずサーブしたものでした。当時のあたくしは不感症と申しますか、まだ女の歡びを知るに至っていなかったのです。ところが柔道ごっこをやりはじめるようになってから、どういうものか図々しくなり、玄關まで迎えにくことが臆却になりました。これはいけないことで、こうなると夫の生活は荒れるばかりです。

あの夜ふと眼が酔めると、枕許に夫が相変らずお酒の香をプンプンさせながら立っているではありませんか。

「おいノ 夜中だというのに表の戸口も玄關も明けっぱなしで寝ている奴があるか」

これはこっちが悪いので普通なら素直に謝るべきところですが、さきほど枕を蹴り上げられたことに妙に腹を立てていたあたくしは「泥棒が入って来たら腕前のほどを見せてやるうと思っていたのに、相手があなたではガッカリね」

この言葉がよっぱど癪にさわったのでしょ。うね。「何をノ」と言いざま足を上げて蹴り倒しにかかってきましたが、こっちは待ってましたとばかり、逆にその足を掬い上げまし

た。酔ってもいるのだし、これでは堪ったものではありません。彼はずでんどうと仰向けにひっくり返り、洋服ダンスの角かどこかでしたたか頭をぶつけたようでした。

「うふっふ。なんてざまなの、その恰好は」今夜のあたくしはよほどどうかしていると思え、こんな毒々しい言葉氣が平で出るのです。パジャマ姿のまま片膝立てて布団の上に坐り、かかってくれば思い切り投げとばしてやる心算でした。

彼はしばらく眼を閉じて苦痛をこらえているようでしたが、矢庭に上衣を脱ぎネクタイを外すと、盲滅法に襲いかかって来ました。

酔うと死力を發揮するといつも言っているようにそれは物凄い力でしたが、そんなものを引っぱずすのは訳ありません。数度空を打たせ、利腕を捻じ上げると、膝頭でぐいと押えつけました。彼は身体をよじり、足をばたつかせて跳ね返そうとしますが、ビクともするあたくしではありません。頃合いを見計り利腕を捻じ上げたままゆっくりと背中に跨りました。

「うむ、畜生ノ この野郎ノ」

吐く言葉だけは大層立派ですが、御本人はひき蛙のようにあたくしの大きなお尻で圧し

潰ぶされているのです。あたくしは悠然と跨ったまま。彼が暴れるとその都度、捻じ上げた腕をぐいとさらに捻じ上げてやります。

「痛い、痛いったら……。腕が折れる」

さっきの勢いはどこへやら今にも消え入りそうな情けない声なので、どんな顔をしてるのか知らず……。と、あたくしは右手を伸ばし邪慳に彼の頭髪を掴むと、首を横にねじ曲げてやりました。と見ると、可哀相に眼を閉じて額から油汗を流しているではありませんか。

「あらノ あなた苦しそうじゃない？ 大丈夫？」

上体を曲げて覗き込むようにして言ったのですが、このときの彼の返事の憎らしいことと言ったら……

「おれの上に乗っかりやがって大丈夫かとは何んだノ お前みたいな奴にネを挙げるおれだと思ってるのかノ」

短氣——これがあたくしの欠点ですが——あたくしは、この言葉でカッとなってしまいました。

「ようし、それじゃネを挙げさせてやる。さあ起てノ」言葉まで男みたいになつてしまいました。「起たんかノ 四つ逼いのまま起つ



んだ。馬にしてやる！」

「えッ？」と軽い驚きが彼の口から洩れたようにうでしたが、それでも起き上がる気配をみせはじめました。しかしさきほどから捻じ上げられていたために両手がしびれてしまっていたのでしよう。両手を前について二度、三度あたくしの身体を持ち上げてはみたものの、歩くどころかたちまちダウンしてしまいうのです。無理ありません。十四貫五百匁の重い女体に蛙のように圧し潰ぶされた恰好のままでは、たとえ両手がしびれていなかったにせよ、起き上がることはできなかったでしょう。それはよく分っていたのですが、今夜はネを挙げさせるのが目的なので、あたくしはでんと腰をおろしたまま、じっとしていました。

「重い」といい、「重いなあ」と独り言ちしていましたが、やがてなんとも衰れな声で「少し腰を上げてくれよ」といいました。

「よし。こうか！」心持ち腰を浮かしてやりますと、彼はすばやく両膝を前方に揃え、両腕に力を入れて起き上がりました。瞬間あたくしも両膝を曲げて騎座の姿勢をとりましたので、身体がふわあッと宙に浮きました。

「さあ歩くんだ。ハイ、ハイ……」とは言っ

たものの、足を曲げて跨っているので乗馬のときのように踵で下なる動物の胸腹を蹴り上げるわけには参りません。しかも掴まえどころがないので、もし彼が上体を拾げればせつかくの馬上の女王もたちまち落馬するよりほかはありません。紐かタオルを口にくわえさせて手綱代りにすれば安定した姿勢がとれたのでしようが、そのときはそんな考えも浮ばなかったのです。

部屋を二、三周したでしょうか。案の定彼は馬上の女王さまを振り落しにかかったのです。彼は力もあつたし、痩せ型ではあつたが十七貫の骨太の体格なので、この姿勢で背上の十四貫五百匁の女体を振り落すことは充分に可能でした。しかしここで振り落されたら征服者の估券にかかわるので、柔道の胸絞めのコツよろしく、相手が暴れそうだとみるとその都度両股に力を入れ、ぐいぐいと胸腹を絞め上げてやりました。何度これをくり返したでしょうか。くり返しているうちに全身の血が逆流するように感じられ、皮膚を通して相手の体温が伝わってくる度びに全身がじいんとしびれてくるのです、そしてこのときはじめて責の歡びを知ったのでした。

あたくしはがばッと上体を伏せ、右腕を相

手の首に巻き、片羽絞めの要領で彼を拘束するとそのまま、彼の上に蔽いかぶさっていました。

「ねえ。もうおとなしくするわね。おとなしくしないと恵子ちゃんこわいわよ。ねえ。あんたあたしが好きなんですよ。好きならあたしの言うこと、なんでもきくのよ」

熱っぽい息をふきかけながら申しました。

「うん。おれが悪かった。家へ帰ったら恵子ちゃんの言うこと、なんでもきく。」

「大いに馬乗りに跨るわよ。それでもいい？ いやだって言ったって、押えつけても跨っちゃうけどさ」

「いいとも。おとなしく、馬乗りにされてるよ」

「おとなしくなくってもいいわ。噛みついてたりしなければ、どんなに暴れたっていいわよ。その方があたしも好きなの。」

## 五

「あたくしの主人——もちろん諸岡堅雄ですが——の作品をお読みになった方は、すぐに彼のマゾ的性向にお気づきになると思いますが、彼のそうした性向をひき出したと申しますか、助長したと申しますか、とにかくそう



させた原因はこのあたりにあるようです。彼にも本来的にそうした性向があったようですが、自尊心が高いのと性来のテレ屋のために、自己の衝動を体験にまで高め、かつ浄化するということができなかったのです。自分よりも膂力のすぐれた女性を妻にした動機も、ほんのじゃじゃ馬を馴らすぐらいの軽い気持ちだったらしいのですが、たどりつい

た結末はごらんのとおりです。しかし彼は世にいういわゆる恐妻家ではございません。社会生活の上では主婦の座を平気で無視する封建的なタイラントとさえ言えると思います。二人の子どもも成人しましたが、パパの威厳は相当なものです。しかし二人だけの世界になると、ダンゼンあたくしが巴御前、彼は平家のひ弱い腰抜け

武士——いや、いや、雑兵に近い存在で、たちまちにして組み伏せられてしまいます。そのときは、あたくしも巴御前になったつもりで、この腰抜け武士を思うさま痛めつけ気分を高揚させます。あたくしは女の遊びを教えにくれた彼に感謝し、彼はまたそのマゾヒスティックな衝動を自己体験にまで高めてくれたあたくしに感謝しているのです。(終)



## (体験記)

## 演劇教室

岡 本 正 治

人は誰でも過去を美化する。想い出の一端を綴ろうとする時、あの頃はよかったと泌々思う。しかし、あの当時は、それなりに、小さな胸に悩みもあったような気がする。

内田百閒先生は百閒園隨筆の中に、高等学校時代の事を述べられた文章に、稚児遊

びの盛んな土地の出身者が、駒場の寮に居て、学生生活を送っていたというような一節があったように記憶している。

そして或は学生は花街から学校へ通ってくるといふのんきな、そして亦羨ましいような明治氣質の学生生活を描写して居られた。

真実、そんなに正常な社会に在る人には我

々異常性欲者をどんなに観るだろうか。昭和十年頃、所謂昭和初頭育った私達の少年期は現代の若い青年達には想像出来ないだろうと思われます。未だ階級意識の在った時代で、仮令ば街を歩いていても、あの人は職業は何をしているだろうか、という事が想像できて、勤人階級と商人、労働者の階層が区別されていて、当時の小学校でも、その階層の序列が少なからず影響していた時代である。

況して南国の尚武の伝統強い此の土地は男女の交際も厳格を極めていた。此の地方都市の旧藩士の士族街と呼ばれる溪流沿いの小学校は市内屈指の有名校で、設備、教諭も比較的整備されていて、児童も旧士族だったと謂われる上品な子弟が多く、南国



美人の系統を引く少年に恵まれていた。

其処に亦、風光明媚な環境が入学して少しく物心が付く頃から、少年同志の愛の芽生えを起させたのは、不思議な事でもなかった。転入生の本田君、郊外近くに住んでいた林田君等、其の態度には女性を意識させるに充分なものがあつた。

今日は午後の余課の時間を割いて担任の先生が「演劇教室」の発表を許して下さつたのである。小学も四年になると、やや大人びた者も居て彼等が教師が演劇熱心なそして物分りの良い先生なのを、都合のいい事にして精力のはけ口を演劇に求めて演出を申し出たのである。此の先生は皆に理解があつたので、快く承諾して生徒の要望を申し入れられた。そして当時としては、破格な生徒の自治に依る発表会を認めて下さつたのである。

恐らく生徒の意志を尊重して、自由に思想を表現させたいという御考えからだつたのかそれとも、演劇論者とか文学青年が持つている自由主義の精神がそんなにさせたのか、普段から余り干渉されなかつた先生は、周囲から軟派だ、軍人こそ最大の名誉

だ。だから将来、軍人になるべく養成されねばならないのに演劇好きの先生とは、と、やや軽視する風潮さえ洗滌しているようにさえ感ぜられるのに此の先生は、かねてから個人の自由を高く評価されて教育して下さい。

だから、此の教室は学校でも独特のカラーがあつた、僅かの在任期間ではありましたが生徒の誰しも浸透する何者かを得たように、情熱の眼を輝かしていた時代でした。

九月の高く澄み渡つた陽光が教室に流れてくる時……。第一幕が劇を始めた。持時間が二十分位に制限されていたので、簡単な小劇で、扮装と言へば僅かに生徒が持ち寄つて衣裳を着けるのが精一杯なのである。

背の低い学芸会の人気者の可愛い本田君がグリーンのワンピースを着せられて、女生徒の役を演じていたのは、非常に似合つていた。こんな会であるからこそ、女装がさせられたのであつて恐らく児童同志が互いに相談し合つて、女装させるといふ事はないであろう。美少年の彼は女とまちがう可憐な姿を舞台一杯にふりまいていた。

第二幕では林田君が若奥様を演ずるホーム・ドラマで、是も彼の持つてゐる独特のムー

ド捉らえて構成している点は、皆に楽しい夢を実現させてくれた。

第三幕が我々の劇であつた。そして此れが演劇教室の最終の番組であつた。

寂とした隣の教室で宝集院君が私に銘仙のお召を着させてくれた。帯は名古屋帯らしい半巾のもので刺繍がほどこしている少女の着物である。赤い花模様が眼に沁むように鮮かで七分袖になっていた。学校の制服である霜降りのズボンも脱ぎ、そして、パンツも脱ぎ白い腰巻から着替えてしまふのである。

今迄屢に女装をさせられた経験はあつたが五十人の生徒に自分の女装晒すのは最初であつた。

しかも相手は有力者の土地の後家さんの一人息子で、親の威をかさにきて乱暴者で通つてゐる宝集院君である。彼の我儘が過ぎるのも、仲間が寛容に扱わなければならぬ暴君的な性格もあつた。そして、彼のパートに私を誘い込んだ時、私は彼の持つてゐる冷静な落着きで、偶々残酷的なときえ思われる行動を敢てする彼の前に、機械的に従うより外はなかつた。

(未完)



## ロマンチック・ストーリー

## 華麗なお仕置

大

中

忠

コンクリートの廊下に堅い靴の音が響いてくる。灰色の廊下を裸電球が照らし、余計冷く見える。廊下沿いに並んだ部屋は一つを除いて全部暗くなっていた。端から二番目の部屋、そこだけが明るく照らされていた。中に数人の居る気配もする。靴音はその部屋に近付いて行った。下校時刻は、とっくに過ぎていた。

時刻が来ると殆どの生徒は強制的に下校させられるのだが、運動部だけに大目に見られていた。スポーツで名を売った私立女学校であるのも、その理由の一つであった。大目には見てもらっていても、大部分は暗くなる頃には皆帰ってしまっていた。しかし、今日の

このテニス部は遅く迄残り過ぎている。

「まだ居るのか、もう遅いぞ。」

「はあい。もう帰る所です。」

足音は再び冷い音を響かせて遠のいて行った。足音の近づくに従って静かになった部屋の中は、又騒がしくなった。部屋の中には、一人の少女が椅子にかけて、うなだれ、それを囲んで数人の少女が立っていた。うつむいた中央の少女は顔色も蒼ざめ、お河童にした髪が豊かな頬に垂れている。膝の上に置いた両手は、小さなハンカチをしっかりと握りしめていた。

「判ったわね。」

正面に立った、上級生らしい少女が強く云

った。

「必ず来るのよ。」

座った少女は、うなだれた顔を一層深く下げた。

「さあ、もう皆帰りましょう。」

「ユキ、もう良いのよ。明日ね。」

一際騒がしい足音がすると残っていた一つの灯りも消され、やがて完全に静寂が訪れ、廊下だけが冷く照らされていた。裸電球に。

○

灯りの殆どない夜道を、雪江は一人うつむいて歩いていた。明日の事を思うと、彼女は心が重かった。中学時代よりも激しい練習に疲れて一週間無断で休んでしまったのだ。高





校生になって、まだ一月と少しにしかならな  
い彼女にとって無理のない話かもしれなかつ  
た。だが上級生は認めなかった。今日のお説  
教の続きが明日キャプテンの家で行われる。  
初めは行かないでおこうかとも思ったが、前  
に、無断で部を辞め、呼び出しにも応じなかつた上級生が、プールで泳いでいるうちにパ  
ンティを隠され、泣く泣く帰ったという話を

聞いていたので、それよりもましだろうと嫌  
々ながらも、覚悟を決めていた。この夜程、  
下宿の部屋に一人で居るのが寂しく思われた  
事はなかった。

○

翌日は上天気だった。五月晴れの空が暑い  
位だ。決められた十時丁度にM駅に降りた雪  
江は、出迎えに来ていたキャプテンの利子と

つれ立って広い道を

山手に向った。道の

両側には、大きな邸

宅ばかり並ぶ高級住

宅地だった。二人は

会った時から一言も

口をきかなかった。

先に立つ利子は、部

室に居る時よりも優

しそうに見えた。

半ばうつむいて、

少しおくらについて

行く雪江に、利子が

急に声をかけた。

「貴女、一人で住ん

でいるの」

「え、ええ、下宿で

す。」

慌てながらも雪江は答えた。話はそれで途  
絶えた。

高い塀に囲まれた大きな家に、利子は黙っ  
て入って行った。雪江のセーラー服が門の中  
に消えると、全く外界とは縁が切れてしまつ  
たようだ。

利子は先に立って家に入ると、二階に上つ  
た。純洋式の建物は雪江の小さな体に冷く感  
じられた。

「ここで待ってて。」

利子は、一つの部屋に雪江を入れると、ド  
アを閉めて行った。これから何をされるかと  
いう不安に胸を高鳴らせながら雪江は窓際に  
行った。この家は丘の一番高い所にあるらし  
く、他の家は皆庭よりも低かった。高い塀が  
まわりを囲み、その内側に高い木が並び、青  
い葉が五月晴れの陽に輝いていた。緑の芝生  
のカーペットが敷かれた庭の中央に小型のプ  
ールが澄んだ色をたたえている。目を下にや  
ると庭に面したヴェランダが見える。豪華な  
造りを見た雪江は自分の生活が非常にみじめ  
に思われて来た。その時ドアの開く気配が  
し、我にかえった雪江はふり向いた。利子と、  
他に昨夜のメンバーの中に居た二人、満子と





「さあ、揃ったわよ。始めましょう。」

利子がうながすと満子と美代子は椅子に深々と腰を下ろし利子は、美代子の椅子のアームに腰を掛けながら、つつ立っている雪江に「そこに座りなさい。」

と目の前の床を指した。

素足に床は堅く冷たかった。スカートで膝を包むようにして正座すると、両手を膝に置いて雪江はうなだれ、これから始まるものへの不安で体がふるえてくるのを押さえるように、両手をしっかりと握りしめた。

「もう、今更改めて云わなくても、昨日あれだけ云ったから判ってるわね。」

利子の声が聞え、雪江は深くうなずいた。「自分が悪いということは認めるわね。そう、それなら、今日はその罪に対する罰を与

えるけど良いわね。」

雪江はどんな罰を与えられるか益々不安になったが、思わずうなずいてしまった。

「さあ、これで良いわ。始める前に、まずお昼にしましょうよ。」

利子が勢良く立ち上りながら云った。他の二人も同意すると、雪江を立たせて階下の食堂につれていった。

「今日は一日中、私達だけしか居ないから、遠慮しなくても良いのよ。」

利子は、少し遅れてついてくる雪江に元気よく云った。

昼食は見事なものだった。不安で胸が一杯の雪江でさえ、思わず次々と手を出してしまふような珍らしいものが次々と並んだ。

食卓の会話は上級生が独占し、雪江は一言も喋らないで食事が終り、のびのびと小一時間経過した。

「さあ、もう始めましょう」

満子が口を切って皆は立った。罰を待つ雪江にとっては余りにも短い休み時間だった。

「ああ、一寸待って」

歩き始めた三人に美代子が声をかけた。

「ここから始めなくちゃ」

と云うと雪江に近づいた。

美代子が部屋に入って来た。皆真白なピッチリとしたショーツに身を包んでいた。トレーニングで陽に灼けた健康そうな素肌が露わに輝いている。

「いらっしやい、待たせたわね。」

満子が声をかけた。こうして三人並んでみると、利子が一番、均整のとれた体をしている。一番肥っているのが満子、背の少し低いのが美代子だった。



「ユキ、手を後にまわして」

瞬間、雪江は縛られると思ったが、これ位なら我慢しなければと思い、素直に両手を後に組んだ。美代子は雪江の両手を背中ですっかり縛り合せると、残りの縄を二の腕から胸にかけて巻きつけた。

雪江は幼い時から、遊んでいる時に縛られた事が度々あったので、縛られる事自体には大した嫌悪感を抱かなかった。

紺のセーラー服に、白い縄が深く喰い込んで、胸元などすっかり縄が隠れてしまっていた。縛り終った美代子はその縄尻をとって雪江をうながした。両手の自由を奪われたまま雪江は足元を見つめながら、一步一步階段を上って行った。後でシャッターの音が数度聞えたが雪江はもう深く考えなかった。

元の部屋に入ると雪江は縄を解かれた。大して痛くはなかったが手首を撫でていると、満子が。

「さあ、ユキ、裸になんなさい。」

ときつい調子で云った。

雪江は思わずびくっとして抗議しようとしたが、それより早く、

「云う事聞けないの。さっきどんな事でもするって云ったじゃないの。汗になって汚れる

からよ。さあ、早く。」

雪江は三人の視線を肌を感じながら部屋の隅で、セーラーをぬいだ。まだ陽にあまり灼けていない少女の体を白く美しかった。ブラジャーとパンティだけになると、雪江は目を伏せて両腕で胸を覆い部屋の中央に戻った。

「何よ、その恰好は」

「まあ良いわ。後は私がしたげる。」

満子が近付くと、すっかりむき出しになった雪江の両手を後に取ると、ふたたび手首を縛り合わせた。手首だけ縛ると、満子は残りの縄を下に垂らし、素早くブラジャーを剥ぎ取った。雪江の口から声にならない悲鳴が洩れた。今迄押さえつけられていた白く柔らかなふくらみが、はじき出されるようにむき出しになった。利子と美代子が思わず見直した程、そのふくらみは美しかった。マシユマロのような柔らかさ、象牙のような艶、小さく固く締った紅の蕾。しかし、満子は容赦なくそのふくらみに縄を喰い込ませて行った。ぐいぐい引き締めると、柔肌に縄は面白い程深い窪みを見せて喰い込んで行った。二の腕の血管が止められ、指先はもうしびれかけて来て縛り終っても、雪江は感じなかった。

「可愛いわ。」

縛り終った満子が思わず声を洩らした程、

後手に縛り上げられて、うつむき加減に立った少女の姿は美しかった。白い肌が窓から入る陽に輝き、上下に縄が喰い込んだ為余計突き出すような形になった乳房に小さな乳首は可憐だった。

「口をあけて。」

利子が、ゴムで出来ていて、レモンのような形をして、両端に紐のついた物を持って近付いた。こばんでも無駄だと思った雪江は、黙って、口を大きく開けた。それが口にすっぽりとハマって紐が後で結ばれたが想像していた程の不快感はなかった。口の中にぴたりとはまり、声は全く出せなかったが、特に苦しくはなく、舌ざわりも良かった。

雪江の姿は余計可愛いくなった。中背の彼女は丸い体をしている。いかにも少女らしい清潔な感じだ。

縛られてさえいなければ、美と幸せの象徴のように見える。太ももからふくらはぎにかけて、他の三人のように引き締っていないのが難点とも云えるが、それだけにむっちりときちんと張り切っていた。

利子が先に部屋を出た。美代子が雪江と並んで、縛られた腕を縄目の上から柔らかくつ



かんだ。縄尻を持った満子は、最後に部屋のドアをしめた。明かるい陽のさし込む部屋の中には、隅に服や肌着類がきちんとたたんで置かれてあった。

縄尻をとられ、腕をつかまれて歩く雪江は、すっかり自分が罪人になった気持で屋根裏への階段を上って行った。目の前には先に立つ利子の伸びた脚が見える。健康そうに陽灼けたぜい肉のない脚は、見事な曲線美を現わしていた。はち切れそうな太もものつけ根を、白いショーツがピッチリと締めつけていた。

満子は縄尻を持って最後に階段をふんでいったが、若々しい肌をさらし、両手の自由を奪われた雪江がうなだれながら上って行くのを見ると、可愛いくてたまらないような気持ちになった。白く肌理の細かい、張りのある柔肌だった。満子はこれから自分達がしようとしている刑罰を受けるには、雪江は余りにも可憐だと思った。この少女がもうすぐ声を出せずに泣きわめき、白い肌を責めが赤く彩るのだ。若い元氣と氣品がこの少女から奪い取られてしまふだろう。満子は豊かな脂肪の下で筋肉の動く雪江のちもを見ていると、哀れさに混って何とも云えない楽しさがわいてくる

のを感じた。

元々、雪江を責めるように云い出したのは満子だった。練習を一週間位サボるのは、何も雪江に限ったことではなかった。しかし、満子は雪江が入部した時から、その可愛い容姿に目をつけていたのだ。いつか、この少女の全てを知りたいという気持と、蔭にひそんでいたサディスティックな気持が混じり合っ

て来た時、丁度雪江が練習を休んだのだ。

屋根裏は薄暗かった。日当りの良い部屋から出て来たので、余計そう感じられたのかも知れないが、庭に向いた窓から差し込む光があるだけだった。屋根裏と云っても、きちんと整頓されているし、中央は両手を延ばしても届かないくらいの高さがあった。形が変っている以外、普通の部屋と大して変りはなかった。真中に屋根を支える柱が一本立っている。裸のままの棟木に二つ三つ、滑車が取っつけられ、隅に小さな平均台のようなものが置かれてあるのは利子達の仕事らしかった。中央の柱に接して大型のテーブルが置かれてあった。雪江はその上に上らせられた。満子が不自由な上半身を押さえている間に利子と美代子が雪江の脚を引っ張って、左右に大きく開きテーブルの隅に、足首を縛りつけてし

まった。続いて両腕が自由になると。縄目の跡を撫でる間もなく仰向けに倒されると両手を頭の上に左右に開いて伸ばした恰好で縛りつけられた。

無防備な姿にされてしまった雪江は目を閉じたが、まぶたの内側には熱い涙が一杯にたまっていた。両手脚は引き延ばされたため太ももの内側と腋の下に緊張した線が見えた。両腕が伸ばされた為、日頃隠されている腋の下が全く露わにされていた。そこに満子の手が近付いた。鳥の羽毛が持たれている、間もなく雪江の口から奇妙なうめき声が激しく洩れて来た。胸に、脇腹に、腹からももに、三人の手にした羽毛は無情に撫で続けた。雪江は、白い裸体を出来るだけもがいて、この奇妙な苦痛から逃れようとした。しかし、その範囲は限られている。両手足を止めてる皮帯が肌に喰い込んで来たが、その痛みよりも羽毛の苦痛の方が雪江には耐えられなかった。たちまち体中から汗が吹き出し、テーブルをぬらした、胸が大きく波打ち、二つのふくらみが、その上の紅の蕾が、上下にゆれる、ブラッシュが続いて光った。

雪江にとっては、この苦痛が一時間も続いたかと思われたが、実際には数分間にしか過



ぎなかった。嵐が過ぎ去ると、雪江は全く力がぬけ切ってしまったような気がした。口から空気を吸おうにも、口には一杯猿轡がされている。その隙間から、さらに可愛い鼻孔から雪江はあえいだ、汗にぬれて光る素肌が美しい、やがて両手脚が自由にされたが、この瞬間の自由も次の責めへの一過程にしか過ぎないのだ。

○  
屋根裏部屋の唯一つの窓から光がさし込んでいたが、先程とは角度は変っていた。床の上には、雪江がぐったりとうつ伏していた。手脚は全く自由だ。少女の白い素肌には、一面に縄目や責めの跡が赤くついている、柱も

テーブルも、小さな平均台のような台も、雪江の汗を吸っていた。吊り責め、鞭打ち、木馬責め、逆さ吊り、その他、様々の責めはまさにこの少女の体には激し過ぎた、雪江は汗とほこりにまみれて、体に残る痛みを耐えていた。吊られた時の乳房の痛さ、背中に喰い込んだ鞭、木馬責めの鋭い痛さ、逆さ吊りの苦しさ、どの責めも気の遠くなるような苦痛であった。雪江は力を抜いたまま、じっと眼をとしていた。頭の中に幼い日々の事が浮んでくる。裸で縛られたことは初めてじゃない。小学生の時、近所の子供と遊ぶと縛られるのはいつも雪江だった、夏の一日、彼女は一人の少年と一緒に納屋の中で縛られた。夏の納

屋は暑かった。皆、裸で遊んだ。雪江とても、まだ女性の羞恥心の芽生えない年頃であっては、平気で、皆と同じように裸になっていた。そのままの姿で、少年と背中合せに後手に縛られたのだが、荒縄が肌に痛かったこと、背中合せの少年の素肌が温かったことをはっきりと覚えていた。

背中への鞭の痛さは殆ど消えていた。特殊な鞭らしく、打たれた時の音と痛みは激しかったが、治るのは速かった。肌に赤い跡は残っていても、傷にはなっていない。雪江はそっと目をあげてみた、目の前の床が、この哀れな被害者の汗にぬれ、前に投げ出した右手に、縄目の跡が幾筋も赤くはっきり残っていた。

### 奇譚クラブ旧号の在庫案内

|        |             |       |
|--------|-------------|-------|
| 復刊第24号 | (昭和33年2月号)  | 定価二百円 |
| 復刊第25号 | (昭和33年3月号)  | 定価二百円 |
| 復刊第27号 | (昭和33年5月号)  | 定価二百円 |
| 復刊第28号 | (昭和33年6月号)  | 定価二百円 |
| 復刊第29号 | (昭和33年7月号)  | 定価二百円 |
| 復刊第32号 | (昭和33年9月号)  | 定価二百円 |
| 復刊第33号 | (昭和33年10月号) | 定価二百円 |
| 復刊第34号 | (昭和33年11月号) | 定価二百円 |
| 復刊第35号 | (増刊号青い廃院)   | 定価二百円 |
| 復刊第36号 | (昭和33年12月号) | 定価二百円 |
| 復刊第37号 | (昭和34年1月号)  | 定価二百円 |

|        |             |       |
|--------|-------------|-------|
| 復刊第38号 | (悦唐小説と緊縛写真) | 三百円   |
| 復刊第39号 | (昭和34年2月号)  | 定価二百円 |
| 復刊第41号 | (昭和34年4月号)  | 定価二百円 |
| 復刊第44号 | (昭和34年6月号)  | 定価二百円 |
| 復刊第45号 | (悦特第一集)     | 定価二百円 |
| 復刊第46号 | (昭和34年7月号)  | 定価二百円 |
| 復刊第47号 | (昭和34年8月号)  | 定価二百円 |
| 復刊第48号 | (昭和34年9月号)  | 定価二百円 |
| 復刊第49号 | (昭和34年10月号) | 定価二百円 |
| 復刊第50号 | (昭和34年11月号) | 定価二百円 |
| 復刊第52号 | (昭和34年12月号) | 定価二百円 |
| 復刊第53号 | (昭和35年1月号)  | 定価二百円 |
| 復刊第54号 | (悦特第二集)     | 定価二百円 |
| 復刊第55号 | (昭和35年2月号)  | 定価二百円 |

|        |            |       |
|--------|------------|-------|
| 復刊第56号 | (昭和35年3月号) | 定価二百円 |
| 復刊第57号 | (サド特集第四集)  | 三百五十円 |
| 復刊第58号 | (昭和35年4月号) | 定価二百円 |
| 復刊第59号 | (悦特第四集)    | 定価三百円 |
| 復刊第60号 | (昭和35年5月号) | 定価二百円 |
| 復刊第61号 | (昭和35年6月号) | 定価三百円 |
| 復刊第62号 | (悦特第五集)    | 定価三百円 |
| 復刊第63号 | (昭和35年7月号) | 定価三百円 |
| 復刊第64号 | (昭和35年8月号) | 定価三百円 |
| 復刊第65号 | (昭和35年9月号) | 定価三百円 |
| 別冊1号   | (告白、手記、体験) | 定価三百円 |

特に定価の半額に奉仕いたします。

(第一号より第六十五号迄の内、本欄に欠号の分は全部売切れました。)



視線をずらせると、可愛い二人の責め手の素脚が見えた。三人の脚も汗に光っていた。雪江が少し元気を取り戻したのを見た利子は

「ユキ、体をきれいにしようね。」

と云いながら近付くと、ふたたび雪江の両腕を後にして縛り上げた。先程の縄目の跡の上に、縄が喰い込むと痛みも倍加された。後手に縛り上げられて立たされた雪江の体には、先程迄の清潔な美少女のイメージは薄れ、被虐の哀れさだけが溪れていた。利子は雪江をうながした。雪江は力の入らない脚をふみしめて階段に向った。汗とほこりで薄黒く汚れた自分の白い太ももを見、赤い縄目の跡がくつきりと残る可愛い足首を見ていると、又雪江は涙が流れてくるのを感じた。一階に下りた一行は、嫌がる雪江を引き立てて、ヴェランダに出た。縛られた素肌が太陽の直射日光に輝いた。高い塀の内側に木が生えているので、絶対に外からは見えないことが判っているのだが、雪江は、自分のみじめな姿が、大衆の前にさらされているような気がした。三人は雪江をヴェランダの柱に縛りつけると家の中に入って行った。ぐったりと体と縄目にゆだねた雪江の目尻から熱い涙が次々と頬をぬらしていた。明るい日光の下にさら

されると被虐の跡がはっきりと見えた。二の腕から腹部、太ももからふくらはぎ、全身に縄目の跡が赤い筋になって残っていた。

雪江のさらしものは間もなく終わった。三人が水着に着かえて出て来たのだ。三人共、皆違うスタイルの水着を着ていた。利子は真白の、体の線にピッタリ合った水着、非常に均整のとれた美しい体の線だ。満子は縞の水着胸と背が大きく、くられ、肉づきの良いふくらみが半分程見え、太ももがつけ根迄すっきり露わになって、むっちりとしたましかった。美代子は水玉模様の子ニスタイル、それも極端に小さなもので、わずかに必要な部分を隠しているだけであった。

このように皆が水着姿になっても、責めに打ちひしがれ、肌に一面の赤い跡を残し、後手の縄尻をとられて芝生を歩く雪江の姿が一番美しかった。例え、汗とほこりにまみれていても、その肌は一番白く、肌理が細かいし、両手は後手に縛り上げられていても、そのスタイルは一番均整がとれていた。それだけに被縛姿が強い陽の下に歩を進める少女の姿は痛々しかった。

プールの水は雪江の肌に快よかった。手すりに縄尻を結ばれて、沈まないように吊るさ

れた形になっているが、水は首迄来ていた。

様々の責めに火照り、汗とほこりに汚れた素肌は優しく撫でられていた。他の三人は雪江を結んでしまうと、皆勝手に泳ぎ始めた。一番肌を露わにしている美代子の体が水の中で白く光り、時々足の裏がちらと白く見える。

三人の立てる波が時々雪江の顔を襲った、素肌を撫でる冷たい水の感触を楽しんでいた雪江はやがてだんだんと苦しくなってくるのに気付いた。縄が水を吸ってぐんぐん縮んで行くのだ。固くなって肌に喰い込んで来る縄目は、先程よりも耐えがたかった。胸を押す痛みに雪江は不自由な声を勢一杯挙げた。丁度傍に泳いで来た利子がそれに気づいた。

「ねえ、ユキが悲鳴挙げてるわ。もう上げてやりましょう。」

「そうね。もうそろそろ、終りにしても良いわね。」

利子と満子が上から腕と縄をつかみ、美代子が下から押し上げた。水にぬれた艶やかな雪江の肌に、美代子の手が滑った。

「なかなか解けないわ。固くって。」

満子が結び目をいじりながら云った。水を充分含んだ縄は少女の手では、とても解けるものではない。



## 〔新版〕女体悦虐フオト七十選

## Z組七十集

大手札判印画紙(9×13㎝)焼付

## 各組一枚一組(送料共)

|        |       |
|--------|-------|
| 一組一枚   | 一〇〇円  |
| 五組五枚   | 四〇〇円  |
| 十組十枚   | 七五〇円  |
| 二十組二十枚 | 一四〇〇円 |
| 三十組三十枚 | 二〇〇〇円 |
| 四十組四十枚 | 二五〇〇円 |
| 五十組五十枚 | 三〇〇〇円 |
| 六十組六十枚 | 三五〇〇円 |
| 七十組七十枚 | 四〇〇〇円 |

|     |       |         |
|-----|-------|---------|
| Z 1 | ゴム猿轡  | (梨花悠紀子) |
| Z 2 | 囚女六三号 | (柳初子)   |
| Z 3 | 猪手足吊り | (梨花悠紀子) |
| Z 4 | 逆エビ縛り | (大塚啓子)  |
| Z 5 | ローソク責 | (東浦ひかる) |
| Z 6 | 豊臀責め  | (絹川文代)  |
| Z 7 | 淫らな縛り | (愛川悦子)  |

|      |        |         |
|------|--------|---------|
| Z 8  | ザリガニ   | (梨花悠紀子) |
| Z 9  | 引き回し   | (東浦ひかる) |
| Z 10 | 全裸後手縛  | (加茂良子)  |
| Z 11 | 豊満被虐   | (大井小夜子) |
| Z 12 | 黒髪いじめ  | (大塚啓子)  |
| Z 13 | 足吊り嬌態  | (絹川文代)  |
| Z 14 | 黒縄高手小手 | (四方清美)  |
| Z 15 | 強烈荒縄責  | (梨花悠紀子) |
| Z 16 | 喰込む白縄  | (東浦ひかる) |
| Z 17 | くの字の足指 | (桜井葉子)  |
| Z 18 | 裸身の受縄  | (前本妙子)  |
| Z 19 | 無茶な猿轡  | (竹野ひろ子) |
| Z 20 | ハリツケ   | (梨花悠紀子) |
| Z 21 | 臍なぶり   | (大塚啓子)  |
| Z 22 | 逆手足吊り  | (東浦ひかる) |
| Z 23 | 美肌いじめ  | (絹川文代)  |
| Z 24 | 鼻ゼメ仰向  | (加茂良子)  |
| Z 25 | 恐怖の瞬間  | (若原明子)  |

|      |        |         |
|------|--------|---------|
| Z 26 | 火箸責め   | (梨花悠紀子) |
| Z 27 | 全裸海老責め | (熱海容子)  |
| Z 28 | ベッドの痴態 | (絹川文代)  |
| Z 29 | 足の裏操り  | (大塚啓子)  |
| Z 30 | 闇の女体飾  | (竹野ひろ子) |
| Z 31 | 首絞めゼメ  | (大塚啓子)  |
| Z 32 | 鼻孔責め   | (若原明子)  |
| Z 33 | 悦虐放心   | (梨花悠紀子) |
| Z 34 | 手枷足ぐさり | (四方清美)  |
| Z 35 | 寝室のプレイ | (花本京子)  |
| Z 36 | 猿轡の妙味  | (梨花悠紀子) |
| Z 37 | 首縄柱しばり | (絹川文代)  |
| Z 38 | 巻煙草責め  | (大塚啓子)  |
| Z 39 | 尻立てポーズ | (桜井葉子)  |
| Z 40 | エビ責    | (東浦ひかる) |
| Z 41 | 彼女の好物  | (竹野ひろ子) |
| Z 42 | ワンピース  | (花本京子)  |
| Z 43 | 荒縄竹棒責  | (梨花悠紀子) |
| Z 44 | 浣腸責ポーズ | (大塚啓子)  |
| Z 45 | 鏡に映す裸  | (山路ミヨ子) |
| Z 46 | 苦悶に喘ぐ  | (大塚啓子)  |
| Z 47 | 酔後の緊縛  | (絹川文代)  |
| Z 48 | 逆十字エビ  | (大塚啓子)  |

|      |         |         |
|------|---------|---------|
| Z 49 | 全裸猿轡    | (東浦ひかる) |
| Z 50 | 欄間宙吊り   | (梨花悠紀子) |
| Z 51 | 全裸逆エビ縛  | (絹川文代)  |
| Z 52 | 荒縄仕置室   | (梨花悠紀子) |
| Z 53 | 庭園の惨虐   | (館典子)   |
| Z 54 | 被虐の果て   | (大塚啓子)  |
| Z 55 | 痛めた全裸像  | (大塚啓子)  |
| Z 56 | 鏡の中の全裸  | (愛川悦子)  |
| Z 57 | セーラー服   | (梨花悠紀子) |
| Z 58 | 檻の緊縛裸体  | (愛川悦子)  |
| Z 59 | 全裸股間縛り  | (絹川文代)  |
| Z 60 | オムツ逆エビ  | (田中芳代)  |
| Z 61 | 胴縄の重量感  | (桜井葉子)  |
| Z 62 | ゴム人形    | (竹野ひろ子) |
| Z 63 | 縄トゲ責め   | (梨花悠紀子) |
| Z 64 | 女大生恥態   | (田中芳代)  |
| Z 65 | 白肌全裸縛り  | (絹川文代)  |
| Z 66 | 強制的開股縛  | (絹川文代)  |
| Z 67 | 強烈的全裸晒  | (愛川悦子)  |
| Z 68 | 亀甲乳房責   | (梨花悠紀子) |
| Z 69 | ベッドの悶え  | (愛川悦子)  |
| Z 70 | 恥しさに耐えて | (館典子)   |

「ぬれているからよ。そのまま乾く迄待ったら良いわ。」  
 「そうね。ユキ、もう一寸待ってなさいね。」  
 三人は又、水の中にとび込んだ。雪江はうつ伏せにされたままだ。むき出しの乳房にコ

ンクリートが痛い。仰向けになれば後手の手首が痛いし、横になれば、二の腕の縄目が痛い。それに、もう不自由な体で起き上がるだけの力はなかった。おおうもののない背中を太陽が強く打つ、乳房を粗いコンクリートが撫

でている。一面太陽にさらされた輝くような白い肌、雪江の苦痛をよそに、他の少女は一心に水しぶきを上げていた。いつ迄も。

(終)



## 最近代理部分讓品案内

## 女体緊縛フオトの部

## 一、//大の字//逆さ吊り

大中判印画紙 三枚一組 四〇〇円

略号(つり) モデル 梨花悠紀子

責めの中で吊りが一番好きだという梨花悠紀子を逆さ吊りの大の字に両足をいっぱいに広げさせた強烈な吊り責めフオト。

## 二、立木 //宙縛り//

大中判印画紙 三枚一組 四〇〇円

略号(くた) モデル 梨花悠紀子

荒縄が全身にぐるぐると喰い込み、立木に高々と宙じばりになった悠紀子の足場のない足先だけが徒らに苦痛にうごめいている。

## 三、凄惨 //乳房責//

大手札印画紙 三枚一組 二五〇円

略号(とい) モデル 梨花悠紀子

ヒョウタンのように根元を縄でくびられてもうこれ以上大きくならないという極限まで虐たげられた乳房の大写し写真。

## 四、//妊婦の緊縛//

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(にむ) モデル 某女

読者の紹介で得た妊娠中の若い女性をモデルとして、その胸や腹を緊縛した写真。誌上に掲載しないという約束の稀少作品。

## 五、//全裸の仕置//

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(すお) モデル 東浦ひかる

マゾの遍歴から。より強烈な試練の庭に立ちたいと願う東浦ひかるの最も新しい生感をここに、あからさまに紹介したいと思う。

## 女体切腹フオトの部

## 一、血紅女体自害

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ひち) モデル 大塚啓子

白鞘の短刀を豊満な下腹へぐさりと突き立てて、きりりと臍下を切り裂き、溢れる血汐がしたたり落ちる凄まじくも美しい光景。

## 二、女体切腹マンダラ

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(あま) モデル 甘木春子外

あるマニヤが同好者の女性をモデルとして

野外にて自らその女性の腹部を切り裂いてゆく有様を撮影した血紅利用の切腹写真。

## 三、悲愴女体自決

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ひい) モデル 大塚啓子

真白い肌に突き立てられる氷のような九寸五分の脇差。臍下に、乳房に、咽喉元に最期のとどめは容赦なく加えられてゆく。

## 四、哀艶女体割腹

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(かつ) モデル 梨花悠紀子

正面向いて両膝を立て、或は右膝を一步踏み出して全身の力を両手にこめ、ううう、とばかり無垢の柔肌に突っ立てる刃先。

## 五、凄惨血紅女体立腹

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ひさ) モデル 大塚啓子

柱を背にして立ち壮絶な立腹を演じるさまを豊富な血紅を用いて刻々と変りゆく経過と苦悶と哀切の表情を捉えた血汐のフオト。

## 六、苦悶切腹表情

大手札印画紙 五枚一組 五〇〇円

略号(せく) モデル 梨花悠紀子



切腹によって起る激痛による苦悶の表情を真迫的に描写しようとして、顔面は勿論、手足の指先に至るまで刻明に写した作品。

### フェチ・フォトの部

#### 一、バンド着用フォト

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(めい) モデル 梨花悠紀子

メンスバンド・マニヤ待望のバンド着用のありさまを刻明且つ鮮明に美しいモデル嬢によって、あらゆる場面をごらんにいきます。

#### 二、バンド着用の縛り(後手)

大手札印画紙 四枚一組 三〇〇円

略号(めろ) モデル 梨花悠紀子

後手高手小手にメンスバンドを着けられた女性の口も鼻も、猿ぐつわとしての替ゴムがムンムンするゴム特有の臭気を放っている。

#### 三、バンド着用の縛り(前手)

大手札印画紙 四枚一組 三〇〇円

略号(めは) モデル 梨花悠紀子

バンドや替ゴム着用の部分を殊更鮮明に大寫しするための前手しぼりによる脚拳ポーズ等、のびやかな下肢の動きは美しい。

#### 四、女性の六尺褌

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ろく) モデル 大塚啓子

晒の六尺褌をきりりと締めた裸女が、正面背面、横臥、側面とフンドシ着用の女体をあらゆる角度からキャッチしたマニヤ向作品。

#### 五、ゴム・マニヤ

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(こむ) モデル 梨花悠紀子

ヌメヌメとした生ゴムのタッチとあの特有の臭気にむせびながら、頭の先から手足の先までゴムづくめのゴムフェチの女体。

#### 六、メンス・バンド

大手札印画紙四枚 一組 四〇〇円

略号(めす) モデル 梨花悠紀子

両の自由を奪われてしまつては、もう強制的に装着させられたメンスバンドをはずすことも出来ない。鮮鋭なレンズはシワの一つも見逃すまいとフィルムに印してゆく。

### Mフォトの部

#### 一、足で戴く珍味

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号(くさ) モデル 絹川文代外

足の指に挟んだお菓子をもそのまま直接口で

受けて戴くのは、マゾヒストの夢にまで描いた幸福の構図ではなからうか。

#### 二、靴の下にうごめく

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号(くつ) モデル 絹川文代外

鋭く尖ったハイヒールの靴先が、或は踵が口の中へぐつと押し込まれる汚辱の瞬間。床に転った顔を踏みにじる非情な靴の裏。

### 特殊趣向フォトの部

#### 一、絞首処刑

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(こう) モデル 絹川文代

後手に縛られたフンドシ一本の裸の女首には絞首刑の縄が垂れ下り、脇腹には白刃が突きたてられて血汐が溢れる苦悶の形相。

#### 二、鼻料理

大手札印画紙 六枚一組 六〇〇円

略号(はか) モデル 大塚啓子

若い女の鼻に対して、これでもか、これでもかと、いろいろの苛虐が手をかえ品をかえて加えられてゆく鼻マニヤの作品。

◎お申込みは「略号」にてお願いします。





水木清一様 貴男の「お灸つれづれ」読みました。たしかにお灸をすえる人は女性が多い様です。そして熱さに対して辛抱強いのは女性です。水木様は自分でお灸をすえられた事がないそうで、わからないと思いますが、熱さの後にくるなんともいえない陶酔苦があります。貴男が書いていられる様に、何か身体がぞくぞくとしてきて、無性にお灸が恋しくなってくるのです。私などは酒が大分回ってくると思ひ出して異性の人

にお灸をすえてもらい、酒の酔いとお灸の熱さ、その悦楽にうめいております。人にお灸をすえることは専門家でないと中々その機会にめぐまれません。自分がすえてもらう分には、大体の人がすえてくれます。そして四、五回すえてもらっている中に相手の様子によって、縛ってお仕置にお灸をすえてくれと頼むと喜んですえてくれます。一度はある旅館の女中さんでしたが、中年の中々美しい女性で、私が陶酔苦にうめき声をあげながら、お灸をすえてもらい、すえ終った時、「お灸って、そんなにきくものかしら？」と言うので、「新薬を飲むより、完全になおすにはお灸が一番いいんだって言いますよ。だからドイツ、アメリカなんかでも、一部の医者が研究しているそうですよ」とお灸のききめを話してやると、「私もすえてみようかしら」と関心を示したので、私がすえてやることになり、灸穴は本で見て知っていいので、彼女の指から寸法をとって、背中に四カ所と腰に二カ所、そしておへその両側に二カ所すえてやった事があります。たしかにお灸の熱さをこらえている女性の

姿は素晴らしいものです。その姿を見たいばかりに、時には浅草の弘法の灸、そして横浜の峯の灸をすえに行きます。峯の灸は途中に一カ所と終点に本家を争っている二軒があります。私は坂を下って右側の新しい家に行きますが、先ず玄関で住所、氏名、年令、職業を書いてもらって、次の部屋に入って仏壇の前にすわっている坊さんの前にて裸になり、印をつけてもらって、その奥の部屋に入ってゆきますと、百帖敷位の部屋に六列位に並んで背中や腰、大体の人が背中に四カ所、腰に二カ所の六カ所に小指大の艾をのせて、煙を上げてこらえて居る眺めは、素晴らしいものです。すえてもらっている七割位は女性です。大体において中年の婦人が多いのですが、中には若い女性の人もまじっています。私も前に書いた「灸責熱海の一夜」が縁となり美枝子と昨年の十一月、結婚式を挙げて、今ではすえつつすえられつ、二人で灸責めを楽しんでおります。そして現在では浣腸も時々やっております。(神奈川八保田徹)

奇ク誌を愛読致しておる三十三才のマゾ男性です。奇クは私ども

の見果てぬアブへの渴望を癒やし充てられる唯一の機関であり、貴い存在として身辺より離し得ない雑誌ですが、私は中でも読者通信の欄に実在されるサド女性からのお呼びかけの声を聞くことを何よりもかけがえのない愉しみとして毎号講読の度に、まづ先に通信欄のページを開いてみております。往年の東京の坂本清子様や川崎市の奥山照代様、そして最近では名古屋の北緋紗子様など、畏敬すべき女王様方の呼びかけのお言葉は、私どものようなマゾ男を驚喜させ、勇気づけてくれることかしれません。私は常々美しく気位の高いサド女性に思ひのままだに支配屈服を受け、絶え難いような辱しめや折檻を受けてみたいものは夜念じ悩んでいるあわれな独身男性です。驕慢残酷な女王様の足下に伏して、嗜虐のための手なぐさみの生ける道具と化し、また女御主人様の一方的福利のために奴僕として使役奉仕致すことを強制せられ、若し些少でも御意に背くときには、刑罰として往復ビンタや鞭でせめさいなまれ、ハイヒールの先で息も絶えるまで踏みつけられたり、便器代りに排泄物を口中にねじ入れられ、あらゆる残虐



の処置をもって賤しい生物だといふことを骨の髄まで覚らされるような境遇におかれたなら、どんなに幸せだろうかと思像しています。全国殊に都内近辺にお住いのサジスチンと自認される女性の方で、何の遠慮もなく悦虐の希いを果したいと望まれる方、一時のプレイでも、また永続的でも結構ですが、本格的な奴隷として絶対無条件の服従を強いることができない玩具として喜ぶことのできるマゾ男をお求めの方がいられますたら、お便り下さるなり、お会いしたいと思います。勿論、秘密は厳守、有形無形のご迷惑は絶対に避けたいと思います。私は毎週日曜日の午後六時前後に、上野公園西洋美術館前にてお待ち致しております。目標しには、右手に週刊紙をもち、お互いに時刻を尋ね合ひましょう。ではサド女性の方々、どうぞよろしく。(東京葛飾八早川芳夫V)

編集部の皆様、全国の女角力と女斗美マニヤの皆様、御無沙汰いたしました。その後お変わりありませんか。最近、女角力ファンの方がたくさんおられる事をうれしく思います。我々ファンは女性同志

が渾一本となり、土俵上で相打ちをし、両者共、渾の立渾を引合せて取組合ったり、乳房のせめ合をし、そのあげく、二人共かさなり合って土俵下へころがるのも意味深いものと思います。女角力マニヤの方、一度友の会でも作りたいと思います。又、文通でもいたしたいと思いますが如何ですか。同意の方は、どうか誌上に名乗りをあげて下さい。いろいろと話し合えたら、きっと楽しいことだろうと思います。お便りをお待ちいたします。(岐阜県平田八服部不二夫V)

編集部の皆様、お変わり御座いませんか。私は竹野ひろ子様が大好きです。ひろ子様の緊縛写真はアルバムにはって、いつまでも保存してあります。ひろ子様が「カバール・ガール」として初めて誌上に登場したときの私のよろこびは何にも替えがたいものがありました。しかし、このような私のよろこび以来、その後、とんと姿を見せない様ですが、どうかしましたか。それとも私のしらぬ間にも、辻村様や塚本様達の手によって、強烈な縛り責めにされてい

るのでしょうか。そう思うと私の胸はときめいて、どうしようもありません。ある時は、竹野ひろ子様を全裸にさせ、彼女の柔肌をロープでぎゅうぎゅうと締めつけて、身動きもできない、きつい後手に縛り、更に息も出来ないくらいきつい猿ぐつわをかませて、ひろ子様の柔肌を足で踏みつけたり転がしたりして、色々な「責」に身もだえし、悲鳴を挙げています。竹野ひろ子様の柔肌を思う存分、縛り上げ責めあげてみたいと思います。その一つ二つを書いてみましょう。まず、ひろ子様を全裸後手吊り、全裸逆さ吊り、全裸乳房吊り、ある時はひろ子様を全裸にして両手首、両足首を縛りつけて身動き出来ない様にする。それから、火のついた太いローソクを竹野ひろ子様の豊かな乳房の上に、二の腕に、太ももに蠟をたらしてゆく。ひろ子様は、この蠟涙のあつさに、どの様にしてもがき苦しむだろうか。ただそう思ってみただけでも、私の胸の中は、熱湯の様にあつくなってきました。色々と書きましたが、ぜひ竹野ひろ子様の変わった写真がありましたら送って下さい。お願いします。(神戸市

八竹淵芳寿V)

貴社から発行されます奇トラブ。この本の一愛読者である私が、必要以上にうれしく思っていることは、最近の本の内容がまったくすばらしいということです。ほんとうに、すばらしいという言葉をおいて、他にどう表現できましよう。ただ目をみはらせることばかりです。それだけのかんろくを持っていきますから、書店でもひとときわ目だつことは言うまでもありません。今まで長い間発行に努力され、けいぞくされてきましたことは、私たちにとって、何よりもの贈りものです。まだまだ内容をじゅうじつさせ、今後ともいつそう努力されますことを一読者として希望いたします。只今暑いさかりですが、どうぞお身体に気をつけられて、よりすばらしい本を発売下さるよう呉々もお願いいたします。私はお多分にもれず、若くて肉体のよい女性の縛りに興味を持っています。何故このような好みを持つのか、いつ頃からそうなったのか、自分でもはっきりとわかりません。とにかく、物心のついたころから、そうだったような気がします。そして、このよう



な変った趣味を持っているために、今までに、色々とお悩み、神経衰弱になるくらいもだえましたが、貴誌を発見してからは、私の悩みもからりと五月のそらのように晴れわたり、只今至極御きげんです。これもひとえに、すばらしい内容の貴誌のおかげだとよろこんでいます。私にとって他は如何なる内容の本よりも貴誌がすばらしいのです。心からお礼申し上げます。(東京八丸本一生V)

八月号が予定日に出ないので案じておりましたが、今日、八、九月合併号を書店に見出したとき、やはり私は「奇ク」のヴァイタリテイを感じました。色々な圧迫があると思いますが、「奇ク」は文獻誌として他の雑誌にない数々の特長を誇りとして、いらぬ遠慮は無用と思っていますが、世に無智な輩が多い現在、時節到来まで、今の姿をとるのも止むを得ないと思います。しかし、多くの支持層があるからこそ、今日まで存続し得たのですから、この伝説を長く伝えて下さい。女斗美、女性輝美の記事、絵がなくなつたことは、いささか淋しいと思いますが、いつの日か、これと再び相見える

日を期待してやみません。これはやはり圧迫のせいでしょうか。これに代って、今月号から生首シリーズが始まることで、マニヤの願望が満たされたことを嬉しく思っております。「娘俠客の切腹」もよかったですが、晒の腹巻の上からの切腹は一寸いただけませ

ん。やはり腹部をむき出しの上、ぐざりと一突き、ざくざくと裂いて行かなければ、迫力があまりないように思われます。「裸女血斗の果て」も結構な贈り物でしたが、「大奥裸女血斗」に於けるような、ふんどし一本の裸女のそれを期待していた私にとっては、少し物足りなく思いました。それに裸女の体に、激しい斗いの後を物語るような、返り血が点々とついていると云うようなものがないことも残念でした。それに首のない相手の裸女の屍も少しかげになつて判然しなかったことも同じです。生首マニヤ、無惨絵マニヤにとつては、このような生々しい裸女の屍も共に描いてあることによつて興味が高まるのです。幸に、このシリーズが続けられるようですから、その中に見望久しい「大奥裸女血斗」のクライマックスであるサロメのような御守殿、即ち相手

の黒輝の裸女の生首を下げて、その屍に片足かけて勝名乗りをあげる赤輝の裸女の図の発表を望んでやみません。勿論背景に、そこかしこに死斗をつずけるふんどし一本の奥女中たち、それに空しい屍となつて斃れ伏しているふんどし一本の裸女達の屍を二、三描き添えて下さればマニヤにとっては、これ程の贈り物はありません。圧迫のせいで今直ちに不可能ならば、時節到来の暁に、是非お願いします。同好諸兄姉の通信を待っています。(大阪八室井英山V)

三隅千恵子様。ぶしつけとは存じますが、お呼びかけ申上げます。七月号の通信欄を拝見いたしますと、どなたか、貴女と私に女同志の試合をさせて見たいと書いていらつしゃいました。貴女の御都合は如何でしょう。お伺い致しますわ、私の方は全然異存はありませんし、喜んでお受けしようと思つていますから。貴女も是非御賛成下さつてお快く応じて頂けませんかしら? 私は貴女の「女学生を組み敷く」や、もっと以前の「変ないたずら」等、とっても興味深く読ませて頂いて、私の好みと不思議な位びったり一致して

るのにびっくりしましたのよ。其の頃から一度貴女にお目にかかつて、色々お話を伺つたり、お差支なければ二人でプレーを楽しんで見たいと思つていました。そんな機会は、今までありませんでしたわね。ですから今度貴女との試合が実現されれば、私は願つたりかなつたりで、此んな嬉しいことはありません。ほんとに其の日は早く来ればよいのと待ち遠しい位ですわ。でも貴女は随分お強いらしいし、正直に云つて私は貴女に勝てる自信はあまりありませんのよ。場合によっては、くやしいこと乍ら貴女に負かされ、馬乗りに組み敷かれて、散々な目に合はされるかも知れませんわね。貴女のお得意な押え込みで、顔を太ももの間にはさみ込まれ、全身の重味でギューギュー喉を絞められたり、或は最後のとどめで貴女の大きいヒップに顔を敷きつぶされたら、何んなに苦しいでしょう。でも、私の方が弱ければ、お強い貴女に屈服するのが当然ですもの、何をされても構いませんわ。そのかわり若し私の方が強わつたら容赦は致しませんから観念して下さいませね。貴女は試合の時の服装は何うなさいます? 私は女性的



な服装が好きですから、お相撲の  
陣姿はいやです。でもスカートは  
じゃまですから、矢張りブラジャ  
ーにパンティーだけでは如何でし  
よう。それにハイヒールは必ずつ  
けていたいと思っていますのよ。  
試合が始まれば、貴女も私もそう  
簡単に降参は云わないでしょう

し、相当烈しい格闘になるでしょ  
うね。何んなに美しく見事でしょ  
う。貴女さえおよろしければ試合  
は、どちらかが降参を云うまでで  
はなく、負かされた方が息も絶  
え絶えに遂に気を失うまで、徹底  
的に決闘をしても結構ですわ、で  
も貴女が気絶なさって息を吹き返

## 斯道愛好家に贈る

定価 一〇〇〇円

## 悦虐写真集決定版

(略号「プロ」)

◆本誌モデル嬢の中、最近活躍  
しました左記の諸嬢の中の緊縛  
姿態の最も優秀なものばかり百  
態を集録いたしました。全く素  
晴しい緊縛姿感集の圧巻であり  
ます。

### 出演モデル嬢

絹川文代、桜井葉子、愛川悦  
子、梨花悠紀子、平野笑子、大  
塚啓子、須川令子、東浦ひかる、  
加茂良子、花本京子、四方清美、  
若原明子、竹野ひろ子、熱海容  
子、花坂道子、田中芳代、田原  
美佐子、岩井知子、前本妙子、  
大井小夜子の諸嬢。

◆本写真集は一切書店売りはい  
たしません故、何卒直接天星社

宛お申込み下さい。

◆これは、永年女体緊縛ポーズ  
を手掛けてきました本誌が、自  
信を以て作成し、自信を以て提  
供できる写真ばかりです。コレ  
クシヨン・マニヤの方はきっと  
お気に召すと存じます。最初、  
印刷物にするつもりでしたが、  
途中で急に予定を変更して、一  
々コピーをとる方式に変えま  
したため、量産できないウラミ  
はありますが、直接感光紙に焼  
付けたものですから、稀少価値  
は凄く増す筈です。貴重な資料  
として是非お求めの上、末永く  
お手元で御愛玩下さるようお願い  
いたします。

さない様なことにでもなれば一寸  
困りますわね。貴女と同じく、私  
も首の上に跨る押え込みが何より  
大好きですから、私が貴女を組み  
敷いたら、断然此の手で貴女をひ  
どい目に会わせて差上げます。私  
は未だ同性の首に跨って跳ね返さ  
れた経験は一度だってありません  
から、貴女だって絶対跳ね起きる  
ことは出来ないはずですわ。貴女  
の細くくびれた喉首の上にどしっ  
とヒップをのせて馬乗りに跨り、  
むちむちした太ももの間に貴女の  
奇麗なお顔をギュッととはさみ込  
んで五十五キロの体重で貴女の首  
をぐいぐい絞め上げるのです。何  
んなに素敵な気持でしょうね。貴  
女は私の大きい膝頭に両腕までも  
がっちり踏み付けにされて、上  
半身は、まるではりつけにされた  
様にびくとも出来ず、私の白い内  
股の間から、やっと顔だけをのぞ  
かせたあわれなお姿で、しきりに  
脚だけを、じたばた中に躍らせ  
て、空しい抵抗をお続けになるで  
しょう。眉をつり上げ、唇を食い  
しばって、真赤に紅潮じた貴女の  
お顔にはべっとり脂汗が滲み出  
て、悲痛そのものの、全くいつも  
のですわ。こんなこと想像してい  
ますと、私は早く貴女を押え込ん

でみたくて、むずむずしますわ。  
でも矢張り貴女を完全にやつつけ  
るには、お顔の上にまともに跨る  
に限りませんわね。だって女は、身  
体の上の部分を敷きつぷされる  
程、屈辱を感じるのが普通ですも  
の。貴女だって、お顔を私のヒッ  
プに敷かれれば、首に乗った時よ  
り、ずっと、みじめな敗北が身に  
しみることでしょう。貴女は、口  
と鼻をびったりとふさがれて、息  
は出来ず声は出せず「う……うッ  
！」とかすかな呻き声がせい一ぱ  
い。苦しまぎれに、のたうちまわ  
ってお暴れになるでしょうね。貴  
女は命からがら、何度かは、必死  
になって私のヒップの下からすり  
抜けることが出来るかも知れませ  
んけど、私は、しつこく何度でも  
繰返し、貴女のお顔の上にどっか  
と跨っては、お気の毒乍ら、半死  
半生の目に会わせて差上げましよ  
う。そうなれば貴女は何うなさい  
ます？ 遂に力つきて、息も絶え  
絶えに「降参、助けて」と仰云る  
か、それとも、息をつまらせ「う  
ーん」と気絶なさって、みっとも  
なくノビておしまいになるか二つ  
に一つですわね。こんなことばか  
り書きますと、貴女は、私をこわ  
い女とお思いになるでしょうけれ



ど、普段の私は、それ程ではありませんが、お目にかかれれば直ぐお分りになると存じますが、其の日の楽しみにして、お待ちしています。でも私は、たった一つだけ、少し気がかりになることがあります。と申しますのは、貴女との試合は勿論望む所ですけれど、第三者の誰かに見られるのは、とても恥しくていやですわ。殊に男の方に見られるのでしたら、初めからおことわりしなくてはなりません。貴女は何うお考えでしょう。それから、折角貴女と私の試合が実現されるのでしたら、二人だけでなしに、もっと多勢お集り頂いて、優勝を争ったら、一層素晴らしいと思いますわ。例えば、貴女と、私、それに戸破貞子さん、三木恵子さん、古川愛子さんに妹さん、高木紀久枝さんに女子寮のお友達等、お呼びかけすれば、十人位は、わけなくそろいそうないがしますわね。御返事お待ちしております。さよなら。三隅千恵子様へ（長瀬昭子）

貴社愈々御清栄の段、誠に喜ばしい事と存じます。私は二十八才の男性ですが、Kクラブを愛読させてもらう事、早や五年、何も知

らない私は、ある書店でKクラブを手にしたとは、生来、こうした素質があったものか、それ以来、日々にMSに趣味を持つ様になり、最近では、毎月新刊の出るのを待ちかねるようになり愛読しております。勿論、読者通信に投書するのは初めてですが。四馬孝先生はじめ、実に貴画の素晴らしい事は、私共愛読者にとっては、この上もない味方だと、いつも感謝致しております。又、モデル嬢も大塚啓子嬢はじめ、竹野ひろ子様など、素晴らしい方ばかりです。私は、やはり貴めでは高手小手が一番好きです。肉づきのよい女性をがんじがらめに縛り上げ、厳重に猿ぐつわをはめ、思いきり鼻を責める。又反対に責められる。こんな場面を想像しただけでも、血が燃える思いです。私は残念ながら現在までプレイをした事がありませんが、一度気の合った女性の方と縛ったり縛られたりしたら、どんなに素晴らしいことだろうと何時もこんな夢を見ています。もし私と同じ趣味をお持ちの女性の方がいらっしゃいましたら、御協力お願い申し上げます。大阪八中村直二（V）

名古屋の北緋紗子様の御通信を

奇ク誌上にて拝見致し、胸をおどらせ早速お呼びかけ申上げる次第です。私は本年三十四才の男子にてマゾヒストでありますが、長い間、奴隷としておつかえ出来る女王様を求めてきました。しかし、現在まで残念ながら、お逢いする機会を得ず、悩みつづけて参りました。はからずも貴女様の御通信を拝見し、やもたてもたまらず、奴隷として御採用下さることを切に念願致す次第です。私は愛知県の生れには、一寸、仕事の都合で唯今こちらに居りますが、年内には帰郷することになっております。従順にして決して女王様を失望させることは、ないことをお誓い申し上げます。何卒是非共、私を奴隷として御使用下さいませ。身命を賭して御奉仕致す所存です。一度誌上には或は局止にて私宛に御返事下さいませ様御願い申し上げます。それから京都市で京区の九徳弘様、同じマゾヒストとして一度是非お逢い致したく存じます。連絡方法を誌上か局止にて御知らせ下さい。（京都中央局止八山田正男（V）

暫く御無沙汰致しました。私は毎月の奇クを楽しく拝見している

マゾ青年です。北緋紗子様、私は貴女を女王様として足下にて奉仕する事が出来たら、この世に生れた生甲斐を感じるでしょう。緋紗子女王様の忠実な奴隷たる私は、女王様の前にひざまづいて無条件に盲従致す事をお誓い致します。女王様の御命令には絶対に背いたり致しません。まして反抗など思ひもありません。ただ恐れおののきながら、鞭打たれる奴隷として一生忠実にお仕え致します。私は美しい女王様の大きなお尻の下で悶え苦しみながら、尊いおならをかかせていただけたら、死んでも本望でございます。私は度々名古屋へ出張いたしますので、連絡下されば、いつでも足下に飛んでゆきます。緋紗子女王様、是非私を忠実な奴隷にさせて下さい。お願い致します。（大阪市八石本完治（V）

私達切腹幻想愛好者にとって、貴誌は唯一無二の愛読誌であったのに、毎月出るたびにとびつくようにして買い、むさぼり読んでいた貴誌であったのに、八月号が店頭に出ない時のさびしさ。それから、デパートの古書籍部や古本即売会などで昔の文献を漁ってみま



したが、昔の本には、絶対といっ  
ていいくらい、女性切腹について  
書いたものがありませんでした。

そして、いよいよ貴誌への期待と  
信頼を深めていた矢先、九月号の  
インクの香も新しい新刊を手にし  
て、ほんとうに飛び上るほど喜び  
ました。巻頭の口絵、「娘俠客覚  
悟の自刃」「裸女血斗の果て」「首  
級をあげたり」「娘子隊の最期」  
の三枚もの切腹画。どの一枚をと  
っても貴誌を買った値うちがあり  
ました。若し私がこのような女性  
切腹の絵を描き求めて、古本屋で  
昔の本から探し求めたとしたら、  
何千円何万円出しても不可能だと思  
います。貴誌の旧刊の値うちが  
出るのも、もっともだと思いまし  
た。この三枚の絵の中、やはり、  
私には先にあげた二枚がよかった  
と思います。絵としては「裸女血  
斗の果て」が素晴らしく、美しいで  
す。欲をいえばこの勝ち誇った女  
性が、自ら腰巻の紐をゆるめて、  
腹を切っていたら、尚更よかった  
のにと思います。とにかく、陰  
惨な画材なのにきわめて明るく、  
美しく描かれているのは、ほんと  
うに立派だと思えます。女性切腹  
のイメージは、やはり、哀憐で美  
しくなければなりません。陰惨や

醜いものになってしまつては、私  
達の折角のイメージもぶっこわし  
です。その点でも貴誌は大好きな  
のです。今私の資料の一つとして  
保存してある「変態資料」の口絵  
に、敵の首級をあげた男が、血の  
したたる首の切口に口をあてて血  
をすすっている無惨絵があります  
が、これなんか、男性同志で、最  
初から私のイメージには合いません  
が、全身の返り血や、首を握っ  
てささげた右手にしたたり落ちる  
血、口のまわりに流れる血汐な  
ど、凄惨さはありますが、美とは  
凡そかけ離れた絵で、愛玩するこ  
とは出来ません。芳年の無惨絵に  
は、陰惨なところが殆どで好きに  
なれません。女性切腹でも緊縛で  
も、やはり明るさと夢と美しさが  
ないと長く人に愛されることが出  
来ないと私は信じております。ど  
うか、これから私達マニヤの夢  
を育くむ資料をどしどしお載せ下  
さるようお願いすると共に、貴誌  
の益々発展されることをお祈りい  
たします。(大阪八中和一〇)

北緋紗子様、突然この様な失礼  
な投稿をお送り致します事をお許  
し下さい。私は奇巧の熱烈なファ  
ンの一人で御座居ます。毎月の発

売日が待ち遠しくてならない一人  
で御座居ます。八、九月合併号を  
買い求めて、貴女様の書簡を拝見  
させて戴き、夢でありますなら、  
幾日もさめないで居てほしいと願  
うばかりです。私は昭和十年七月  
三十日生れの淋しい男の一人で御  
座居ます。誰か私の如き者でも胸  
をうち明けて話をきいて下さる御  
方は居られないものから探してお  
ります次第で、まことに回りくど  
い投稿に成りました誠に申訳御座  
居ません。前後をかえり見ませ  
ず、私の思うがままにペンを走ら  
せて告白させて戴こうと思いま  
す。無礼の段重々伏してお詫び致  
します。私は大変なM(マゾ)男  
で御座居ます。一生に一度奇巧の  
小説に書いてありますような(私  
にとつては)命にも替えがたい女  
王様、女王様と心の中で叫びつづ  
けているので御座居ます。かりに  
私の願いが十分の一でも叶えて下  
さいますものなら、私は地の果て  
までも喜んで犬に成り、又奴隷と  
成って……。たとえ自分の身がバ  
ラバラに料理されようとも私にと  
つては、それに過ぎた喜びは御座  
居ません。私はこの様に身に余る  
大きな空想に耽って悩んでおりま  
す。書き遅れて申し訳け御座居ま

せん。身長は五尺五寸六分、体重  
十六貫、職業はクリーニング店を  
経営しております。でも、一寸顧  
り不安に成りますのは、近辺の方  
でなければ駄目なものでしょう  
か。貴女様に、この文を見て戴き、  
お心を通じますものなら、誌上又  
は書面、どちらでも結構で御座居  
ます。御返事戴けませんでし  
ょうか。私、伏して伏してお願ひ致し  
ます次第です。最後に貴女様の御  
健康を祈っております。(悩む大  
の男八木村覚〇)

小生、三十三才、名古屋市在住  
の者です。マゾである私は、日頃  
よりサドの女性の方のドレイとし  
て心ゆく迄おつかえしたいと思っ  
ていますが、いまだ機会もなく現  
在にいたっている次第ですが、今  
回はからずも奇巧にて緋紗子様  
のお便りを拝見しまして、近辺に私  
の察望をかなえて下さる方のある  
ことを知り、早速お願いしてドレ  
イとしておつかえしたいと考えま  
したが、何分にも妻子のある身故、  
プレイに専念するわけにもゆか  
ず、限られた範囲、それも休日の  
一定時間しか自由を見いだすこと  
が出来ませんが、プレイには自信  
をもってお仕え出来ると思いま



す。何分未経験ですので、大きなことともいえませんが、緋紗子様のリードによって、十分ご期待にそえると思います。限られた範囲しかお仕えできませんが、よろしかったらご使用下さい。なお、出来ましたら一度お会いして、ご高説でもお聞きしたいと思いますが、いかがでしょうか。もしご都合がつかましたら、9月2日(日)午後一時から二時迄の間、栄町東行バス停(一番西より)にてお待ちしています。目印は右手にハンカチをまきつけています。もう不成功の場合は9月23日(日)同時刻頃おまちしていますので、お出かけの上およびかけ下さい。(名古屋市八服部生V)

○ 御社益々御盛栄の段、およろこび申し上げます。小生は御誌発刊以来、すでに十年以上に亘って愛読を続けております。生地は京都で住居も父のあとをついで、ずっと京都です。勤め先は大阪で、いつも活気のある京都の雰囲気を感じ、中身は身につけ、夜は静かな京都の街にて安らぎを覚えています。十何年間の間、小生も自分なりに同好の相手を求めては、その緊縛のポーズを写真にとっては、そのア

ルバムも今では、数冊にも余るようになっていました。同封の五枚の写真は、小生がこの春、商用で上京した際、車中で同席して親しくなれた女性で、女子高校を卒業した機会に国(群馬県)の館林とかいっていました。墓参に行くとかいう話でした。それから十日ほどして、小生が名刺を渡しておいたため、勤め先へ電話があり、その日の夕方、喫茶店で逢って、いろいろ話をした上、五月ごろから緊縛ポーズをとるようになりました。ごらんのように、大変肉づきのよいグラマーでフェイスの方も可愛い顔つきです。この写真の主が最も新しいアルバムの写真ですが、今までモデルにした女性はこの人を含めて、二十人ぐらいになるでしょう。中には、どうしても写真をとるのは嫌だということで野外のスナップ写真だけしか残っていない人もありますが。この女性には、只今市内の某商事会社に勤めているようで、(小生にはその会社名を明していませんが)小生の経営する勤め先へ三日おきぐらいに電話してきますのですぐ連絡がとれます。御誌のことを話したら、大変興味をもったらしく、ぜひ紹介してほしいとのこと

です。で、御誌のモデルに一度使っていたらどうでしょうか。本人は真正面でなかったら顔を写されてもいいといっていました。小生の考えでは身体が非常に立派なので、肩、胸、股とかいった部分的な緊縛のアップをとったら十分鑑賞にたえるものが出来るだろうと思います。五枚の中の一枚、(ホ、)は小生がそういう狙いでとったもので、胸のポリウムと肩に重点をおいて誇張したものです。小生は余りゴタゴタと縄をたくさん使ったものは好みませんから、このようにあっさりしたものになりましたが、場面によっては、ごつごつした荒縄なんかで胸を飾ったら、一寸面白いものができるのではないかと思います。なんでしたら、小生所蔵の数冊のアルバム、(全部自身でうつしたもので、ネガが揃っています)をお見せしてもよろしい。何分のお返事をいただければ幸いです。小生、先にも書きましたように、住居は京都ですが、毎日大阪市内の勤先(別記)へ出勤しておりますから、九時から五時頃まででしたら、お電話下さい。尚、京都の撮影所が近いせいもあり、知りあいから緊縛のスタイルも大分もらい集めました。

た。これもアルバムにしてありますが、御誌にのったものも、混っています。自分でとったものと違い、余りピンとくるものはありませんが、一応集ったものだけはあるてあります。昨年バーの女で、酒の勢いで口説いたところ、一回一万円ならということ、写真をとったのですが、この女、中々演技力のあるお芝居気を持った女で、かすらに振袖姿で縛られたり、相対いろいろの場面が、出来上り、今も小生のコレクションの中では異彩を放っております。小生の趣味としての散財もゴルフやドライブなんか比べて、割安だと思っております。愛用のカメラを駆使していろいろお話できたらと思っております。それから、読者の提供にかかると写真が今まで、時折誌上を飾ったことがあります。差支えない程度に、手持のものを差し出して、コンクールのような恰好で誌上を賑わしたらどうでしょう。全国の愛読者の写真ファンの方々に提唱する次第です。(京都八竹年一V)

○ 皆様、お元気でお過ごしのことと存じます。益々内容の充実して



参る奇クに人知れぬ喜びと楽しみを感じている私たち夫婦でございます。毎号奇クを拝見させて頂いて居りまして、如何に入知れず求め合うことが多いかとつくづく私自身のことも含めて、しめつけられる様な想いにかりたてられます。私たちだけの想いなのでしようか？ でも之だけの求め合う人たちの果して何分の一人の人が、たとい文通だけでも出来る様な御交際ができて居るのでしようか。もう何号か前になりますけど、同好グループをお作りになろうと呼びかけになった東京の中野様の御意見は主人も本当にまじめな集いであれば、之が理想だとしきりに同意しておりまして。お互いの社会的立場や秘密が絶対に厳守され合つて御交際できるグループがあつたら、どんなにか楽しいことでしょう。人それぞれには条件があるのですから、決して無理強いをせず連絡責任者のしつかりした方がお世話頂いたらと思つたり。実は正直に申し上げてみますと或る頃から御知り合いになった私たちの御交際している御夫婦お二組K夫婦の御主人が相当詳しい案を御知らせ下さつて居ます。この様な同じ考えの方々に御趣向を

合せてそれぞれ御連絡し合える様なグループはぜひあつてもよろしいのではございませんでしようか。七月号の桜井御夫婦様、或は女性同志でお話し合つてみたいと思つて居ます。和歌山の水口晴子様、東浦かおる様はじめ御便り交換でも、せめてさせて頂いたらと希つて居ります。この様なお考えの方々がそれぞれの御意見や御申出をもち合つてお話し合い研究し合つてみたら、本当に心配のない立派なモノが出来上る筈だと主人も申しておりますが。勿論私たちもできるだけの御協力は致しますが、誰方か力強くリードして頂ける方が必要ではないでしょうか。奇クスタッフ陣の諸先生方の中でも甚だ失礼ではございますが、個人的に御賛意の方がいらつしゃつたら御意見なり御助力なり賜りたいとも存じます。女だてらに大変な御提案をいたしてしまいました。主人の意見が殆どでございます。只私に致しまして求めてはいても否定などはいささかも致してないことはお恥しいかぎりですが、神に誓つて申し上げて置きます。真剣であればある程求めるものは。ともあれ、これを機会と致しまして私たち平凡な

夫婦にも新しいペンフレンドが与えて頂けます様人知れず不逞なお祈りをしながらペンをおきたいと存じます。本日は前述の投書もさせて頂きましたし、主人の意見もございまして大変お恥しいのですが私たちの作品の一、二もお送りさせて頂きますが、御批判など頂ければ幸いです。 (香川 八山崎美代子)

此の処全くの話、うだる様なという表現がびつたりする様な毎

日、時折り気まぐれな台風が一日か二日連んで参ります冷風に息をついておりますが、編集の労苦をなさつて居られます皆様には全く御苦勞様とお礼申し上げます。先月は御誌の発刊が見られず、一カ月の間、書店の前をちらちらのぞき見しては、がっかりしたり心配したり、此のまま奇クが消えてしまひはしないかと、前の勧告とやらを思い出して落つかぬ毎日。一日千秋と云いたい程のやきもきした思いを致しましたが、此うして再

## 今月の新版「女体切腹フォト」

### 腸露出 「無念腹」 女体切腹図譜

A5判(本誌の大きさ)感光紙焼付 十枚一組 八〇〇円

モデル……大塚啓子 略号 (せ10)

やわらかなヘソ下の肌に今や

ろがってくる。

深々と刃を突き立てれば、溢れ

左手で腸を押えながら右脇腹

る血汐は、唐くれないに、とびち

まで切りさいてゆくと、刃を抜

り、腸が切口から、むくりむく

いて、今度は下腹からみぞおち

りと盛り上ってくる。無念の形

まで一気に凄惨な十文字腹。

相も物凄く、血に染った手に更

今まで試みられなかった腸露

に力をこめて引きまわせば、腸

出の有様を今回はじて写真化し

は刃のきりきりと皮膚をさき皮

た女体切腹フォトの決定版とも

下脂肪を割け、肉を切るにつれ

いうべき迫力のある連続写真集

で、みるみる創口いっぱいひ

である。



び貴誌に見える事が出来、心からうれしく思っております。今後共皆様の御努力により益々素晴らしい内容に充実して我々ファンの夢を満して戴けます様心から御願ひ申し上げます。東浦ひかる様、毎号の美しいグラビヤの貴女様を見てゐる心からなるファンで御座居ます。色々プレイの想い出や御経験等も豊かに心楽しいお話など御豊富と思ひますが、それが没で戴らないとは誠に残念です。私もずっと以前発刊の頃よりKKをこよなく愛して居ります。そして乳房縛り、股間縛り或は吊り、鞭打ち等が好きですが、何しろKKも公開の誌、時折がゆく思わないでもないではありません。没のお便りとか、その他かくれたプレイの御話など、承ることが出来たら、どの様に楽しい事でしょう。又、プレイのチャンスでも出来る事ならば、天にも昇る思いがするかも知れませんね。でも、それまでは、仲々実現は難しいとは思ひますが、お便りしたり、会つてお互いのプレイへの情熱を語り合う事が出来たらと心から願つております。そして美しい東浦ひかる様の強烈な刺戟のフォトでKKが飾られる事を祈つて居ります。今後共

一層の御精進をお願い致します。そして楽しいプレイの事等お聞かせ下さい。△陰の賛美者より▽北緋紗子様。通信にて御名前拝見致しました。色々プレイについて御悩みお持ちの由ですが、元来SMに人道は必要なきもので、むしろ、私共は従来のあるきたりの道徳を超越した所に私共の樂園を求めてゐるのではないのでしょうか。私も古くからKKに親しみ、SMの夢につかれた男の一人です。プレイにも乏しいながら一応の経験もあります、即ち、吊り、縛り、鞭等の凡てのプレイに相当程度耐え、女王様の御心に御満足をして戴けるかどうか判りませんが、女王様に楽しんで戴ける程のプレイは出来ると思つております。若し奴隷として責めさいなんて戴けるのでしたら。喜んで此の肉体を捧げます故、御連絡賜れば幸と存じます。若し奴隷としてお使い下さいますならば、たとえ犬でも馬でもかまいません。繩に呻吟し答にうめき、気絶する迄逆さに吊られても苦情は申しません。いかなる御奉仕も心から喜んで致します。此の東海地区にも此んな奴隷が居ります事が御目に止りましたら、名古屋地下鉄地下駅西出口正面の伝

言板にでも夕方六時頃、何処か御連絡先かお目に掛れる場所と時間と、目印を御連絡賜れば早速参上致します。是非奴隷の一匹として御採用賜ります様伏してお願ひ申し上げます。(名古屋△西山生▽)

読者の皆様、暑中お見舞申し上げます。小生は廿八才の女性切腹とメンズバドのマニヤです。最近通信室にマニヤ各位の活発な御意見が発表され、大変うれしく拝見しています。さて、合併号にはグラビヤに切腹シーンがなく大変残念に思ひましたが、ハラキリ抄の記事を得て熟読致しました。筆者の御苦心に深甚なる敬意を表します。また通信室にては、荒井弥生様は御主人の前でプレイとはいえ、立派に切腹なさった由。全くその勇氣には感心しました。是非共その時の体験記を誌上に発表下さいます様切腹マニヤ一同を代表しましてお願い致します。切腹はやはり和服姿が一番適當なのではないかと思ひます。原服、花嫁の白無垢等編集部の御配慮を願ひたいものです。それから徳山市の保田様、バンドマニヤにとつて全く同感です。あの替ゴムの魅力はたまらないですね。小生が現在所

有しているのは、フレンドが二種、ビトリヤ、スーマ、大正の五種です。貴兄と同じく、小生も前開きのものが大好きです。それから前後がネルで作られたゴムの部分をその下の方でゴムをスナックで止めるようにしたもの、要するにショーツ型は外観上ややバンドと見にくいものですね。次に編集部にお願ひを一つ、代理部にて分譲されている各種の写真的なもののみで結構です。をたとえ一冊角位の大きさでもよろしいから、裏表紙にでも掲載されましたら読者の注文に便利と思ひます。読者へのサービスとしては是非実現されんことを願ひます。(兵庫△香山生▽)

再三にわたり私の拙文を誌上に出して戴き有難うございました。私の読者通信の記事について、愛読者の方により種々と誌上を通して返事や呼掛けがあり、中でも、中田明氏の短信について、私の「吊責めへの誘いの返事」を同じ短信として発表下さいましたことは大変に嬉しく思つております。これに氣を良くしたわけではありませんが又、愚文を同封いたしま



す。御検討の上訂正なり削除なりして発表しても、又没にするのも、最近の諸情勢に依り致し方でございませぬ。文中細部についても告白の様なものもありますが、うまく書けませんので考えております。又、八月号の私の短信の文中にあります川端多奈子さんの全裸の逆吊り、梨花さんの吊り等の写真、ありましたらお分いただきたいと思います。誠に身勝手な事ばかりで申し訳ありませんが、私の住所氏名は他に知らせぬ様御願ひ申し上げます。(東京八豊島津利)

「週刊現代」八月十二日号に興味をひく写真が二、三ありました。「世界の十一才」と題するグラビヤ。一人の少女が地面に手足を伸して横たわっている。頭の上に伸ばされた手は、両手首が縛り合っている。胸の上に一人の少年が馬乗り、むき出しの脚の膝の辺りを一人の少年がおさえ、もう一人の少年が足首を縛り合わせている。少女の満足そうな表情。次に「人命救助」のグラビヤ。溺れる者にしがみつかれた時の方法として、①手首をとられた時、離す為に肩を蹴るシーン。②後から抱きつかれた時、体をかわして相手の

手を後にまわすシーン。両方共、溺れる方は白い水着の女性、相手は男。特に②のシーンでは、そのまま縄をかければ後手の姿となる。(東京八K・T生)

私は最近奇クを読みはじめたばかりの21才になる未婚の女性です。私はMらしく毎号、グラビヤや口絵を見る度に体がカーンとしてきて、いつも縛られたり、責められたりして貰えるモデルの人達がうらやましくなりません。私の念願はSの男の方と、心ゆくまでプレイすることです。まず最初に、私は荒縄でがんじがらめに縛りあげられることでしょうか。そして、あなたはそんな私を眺めたり写真をとったりするでしょう。身動きもできない私に、あなたはパンドカムチで、私のお尻といわず、脚といわず、打って痛めつけて下さるのです。私はさるぐつわをはめられ、声を立てることすら許されていません。次にあなたは私をうつぶせに寝させるか、前方の海老責めで縛られるでしょう。私の足は無理に開けられ副木を当てて縛られます。腕はこれ以上曲らないという具合にまで、後手に縛られます。そしてあなたは、ガラス

製のピストン式浣腸器を取り出して、いやがる私に40℃グリセリン(それ位ないと私にはききませんから)溶液を注入します。私の顔は便意の苦悶と恥しさでゆがむことでしょうか。ああ考えるだけでも胸がどきどきしてきます。しかし、あなたはこれだけで私を解放

### 【編集後記】

○先月号で予告しました「座談会と撮影会」は、出席者の選定も終わりましたので、近々開催の運びとなります。間に合えば、来月号あたりで、辻村隆氏のペンによって詳細紹介されることになるでしょう。

○先月号で「ニューフェイス登場」と題して新人水本茂美嬢が辻村氏によって紹介されましたが、今月号の口絵で第二回目の撮影分の一部がグラビヤを飾りました。実は辻村氏から「マゾヒスト「水本茂美」の登場」と題する一文と若干の写真が届けられたのですが、残念ながら今月号には誌面の都合で掲載できませんでした。次号で発表いたしますから御期待下さい。

○尚、先月号に引続き第二回分

してはくれません。きっと乳房責めをはじめとし喜んで受けましょ。以上が大体私の希望ですが、若しあなたが、お望みでしたら、切腹もやってみますし、水責めも受けます。又、全裸にされて、擦り責めや庭の木にがんじがらめに縛られたり、さらしものにされて

の「花と蛇」(花巻京太郎)も挿絵が ok されましたため、今月号には載りませんでした。

○今月は、サブタイトルにもありますように、八告白と手記と体験の特集をいたしました。只今、保有しています分も、漸次誌上に発表してゆく考えであります。読者の方々の中で何か告白等を書いてみたいと思ひ立たれた方は、どうか、この際御寄稿下さるよう、心からお待ちしております。

○近頃、女性読者の中でモデルになってみたいと志される方の通信をよく受けとりますが、そういった御希望の方は一応御連絡下さるようお願いいたします。尚編集をやりたいという御希望の方もお申出下さい。何分の御返事をいたします。(編集子)



次号、十一月号は九月二十五日発売いたします。

も構いません。股責めもいくら縛られても、いじめられても結構ですが、最後の一線だけは絶対に守って欲しいのです。又、秘密も確実に守って下さる様お願い致します。当方身長一五八センチ、体重四九キロ、顔は十人並のデパート・ガールです。どうか私を満足させて下さい。大阪近辺のSの男性の方、私とプレイを楽しみましょう。編集者の皆様、御苦勞様でございませう。ただどしどし拙文ではございますが、掲載お願い申し上げます。奇クサロンでも読者通信でも、どちらでも結構です。住所は秘しておいて下さいませ。(大阪八水野淑子)

暑中御見舞申し上げます。先日原稿を応募致しましたが貴社の方へ着きましたでしょうか。原稿には題名が書いて有りません。私には、どんな題名が良いか判りませんので付けていただきたいと思います。居ります。又、私の町にも同好者が沢山居りますが、通信、告白、体験等を出そうと思っている友人も居るのですが、出しても誌上に

はのしてくれない、返事も来ないだろうと言って出す人が有りません。そこで私がトップに出したのです。どうかよろしくお願い致します。私は友人をアッと言わせ貴社の信用あるところを見せたいのです。又、八、九月号を拝見いたしました。又、友人と相談の結果、絹川、大塚、桜井、竹野、梨花、花坂様、以上六名の方にサインをお願いしたのであります。サインと言っても名前ではありません。手足のサインです。黒、赤、青色何んでもよいです。ただし両手両足、なるべくはっきりしたものを願いたいです。私達グループの希望をお聞き下さって貴社のお力で送ります。私達の願いをくれぐれも一日も早く、この便り着き次第送って下さい。又、原稿のお返事を詳しくお願い致します。又、縛写真もお送り致したいと思つて居ります。私の全力上げた原稿が誌上に出一人でも多く同好者の方々に読んでいただければ本望だと思ひます。では今日は此れにて。くりかえし、お願い。モデル嬢の手足

のサインをくれぐれもお願い致します。では貴社一同の皆様の健康と御多幸をお祈り申し上げます。(徳島県八岡本守)

毎日暑い日が続きます。御社の御発展心からお喜び申し上げます。編集部の方々毎日ご苦労さまです。七月号の読者通信にありました、横浜市の伊佐正幸様。実は私伊佐様同様、大変女装するのが好きです。自分で言うのもはざかしのですが、私は男としてはあまりいい方ではありませんが、女になれば一寸変わります。十二人並でしょうか。鏡の中で別な女が現れる。なんと楽しい事でしょう。昨年の十二月、始めて女装外出して見ました。白昼です。始めての事で、不安と喜びと合半して、もうどうして良いやら表現のしようもありませんでした。今年になつて、七月に又、女装外出しました。前日に旅館に行き翌日朝、女装して先ず一番は美粧院へゆき、パーマをかけてセットしてもらいました。そうして町のにぎやかな通りを一廻りして、次に写真館に入り写真を書いてもらいました。そして又街にゆき、映画を見て旅館に帰りました。同封の写真は其の時、自分で写したものです。お笑

い下さい。私は女装して、女で居る時が一番楽しく嬉しいのです。横浜の伊佐様に御交際していただくと思つて居りますが、ごれんらく願えませんでしょうか。私はあまりきれいでありませんが、どなたか、私を女として愛して下さい。方は有りませんか。年は中年以上の方をおねがいます。家庭をもつて居るので、まじめな方をのぞみます。私は妻として夫にかしづくつもりです。又二号としても、だんなさまとして献身的につかえます。ほんとうに私を女にして下さる方がございましたらお手紙下さいませ。(東京八野本志乃)

初めてお便り差し上げます。私も毎月、奇クの何時に変わらぬ、むれる様なムードを独りたのしんでおります。然し同好者もなく、一度は女性を思う存分にサドしてみたいと思つたり、又ある時は、御婦人に仕えて見たいと思つて居ります。扱て、八、九月合併号の読者通信にありました名古屋の北緋紗子様とお会いしたく存じます。熱海か静岡辺りでしたら、双方から二、三時間で行けるわけですか



ら、打ち合せて参りたいと思ひます。御都合で名古屋へ出向いても良いと思ひます。何れにしても、日曜日ということになります。緋紗子様のブラジャーで猿ぐつわを、パンティで目かくしをして頂き、そのむんむんする移り香に酔いしれて緋紗子様の奴隷として奉仕致したいと存じます。又、SM何れでも結構ですが、東京地区にて三十才乃至四十才位の女性の方がありましたら、プレイをたのしみたいと思ひますので御紹介下さい。私は三十五才で特に女性の下着、MB等にたまらぬ執着を持っています。居ります。(東京/M・K生)

暑さきびしき折柄、御一同さまにはお元気のことと思ひます。この頃の誌上を拝見しております。と、女性の方で奴隷をどうこうしてみたいとおっしゃる方を見うけられますが、私もちょっとばかり興味がひかれ、それに実益の方が

らも、もし奴隷として、或は下僕として献身的に仕えてくれる男があったら、二人でも三人でもほしいと思ひます。私は今、バーを経営しておりますので、どうしても家へ帰るのがおそくなり、従って朝もおそいので家の掃除なんかも中々大変です。最近の女中は、ちょっと叱ったりすると、すぐとび出してしまい、私のところのようには、気楽な家でも中々居つきませんのよ。家は市中でも住宅地で通っている高台で、三百坪も庭がありますので、掃除や庭木の水打ちだけでも、今一人いる年寄りだけでは、ちょっと手がまわりかねます。この家は先年交通事故で死去した私のパトロンが私のために残してくれた家なので、離れるのがいやで、淋しいのを我慢して住んでいます。今売り払えば数千万円はするだろうと云われていますが、お店も(名前を申し上げれば、ああ、あれかと直ぐ分ってしまいますので秘しますが)おかげでは

## 代理部分護品総目録第五号出来ました。

最近の代理部分護品を網羅した総目録が出来上りました。十円切手封入の上お申込み下されば、折返し急送申し上げます。

やっておりますので、そんな必要もございません。誰か、私の下僕としてこき使われない方がありません。申出て下さい。私は夜は晩いですが、そのかわり、四時頃まで家におりますから、その間、うんと仕事をいっつけてあげます。私は三十二才、ちょっとしたグラマーですから、お尻の敷かれ甲斐もありますよ。酒に酔って帰った晩などは、うんといじめてあげてもよろしい。家には、私の外に、女中二人、手伝の老人一人といた四人暮らし。但し、月の中、二十日位は男のお客さんが泊ります。時には終電にのりおくれた人が、三人も四人も私の車で送られてきて泊ることもあります。家の中が広いので、酔っぱらいの騒ぎといった近所迷惑もありません。(近所は皆何百坪という大きなお屋敷ばかりですが)住込みで月一万円ぐらいいなら、三人ぐらいいほしいものだと思います。食事や住居も、お好みのものを作らせます。この頃は日に二回は水を打たないと庭木が枯れますので、一人はつききりでも、十分仕事があります。高い塀でめぐらしていて樹が茂っているの、外からは絶対に見えません。御希望なら、首輪を

つけて犬のように、庭木につないでいても、泉水につけておいてもよろしい。但し、蚊がひどいすよ。もっとも、本物の犬はセパードと土佐犬を一足ずつ飼っています。古くなつた犬小屋(大人が十分入れる位大きいです)を住居として提供してもよろしい。とにかく、私を女主人としてあげめ、下僕として仕える気持のある男だったら、志願してみして下さい。私は只今のところ、きまつたパトロンはありませんから、お気のすむようお相手してあげます。(大阪/佐川奈津子)

本誌も色々の面で進歩して我々愛好家にとつては、この上もないうれしい事です。ただ口絵写真の少ないのが淋しいですが、八月号の様に心配させないで下さい。今後も色々の事情も出てくると思いますが、今回発行された悦店写真集決定版なるものを口絵写真のかわりに、時々発行する様にして下さい。楽しみにしております。緊縛に関して見るだけでなく実際に腕をふるいたいと思ひますが、大塚さん、梨花さんの様に縛られる女性によって秘密ベールを開きたいものです。(福井/和男)



読者原稿募集

△体験、告白、手記▽

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるものたえ、どうか皆様の真実の叫びを、どしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語▽

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下

さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポート・マニヤ通信▽

新聞記事、週刊誌記事等に関心をお持ちの事項、或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈いたします。

△読者通信▽

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、文通、或いは読者相互間の交歓、文通、応答などをお寄せ下さい。誌面の許す限り、つとめて掲載いたします。

書下し原稿募集

新しい風俗雑誌として新発足する本誌のために、新鮮にして読者の大歓迎するよう、新鋭の作家を、どしどしとお寄せ下さるよう、左記の要項にて募集いたします。どうか奮って御応募下さい。

募集要項

一、原稿の内容は風俗雑誌の尖端をゆく本誌にふさわしいもの。例えば、オースドックスなSMに連れた小説、創作、研究、資料、体験、告白、紹介、論説といったものを始めとして、流暢な女体、腹、フェチ、女相撲、女闘美、美、身体各部に対する狂熱等に連したものを含めます。

一、表紙、口絵、挿絵、或は写真なども努めて掲載したいと考えますから、原稿の枚数は別に定めません。合に長短は御自由です。尚、御都合によつては、便箋や鉛筆がき等でも構いません。必ず自作品で、未発表のものに限りません。掲載可能な作品は最近号から漸次発表いたします。優秀作品の投稿者は、採用原稿から題材を提供して、寄稿料をお支払致します。一、誌上で匿名は御自由です。又投稿者や寄稿家の住所本名は絶対に他へ洩すようなことは致しません。故御安心下さい。

奇譚クラブ編集部

☆本誌御愛読の契

予約料

一月分 (1冊) 二百円△送共▽  
三月分 (3冊) 六百円△送共▽  
半年分 (6冊) 千二百円△送共▽

☆代理部分譲品についての案内

○本誌代理部の分譲品は、最近分譲品案内並に読者通信欄の記事中に広告してありますが、他に代理部分譲品目録を準備しております。一、読者から、それによってお申込願います。目録は十円切手同封にてお申込下されば急送申し上げます。○雑誌は厳重包装の上、第三種郵便にて、その後は第五種郵便にてお送りいたします。○代理部に対する御送金は、なるべく現金書留、振替、定額小為替、小為替、切手代用の節は、八円又は十円切手等の小額のものに願います。

本誌は各地書店にて毎月二十五日一斉に発売致しますが、若し入手困難でしたら、直接発行所へ代金御送りの上お申込み下さい。予約お申込みの場合は発行と同時に、厳重包装の上、急送申し上げます。尚既刊号の内、在庫分は別項に一覧表を掲げてあります故、御注文頂き次第に急送いたします。

本誌に発表した口絵、写真の複写或は無断転載等は固くお断りいたします。

奇譚クラブ 定価二百円

十月号

(第十六卷 第九号)  
(通刊第百六十九号)

昭和三十一年九月二十日印刷

昭和三十一年十月一日発行

編集印刷兼発行人

箕田 京二

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

発行所 大星社

(振替口座大阪五〇〇四二番)

(昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可)  
(国鉄大局特別扱承認雑誌 第一二二二号)